松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業
区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1983

松江市末次町86番地
松江市教育委員会
社会教育課

松 江 市 教 育 委 員 会

正誤表

P	行	誤	正
27	3	深さ　0.20 cm	深さ　0.20 m
29	6	主体部が どうか	主体部は どうか
44	4	厚さ 1 mm	厚さ 1 mm
44	9	施こさ れている	施さ れている
50	6~7	傾斜する が	傾斜する のが
71	5	幅 0.4 mm	幅 0.4 cm
93	27	高さ　0.75 cm	高さ　0.75 m
128	1~2	約40 cm 約 計る	約 40 cm を 計る

凡　　例

1. 本書は、松江市教育委員会が松江市都市開発部区画整理課の依頼を受け、昭和55年度から57年度にかけて実施した友田遺跡他の発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

事業者	松江市　松江市長		中村芳二郎
主体者	松江市教育委員会教育長		内田　榮
事務局	松江市教育委員会社会教育課		
総括	同上	課長	石飛　進
庶務・会計	同上	文化係長	中西宏次（S 55. 11から）
	同上	〃	足立千利（S 55. 10まで）
	同上	文化係主事	加藤　睦
担当者	同上	文化係主事	岡崎雄二郎
	同上	文化係主事	中尾秀信
補助員	同上	文化係指導員	佐々木　稔
	同上	臨時職員	加藤博己
	同上	臨時職員	雲嶋滋人
	同上	臨時職員	古館　普
	同上	臨時職員	野津由美子
	同上	臨時職員	渡部美枝
	同上	臨時職員	上川晃弘
	同上	臨時職員	小谷能理子

3. 発掘調査にあたっては、事業者である区画整理課から多大な御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

4. 本書の編集は、岡崎・中尾・佐々木が担当した。

5. 実測図面の浄書は、野津由美子と渡部美枝が担当した。

6. 出土遺構遺物の検討については、島根県教育委員会文化課主事川原和人氏から有益な御教示を得た。記して感謝する次第である。

至本庄
至瀬之夫
至日吉
至小倉
至西ノ谷
至南講武
松江市
朝酌川
大橋川
宍道湖
-0.29-
西津田町
東津田町
上乃木町
浜乃木町
佐草町
西忌部町
東忌部町
下忌部
平原

第1図　遺跡の位置

目　　次

Ⅰ　調査に至るいきさつと経過 …… 1

Ⅱ　下沢遺跡

1.　調査の概要 …… 3

2.　遺構と出土遺物の検討 …… 7

3.　小　　結 …… 8

Ⅲ　長砂古墳群

1.　遺跡の位置と歴史的環境 …… 9

2.　各古墳の調査概要 …… 13

3.　遺物の概要 …… 43

4.　遺構と出土遺物の検討 …… 50

(1)　遺構の検討 …… 50

(2)　遺物の検討 …… 51

5.　小　　結 …… 52

Ⅳ　二子塚古墳

1.　位置と歴史的環境 …… 55

2.　調査の概要 …… 56

3.　小　　結 …… 62

Ⅴ　潜松古墳推定地

1.　位置と歴史的環境 …… 65

2.　調査の概要 …… 66

Ⅵ　後友田古墳

1.　調査の概要 …… 69

2.　小　　結 …… 73

Ⅶ　南友田遺跡

1.　位置と歴史的環境 …… 77

2.　調査の概要 …… 77

3.　遺構の検討 …… 78

4.　遺物の検討 …… 79

5. 小　　結 …… 84

Ⅷ 向原古墳群

1. 位置と歴史的環境 …… 85
2. 各古墳の概要 …… 86
3. 小　　結 …… 95

Ⅸ 友田遺跡

1. 位置と歴史的環境 …… 99
2. 調査の概要 …… 103
   (1) A区土壙墓群 …… 103
   (2) B区墳丘墓群 …… 135
   (3) C区 …… 151
3. 遺物の検討 …… 168
4. 遺構の検討 …… 169
5. 小　　結 …… 172

Ⅰ 調査に至るいきさつと経過

松江市では、住宅需要のひっ迫にともなって計画的な宅地を供給するため、郊外の水田地帯の宅地化を促進することになり、北部（川津）に続いて南郊乃木地区において、土地区画整理事業を計画した。

事業の概要は、昭和54年から昭和59年度にかけての6年間で、総面積72.64haの山林、水田を区画して道路等を設けるもので、完成後は宅地、商業用地として利用されることになっている。

ところが、この計画区域内に周知の遺跡として、下沢遺跡・乃木二子塚古墳（前方後方墳、30m）二子塚古墳（円墳・15m、半壊）の3遺跡の所在が明らかであったので、これらの取り扱いについて県教委文化課、松江市教育委員会社会教育課、松江市都市開発部区画整理課の三者で協議がなされたが、下沢遺跡と二子塚古墳については事前の発掘調査を実施して、その内容を把握することで一致した。しかし、乃木二子塚については全長30m以上の前方後方墳と推定され、既に島根県指定文化財の候補にあがっていたことから、区画整理課と再度協議の結果、史跡公園として現状保存することになった。

一方、この区域内の低丘陵地や畑地にもまだ多くの遺跡が埋もれているのではないかと思われたので県教委文化課の指導のもとに昭和55年11月28日に全域の分布調査を実施した。その結果、長砂（ながすな）古墳群、潜松古墳推定地、後友田古墳、南友田遺跡、友田遺跡、向原古墳群が新たに発見され事前に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、下沢遺跡（昭和55年3月4日～同年同月27日）、長砂古墳群（昭和55年7月8日～56年1月25日）、潜松古墳推定地（昭和56年6月4日～同年同月17日）、後友田古墳（昭和56年6月～7月）、友田遺跡（昭和56年7月～昭和57年10月）、向原古墳群（昭和57年4月12日～同年6月7日）、南友田遺跡（昭和57年5月24日～同年7月8日）、二子塚古墳（昭和57年8月～昭和57年12月）について実施した。

第２図　周辺の遺跡分布図

Ⅱ 下 沢 遺 跡

1. 調査の概要

本遺跡は、従来から黒曜石片の散布地として知られているが、他に乳棒状石斧や凹石も採集されている。所在地は、乃木二子塚古墳の墳丘東側直下の畑地一帯で、10 m × 20 mの範囲に黒曜石片が多数散布している。調査では、その畑地に南北方向に長さ12 m、幅2 mのトレンチ（Bトレンチ）と、それに直交し墳丘側へ東西方向に長さ3.4 m、幅2 mのトレンチ（Cトレンチ）を設けた。また、畑地の東側に隣接する細長い水田地（現在休耕田）には、東西方向に長さ30 m、幅2 mの細長いトレンチ（Aトレンチ）を設けて、その中ほどに直交するサブトレンチを設けた。以下に、各トレンチの調査概要を述べてみたい。

Aトレンチ

トレンチの最西端では、耕作土上面から約20㎝で地山に達する。堆積土層は耕作土以外にはない。地山は、明褐色粘性土である。トレンチ最西端から1.95 m東寄りの地点で低い段を形成し、その段差は約10㎝ほどである。

段から東へ向けて地山は徐々に下がり、東端では表土から1.05 mを測る。その間、最上層である耕作土層から地山面までの堆積土は5層に分かれ、ほとんど水平方向に堆積している。耕作土直下の第2層は褐色砂質土、第3層は灰色粘土層、第4層は暗灰色粘土層、第5層は淡灰色粘土層でいずれも粘性が強く水田化するために客土された可能性が強い。第6層は灰色砂質土で水田形成以前の自然の堆積土であろう。

遺物は主にトレンチの中ほど（西端から15㎝）までの区間で、表土から最下層の灰色砂質土までの殆んどの中間層から黒曜石片が出土するが、いずれも長さ1～3㎝程度の小片で、加工されたものはほとんどない。出土の密度は、耕作土とその下層との界面、及び地山直上が多い。

土器類では、土師器と思われる小片が地山直上の灰色砂質土から出土している。それ以外にも、須恵器、土師器片が若干出土しているが、いずれも耕作土層中である。サブトレンチの西壁の状況について若干ふれると、南端では耕作土上面から地上面まで40㎝余り、北端では90㎝を計る。つまり南側（山側）から北側（水田中心部）へ向けて傾斜している様子がつかめた。

Bトレンチ

南端における地山は、表土から46㎝あり、北へ向けて徐々に傾斜しており、しっかりした段を形成していない。トレンチ中央部における地山は、表土から1 m余りを計り、北部では20㎝の段を設けて地山面が上がっている。これらのことから、全体としては大きな濠になるものと思われるが、しっかりした段を設けていないので、かなり粗雑な加工と言える。このトレンチは、Aトレンチと同様にほぼ水平方向に堆積するが、トレンチ中央部では9層に区分された。最上層は耕作土であるが、第2層～第5層までは、褐色粘性土とそれよりやや黒い暗褐色粘性土が交互にあらわれる。第6層は暗灰色粘性土層となるが、ほとんど粘土に近く、第7層は黄色粘土層となる。第8層は黒色土で、北端で厚さ4㎝、中央部で10㎝を計り、南端より2 mのところで終っている。最下層は褐色の砂質土である。

Aトレンチで見られなかった黒色土層が検出されたことは、この面まですでに堀り込まれ、有機物が堆積した可能性があり、乃木二子塚古墳により近いトレンチであることからも濠の存在が考えられる。

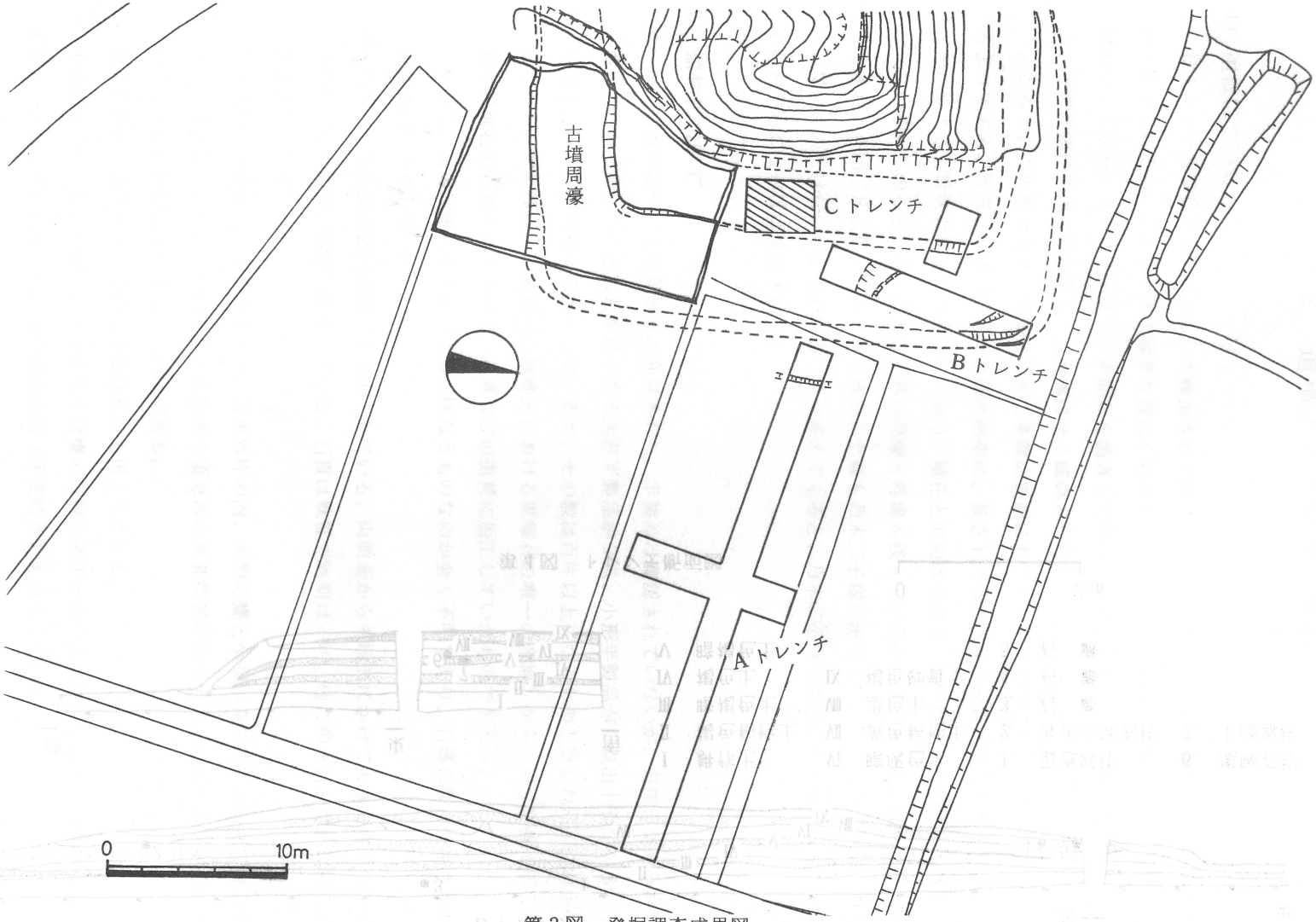
出土遺物は大別して、土器と石器類に分類される。土器は須恵器片と土師器片に分かれるが、須恵器は最も古い形成のものでは、山陰地方でいう須恵器のⅡ型式に併行するものと、奈良時代頃の高台付の皿が出土している。

土師器は、平底の壷の底部や5の字口縁の一部が出土している。この内、須恵器や土師器片は第5層目までの堆積土層から多く出土している。黒曜石片は第7層目までの堆積土層から多く出土した。この内、完成品としての石鏃は3点出土している。このうち、2点は地山直上の黒色土層中から、1点は最上層の耕作土層中から出土した。このほか、ほとんどの層から未製品の黒曜石や、細片が検出されている。

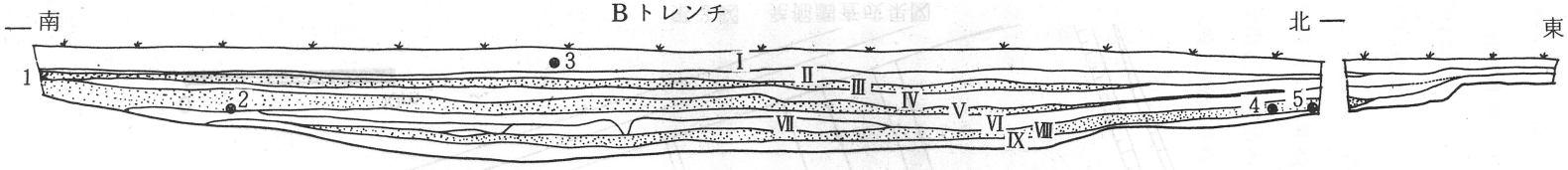
Cトレンチ

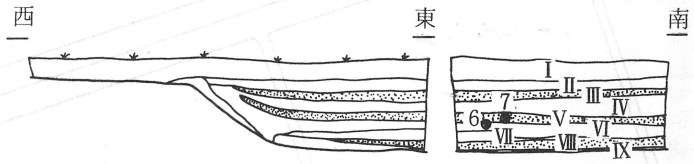
Bトレンチと同時に、水平方向に堆積し、東端で9層に分割される。土層の構成上Bトレンチと同様である。トレンチ中央部では、南北に走る段が検出された。落差60㎝を計り、東側（Bトレンチ干方向）に向けて落ち込んでいる。恐らくBトレンチで検出された濠に結びつくものと考える。しかし、Bトレンチ内の濠については、前述した通りしっかりしたものではなく、傾斜の変換点（濠の上端と下端）が明確にはつかめないものであったので、Cトレンチの段と対をなすものであるか、あるいは結びつくかどうか積極的には断定し難い。（その後の乃木二子塚に関連した調査で、このCトレンチの段は、古墳側の周濠の壁を形成したもので、Bトレンチ中央の段とは結びつかない可能性が強いと判断されるに至っている。）

出土遺物は、第5層までの堆積土層から土師器片が、第5層、第6層目からは黒曜石片が多く出土している。



第3図　発掘調査成果図





I　耕作土
II　褐色粘性土
III　暗褐色土
IV　褐色土
V　暗褐色土
VI　暗灰色土
VII　黄色粘性土
VIII　黒色土
IX　褐色砂質土

1.　須恵器片
2.　古式土師器片
3.　石　鏃
4.　石　鏃
5.　石　鏃
6.　黒曜石片
7.　土師器片

0　2 m

第４図　トレンチ断面図

2. 遺構と出土遺物の検討

1) 遺構について

Bトレンチ及びCトレンチにおいて検出された段及び濠は、乃木二子塚に関連して構築されたものと考えられるが、Cトレンチの顕著な段にくらべて、Bトレンチの濠はその斜面があまり明確ではないことから、さらにトレンチの中間点を調査して相互の関連を明確にしなければならない。また、下沢遺跡に関係すると思われる遺構は全く確認されなかった。

ところで、この濠は大きく見ると乃木二子塚の東側において、墳丘にほぼ平行して開削されているようである。現在、乃木二子塚の北側水田中に、長さ14.8ｍ、幅3.3ｍ、高さ0.5～0.6ｍの長方形を呈する土塁状の高まりが遺存しており、墳丘との間は水田よりやや低く、常時滞水の状態となっている。このことから、乃木二子塚の周濠と外堤が残っているのではないかと、従来から言われてきた。今回、B、Cトレンチ内で検出した濠も乃木二子塚の濠であり、恐らくその土塁につながっていくのではないかと思われる。こう考えてくると、乃木二子塚の墳丘の東と北側において濠の存在することがほぼ推定される。

2) 遺物について

イ) 黒曜石製石鏃……完成品が4点発見された。半製品は確認されていないが、刃部が認められ石鏃以外の製品を作ろうとした形跡のある大形半製品が2点、小形半製品が1点出土している。他は黒曜石の石片が各層から出土しているが、その数は百片以上になるものと思われる。これらのことから、遺跡周辺で隠岐島（山陰地方における黒曜石の唯一の産地）から、物々交換で手に入れた黒曜石の石塊を打ち欠いて、石鏃などの道具に加工していたものであろう。

しかし、この黒曜石にどんな土器が伴なうものなのか全く不明であり、石鏃の製作使用された時代もはっきりしない。

ロ) 石器……黒色頁岩製の石器が1点出土している。両側面から先端部にかけて大きく打ち欠いて刃を付けたもので、茎部は折損している。石質は軟質で時期は不明。他に叩き石と思われるものが数点出土している。

ハ) 土器類……濠中から多く出土した。須恵器片の内、大型の甕と小型の壷の破片は内面叩き文をナデて消去しており、この特徴から山陰地方須恵器の第Ⅱ型式になるものと思われる。実年代でいうとほぼ6世紀前半を中心とした頃である。

他に高台付の須恵器皿（奈良～平安時代）も出土している。

土師器は5の字形の口縁をした壷もしくは甕の口縁の破片があり古墳時代前期末頃（西暦4世紀末頃）のものと思われる。他に糸切底の土器（平安時代）も出土している。

3. 小　結

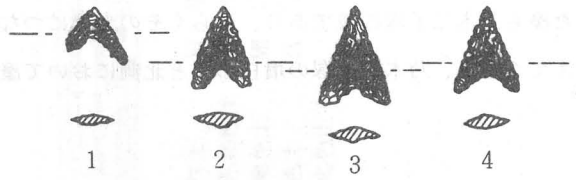
従来から黒曜石類の散布地として知られていたが、調査の結果、明確な遺構は確認されず、遺物類は濠中から出土した。この濠は調査時点でも乃木二子塚に伴うものと推定していたが、その後、昭和56年度に実施した乃木二子塚の詳細分布調査では、後方部の南部からほぼ直角に折れ曲った濠と、後方部の北部の濠が確認されたので、これらの濠が下沢遺跡の濠と一体となるものと考えることが可能である。

そうであれば、濠中の遺物は、乃木二子塚古墳の濠築成以後に堆積したものと考えられる。このことから土器、石器類は、当初遺跡周辺一帯に存在したであろう住居跡等の遺構に伴っていたものが、古墳築成時に、掘削撹乱を受け、一部は盛土中に混入され一部は、周辺に埋没したものであろう。

そうであるから、出土遺物に石鏃もあれば、古式土師器や須恵器も混在していることもうなずけるものである。

ただ、石鏃が出土するから縄文時代の遺跡であるといわれるが、松江市内には、縄文土器や弥生土器を伴わない遺跡も数多くあることから古墳時代にも石鏃が製作、使用された可能性も捨て切れない。

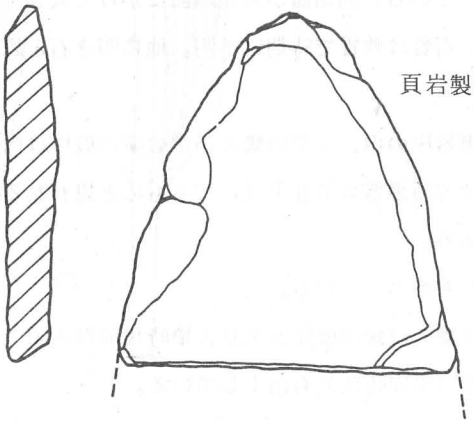
今後、石鏃出土の遺跡の調査や石鏃の編年による年代観の見通しがたてば、事情がもう少し明らかになるであろう。（中尾秀信・岡崎雄二郎）



黒曜石製石鏃

黒曜石未製品

黒曜石製のクレイパー



頁岩製石製品

第5図　遺物実測図

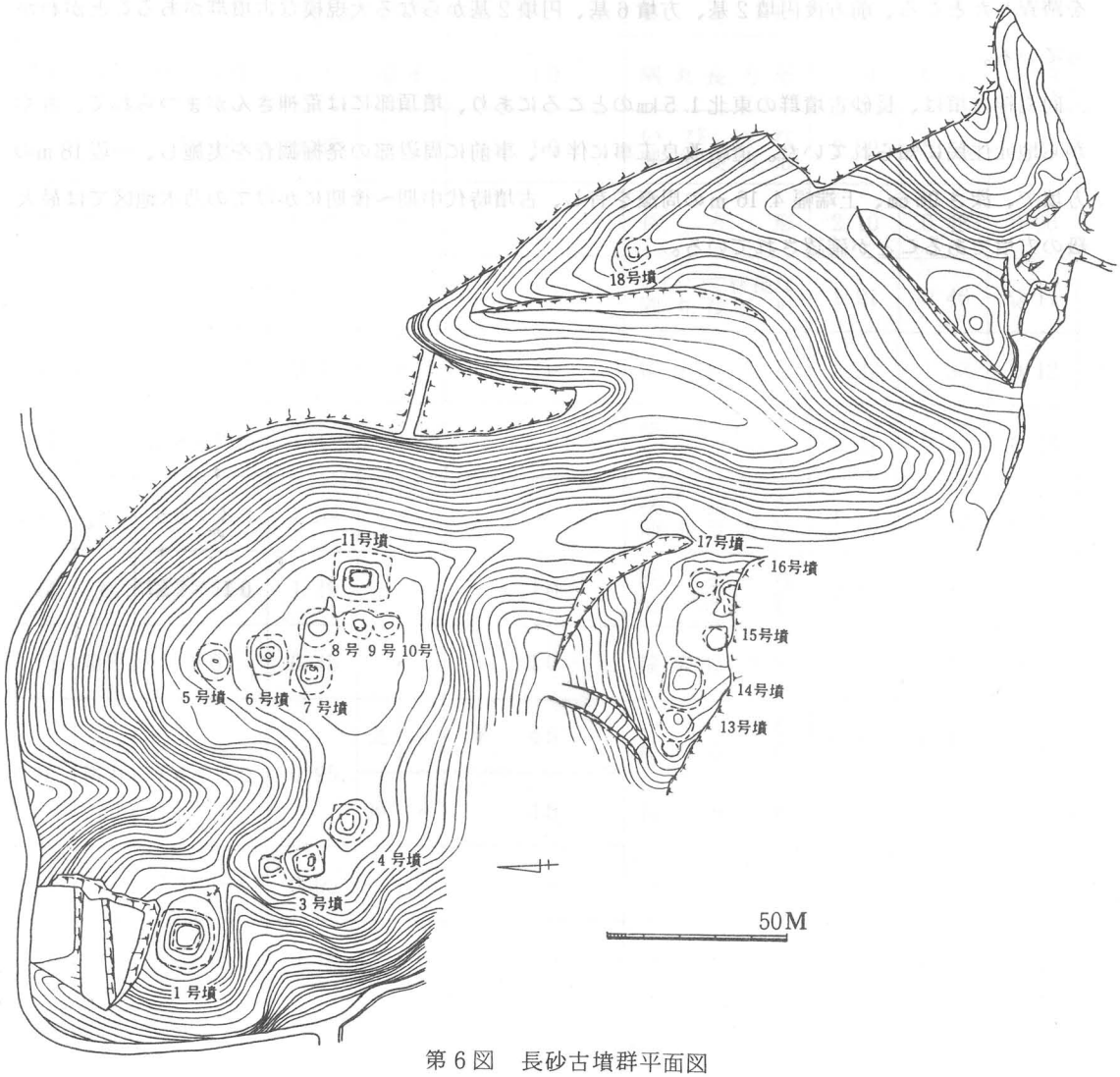
0　5CM

Ⅲ　長砂古墳群

1. 遺跡の位置と歴史的環境

長砂古墳群は松江市上乃木町字長砂2736、2739、2740、2742の各番地に所在する。松江市街より約4.5㎞南方の低丘陵上に位置する。付近一帯には乃木二子塚古墳、下沢遺跡、友田遺跡、向原古墳群、田和古墳群、向荒神古墳等乃木地区の代表的な遺跡群が隣接集中している地域である。

乃木二子塚古墳は、既に古くから土地の人々に知られていた。戦後、昭和22年、同29年の2回この古墳の測量が行われ、昭和56年には松江市教育委員会において古墳の規模と概要の把握のための調査を行い若干の出土品もみている。その結果、中軸長36ｍ、前方部高2.25ｍ、後方部高4ｍを測る。周濠をめぐらした前方後方墳であり、出土品からほぼ6世紀前半期に構築されたものであることが確認されている。



第6図　長砂古墳群平面図

下沢遺跡は縄文〜弥生期の遺跡散布地として知られていたが、その位置が不明確であったことから範囲と概要を明確にする目的で、昭和55年と同56年の2度にわたり調査を実施している。その結果土師器片、須恵器片、黒曜石製の石鏃が出土したが、縄文〜弥生期に推定される遺物や遺構は発見されず、近くに何らかの遺構があったことは知られるが下沢遺跡に該当する証明は得られなかった。

友田遺跡及び向原古墳群は、長砂古墳群の位置する丘陵に連なる南西の丘陵上に位置し、友田遺跡には長方形墳5基、向原古墳群には方墳2基、円墳2基が確認されていた。昭和56年4月、松江市教育委員会で調査を行い、友田遺跡からは弥生期の土壙墓26基と、四隅突出型方形墓や弥生期の墳丘墓群が発見され、また、向原古墳群では鉄製の直刀や須恵器蓋坏等が出土しており、この調査については別項に所収のところである。

田和古墳群は、友田遺跡の西方、0.2㎞程の丘陵上にある。友田遺跡関連の分布調査で、この丘陵を踏査したところ、前方後円墳2基、方墳6基、円墳2基からなる大規模な古墳群があることがわかっている。

向荒神古墳は、長砂古墳群の東北1.5㎞のところにあり、墳頂部には荒神さんがまつられて、古くから地元住民に知られていた。道路改良工事に伴い、事前に周辺部の発掘調査を実施し、一辺18mの方墳で、深さ96㎝、上端幅4.16mの周濠を有し、古墳時代中期〜後期にかけての乃木地区では最大級の方墳であることが確認されている。

第１表　墳丘及び主体部法量一覧

古墳番号	墳形	墳丘規模		主体部法量					
		一辺（m）	高さ（m）	位置	盛土表面から上端までの深さ	平面形	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）
1	方	16.9×16.6	1.24	盛土層中	18（cm）	隅丸長方形	2.63	0.70	0.31
3	〃	12.7×12.0	0.74	〃	18	いびつな長方形	2.11	0.62	0.12
4	〃	11.5×12.1	0.82	〃	55	長方形	2.29	0.70	0.11
5	略円	11.9	0.55	基盤	30	幅広長方形	1.79	0.56	0.05
6	方	10.9×10.0	1.03	盛土	10	隅丸長方形	2.31	0.61	0.09
7	〃	8.7×10.4	0.87	〃	16	いびつな隅丸長方形	2.22	0.56	0.21
8	略円	9.3	0.98	〃	5	長方形	2.10	0.48	0.20
9	方	7.3× 8.0	0.53	〃	20	いびつで狭長な隅丸長方形	1.91	0.46	0.11
10	〃	5.4× 6.1	0.42	〃	20	幅広長方形	2.32	1.33	0.12
11	〃	12.8×13.2	1.41	〃	直下	略長方形断面U字形	2.41	0.54	0.18
13	〃	8.6× 8.3	1.89	〃	〃	狭長な隅丸長方形	1.72	0.42	0.19
14	〃	12.2×11.0	1.19	〃	10	狭長な長方形	2.13	0.42	0.19
15	略円	8.6	0.45	〃	10	幅広長方形	4.75	2.75	0.45
16	略方	7.4× 7.0	0.95	北 〃	45	いびつな長方形	0.71	0.42	0.16
				南 〃	45	長方形	0.86	0.35	0.15
17	方	7.3× 6.6	0.90	－	－	－			
18	〃	8.3× 6.8	0.40	〃	5	長方形	1.77	0.51	0.12

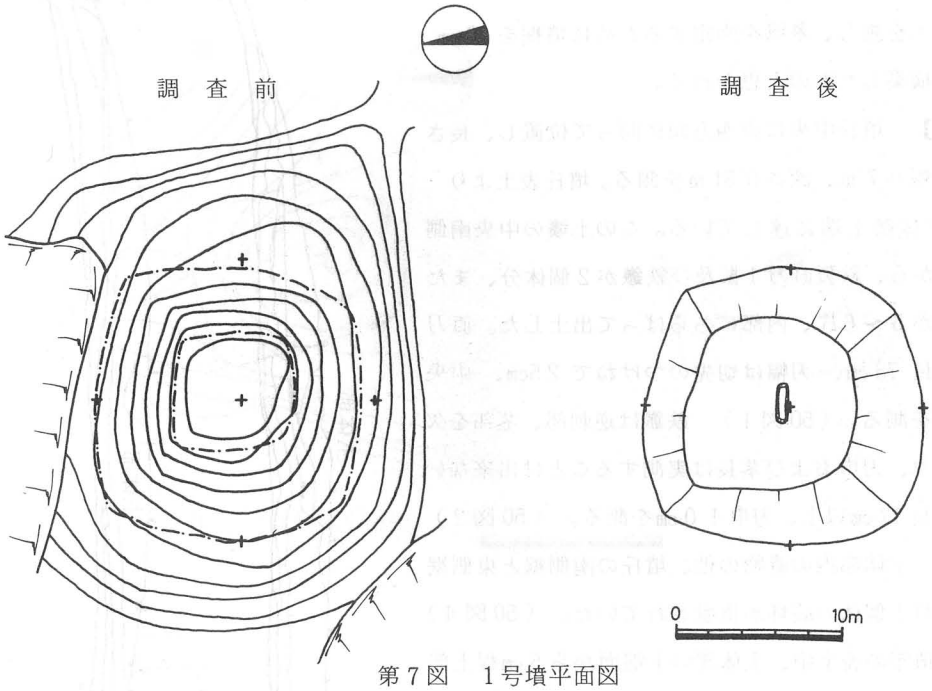
第２表　長砂古墳群出土遺物一覧

古墳番号	出土場所	鉄器				玉		須恵器						土師器			
		直刀	矛	鏃	刀子	めのう勾玉	ガラス小玉	樽形瓹	大形瓹	小形瓹	把手付椀	壷	蓋坏	高坏	壷	甕	破片
1号墳	主体部	1		10													5～6
	墳丘南裾													1			
	〃 東裾													1		大形1	
	墳頂部盛土層																
3号墳	主体部														1		
4号墳	主体部		1			1	3										
	墳頂部盛土層															1	
	墳丘西裾									2		1	1				
5号墳	なし																
6号墳	主体部								1								
	墳丘北裾									1							
	〃 南裾																100以上
7号墳	主体部														1		
	墳丘北裾										1						
8号墳	主体部																6～7
	墳丘南裾									1				1			
	墳丘南西斜面													5		1	
	盛土最下部			3													
9号墳	墳丘北側斜面																2～3
10号墳	なし																
11号墳	主体部																1
	盛土層中				1												
	墳丘西裾							1						6	2	1	
13号墳	主体部																5～6
	西溝														1		
	南溝												1				
14号墳	主体部								1								
	墳丘東裾													3	1		
	北溝													1			
15号墳	なし																
16号墳	北東溝														1		
17号墳	墳丘東北斜面													1			
	墳丘北東裾										1						
18号墳	南溝														1		
	合計	1	1	13	1	1	3	1	2	4	2	1	2	19	8	4	

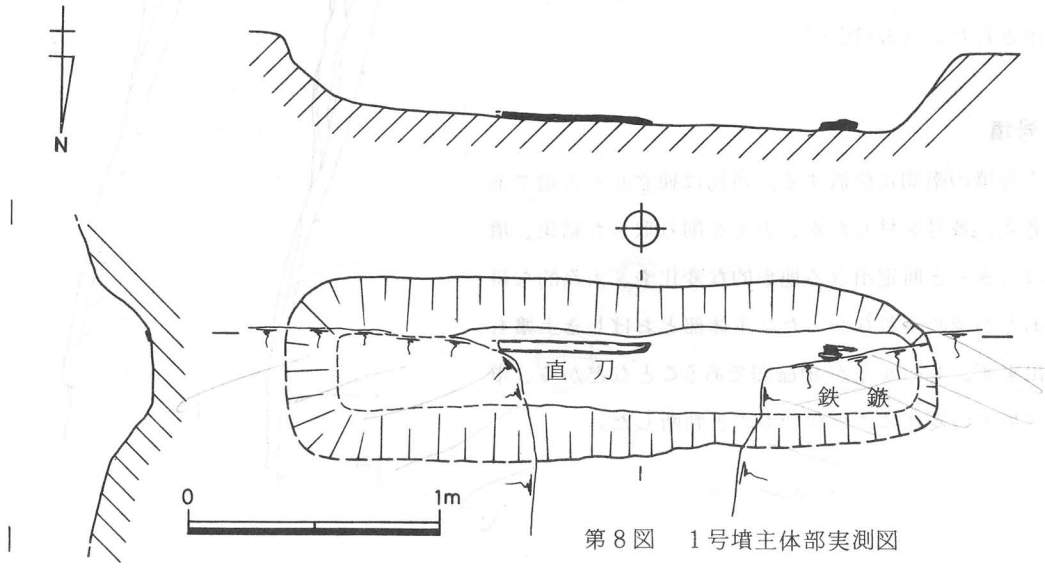
2. 各古墳の調査概要

本古墳群は、乃木二子塚古墳のすぐ南側に派生する、比較的平担な丘陵に立地する。分布調査の過程では、計18基の古墳が4つの尾根に分散していることがわかり、これを4群に分ち調査の便をはかることとした。すなわち、第1支群を第1号墳～第4号墳までの4基とし、第2支群は第5号墳～第11号墳までの7基、第3支群は第12号墳～第17号墳までの6基、第4支群は第18号墳1基である。

調査は第2支群から開始し、第1支群、第3支群、第4支群と順次発掘を行った。以下に各古墳の概要と出土遺物について記したい。



第7図　1号墳平面図



第8図　1号墳主体部実測図

第１号墳

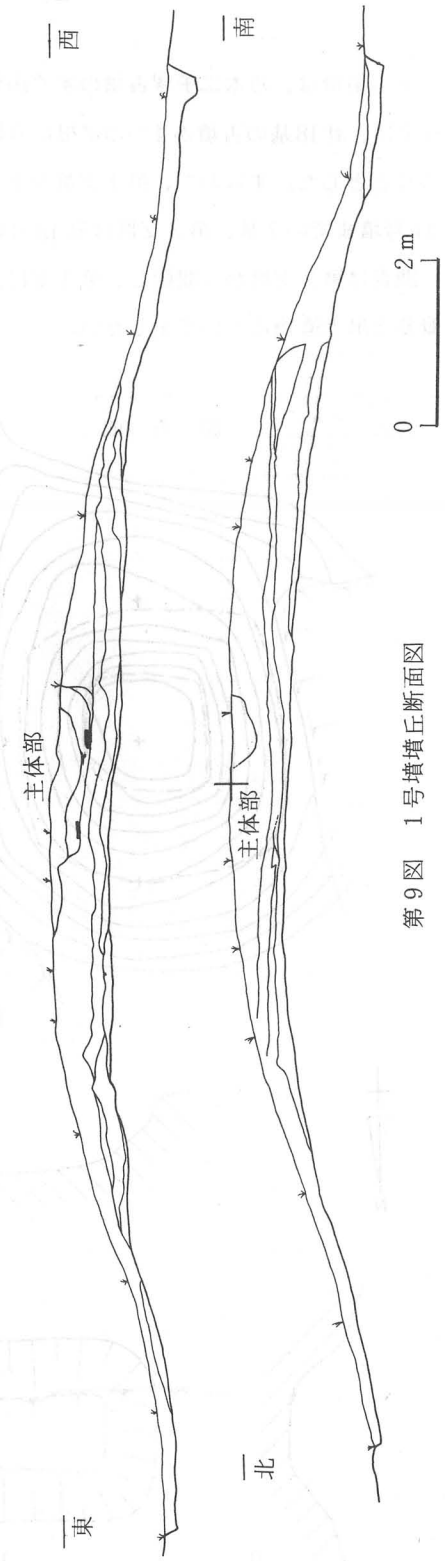
【墳丘】　本古墳群の北側西寄にある第１支群中最大で、本古墳群中でも最大の方墳である。南北長 16.9 m、東西長 16.6 m、高さ 1.24 mを測る。墳丘東側には幅 35 ㎝、深さ 13 ㎝ の浅い周濠を有する。北側は墳裾まですでに削平されており周濠の確認は出来なかった。南側及び西側は墳裾から 50 ～ 60 ㎝の平坦を設けたのち、すぐに急な斜面となっている。丘陵先端の平坦面に、ほぼ現在の形状に盛土を施し、墓域を画定するために墳裾を 20 ㎝程削平し横築したものと思かれる。

【主体部】　墳丘中央に東西方向に向って位置し、長さ 2.63 m、幅 0.7 m、深さ 0.31 mを測る。墳丘表土より 10 ㎝で主体部上端に達している。この土壙の中央南側面床部分から、鉄製直刀１振及び鉄鏃が２個体分、また土師器片が５～６片、内部にちらばって出土した。直刀は、現存長 73 ㎝、刃幅は切先のつけねで 2.5㎝、中央部で３㎝を測る。（50 図１）　鉄鏃は逆刺部、茎部を欠損しており、刃巾および茎長は実測することは出来ないが、現存長 17 ㎝以上、刃巾 1.0 ㎝を測る。（50 図２）

【遺物】　主体部内の遺物の他、墳丘の南側裾と東側裾にそれぞれ１個体の高坏が供献されていた。（50 図４）また、墳頂部の表土中、主体部の上端面から５㎝程上部で、土師製の大型甕の一部と思われる土器片が 20 片以上検出された。（50 図３）

第２号墳

第１号墳の南側に位置する。当初は独立した古墳であると考え、番号を付したが、表土を削り取った結果、墳丘がはっきりと断定出きる地形的な変化や、人為的な耕作のあとが認められなかった。主体部とおぼしき土壙も発見出来ず、レベル差が40㎝弱であることなどから、単なる地形上の変化にすぎないものと判断した。

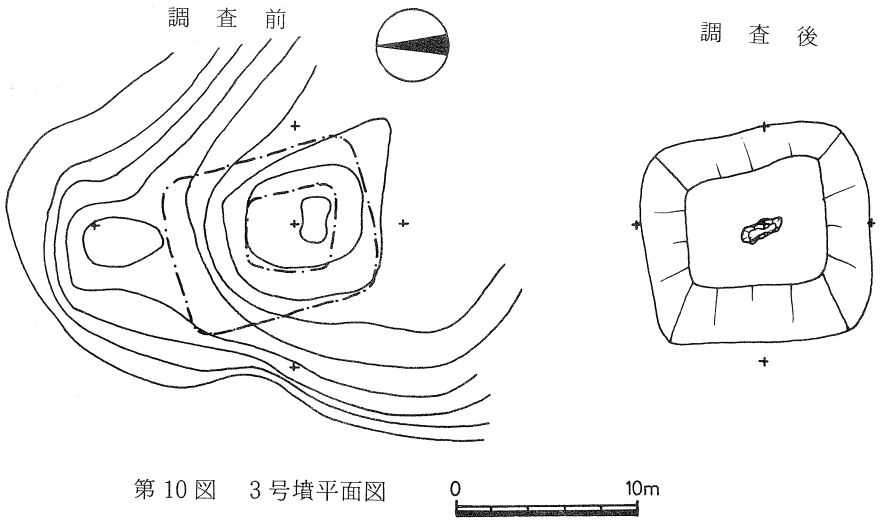


第９図　１号墳墳丘断面図

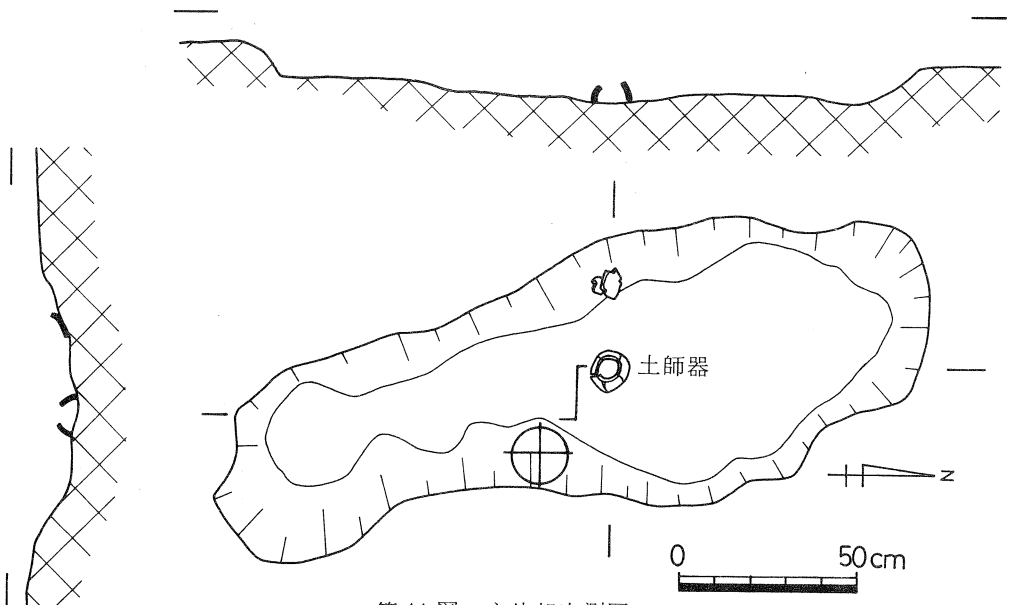
第 3 号墳

【墳丘】　第 2 号墳と考えていた古墳のすぐ南隣りに位置する。長砂古墳群の中では比較的形状のはっきりした方墳で、南北長 12. 7 m、東西長 12. 0 m、高さ 0. 74 mを測る。屋根上平坦面に墳丘基盤を作るため方形に墓域を区画した後、盛土を施したもので、外部施設はない。

【主体部】　墳丘中央に南北に向かって、長さ 2. 11 m、幅 0. 62 m、深さ 0. 12 mを測る。墳丘を構成する土砂の中で、わずかに暗褐色を呈すると認められるにすぎず、土壙の形も不定形である。しかし主体部のほぼ中央から土師質の壷が、下半分を切り取られた形で埋没しており、これが被葬者のために供じられた遺物であったろうと推定された。

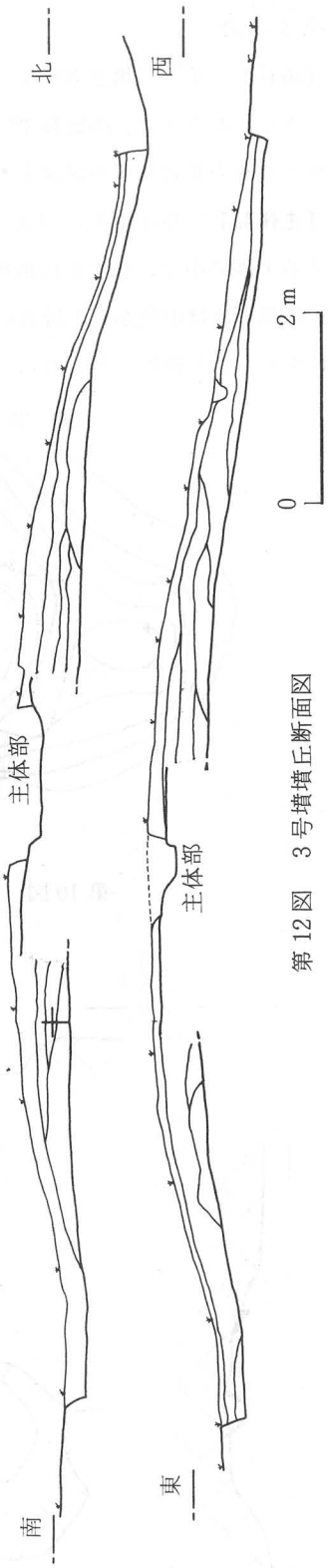


第 10 図　3 号墳平面図



第 11 図　主体部実測図

【遺物】　主体部内の遺物は前出の土師器壷上半部だけである。そのほか墳丘上には遺物は全く見当らなかった。



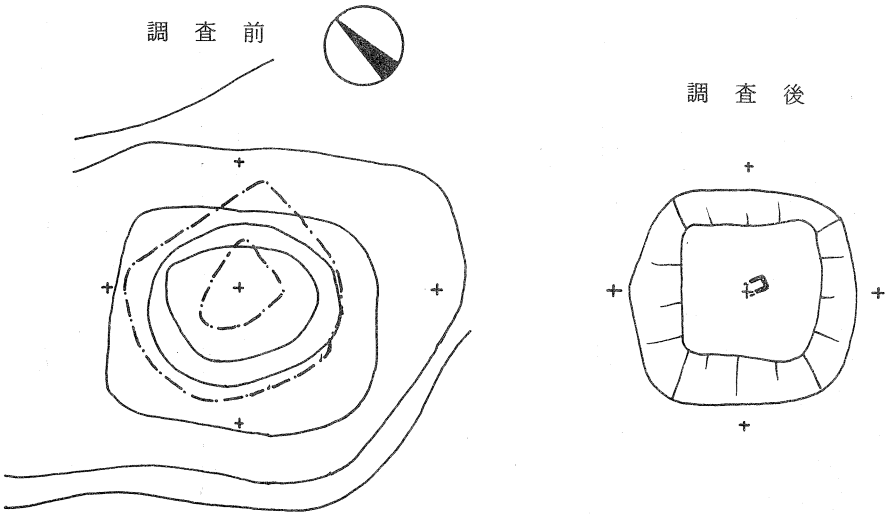
第 12 図　3 号墳墳丘断面図

第４号墳

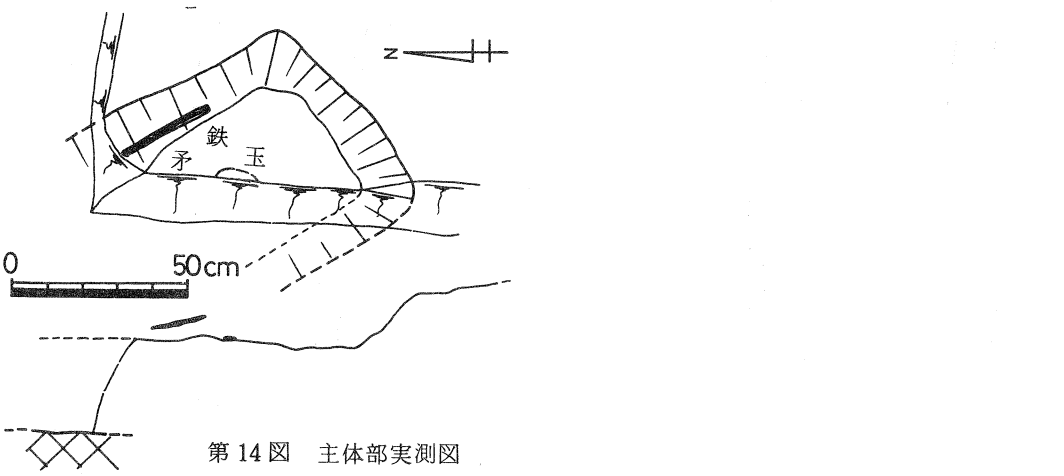
【墳丘】　第３号墳のさらに南側、本古墳群の所在する丘陵頂部の平坦面にあり、レベル的にみても最も高所に位置する古墳である。南北長 11.5 m、東西長 12.1 m、高さ 0.82 mを測る方墳である。墳丘の築成は、この平坦面に、ほぼ現状のとおり盛り土を施したもので、その構造は、第１号墳及び第３号墳と同様である。外周施設はなかった。

【主体部】　主体部と考えられるような明確な土壙は確認出来なかったが、墳頂部に東西長 2.29 m、幅 0.7 m、深さ 0.11 mの落ち込みが認められ、また後述の遺物が発見されたので、これを主体部と判断した。

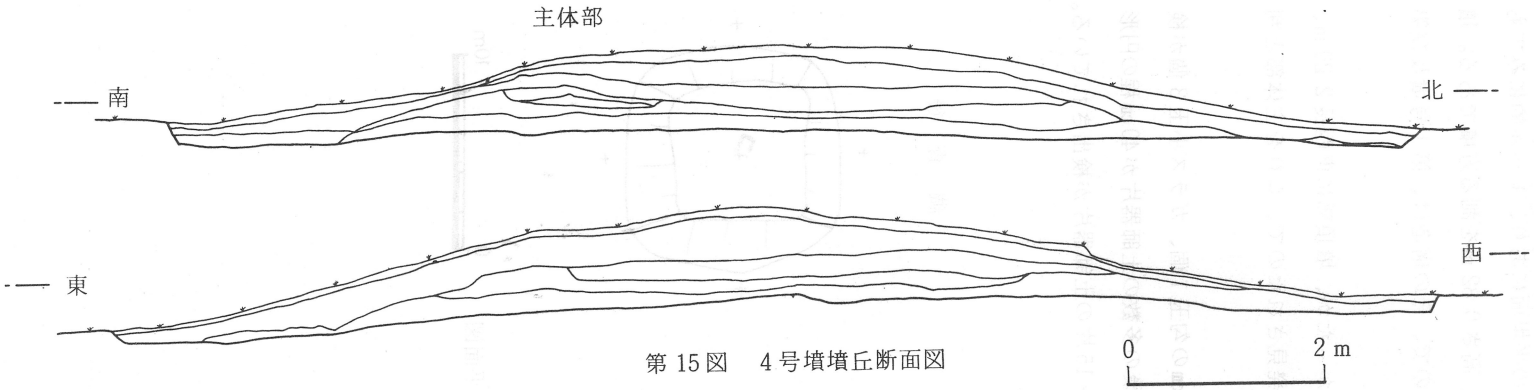
【遺物】　主体部内の床面に柄部分を欠いた鉄製矛と、長約２cmの勾玉１個、ガラス小玉３個が検出された。この上面の墳頂部表土である褐色土中からは、３cm前後の多数の土師器片が40cm程の円形の範囲で密集して発見された。その下層、暗褐色土層中でも 10 ～ 15片の土師器片が検出されている。



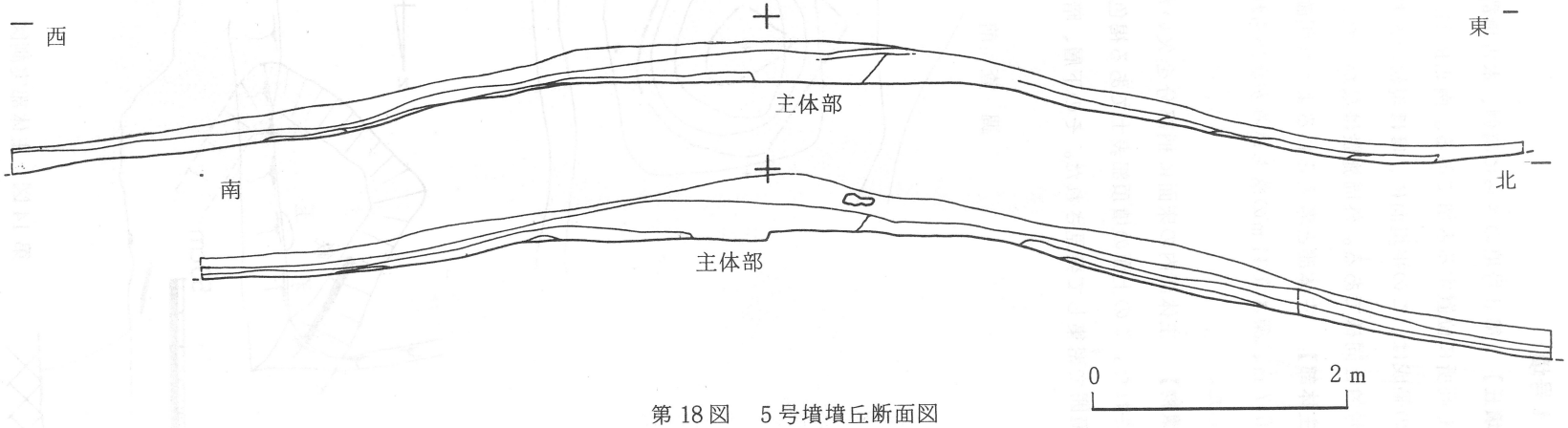
第 13 図　４号墳平面図



第 14 図　主体部実測図



第 15 図　4 号墳墳丘断面図

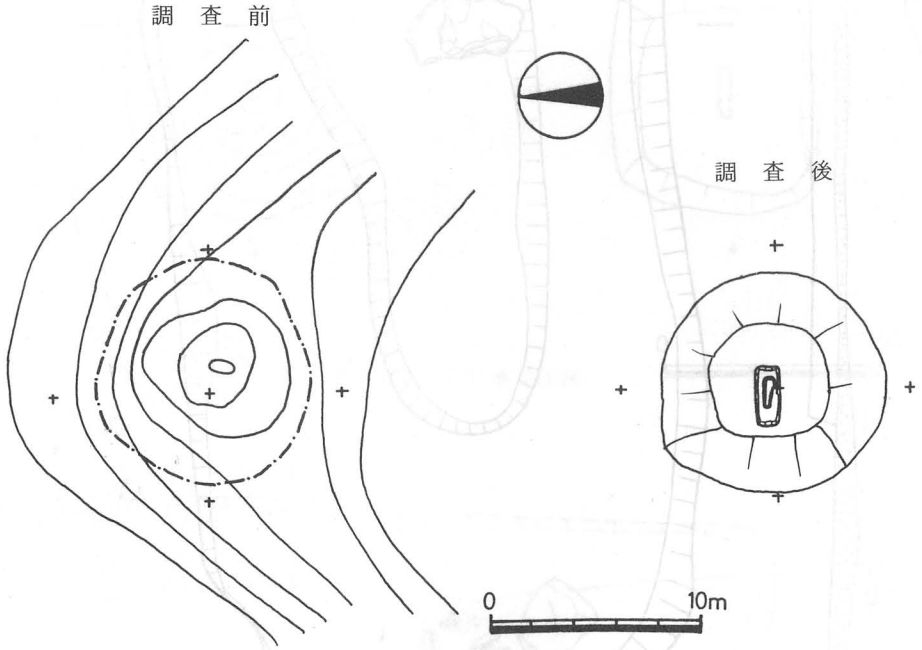


第 18 図　5 号墳墳丘断面図

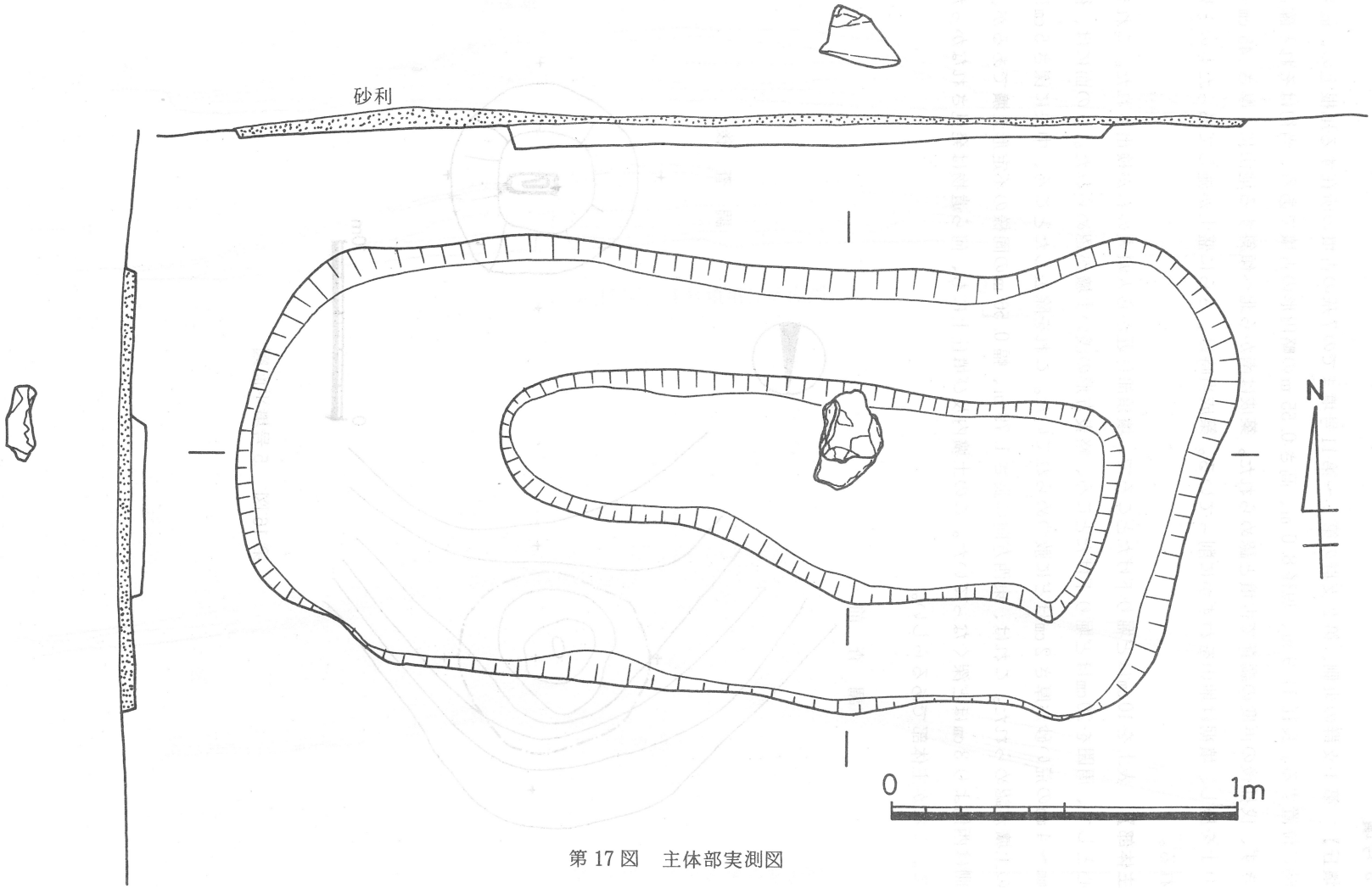
第５号墳

【墳丘】　第１支群の東側、第２支群の第５～第11号墳までの７基の古墳の所在する尾根上の、最も北端に位置する。長径 11.9 m、短径 8.0 m、高さ 0.55 mの略円形の古墳である。当初はそれと確認できず、伐採後の再度の調査で古墳と認められた。築成は南から北へ傾斜する地山に、厚さ 45 cmの盛り土を施し、墳裾は地山をわずかに削っている。築成当時は、さらに盛土が施してあったものと思われる。

【主体部】　表土を10cmほど堀り下げたところで、墳頂部付近から人頭大の石が検出された。これを中心として、周囲を20cmほど堀り下げたところ、略表方形の浅い土壙が認められた。この面には、径２mm～４mmの荒い砂が厚さ２cmほどに敷つめられていた。これを除去したところ、中央に深さ５cmほどの土壙が認められた。これは、東西方向に長さ 1.79 m、幅 0.56 mの同様の不定形土壙であるが、東側は西側より３cmほど深くなっていた。この土壙内及び墳丘上にも、何ら遺物は発見されなかったので、これが主体部であるらしい。



第16図　５号墳平面図



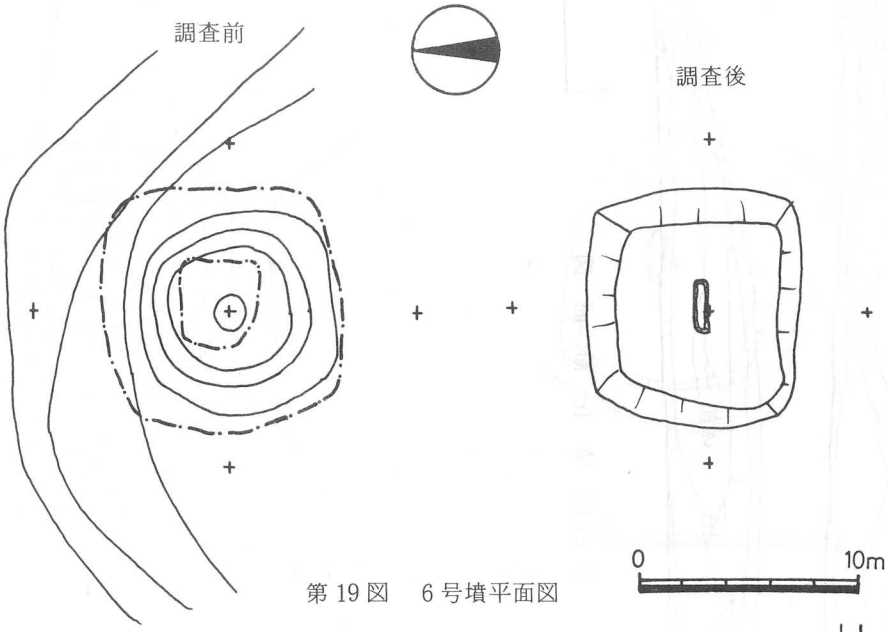
第 17 図　主体部実測図

第6号墳

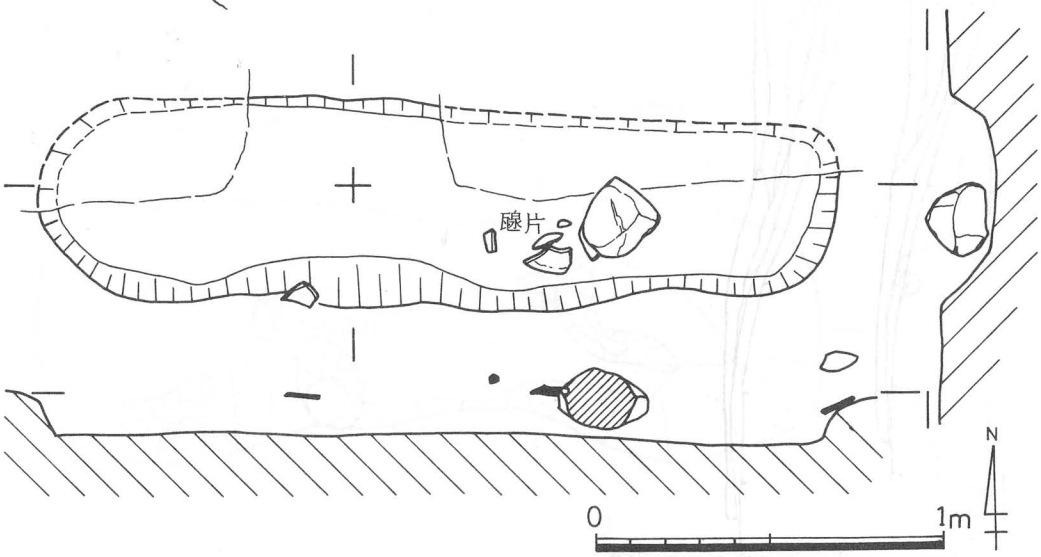
【墳丘】 第5号墳の南側に位置し、南北長10.9 m、東西長10.0 m、高さ1.03 mを測る方墳である。地山はほとんど加工せず盛土によって築成されている。外周施設はない。

【主体部】 表土下12 cmで、土壙上端面に達し、東西方向に長さ2.31 m、幅0.61 m、深さ9 cmの長方形を呈している。この土壙内にも5号墳丘上の土壙と同様に人頭大の石が置かれてあった。遺物は須恵器大型瑳の破片が3片、石の周囲に置かれてあった。

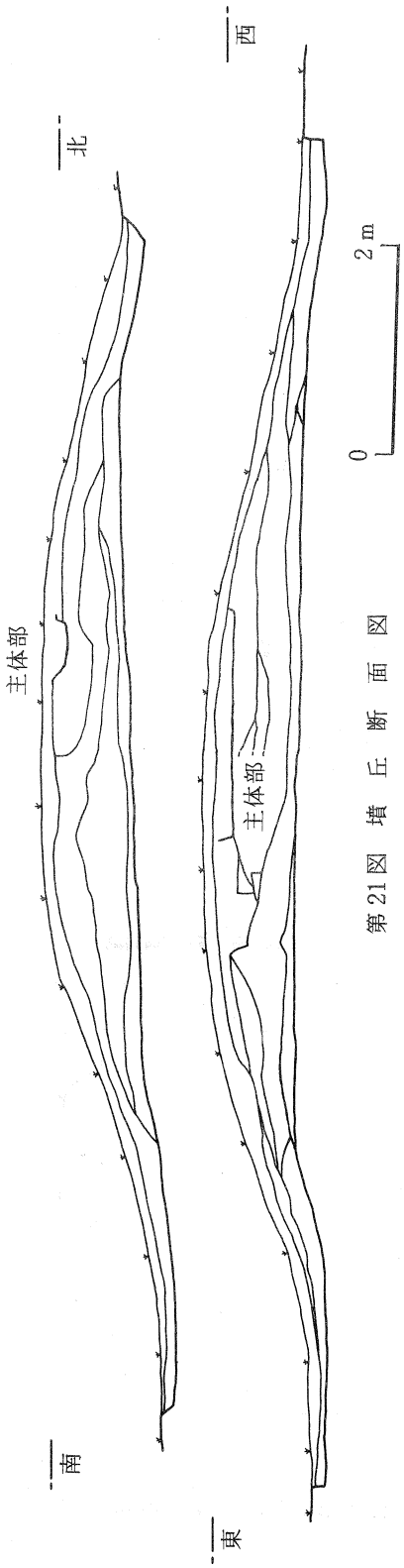
【遺物】 表土を10 cm堀り下げたところで、北側墳裾より瑳の破片が、又、北東部墳裾でも同様の



第19図　6号墳平面図



第20図　主体部実測図

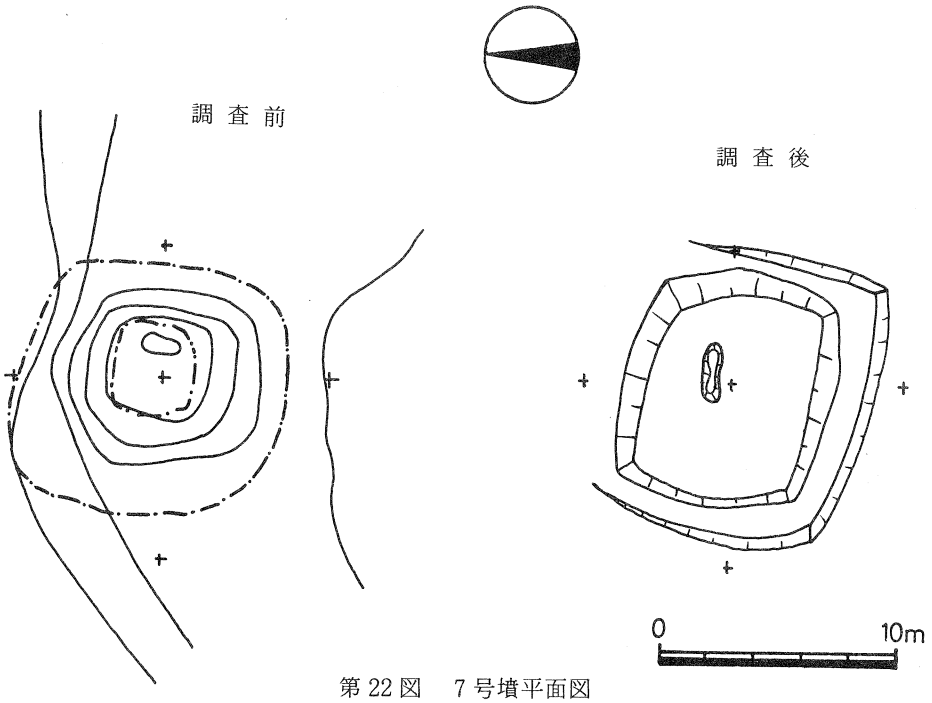


第21図 墳丘断面図

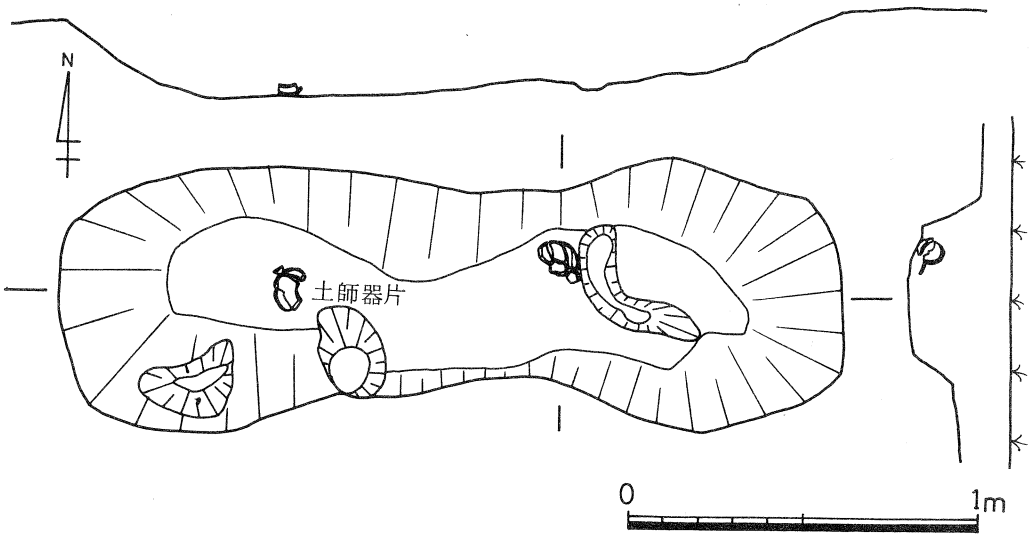
瓲の破片が検出された。これは、前述した土壙内の瓲と同様の破片で、故意に破砕され分散して置かれた可能性が強い。このほか、南側墳裾で、3～4㎝の磨滅した土師器片が100片以上も集中して出土しており、これも葬送儀礼後の使用済土器の集積場所のようなものでなかったかと考えられる。

第７号墳

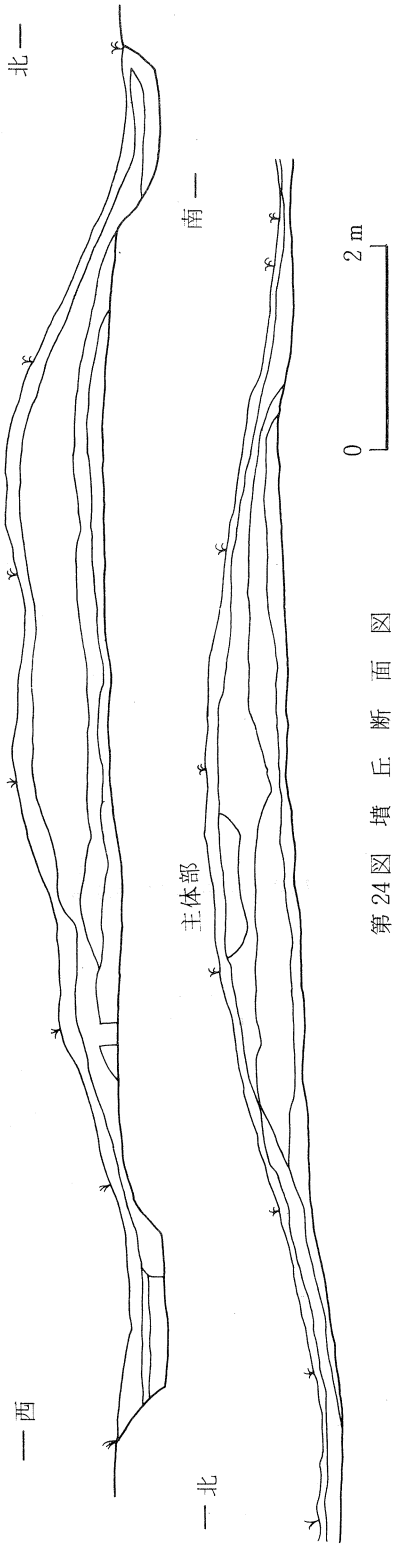
【墳丘】　南北長8.7ｍ、東西長10.4ｍ、高さ0.87ｍの方墳である。第２支群の所在する丘陵屋根上の頂部平坦面に、他の８号墳～11号墳と共に密集している。東側と西側、及び南側に、幅1.6ｍ～2.1ｍ、深さ0.3～0.4ｍのかなり深い周濠がめぐらされており、はっきりした方形を示している。平坦面に盛土を施したのち、濠を穿ったものと推定される。



第22図　７号墳平面図



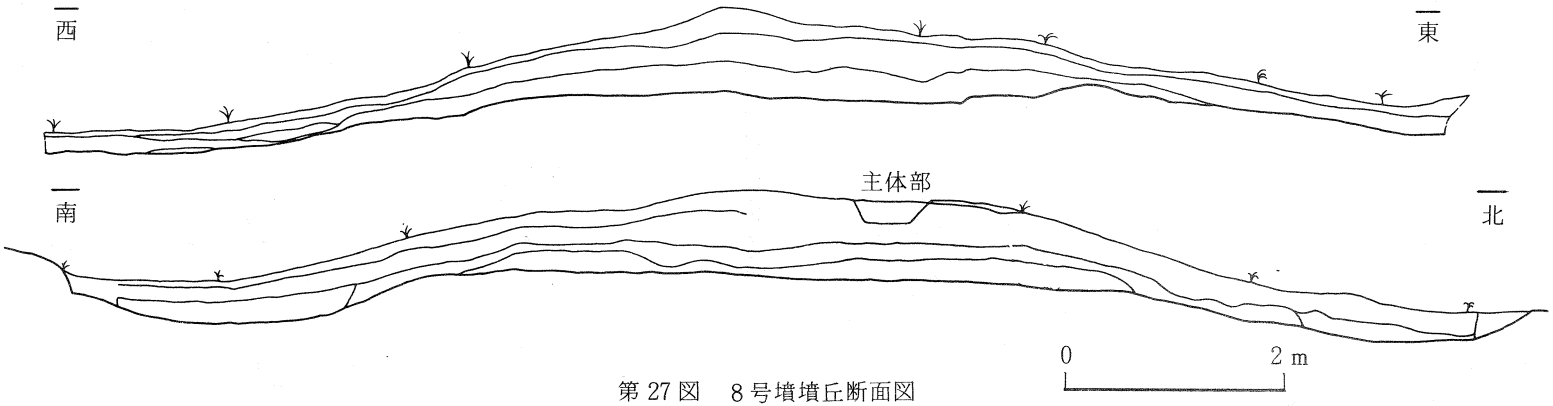
第23図　主体部実測図



第24図 墳丘断面図

【主体部】 ほぼ墳頂上にあり、東西方向に長さ2.22 m、幅0.56 m、深さ0.21 mを測る。表土下10㎝内外で主体部上端面に達した。土壙内には直径10㎝、深さ10㎝の土壙のほか、2か所に凹地が認められたが、人為的な作為は認められなかった。主体部西側2か所に、同一個体の土師質の壷が埋葬されていた。

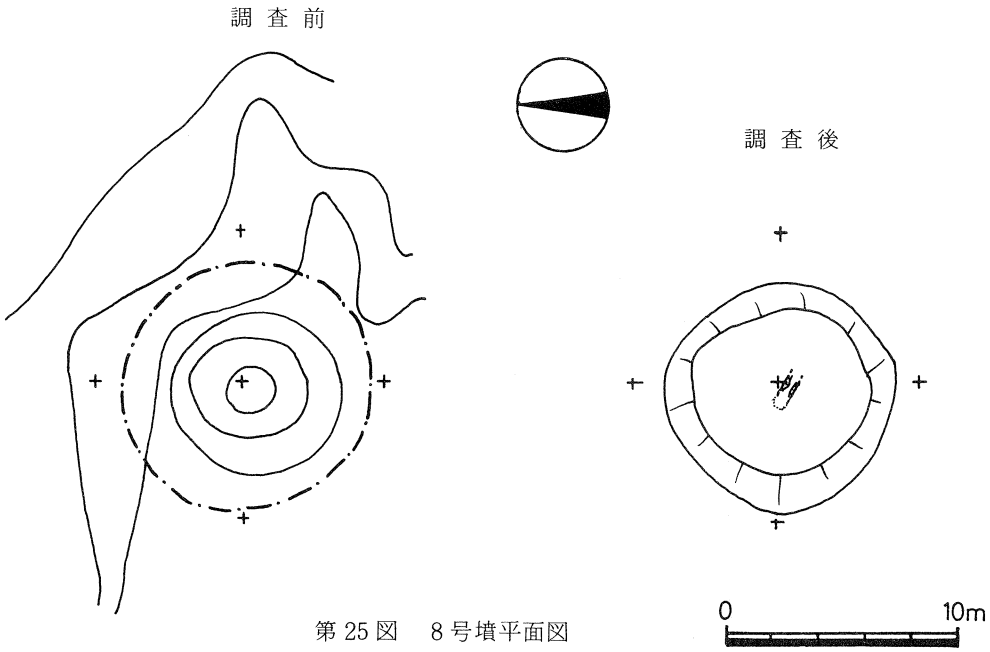
【遺物】 北側の6号墳との中間地点から、外径9㎝、高さ5.8㎝の須恵器把手付碗が出土した。その他には遺物はなかった。



第 27 図　8 号墳墳丘断面図

第8号墳

【墳丘】 第7号墳の東隣りに位置する、長径9.3 m、高さ0.98 mの略円墳である。長砂古墳群内には、計3基の円墳があるが、これらの古墳も完全な円形とは云えず、楕円形であったり、角をもつものがあり断定出来ない。この中でも、この第8号墳は、比較的円形に近いもので、円墳として構築された可能性が強い。

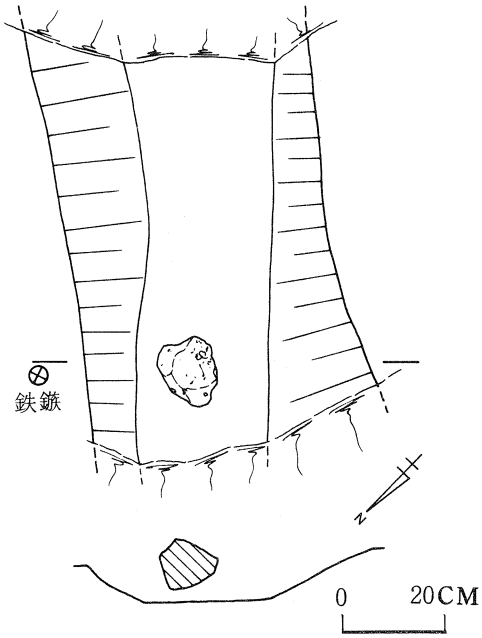


第25図　8号墳平面図

【主体部】 表土下約10㎝で主体部上端面に達した。当初は、これを主体部と判断出来ず、畦を残して地山面まで堀り進んだ。後日、確認のため再度、畦面を掃除した結果、わずかに土色の差異が認められた為、これを調査し、推定東西長2.10 m、幅0.48 m、深さ0.20 mの土壙を確認した。この中には、土師器の細片が7～8片遺存していたのみである。

【遺物】 南側墳裾地山面から須恵器甕片が2個体分、同様の地点から土師器高坏片が1個体分出土している。

主体部北の地山直上からは、鉄鏃が3束以上発見された。

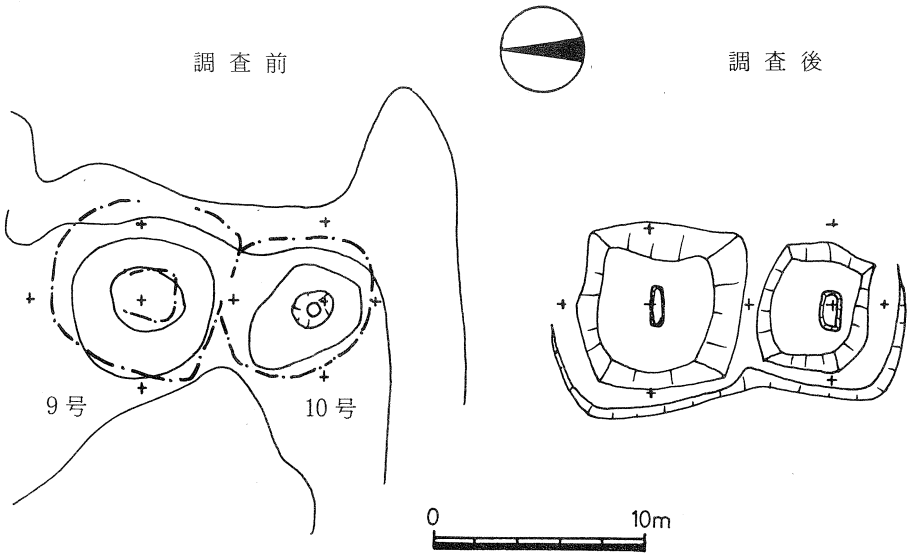


第26図　主体部実測図

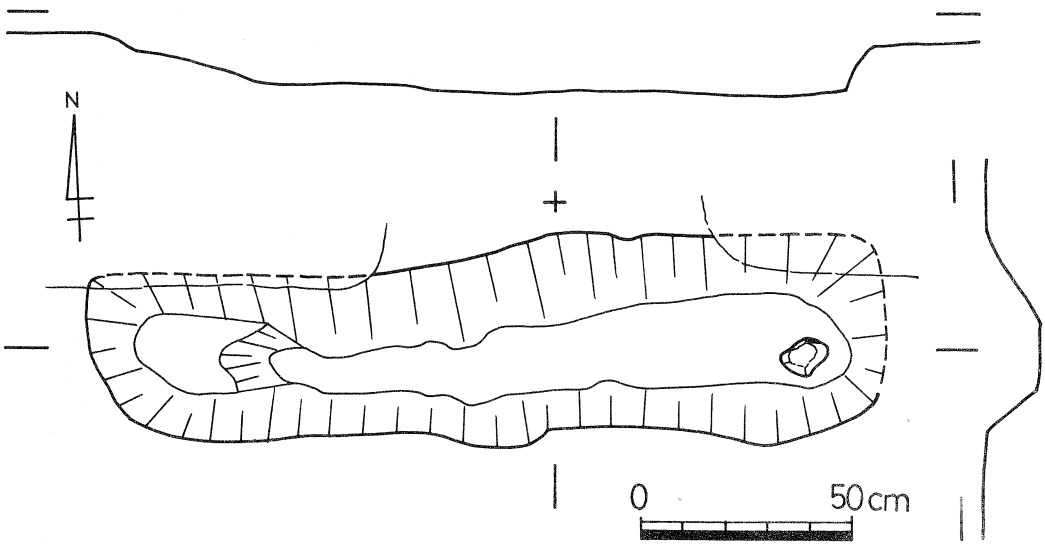
第 9 号墳

【墳丘】 第 8 号墳の南側丘陵の頂部に所在し、南北長 7. 3 m、東西長 8. 0 m、高さ 0. 53 m の小形の方墳である。墳丘の北、南及び西側に幅 0. 8 m、深さ 0. 20 cm の周濠を有している。周濠を穿った後その土砂を盛り上げたもので、その築成は隣接する第 10 号墳と似かよっている。

【主体部】 東西方向に長さ 1. 91 m、幅 0. 46 m、深さ 0. 11 m を測る土壙が、墳丘のほぼ中央から検出された。土壙内には、東側に直径約 10 cm ほどの石が 1 個検出されたのみで遺物は全くなかったが、



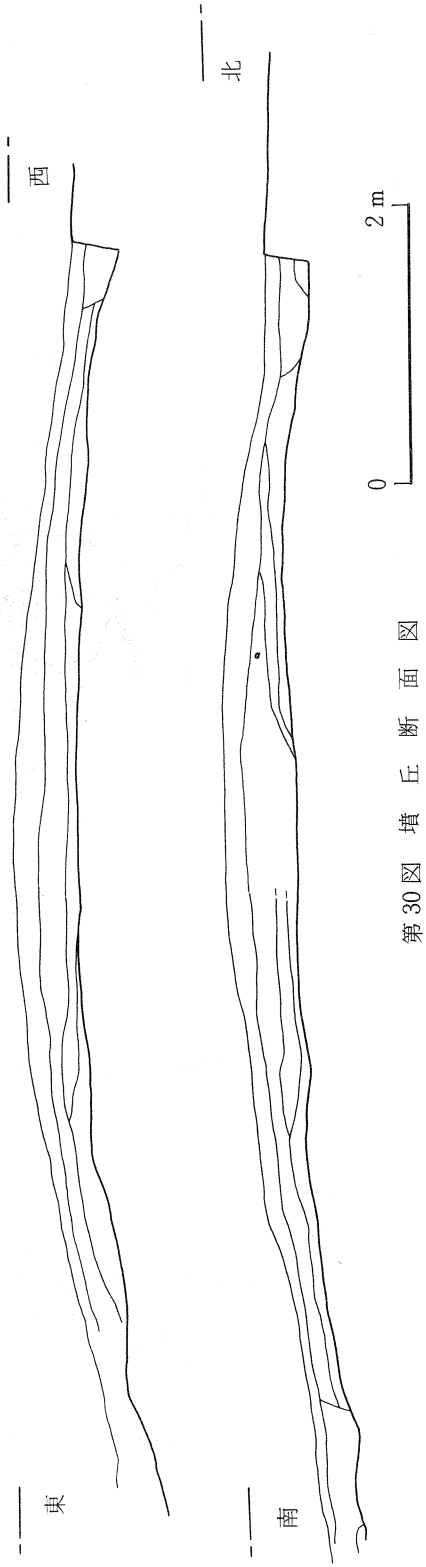
第 28 図　9 、10 号墳平面図



第 29 図　9 号墳主体部実測図

これが本古墳の主体部であると考えられる。

【遺物】　墳丘の北側斜面に、土師器片が2～3片出土した他は、東側の墳裾より土師器片、須恵器片が多量に出土したが、これは後述する、第11号墳に伴う埋葬物と考えられたので、含まないものとした。

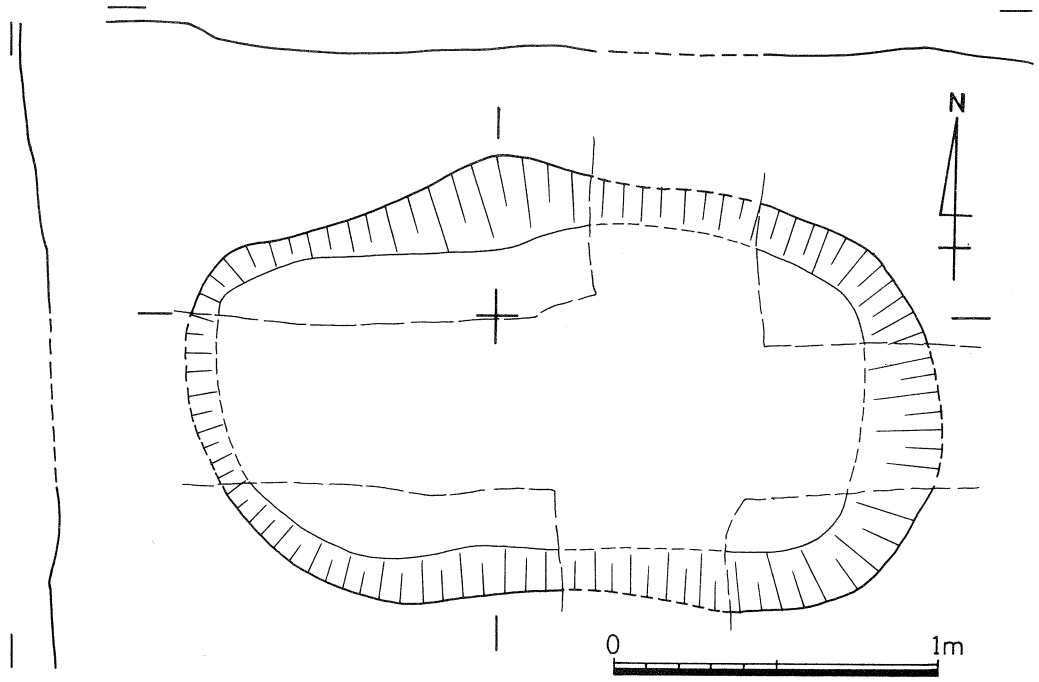


第30図　墳丘断面図

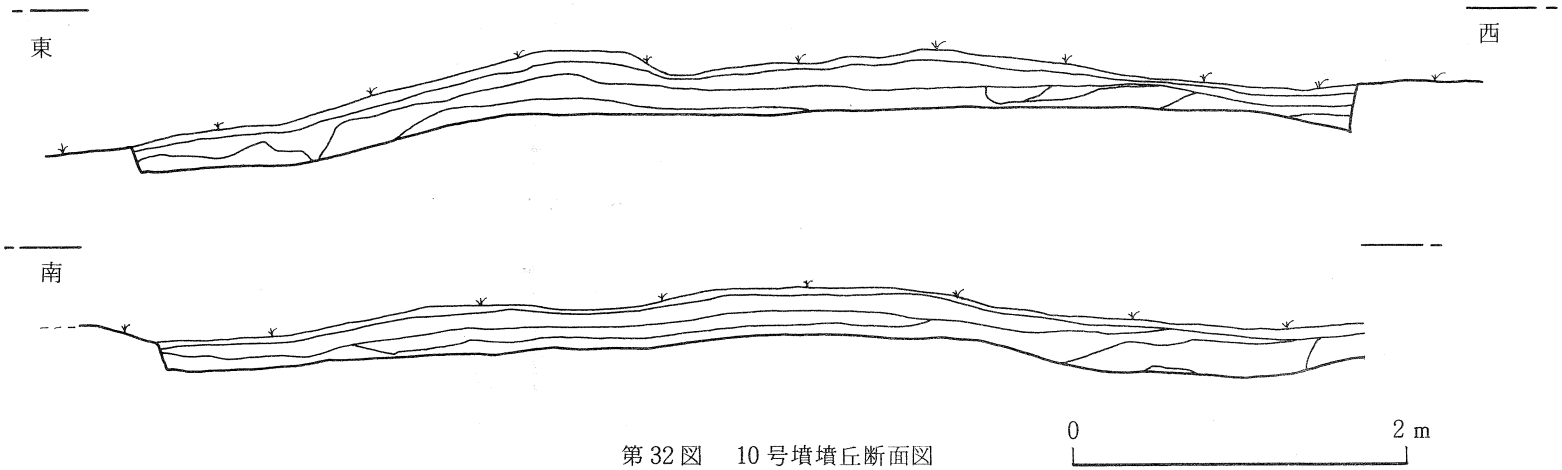
第 10 号墳

【墳丘】 第 9 号墳の南側に隣接し、北側周濠を共通にしており、また西側の周濠は等しくつながっている。南北長 5.4 m、東西長 6.1 m、高さ 0.42 mを測る方墳である。第 9 号墳と同様、平坦面に周濠を穿った後、土砂を盛り上げたものである。

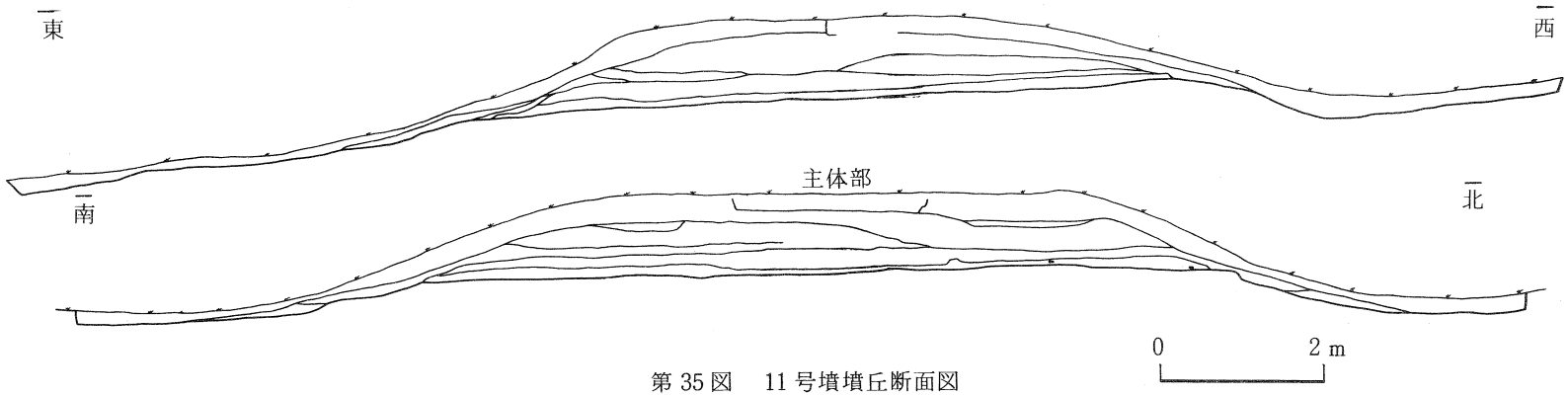
【主体部】 墳丘中央に南北長 2.32 m、東西長 1.33 m、深さ 0.12 m の幅広長方形の土壙が認められたが、遺物、その他は全くなく、主体部がどうかは確認出来なかった。墳丘上にも、遺物は発見されなかった。



第 31 図　10 号墳主体部実測図



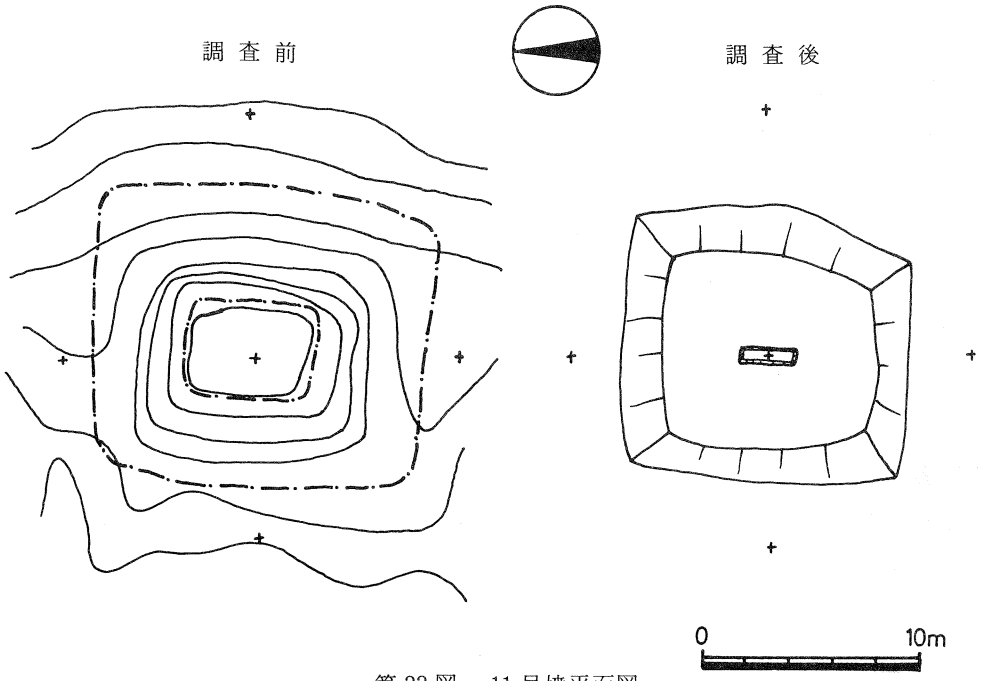
第 32 図　10 号墳墳丘断面図



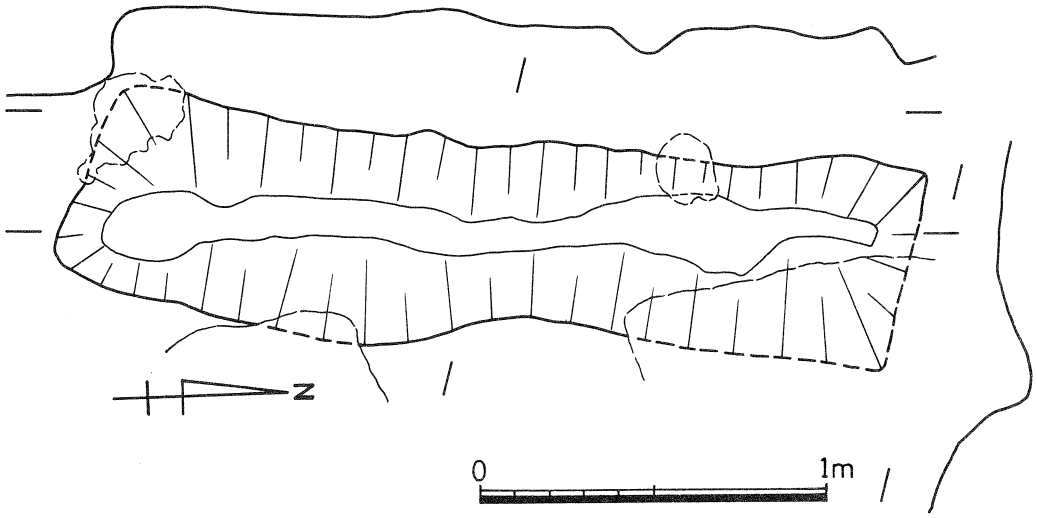
第 35 図　11 号墳墳丘断面図

第 11 号墳

【墳丘】 第 2 支群中最大の古墳で、第 1 支群の第 1 号墳と比較すると、規模ではやや小さいが、非常に形の整った方墳である。南北長 12.8 m、東西長 13.2 m、高さ 1.41 mを測る。西側は墳裾より幅 0.56 m、深さ 0.08 mで、9 号墳、10号墳の墳裾までわずかに周濠らしきものが認められる。そのほかの方向には周濠はない。墳丘は東側に傾斜した斜面に作られているので、墳丘基盤を作る際にこれ



第 33 図　11 号墳平面図



第 34 図　11 号墳主体部実測図

を平面とするために、かなり西側を深く穿ち、この土砂を盛り上げたものであろう。

【主体部】 これまでの古墳の主体部と同様、表土を除去後の暗褐色土上面で土壙が検出された。これは南北方向に、上端面で長さ2.41m 、幅0.54 m、深さ0.18 mを測るが、床面積は10㎝内外でU字形の土壙である。遺物は、土壙中程に土師器片1片が検出されたのみであった。

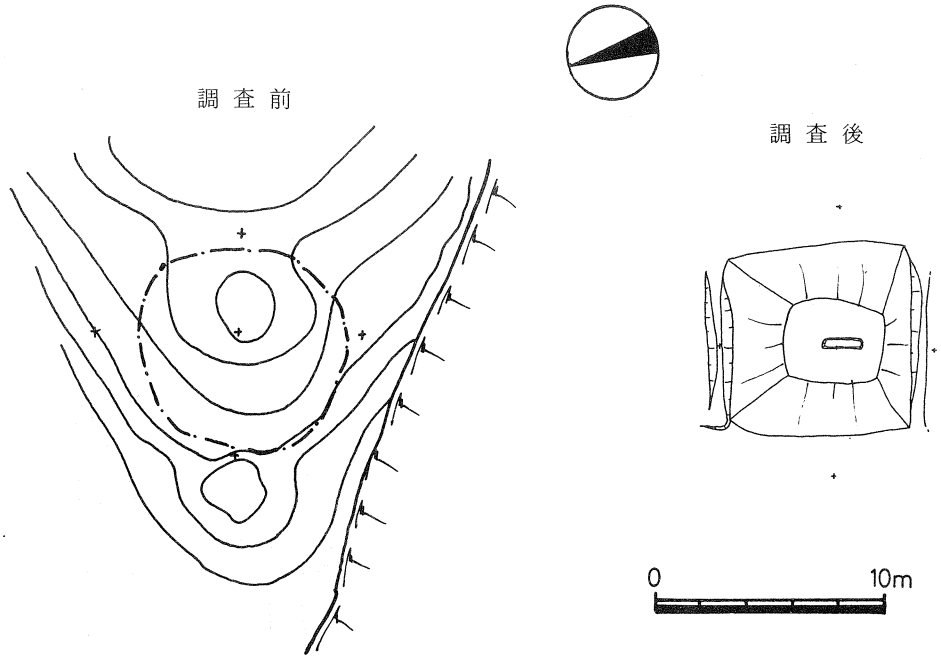
【遺物】 墳丘西側、第9号、10号墳に面する浅い凹地に、墳裾にそってコの字形に並べられた状態で、土師器高坏4個体と、土師器壷1個体、須恵器の甕と思われる細片が集中して検出された。さらに、第11号墳西側墳裾のなだらかな斜面上にも、土師器高坏2個体分、ほかに大型甕と思われる土師器片が30片以上確認された。ここで出土した須恵器片を復元してみたところ、高さ15.6㎝、胴径17.9㎝、口径8㎝の県内でも類例の少ない樽形甕であることがわかった。土師高坏は、都合6個体出土したが、そのうち3個体はほとんど同じ地点に列をなして並べられていたと思われる。法量もほぼ同様で、口径13㎝、 器高12㎝、 脚底径9.2㎝、 脚高4.7㎝を測る。樽形甕は、須恵器の古式に属することから、この第11号墳も、古墳時代中期に属するものと考えられる。また、他の古墳も第11号墳と同様の形状と埋葬形態を示すことから、長砂古墳群全体の構築年代も、それほど大きなへだたりはないものと思われる。

第12号墳

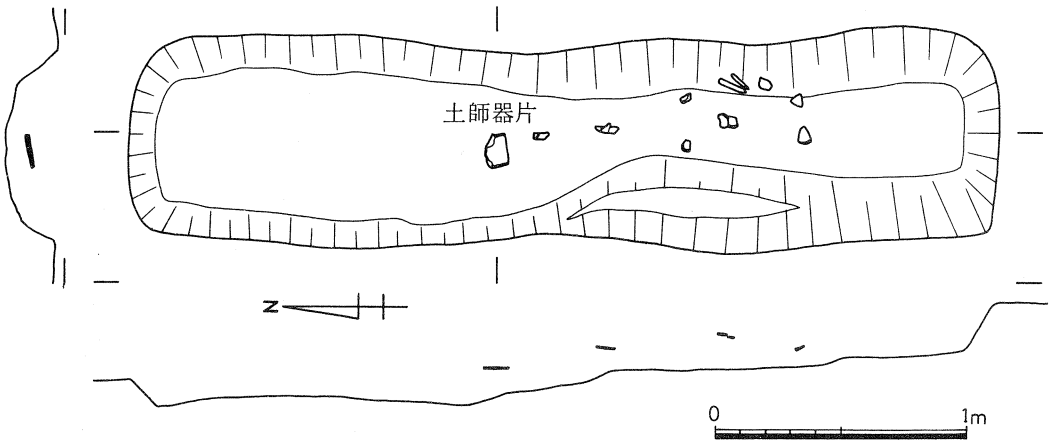
第3支群、第12号墳～第17号墳までの6基の古墳が連なる、南側尾根上の最も西端に位置し、当初小形の円墳と考えていた。この地域を代採した際、再調査を行った結果、ほとんど地形的な変化が見られなかったことから古墳とは疑わしいと判断した。一応表土を除去したが、遺物は全くみあたらなかった。

第 13 号墳

【墳丘】 第 3 支群の尾根上西端に位置する。南北長 8.6 m、東西長 8.3 m、高さ 1.89 mを測る方墳である。西側に深さ 20 cm、幅 45 cmの周濠を有する。北側及び南側は急な尾根の斜面となっており、また東側は第 14 号墳がすぐ隣りにあって、周濠を作る余地がない。尾根斜面西側に濠を堀ることにより墓域を作り盛土は墳頂部に主体部をおおう程度に盛られているにすぎない。



第 36 図　13 号墳平面図

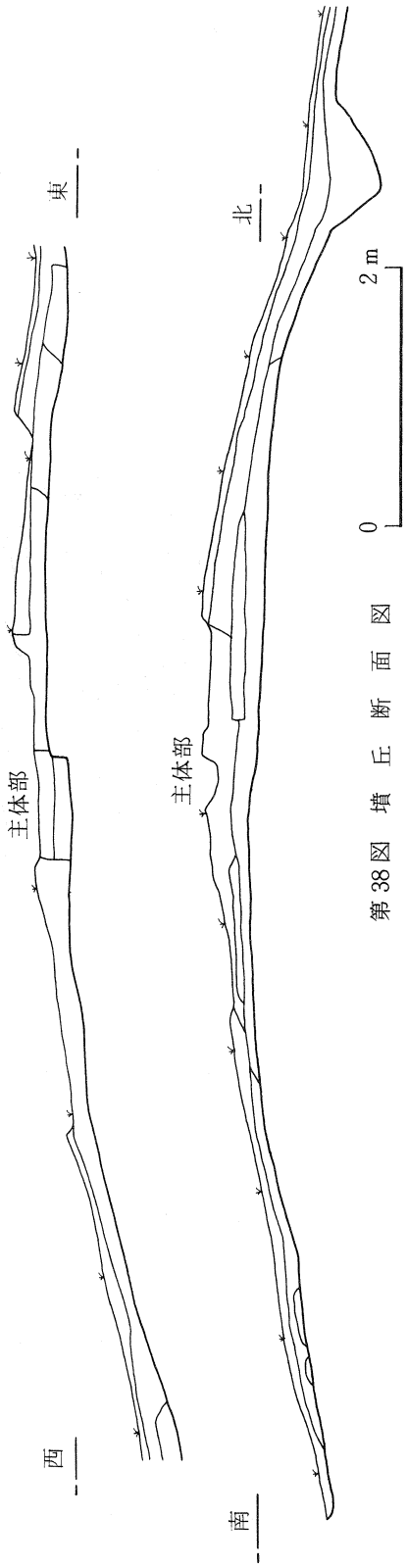


第 37 図　主体部実測図

【主体部】　東西方向に長さ1.72 m、幅0.42 m、深さ0.19 mを測る。東から西にむかって床面が傾斜しており、レベル差は25㎝程ある。また中央部が10㎝低くなってあらたな凹地を作っているが、その差異はほとんど認められない。床面と上端面との中間地点に土師器片が浮いた状態で5～6片散在していたほかは、遺物は認められなかった。

【遺物】　西側周濠の底に埋めこまれたように、土師器壷の縦半分が遺存していた。非常にもろくなっており、土砂を取りのぞく時点で、細片となった部分もあり、濠内に露出していた他の半分は、すでにくずれさったものと思われた。

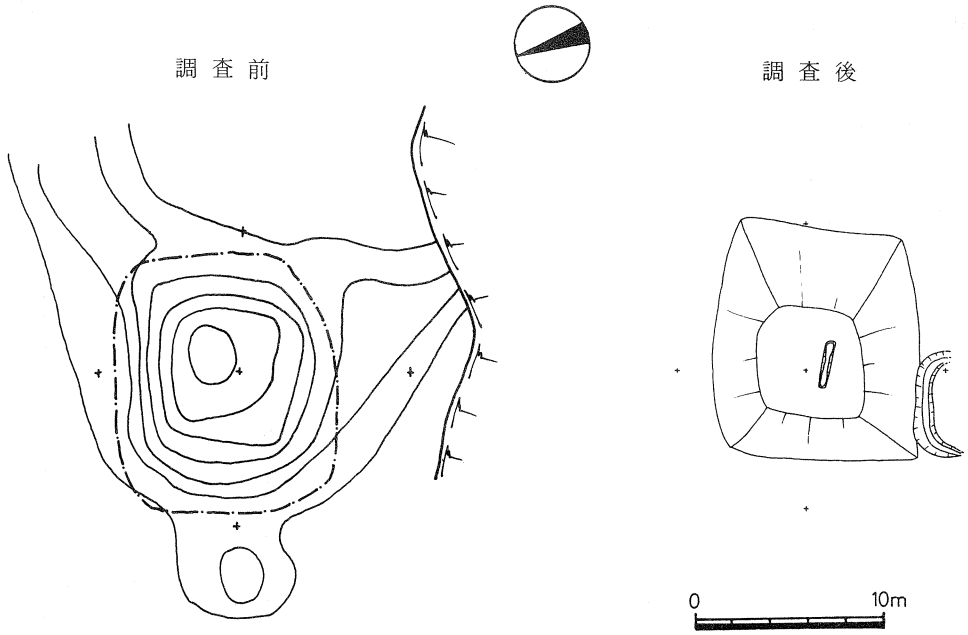
そのほかに遺物はなかった。



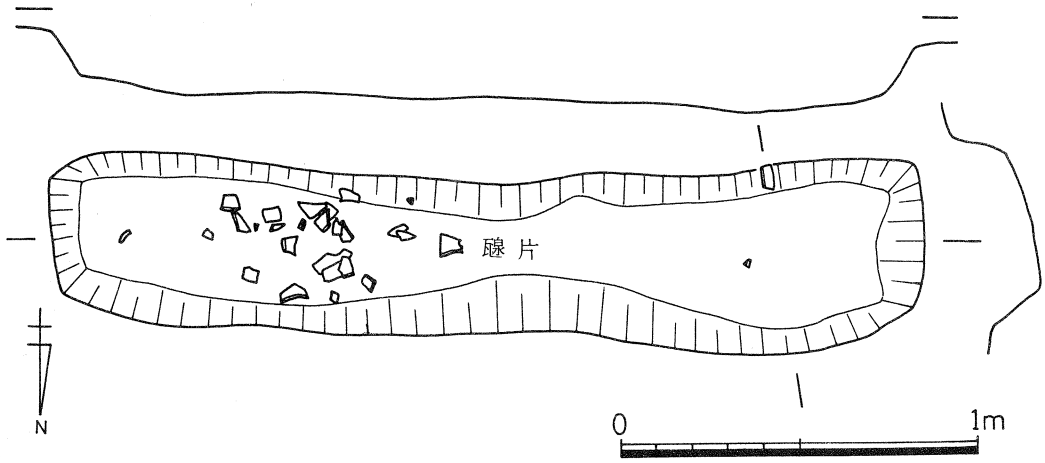
第38図　墳丘断面図

第 14 号墳

【墳丘】 第 13 号墳のさらに東側に位置する。南北長 12.2 m、東西長 11.1 m、高さ 1.19 mを測る。第 3 支群中では最も大きく、均整のとれた方墳である。第13号墳との境界に周濠を有するほか、南側にも巾 54 cm、 深さ12 cmの浅い周濠らしきものが認められた。第 3 支群全体としてみられることは他の支群に比して盛土の厚みが薄いことがあげられるが、これは尾根の斜面に多くの古墳を作った為であろうと思われる。この第14号墳も墳頂部に主体部をおおう程度の盛土を施しているのみである。



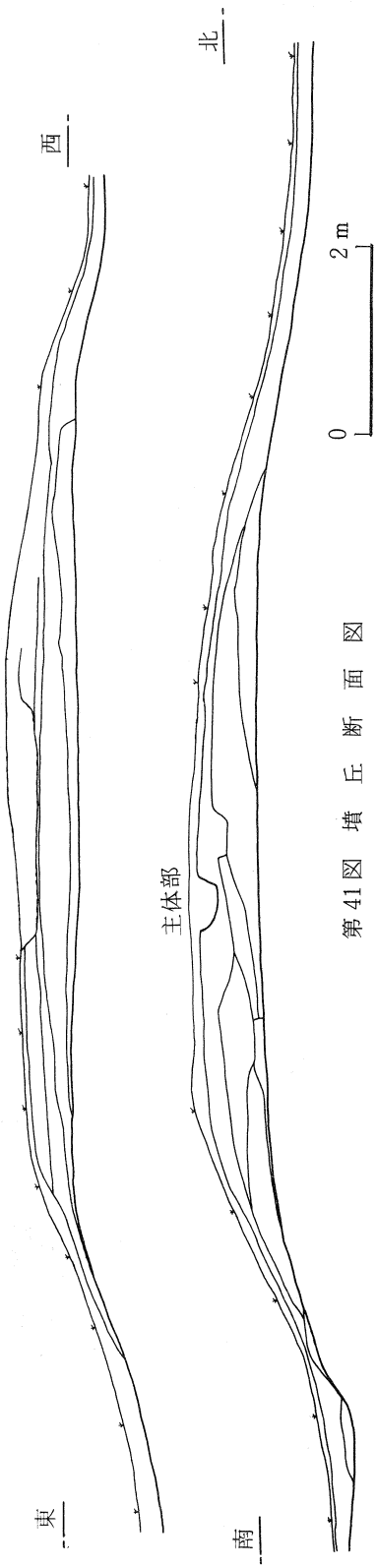
第 39 図　14 号墳平面図



第 40 図　主体部実測図

【主体部】　墳頂部中央に、東西方向に位置し、長さ2.13m、幅0.42m、深さ0.19mを測る。他の古墳の主体部と同様、表土を除去したあとの暗褐色土層中にそれと認められた。この土壙は完全な長方形ではなく、西側先端が細くなり、床面も凹凸があり一定していない。土壙内には、須恵器片が西側に散乱していたが、これは後日の復元作業の結果、大型瓹であることがわかっている。

【遺物】　墳丘東側の裾で、多量の土師器片を検出したが、これは高坏3個体と壷の破片1個体分程であろうと思われる。また、南東部墳裾からも須恵器片が検出されたが、これは地山面より1cm～5cmも浮いており、須恵器の作りからも古墳時代後期から奈良期にかけて製作されたものと思われる。

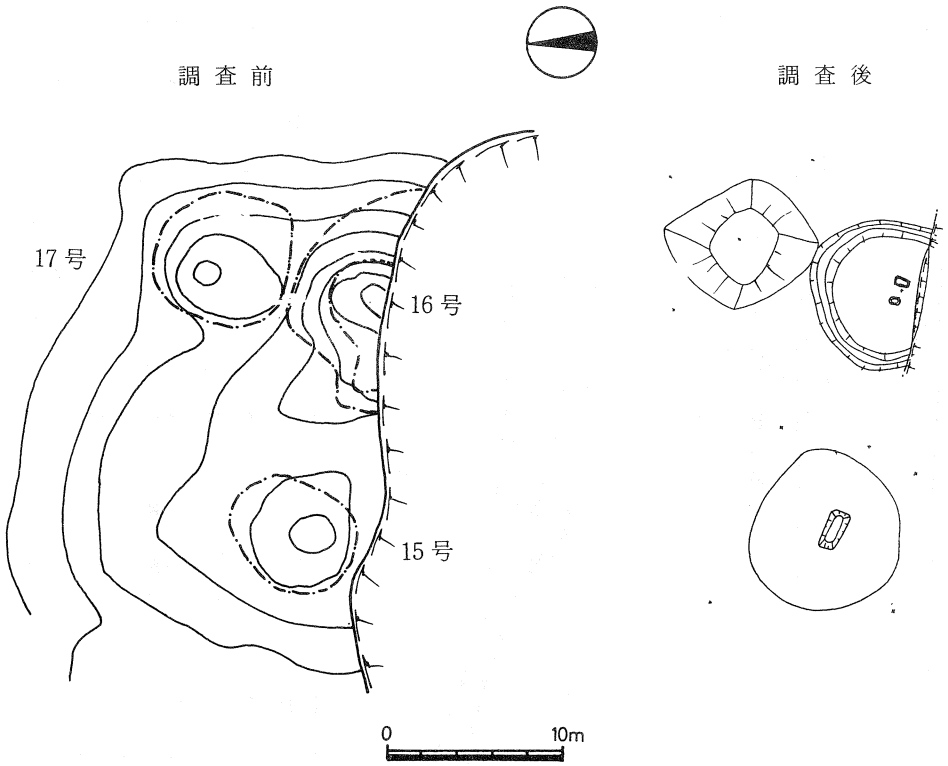


第41図　墳丘断面図

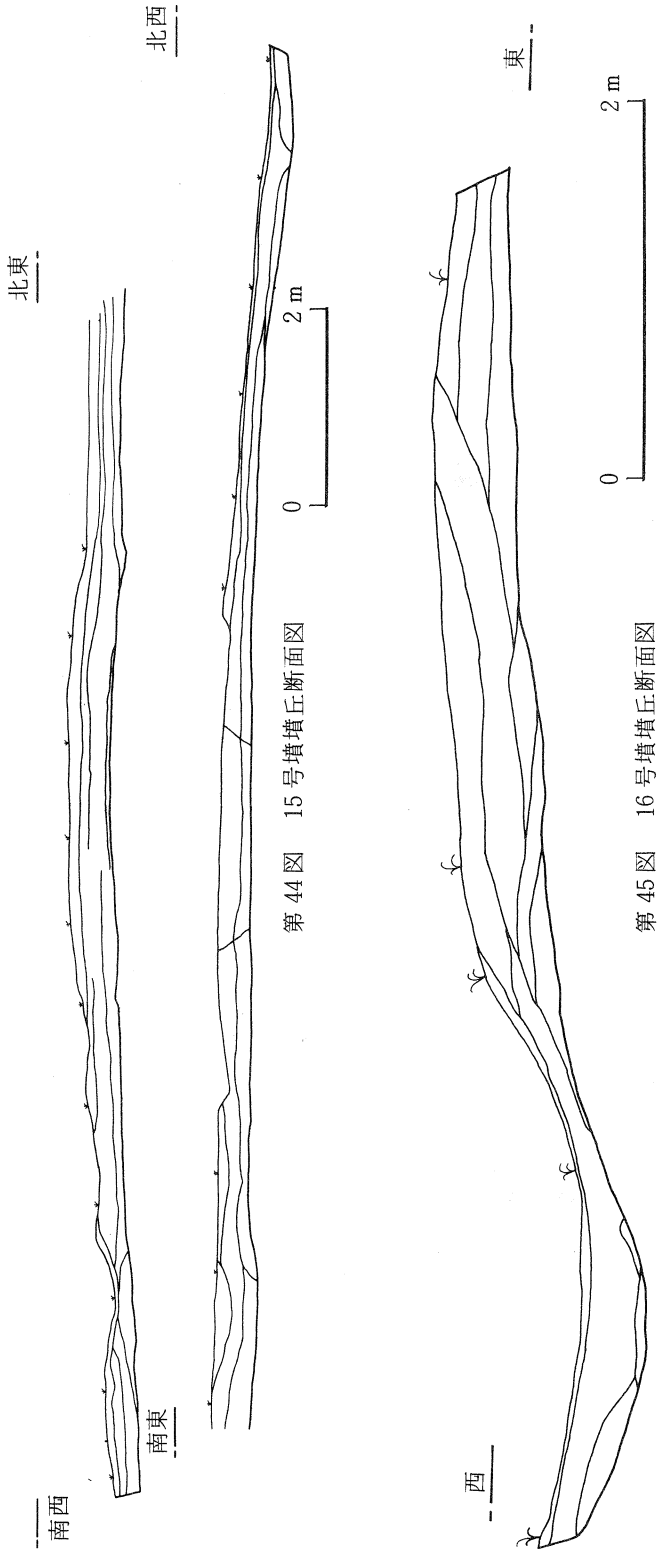
第 15 号墳

【墳丘】 第14号墳の更に東側、第３支群の所在する屋根上平坦面にあり、径8.6ｍの略円形を呈している。高さは、表土を取り除いた時点で30㎝ほどしかない。南側は、柿園造成のため墳裾ぎりぎりまで削平されているが、東側、北側及び西側では、幅１ｍ、深さ10㎝ほどの溝らしき落ち込みがめぐっていた。盛土はほとんど流出しており、外部施設もないため墳形ははっきりと断定出来なかった。

【主体部】 当初、墳丘には主体部らしい土壙は認められなかったが、精査の結果、東西長4.75ｍ、南北長2.75ｍ、深さ0.45ｍの広長方形の土壙を検出した。しかし、この土壙内に遺物はなく、墳丘上にも全く認められなかったので、これが主体部かどうかは確認出来なかった。



第 42 図　15 、16 、17 号墳平面図



第 44 図　15 号墳墳丘断面図

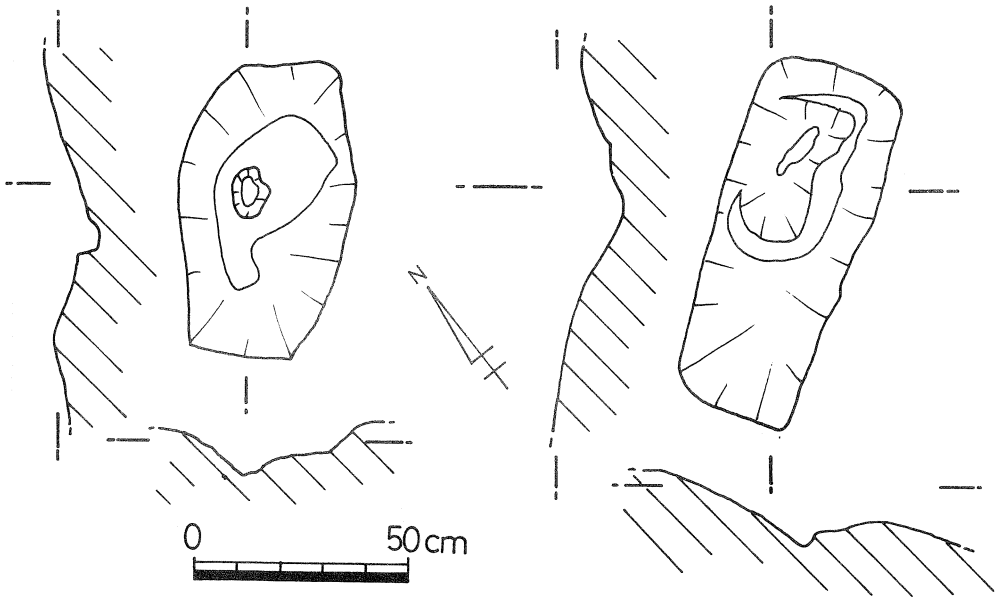
第 45 図　16 号墳墳丘断面図

第 16 号墳

【墳丘】　第 15 号墳の東側の第 3 支群の尾根上の最も高所に位置するが柿木園の造成により、すでに南側半分が削平されていた。南北径約 7.4 m、東西径 7.0 m、高さ 0.95 m を測り略円墳であったろうと推定される。周濠は西側墳裾の途中から始まり、北側及び東側に上端幅 1.7 m、深さ 0.25 m の規模でめぐらされており、東側は同じく削平されている。尾根上に深い濠を穿ちその土砂を盛土して築成したものであろう。

【主体部】　墳頂部平坦面より、2 つの小形、不定形の土壙が検出された。北側のそれは東西方向に、長さ 0.71 m、幅 0.42 m、深さ 0.16 m を測る。南側の土壙は、東西方向に、長さ 0.86 m、幅 0.35 m、深さ 0.15 m を測る。いずれも形状のはっきりしないもので、遺物も検出されなかった。削平された南側墳丘に、主体部があった可能性が強いように思われる。

【遺物】　古墳をめぐる周濠の北東側の底に、土師器壷が縦に半分埋まり込んだ形で発見された。濠内に露出した残りは、第 13 号墳周濠内の土師器の壷と同様に、すでにくずれさったものと思われる。

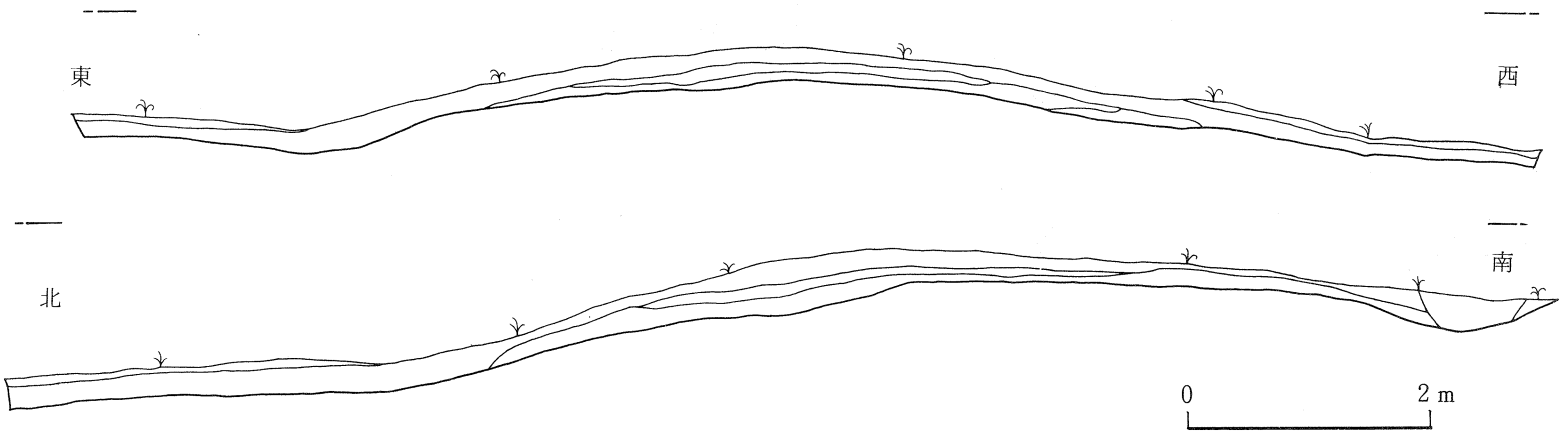


第43図　16号墳主体部

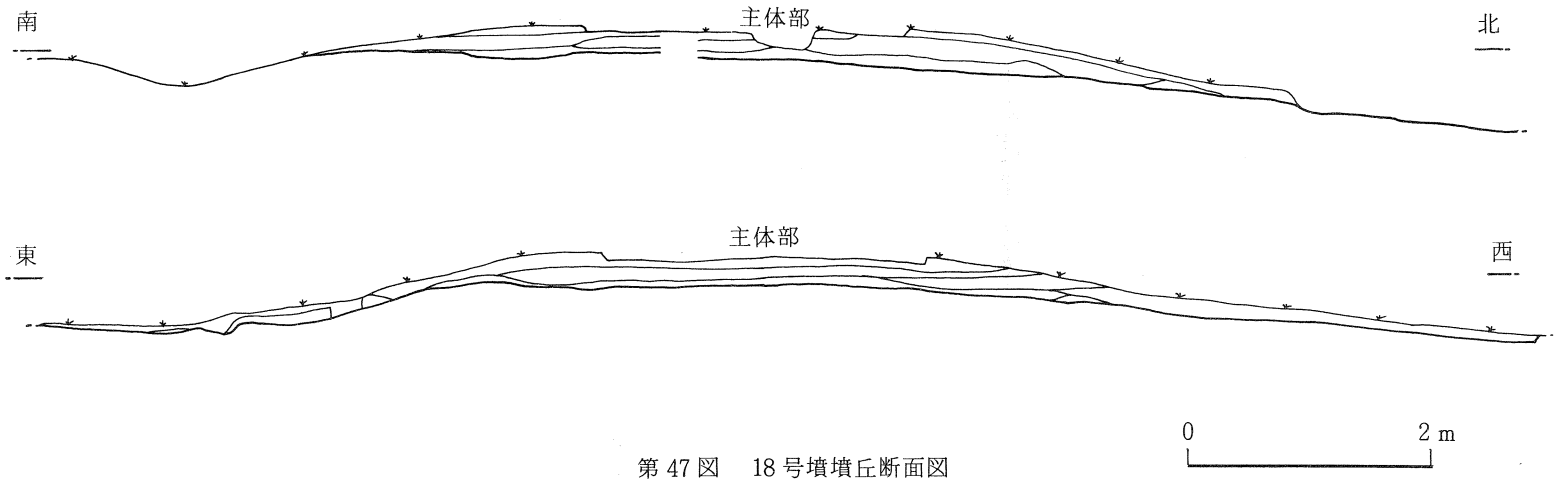
第17号墳

【墳丘】　第16号墳の北側に隣接し、南北径7.3ｍ、東西径6.6ｍ、高さ0.9ｍを測る方墳である。外部施設はない。北側はすぐに斜面となっており、東側は50㎝ほどの平担面ののち削平された崖となっている。この第17号墳の墳頂部には、直径1.5ｍほどの松の切り株があり、15号墳と同様に盛土が流出しており、墳裾からトレンチを入れてみたが主体部の確認は出来なかった。

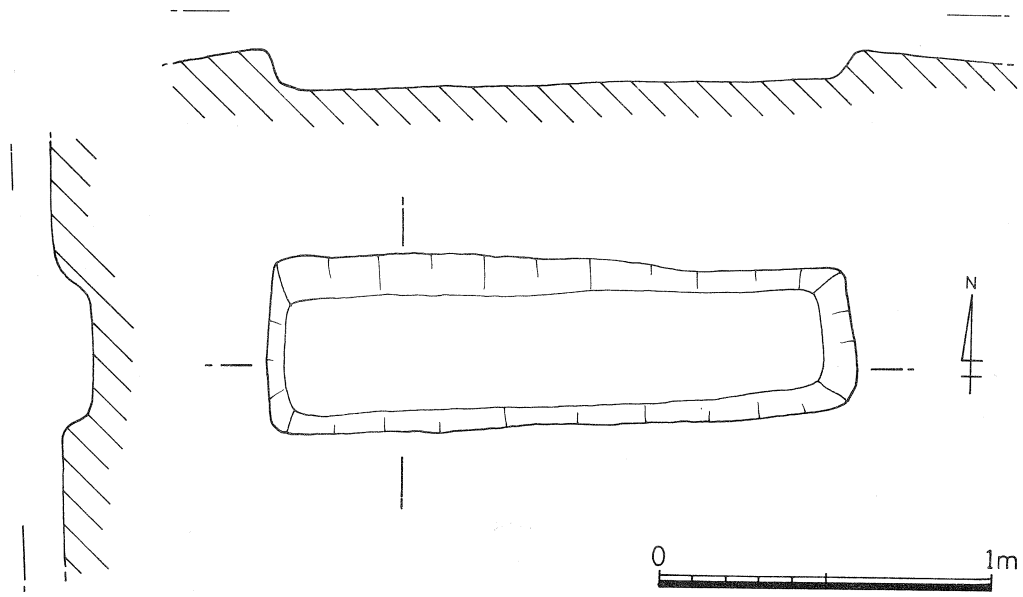
【遺物】　墳丘東北斜面より土師器高坏片が少量散在していた。また、北東部の墳裾からは把手付椀の破片と思われる須恵器の小片が出土した。



第 46 図　17 号墳墳丘断面図



第 47 図　18 号墳墳丘断面図



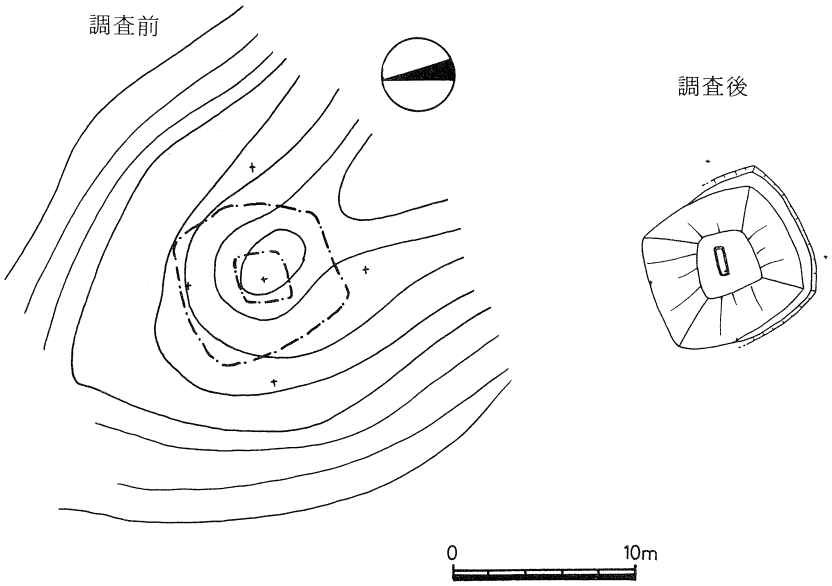
第 48 図　18 号墳主体部実測図

第18号墳

第3支群より谷1つをへだてた東方尾根上に1基だけ存在していた。便宜上、第4支群と呼称している。南北長8.3m、東西長6.8m、高さ0.40mを測る方墳である。外部施設としての周濠は、西側の中途より、南側をめぐり、東側の中程まで作られている。上端幅は南側で0.8m、深さ0.2mを測る。

【主体部】 墳丘のほぼ中央、東西方向に長さ1.77m、幅0.51m、深さ0.12mを測る。表土下8cmほどで暗褐色土層に達するが、それに比してやや暗い土色を呈しており、ほぼ長方形に遺存していた。この土壙内に遺物はなかった。

【遺物】 南側の周濠内より土師器片が10片あまり出土したが、口縁の形態からみて、すべて同一個体で、壷と思われる。



第47図　18号墳平面図

そ の 他

以上の古墳の発掘のほか、第1支群と第2支群の間の尾根平坦面に4m×4mのグリッド5か所を設定したほか、第18号墳のある尾根上平坦面に幅2cmのトレンチを十字に設定し、いずれも地山面まで削平し調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

3. 遺物の概要

50図－1

1号墳の主体部内から出土。副葬品の直刀である。茎部の先端部を欠失し、現存長73㎝余り、刃部長68㎝、刃幅は中央部で3㎝、茎部で4㎝、厚みは0.9～1.0㎝を計る。茎部は、現存長5㎝、幅2.7㎝、厚み0.6㎝を計る。鞘の木質部を随所に残す。

50図－2

1号墳の主体部内から出土。副葬品の鉄鏃である。2本と8本のかたまりに分かれており、計10本分が1ケ所に検出された。尖根両刃式のもので、刃部長2.4㎝、幅1.0㎝、厚み4.5㎜を計る。茎部は、長さ15㎝以上、断面長方形で6×5㎜、末端部は、直径4㎜ほどの円形となり、厚み1㎜ほどの桜皮を巻くもの。

50図－3

1号墳の墳丘中心の北東部盛土層中にて発見。表土からわずかに11㎝下部である。器形が確認出来るのは底部のみである。底部は、直径10㎝ほどと、体部との変換点は丸味を帯びている。厚みは2.3㎝と分厚い。体部下半部は内反し、先端部で厚み6.5㎜を計る。文様調整は不明である。

50図－4

1号墳の墳丘南裾部の地盤上から出土。供献された高坏である。口径10.8㎝、底径9.6㎝、接合部径2.6㎝、器高9.3㎝を計る。明褐色を呈し、焼成は良好。

50図－5

4号墳の主体部内から出土。副葬品の鉄矛である。身の全長24.8㎝、幅は中央部で2.5㎝、厚み7㎜でわずかに先端部を欠失する。身の基部は袋状となり、径2.3㎝、厚み1.5～2.5㎜を計る。内部に柄の木質部を遺存する。

50図－6

4号墳出土。 50図－5と同一個体の石突である。両端部を欠失し、中央部で直径2.0㎝、厚み2.5㎜を計る。柄は木質部を遺存する。

50図－7

4号墳主体部出土。赤色系半透明のめのう質の勾玉で、長さ2.2㎝、中央部の幅7㎜、厚み5.5㎜、孔の直径2.2～1.4㎜で片面穿孔である。

50図－8

同じく勾玉を共に出土した。大中小それぞれ1個づつあり、大はコバルトブルー色を呈し、直径5.5～5㎜、厚み5.5～4.5㎜を計る。孔の直径は2.5～3㎜を計る。中は直径3㎜、厚み3㎜、孔の直径0.9～0.8㎜を計る。やや角のあるもので、暗緑色を呈する。小は直径2.5㎜、原み1㎜、孔径1㎜弱で、角のあるもので暗緑色を呈する。

50図－9

第4号古墳で出土した甕の破片の中に混在しており、風化が激しく非常にもろい状態となっていた。口縁部を欠いているが、蓋坏の蓋の一部と見られる。天井部は比較的平らに近くなっており、左まわりのロクロ調整によるヘラ削りが稜の部分まで施こされている。胎土は灰色から暗灰色を呈し、砂粒が多い。他の出土遺物とほぼ同時代のものである。

50図－10

第4号墳の西側墳裾より出土した。残存高8.8㎝、残存口径5.0㎝、体部最大径11.1㎝を計る。口縁部は3分の1を残すのみで、しかも口唇部を欠いている。口縁と肩部より下部では、胎土は黒みを帯びた灰色であるが、体部上部は灰色を呈している。口縁には細かい櫛目状の波状文を二段に施しており、また肩部には巾9㎜前後で2本の沈線を施しその2本の沈線の間に縦に刺突文からなる文様を埋めている。器高に比して体部が大きいため、非常に背の低い扁平な感じを与える。

50図－11

50図－10と同じく第4号墳西側墳裾より出土。残存高10.1㎝、口径9.2㎝、体部最大径13.0㎝を計る。口縁は直角に切られてやや上方へのびる。50図－10と同様に口縁と肩部より下部では胎土は黒灰色を呈するか、上部では灰色である。頸部より2.4㎝上方の口縁に凸帯が施されており先端は鋭くとがっている。底部内面は手仕上げによる圧痕があり、肩部と口縁はロクロにより整形されているが体部と口縁の接合部は不整形な圧痕があり、体部と口縁を別々に整形後接合させたものであろう。

50図－12

長砂第4号墳の3～4区にかけて大量に出土した細片の一部で、大型甕の肩部と思われる。口縁部及び底部を全く欠いており、法量を推計することは出来ない。表面は細かい平行たたきにより調整しており、一部にへらなでにより消去した跡もみられる。裏面は指なでにより器形を形成し調整したもののようで、たたきによる調整は全くみられない。総じて薄手に作られており焼成も堅い。

50図－13

第6号墳の北、西側の墳裾及び主体部内の3か所から、2～3片づつ出土。接合の結果、大型瑞であることが判明した。口径推定9.8㎝、高さ15.7㎝、体部最大径16.8㎝、基部径6.6㎝を計る。口縁部から体部中央にかけて暗緑色の灰釉が付着している。口縁には12本を単位とした櫛描波状文が施されている。底部付近は格子目状に叩きが施され、胎土を打ち固めている。口唇部は全体にのこぎり状に破そんしており形態を知ることは出来なかった。口縁下には凸帯をめぐらす。全体として胴部が大きく口縁部が低くみえる。陶邑によれば、大型瑞は第Ⅰ型式の4までに見られる傾向である。

50図－14

7号墳主体部より出土。口縁部を欠く。頸部径8.5㎝、体部最大径12.3㎝を計る。単純口縁の小壷になるもので、外面の調整は不明であるが、内面下部は荒い削り調整を施す。外面下半部は、ススが付着している。黄褐色を呈する。

50図－15

第7号墳より出土した把手付椀である。口径9㎝、器高5.8㎝を計る。口縁は上部でわずかに外面に屈曲しており、端部は丸く仕上げられている。把手は底部より6㎜のところから始まり、胴部突帯の下端で終る。その上にある球体は把手に伴う装飾であろうと考えられる。高さ18㎜の口縁をもうけその下に巾4㎜、深さ1.5㎜の沈線を施すことにより鋭い突帯を浮きたたせている。その下には、巾15㎜ほどの間に波状文を施し、また沈線を入れて文様帯を強調している。胎土はきめ細かく焼成も堅い。

51図－1

第8号墳より出土。口径9.2㎝、頸部径4.6㎝、胴部最大径10.8㎝、高さ10.4㎝を計る。口縁部及び口頸部、体部中央に波状文が施されている。体部のものは特に上下を2本の浅く広い沈線で区画している。口唇はやや内側に傾斜しわずかに凹面を呈している。体部文様帯の下は平行の叩きによって器形を調整している。体部最大径に比し、口径の小さいこと、口縁部が低く仕上げられていることからみて、山陰Ⅰ型式、陶邑では第Ⅰ型式の3までにみられる傾向である。

51図－2

8号墳の主体部直下の墳丘基盤から出土。平根式両刃の大型鉄鏃である。逆刺部での幅4.8㎝、長さ4.9㎝、厚み3㎜を計る。中央部に箆の木質部を残す。

51図－3

同じく8号墳の主体部真下から出土。尖根式両刃の鉄鏃である。刃長2.4㎝、幅0.95㎝、茎長13.7㎝を計る。茎の先端部に箆の木質部を遺存し、桜皮が巻いてある。

51図－4

同じく8号墳の主体部真下から出土。茎の一部である。現存長8㎝、断面は長方形で、7×4㎜を計る。

51図－5

同じく8号墳の主体部真下から出土。茎の先端である。現存長6㎝。断面は6×8㎜の長方形、先端部で丸くなり、箆の木質部を遺存し、桜皮が巻きつけてある。

51図－6

8号墳の墳丘盛土層中から出土。口径は18.6㎝を計り、口縁端部内径が丸く肥厚し、上面は、幅6㎜の平坦面を形成する。頸部は、くの字形に折れ曲がる。外面は、横～斜方向の刷手目調整を施し、内面は、横方向のヘラ刷り調整である。

51図－7

第11号墳西側墳裾より出土。口径8.0㎝、基部径4.2㎝、胴部径17.8㎝、胴部高12.3㎝、高さ15.6㎝を計る樽形瑕である。胴部には頸部を中心として3本の沈線を施し、その間を全体に波状文でうめ装飾している。胴部内面のナデ調整が口縁と直角方向にみられることから、まず樽形の胴部を横に立てて作り、のち両端に粘土板をはり、口頸部が入るほどの穴をえぐって口縁を接合したもので、その後に沈線、波状文を施して装飾したものである。また自然釉が胴部中央の円孔に対し、右側の口縁部と端部平面のみに付着していることから焼成の際にも横に立てていたものと思われる。島根県内では石見町大峠山古墳群から出土したと伝えられる口縁部を欠いた樽形線があるのみである。また大阪陶邑によればⅠ型式の1～3の段階までに見られるものである。

51図－8

11号墳の西側墳裾から出土。土師器の高坏である。口径13.2㎝、底径9.2㎝、器高12㎝を計る。坏部は内湾するが、脚部は、くの字形に広がる。坏部外面は、口縁部付近を横ナデ調整。接合部分をタテ方向の刷毛目調整。脚部内面は、刷毛目調整を施す。脚部には、半月型に近いすかし孔が1ケ所認められる。砂粒少なく、焼成は良好。

51図－9

11号墳西側墳裾から出土。口径17.1㎝、底径10.1㎝、器高11.2㎝の高坏である。外面の調整は不明。内面は、坏部が横方向の刷毛目調整、脚端部がタテ方向のナデ調整、上部が横方向のヘラ刷り調整となっている。坏下半部に段を設けているのが注意される。

51図－10

11号墳西側墳裾から出土。底径10.8㎝の高坏で、坏上部を欠く。坏下部には稜線が認められる。磨滅著るしく、調整不明。

51図－11

11号墳墳丘の盛土層で地山面より40㎝上位で発見。刃部の大半を欠く刀子である。刃部の現存長1.7㎝、茎部との接点で幅1.5㎝、厚み2.5㎜を計る。茎部は鹿角装で長さ3.6㎝、幅1.7㎝、厚み9.5㎜を計る。

51図－12

11号墳の墳丘盛土から出土。サヌカイト質の大型石器である。一方の側に刃を付ける。反対側には楕円型にえぐられた痕跡があるが自然に出来た可能性もある。厚みは基部で8㎜を計る。

51図－13

13号墳南西の溝底から出土。土師器の小型壷である。口縁部を欠く。体部最大径14.4㎝、現存高11.2㎝を計る。磨滅著るしく調整不明。

51図－14

13号墳東南の溝底から出土。須恵器蓋坏の坏身である。口縁部を欠く。受部径11.7㎝、拡張部径12.6㎝、器高（推定）5.6㎝を計る。非常にもろく淡黄色を呈する。体部の3分の2近くを右まわりのヘラ削り調整している。

51図－15

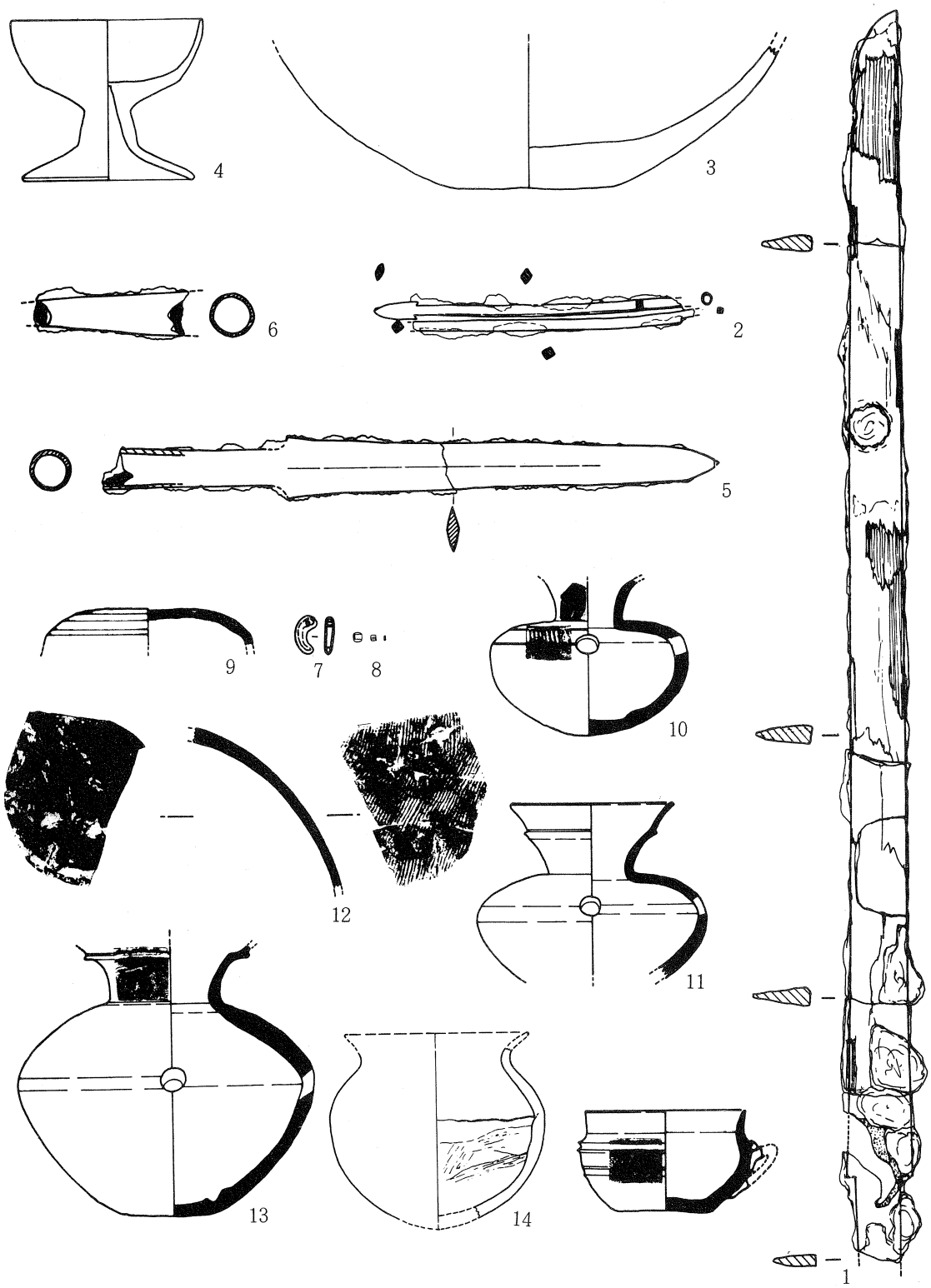
14号墳主体部内より出土。大型瓶である。口径10.2㎝、高さ16.8㎝、体部最大径17㎝、基部径5.6㎝を計る。14号墳主体部に散乱していた須恵器を復元。ほぼ現状に復した。口頸部は頸基部から放物線状に外反し、段をなしたのち上外方にほぼ直線的に立ち上り端部は内傾する段を設けている。口頸部には、14㎜ほどの幅で波状文を施し、胴部には15㎜の幅で2本の沈線を引きその間に波状文を入れている。全体にうすく回転かき目調整がみられるが、体部中央から底部にかけては、不整方向のナデ調整もみられる。また体部中央外面には指でおさえて調整した凹凸があり肩部内面にも細かな指おさえの調整がみられる。

51図－16

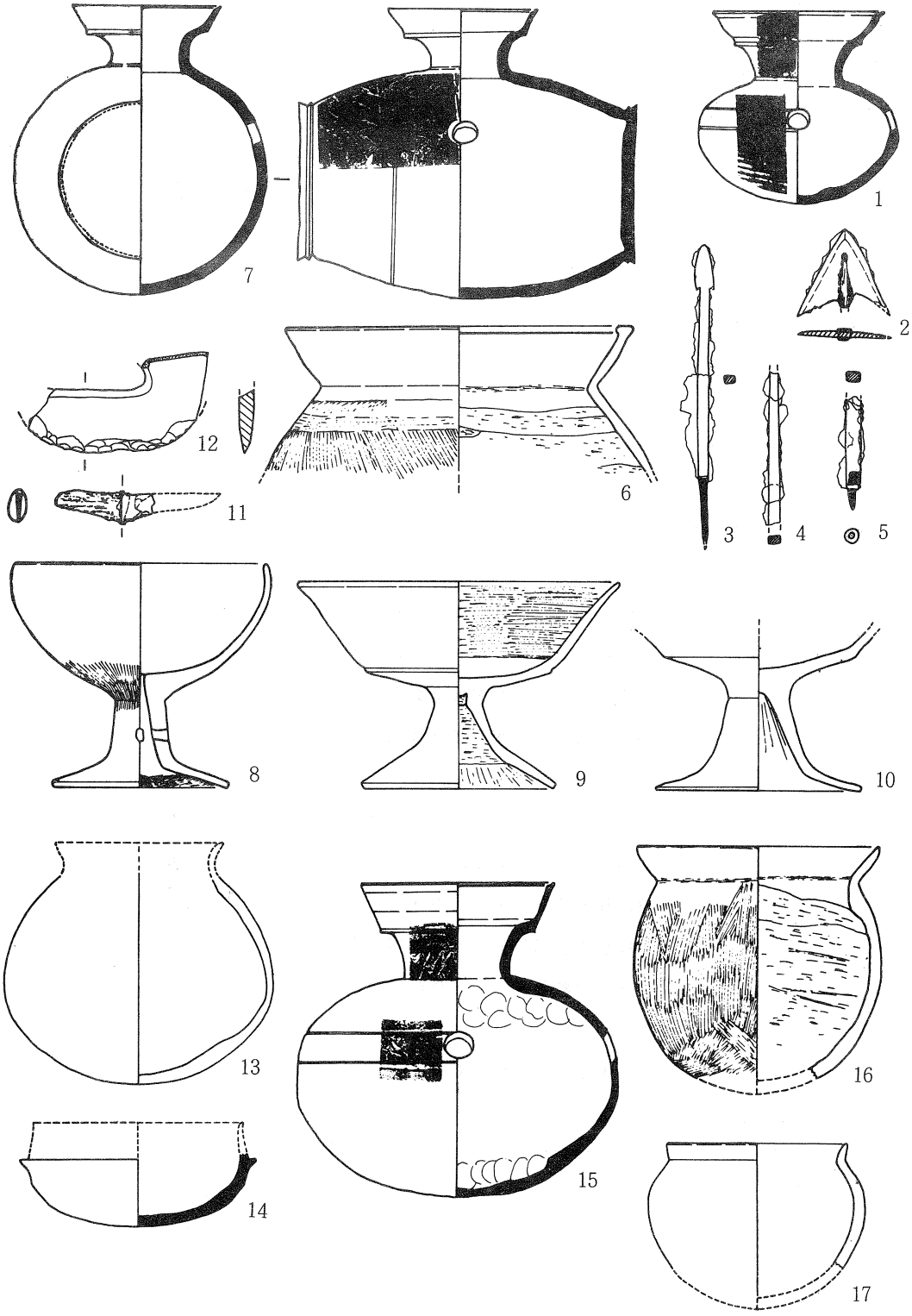
16号墳の周溝から出土。土師器の小型壷である。口径12.9㎝、底部を欠くが丸底となるもので現存高12.5㎝を計る。外面は口縁～頸部が横ナデ、体部はタテ～斜方向の刷毛目調整を施す。ススが附着している。内面は頸部以下をヘラ削り調整としている。

51図－17

18号墳の南部溝中から出土。土師器の小型壷である。口径9.6㎝、現存高6.7㎝を計る。底部は、丸底となるようである。外面の調整は不明であるが、内面は簡単な指ナデ調整を施す。



第 50 図　遺物実測図　(1)　1～4＝1号墳　5～12＝4号墳
13＝6号墳　14、15＝7号墳



第51図　遺物実測図　　1～5＝8号墳　6～12＝11号墳　16＝16号墳
13、14＝13号墳　15＝14号墳　17＝18号墳

4. 遺構と出土遺物の検討

(1) 遺構の検討

ア、主体部について

1号墳の主体部は盛土層上層にある。盛土は墳丘中心部で80㎝を計るが土壙は、いったん盛土した後、40㎝ほど堀り凹めて形成している。土壙は、隅丸長方形の上、側壁がなだらかに傾斜するが特徴である。壙内からは直刀と鉄鏃が副葬されていたが、いずれも南側に寄せており、東部の幅が広いことから遺骸は頭部を東におき副葬品を左側に置いていたことが知られる。

一方、この土壙の北東側の盛土層中の30㎝下には大型の甕形土師器の底部が遺存していた。主体部の近くにこうした土師器の大甕を置く例は、安来市仲仙寺5号墳や、松江市客山古墳群などにみられるが副主体とも供献品とも判別がつかない。

3号墳の主体部も、墳丘基盤から32㎝上方の盛土層中に床面を成しており、平面形は極めて粗雑な不定形を呈する。

4号墳も同様に墳丘基盤から26㎝上方の盛土層に土壙底面を設ける。比較的整った長方形土壙である。

5号墳では、幅広の略長方形の堀り込みがあり、細い川砂利が敷きつめられていたが、それを取り除くと中央部に長方形土壙が検出された。こうした例は、年代も形状も異なるが、東出雲町の寺床1号墳の主体部に、やや似かよった方法である。

6号墳の場合も、基盤から56㎝上方に壙底面が存在する。

7号墳も同様に48㎝上方の盛土層中である。

以下18号墳まで、5号墳を除き全て、盛土中に営なまれていることが注意される。しかも、その大半が、墳頂部の盛土上層に位置している。

概して、出雲地方では墳丘基盤を堀り込んで主体部を形成する場合が多い。長砂例は非常に特異な在り方を示している。これが、当時の人々の他界観念にもとづくものであったとしても多分に集団間の系統があるものと思われるので、今後の調査例の増加をまって検討したい。

イ、平面形について

16基の古墳内、5、15、16が円墳と思われ、8号墳については、円墳に近い平面形である。他の13基は、全て方墳である。

出雲部では、方墳、前方後方墳の数が、円墳、前方後円墳より圧倒的に多い。このことは、長砂でも方墳が大多数を占めることからもうなづける。しかも古墳群の中では、比較的規模の大きい、1号墳と4号墳、11号墳といった方墳は、副葬品として鉄器、玉類、須恵器類を副葬し、本古墳群中では、盟主墳的な存在と考えられる。

しかし、その一方で、確実に円墳と思われる古墳が3基確認されたことは、他地域との政治的交錯の結果の産物と考えざるを得ない。このことは、ほぼ同じ頃の松江金崎古墳群が、前方後方

墳２基、方墳９基から構成されていることと対照的である。

(2) 遺物の検討

鉄器類は、１号墳主体部出土の直刀、鉄鏃と４号墳主体部出土の矛それに第８号墳では墳丘盛土の最下層で墳丘基盤上から鉄鏃が出土、さらに11号墳の墳丘盛土層中から刀子が出土している。この内、矛は県内では松江市金崎１号墳、安来市毘売塚古墳から出土し、鳥取県では倉吉市所在の前期古墳である上神大将塚から出土しているくらいで非常に類例まれなものである。

玉類は、４号墳から勾玉とガラス小玉が出土しているだけである。勾玉は、後期古墳出土のものに比べるとひとまわり小さい。又、ガラス小玉も最大のものがコバルトブルー、他の２個が暗緑色で、金崎１号墳出土のものに類似する。

須恵器類は、６、７、８、11、14、17号墳からそれぞれ出土しているが、この内、主体部出土のものは６号墳と14号墳のみであり他は墳裾から全て出土していることが注意される。

しかも、瑳の数が６個体ともっとも多く、他は把手付椀、小壷、蓋坏である。主体部出土のものは、全て大形瑳であり、他の器種の少ないことが注意される。

古式の瑳は、松江・金崎１号墳や薬師山古墳でも出土しているように供献・副葬品として他の器種と共に欠かすことの出来ないものであったらしいが、長砂では瑳の出土率が高いことは、何か瑳に対する特別な観念をもっていたことによるものではないだろうか。瑳は、樽型瑳、大型瑳、小型瑳の三種がある。樽型瑳は県内では、邑智郡石見町の大峠山古墳群で採集されたものがあるのみで、２例目である。県外では、鳥取県出土のものがあるが、これは器高に比して横幅の狭いものである。岡山県赤盤郡山陽町の宮山４号墳の北構内葺石に混じって破砕された状態で発見された例がある。出土地点の似かよったものであり、注意される。

大阪府の、陶邑古窯跡群ではⅠ型式の第３段階まで生産されているものである。

次に、大型瑳、小型瑳については、器形の特徴からやはり陶邑でいうⅠ型式の範ちゆうに含まれるものである。蓋坏の破片は蓋と身の区別がつかないが、天井部又は底部が水平に近い平坦面を成し、ヘラ削りの面積も多いことからやはり陶邑のⅠ型式に含まれるものである。壷は、外面が平行叩き目、内面がスリケシのみられることからやはり他の須恵器類と同様の年代観が得られる。

そこで、金崎・薬師山古墳の出土須恵器と長砂古墳群出土の須恵器を比較検討してみたい。

金崎・薬師山古墳出土の須恵器の蓋坏などの特徴は陶邑古墳窯跡群の編年でいう第Ⅰ型式の３から４に対比できるものである。

一方、長砂古墳群出土の須恵器の内、樽型瑳をみた場合、陶邑古窯跡群の編年でいう第Ⅰ型式の１から３までに限定されているものである。

以上、三者の関係からすれば、長砂古墳群の築造開始の時期は、金崎・薬師山古墳の築造時期とほぼ同時期か、もしくは数段階古いということになる。

しかし、長砂の須恵器が、当地で生産された可能性もあり、畿内から製品として当地へもたらさ

れたとしてもそれぞれが同じ時間を経て副葬、供献されたかどうか、もっと複雑な事情も考慮すべきであると思われるので、さらに今後の類例の増加を待ち検討を加えたい。

次に土師器類は、3号、7号の主体部からそれぞれ壷が1個体分出土。一方、8号、11号、13号墳の主体部内からは、数片ずつ出土しているが、これは副葬品とは認め難い。

高坏や小壷は、安来市・鳥木町御立山第1群4号墳の出土品とよく似ており、大体、山本清編年でいうところのⅠ又はⅡ期に併行するものと考えて差し支えない。これは須恵器の示す年代観とほぼ合致する。

土師器の大多数は、周溝又は墳裾から出土しており、このことは、副葬する風習はあまりなく、大半が古墳の裾で墓前祭を営なみ、その場に置いたが、溝に入れたのではないだろうか。

このことは、11号墳の西側墳裾で出土した土師器類と須恵器類に端的にみられる。ここでは、土器類が11号墳の中心部に向けて凹字形に配列されており、特に樽形甕は、広範囲に散布しており1個所にあったものが土圧で壊れた状態ではなく故意に破砕されたものとしか考えようがない。

これによって、墓前祭で供献された土器のセット関係を見出すことが出来るのではないだろうか。

ところで、破砕された土器の例は4号墳にも見ることが出来る。すなわち、4号墳では、西側半分の墳丘斜面から墳裾にかけて須恵器の細片が点々と広範囲に散布していたが、復元すると同一個体の甕の体部になるものである。これも、故意に甕を破砕してばらまいたとしか考えようがない。

須恵器を故意に破砕することの意味は一体何なのかまだよく分かっていないが、葬送儀礼に使用した土器を忌みけがれたものとして破砕して墓に投棄した結果なのか、あるいは、破砕された土器の破片1個1個に神霊が宿りお墓を守護する役割りを果たしているのか、いろいろ考えられるが、これは今後の調査例の増加と、民俗例からの比較検討をまつしかないだろう。

5. 小　　結

本古墳群は、出土須恵器、土師器の特徴から山陰の須恵器編年でいうⅠ期の頃に連続的に築造されたもので、大阪府・陶邑の須恵器編年観にもとづけば、松江・金崎、薬師山古墳出土の須恵器と同じ段階かもしくは若干古い段階のものであるらしいことが分かった。

本古墳群は、都合四つの群に分けて説明してきたが、18号墳を除く全ての古墳は隣り合わせの支陵上に集中しており、しかも各古墳は、溝を共有するものが多いことから血縁関係の濃い権力集団の古墳群と考えられる。しかも出土遺物の検討から年代幅の狭い間に次々と連続的に築かれたようである。この内、鉄器類や玉類を副葬した1号墳と4号墳の両墳は、本古墳群中でも盟主墳的な存在ではなかろうか。

金崎古墳群は、9基の方墳と2基の前方後方墳から成り、須恵器の編年でいう山陰Ⅰ～Ⅱ期の段階に至る間、連続的に築造されたもので長砂古墳群とよく似かよっている。但し、金崎の場合は、前方後方墳が2基含まれているし、その内の1号墳には内部主体とした竪穴式石室があり、須恵器類や玉

類など豊富な副葬品が出土している。

このことから、ほぼ同じ頃に前後して築かれたであろう長砂古墳群と金崎古墳群では、金崎の方が内容的に数段勝さる時期があったとしても基本的には濃い血縁集団の古墳群として共通するものがある。

5世紀中葉から後葉にかけて、こうした古墳群が出現してくることは、一定の地域社会内部において支配関係の変化のあったことを示している。つまり、ひとたび支配権を掌握した豪族がその系譜を守るために世襲関係を強化したことに他ならないだろう。

次に、主体部の形状をみてみると、出雲部の古墳の通常の木棺直葬の場合、地山面に堀り込まれた長方形の土壙であるが、長砂の場合、殆んどの主体部が墳丘盛土層中の最上部付近に設けられており、その平面形もいびつな略長方形を呈するものである。

このように、主体部の形状、位置、そして副葬、供献された土器類の在り方から総合的に考えて出雲的でない要素を強く含むものである。

さて、長砂古墳群の所在する丘陵の突端部の平地には、全長36mを計り、周濠を有する乃木二子塚古墳が所在し、山陰地方の須恵器編年でいうⅡ期に該当するものである。又、その西隣りに所在する二子塚古墳は、一辺13m以上の方墳で南部低丘陵側に濠を有し、Ⅱ期からⅢ期への過度期にあたるものである。

以上の古墳の分布状況から考えるならば、長砂古墳群→乃木二子塚→二子塚という古墳の編年が可能となる。そして、お互いに近接して立地することから、これらはいずれも同族集団の系譜になるもので、乃木二子塚の段階が最も支配権を強く及ぼした時期であろうと思われる。（中尾秀信）

Ⅳ　二子塚古墳

1. 位置と歴史的環境

本古墳は、松江市上乃木町字二子塚2738－1、1503番地に所在する。南部の低丘陵上には、18基から成る小型方墳で構成される長砂古墳群があった。いずれも、一辺10～15mの方形墳で、墳丘盛土層の浅い位置に長方形土壙を有し、古式の須恵器類を副葬もしくは供献するものである。須恵器の中には、樽形瓿や把手付埦がみられ、山陰地方の須恵器編年でいうⅠ期の中でもより古い段階のものと考えられる。

又、本古墳の東側には、隣接して乃木二子塚古墳が所在する。古くから注目されていたが、昭和56年度において当市教育委員会で部分調査したところ、中軸長36mの前方後方墳で周濠がめぐり、築造時期はⅡ期と考えられる。

この乃木二子塚古墳の後方部側の周濠周辺に下沢遺跡が所在する。古式土師器片、須恵器片、黒曜石製の石鏃が確認されているが、縄文・弥生式土器は、皆無であった。二次堆積の遺物包含地である。

本古墳は、長砂古墳群の立地する低丘陵の突端部の低台地に位置する。北部は、水田地帯であり、本古墳の立地は東隣りの乃木二子塚古墳と同様に、あくまでも見せることを意識している。この点では、同じ頃に築造された大庭鶏塚古墳とも共通性があろう。

本古墳がはじめて注意されたのは、山本清氏によってであった。山本氏は、昭和25年2月7日と昭和37年3月13日の2回にわたり現地踏査している。

まず、昭和25年の踏査の際には、略測図を作成しておられるが、それによれば、北側水田に出張る形で東西のさしわたし17m、南北のさしわたし19m、高さ3mほどの隅丸方形墳であることがうかがわれる。中央部には、盗掘坑と思しき長い凹地が認められる。

次に、昭和37年の際の野帳によれば、「5時半頃のバスにて出かけ、6時頃現場に至る。前方後方墳の方は篠がよく茂り異常なきも、円墳の方は半分程開墾されて畑となっている。それをよく見るに、開墾の際に出たと見え、畑の脇に径10～15cm位な塊状の角のとれた河石の如きもの、ざるに2杯ばかりおいてあり、又、別に箱（ネコ車にのせた？）の中にビールビンの割れなどとともに同様の石少し入れてあり、両所とも須恵器甕の破片相あり、数ケ体のものの如し、器内面打痕ある常の品と思われるに、上記の口縁部あり、これは古いと思われる。門生窯跡出土品（第1期）も内面打痕あり、これも1式か少なくも2式位ならん。ただし櫛目の簡単なるは如何？、古くてもこの様な例あるにや。尚、之と共に埴輪円筒破片2ケあり、その内の1個を採集して帰る。」

このことから、本古墳は、畑耕作などにより、かなり削平、撹乱され、墳形も隅丸方形墳から円墳へと変形していったことがわかる。

その後、古墳の南部は宅地として埋め立てられ、北側は、さらに削り取られ水田となった。

調査前の墳形は、円墳とも方形墳とも全く判断出来ないほど削り取られ、わずかに北東部4分の1ほどの墳丘が最も高く、撹乱の度合いの少ない部分ではなかろうかと思われた。

2. 調　査　の　概　要

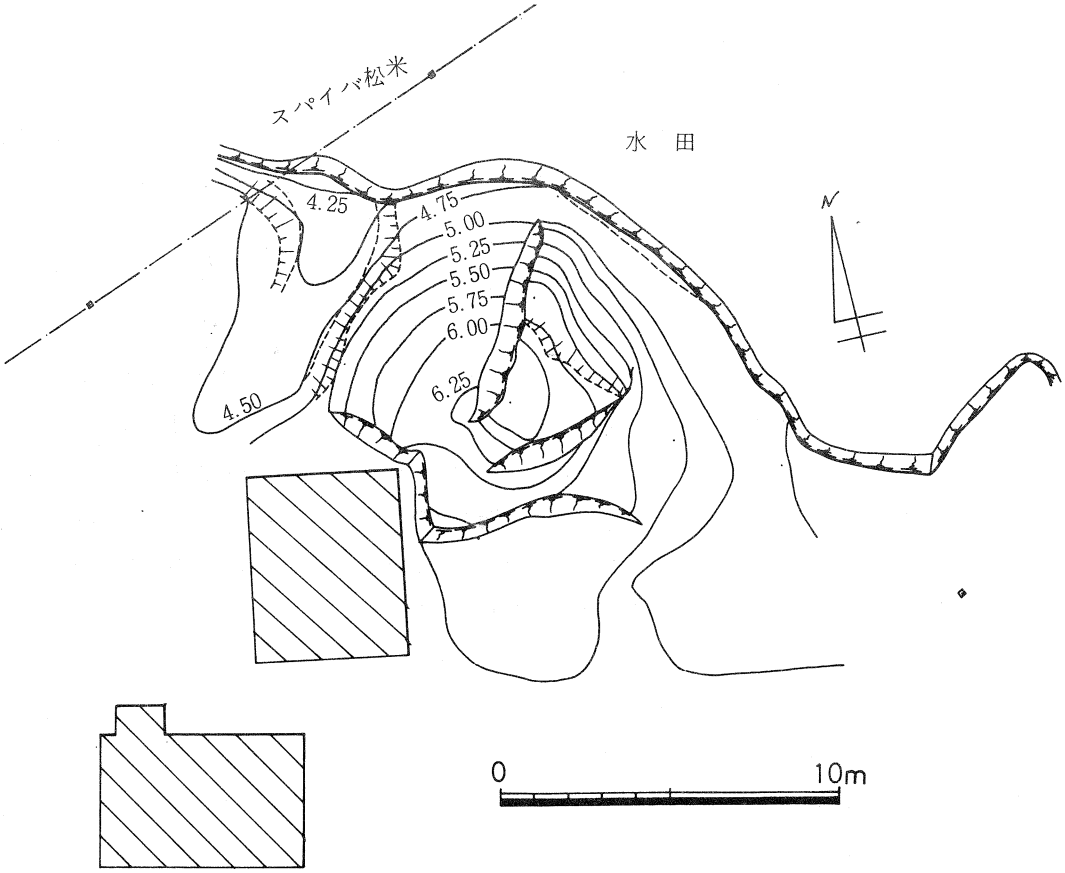
(1)　墳丘の構造

【墳丘】　南部から派生した低丘陵の突端の平坦な低台地をうまく利用して旧表土上面をそのままにしながら、周囲を切削加工し、一辺18ｍほどの墳丘基盤を確保しつつ、その外側に濠を穿つものである。濠は南辺に沿ってのみ確認された。東西北の３辺では、宅地、水田となり、当初あったものかどうか分らなかったが、恐らくは、台地の突端を切り離したのみで、周濠があったとは考え難い。

ア、墳丘基盤上の出土品

1.、２は、いずれも、２区の墳丘基盤を成す旧表土（黒褐色土）上面に底部を下にし、隣接した状態で出土した。

１は、口径11.8cm、器高４.５cmを計り、内外面共に橙色を呈する。高さの低い盌である。内面内面の調整は、底部を磨研調整、体部から口唇部にかけては横ナデである。外面は、口唇部から体部にかけて、やはり横ナデ調整を施し、底部は静止ヘラ切りである。底内面に、さしわたし７cmの赤色顔料が遺存していた。厚みは、底部近くで６mm、底部で３～４mmを計る。底部がほとんど平底で、口唇部がわずかに外反する点が特徴である。



第52図　二子塚古墳測量平面図（等高線は標高）

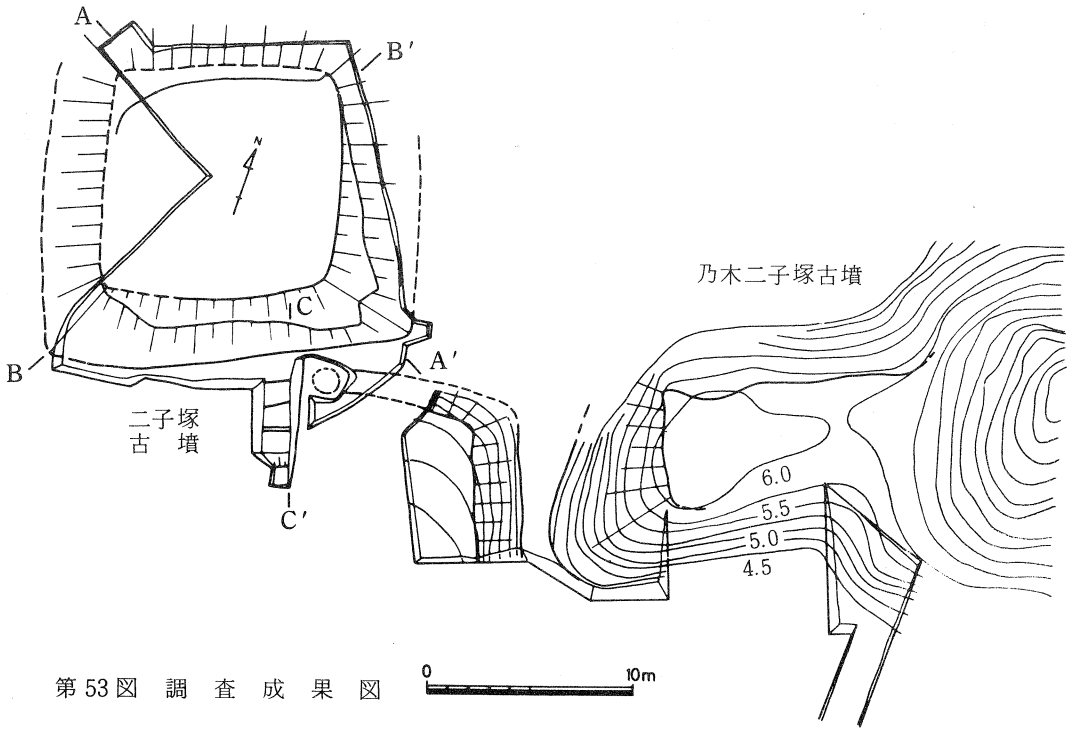
2は、小形の壷で、口径9.4㎝、体部最大径12.0㎝、器高9.8㎝を計る。口縁部は、単純口縁でわずかに外傾する。体部下半部は、直線に近い曲率で底部につながる。底部は、丸底となる。外面は、口縁部から体部下半部にかけて、横方向のかき目調整、以下底部までは、斜方向のナデ調整である。内面は、口縁部が横方向のナデ調整、頸部以下は横～斜方向のヘラ削り調整を施している。器厚は、体部最大径部分で8㎜、底部で7㎜を計る。内外面共に黄褐色を呈し、外面の下半部にススが附着している。

【濠】断面は略V字形を呈し、上端の幅5.0～5.5m、深さ1.53mを計り、濠中には、厚み1.6㎜の土層が堆積している。濠底から40㎝上までは、灰色粘性土層で、須恵器片若干、円筒埴輪片を多量に含む。古墳築成直後に堆積した土層である。その次に堆積したのは、褐色土～暗褐色土層で、須恵器片、円筒埴輪片を多量に含んでいるが、近年の陶器片、瓦片も見受けられる。最上部の砂層は、土地所有者が宅地にする際、均したものである。

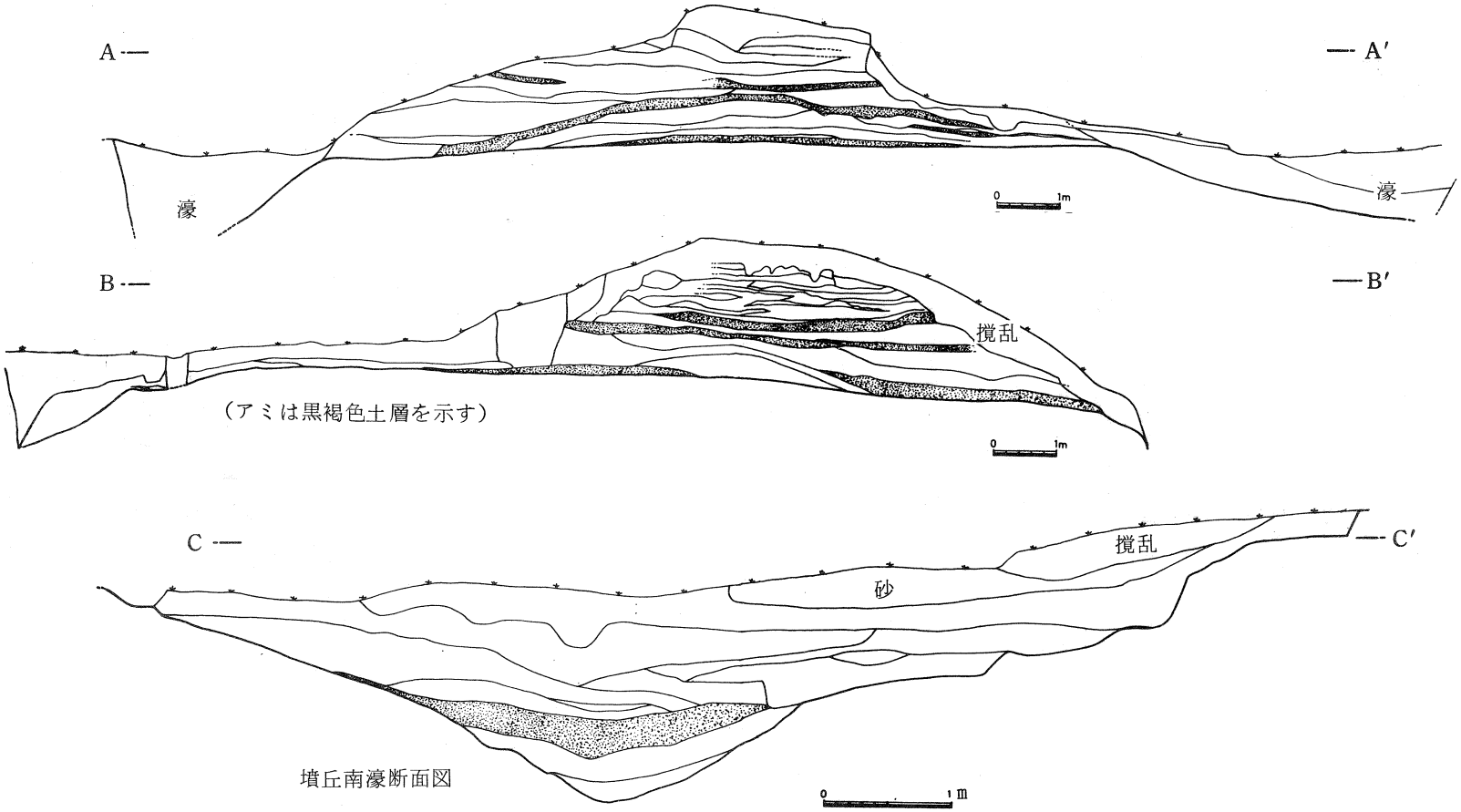
イ、2区濠中及び墳丘表面の出土品

3は、暗褐色土層から出土。蓋坏の坏身である。蓋受の口縁部と、底中央部を欠く。蓋受の受部で、直径13.1㎝を計る。立ち上がりと口縁部を欠いているので、口縁部の直径と器高は不明である。しかしながら、外面は、右まわりのロクロによる削り放し調整を施している。山陰の須恵器編年でいうⅢ期もしくは、Ⅱ期頃のものである。

4は、筒形器台の筒部最上部と考えられる。体部最大径は11.6㎝ほどで、厚みは1.2㎝を計る。上部に0.6㎝の間隔をおいて、2条の浅い沈線があり、その上下に6～10条の櫛目状の連続文を施している。下部にも突帯を1本設ける。沈線で区画された内側には、形状不明の装飾突起を



第53図　調　査　成　果　図



第54図　墳　丘　断　面　図

付けたらしい痕跡がある。内面は、一部に粘土の接合面を残すが、大半は、横方向の指ナデ調整を施す。下端部は、斜ナデ調整である。断面は、中心部が赤紫色で、表面が灰色を呈す。

5は、器台の破片である。断面が青灰色で、4の破片とは別個体のものである。上部にやや鋭い突帯があり、その下方に櫛描波状文を施している。厚みは、2㎝前後を計る。

6は、子持壷の子壷の破片である。体部上半部から口縁部を欠く。体部最大径は7.2㎝、底径4.7㎝を計る。体部外面は横ナデ調整、上部が横方向のナデ、下部が指頭による斜〜横方向のナデ調整を施す。底部外面は、静止糸切りの痕跡が明瞭に認められる。底部の外周には、親壷との接合の際に付けられた粘土帯が認められる。断面は、中心部が赤褐色で、表面は青色を呈する。厚みは、体部最大径の部分で5㎜、底部で3㎜を計る。

7は、大形甕形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁上半部は、2区の濠中の堆積土層中、第2層の暗褐色土層上面から出土。口縁下半部から頸部にかけては、2区の濠中と4区の墳裾で、水田との境の褐色土層から出土したものが接合したものである。口縁部上半部のものと、同一個体となる。

口唇部は、肥厚し三角形状となり、その下方に2本の断面三角形の突帯をつけ、さらにその下方には、タテ長の櫛目状工具による波状文を施している。内面は、蛇行状に屈曲している。内外面共に、黄褐色の自然柚がかかる。頸部以下の内面は、かなり直径の大きい同心円文の押し当て具痕跡を残し、外面には、平行叩き目文を残す。

これと同一個体のものと思われる体部の破片は9片、底部の破片が1片ある。又、これとは別個体の甕の破片が、4種類確認される。この内のひとつは、外面が叩き目の調整痕、内面は、同心円の圧痕を残さず、横方向のナデ調整により全く消去している。破片は、6片あったが、2区の東端から西端まで広範囲に散布していたことが注意される。

8は、小形の壷形土器の体部の破片である。暗褐色土層から出土。体部最大径31㎝を計り、厚みは6〜7㎜とうすい。外面は、平行叩き目文による叩きしめの後、横方向のカキ目調整を施す。内面は、同心円の押し当て具圧痕をつけた後、横方向のナデ調整を施している。

9は、器形不明の須恵器片である。最下層から出土。厚み1.5〜2.3㎜の非常に薄手のものである。中心部からおよそ3㎝外方のところから急傾斜していくもので、小形の蓋様のものか、或いは、樽形瑞の横蓋の部分なのか判別しがたい。胎土は、非常に緻密で硬い。淡灰色を呈し、内面右まわりのヘラ削り調整で、外面は、ロクロを利用した回転ナデ調整を施している。

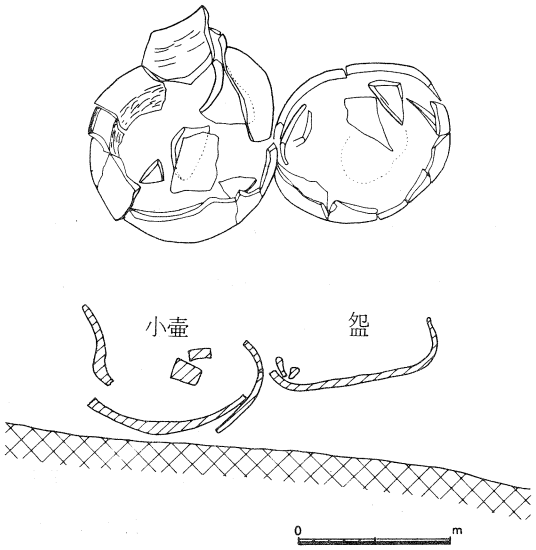
10、11、12は、共に通常の円筒埴輪の破片である。円筒埴輪の破片は、墳丘の表面及び墳裾の黒色土層中ならびに、濠中から大量に出土しており、もとは、墳丘上に密に立て並べられていたことが知られる。しかも、濠中の最下層底面から多量に出土したことは、古墳築成直後から埴輪の崩落現象が開始されたと判断される。

10は、口縁部は、外面を斜め方向の刷毛目調整、内面をゆるやかな斜方向の刷毛目調整を施し、口唇部外面を指ナデでやや凹ませ、アクセントをつけている。口唇部上面は、ほぼ水平となるこ

とが特徴である。厚みは、口唇部で1.1cm、4cmほど下方で1.0cmを計る。直径は、口唇部で26cmを計る。

11は、突帯部分を含むかなり大形の破片である。円孔透し部分は遺存していない。突帯は、7mmほどの高さの低い台形を呈し、指でナデて仕上げている。突帯以外の体部外面は、斜方向の刷毛目調整を施している。体部内面は、下部は横方向、上部は斜方向の刷毛目調整を施している。器厚は、1.3～1.0cmを計り、やや軟質で明褐色を呈す。

12は、朝顔形円筒埴輪の円筒部から口縁部にかけての破片である。



第55図　墳丘基盤上土師器出土状態

【盛土】厚みは、中央部で現存2mを計る。最下層の盛り土は、さしわたし5.4m、厚み54cmほどの土まんじゅう形で、その上に、順次別の盛土が形成されているが、上面は、常に平坦面をなし、厚みも15cmから30cm位で、一つの土層を分厚く盛っていない。しかも、黒色土層を意識的に交互に盛っている傾向がみられる。盛土層中からは、古式土師器片と半磨製石斧が混入していた。又、墳丘基盤である旧表土上面からは、土師器の壷と埦が発見された。

ウ、墳丘盛土層中出土品

13は、3区の表土から－110cmの第4層である褐色土層から出土。古式土師器の口縁部である。口縁径26.3cm、著るしく外傾して立ち上がる複合口縁で、下端部が出張る。口唇部外面は、やや肥厚して突き出る。内外面共に、横ナデ調整を施す。

14は、2区の第3層である明褐色土と第4層である黒褐色土層の界面から出土。口縁径15.6cmを計る小計の壷形土器の口縁部である。恐らく、単純口縁となるであろう。内外面共に、横ナデ調整を施す。

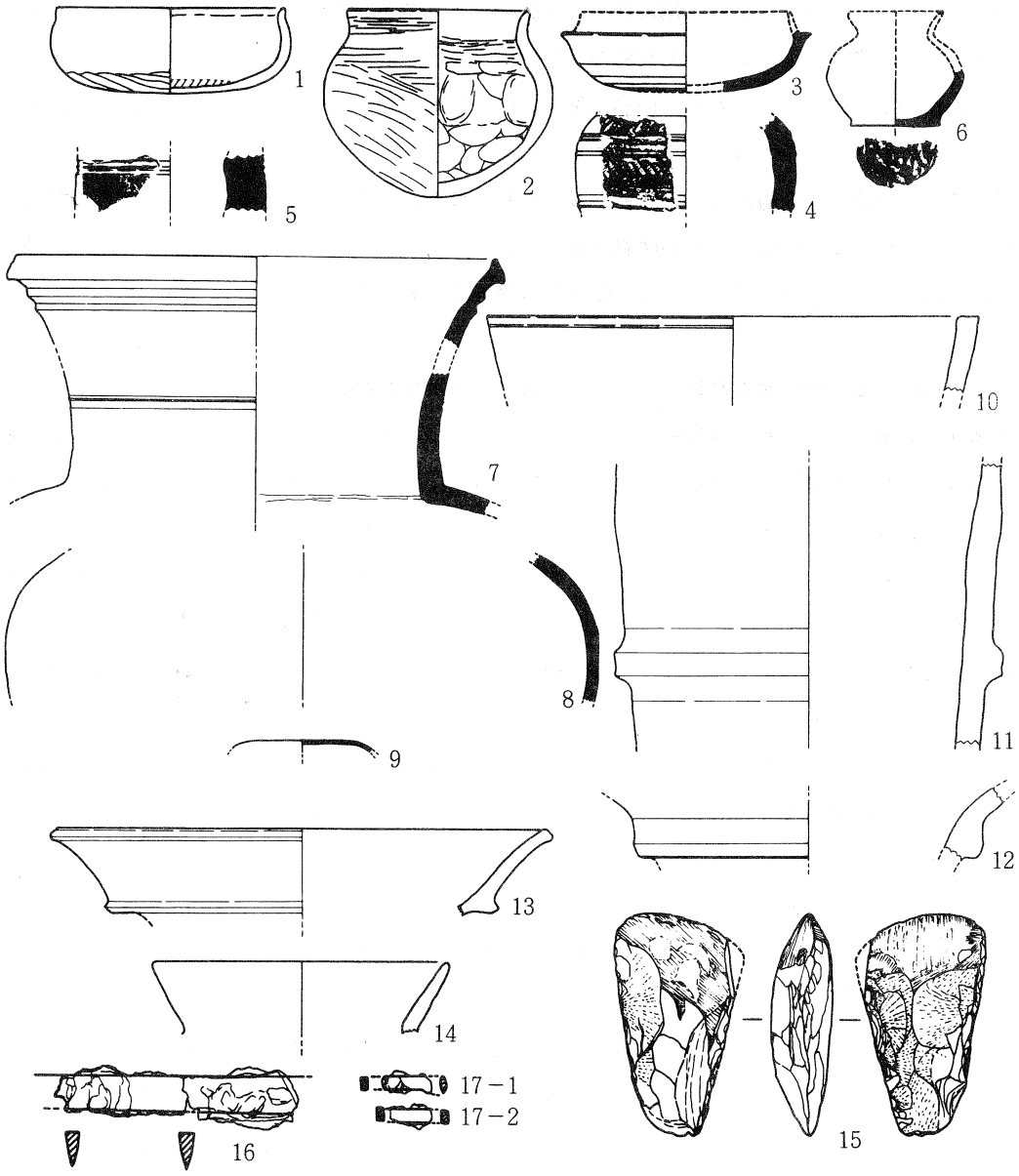
15は、1区の盛土層の黄褐色土層上面から出土。灰色玄武岩質の半磨製石斧である。長さ11.6cm、刃幅5.9cm以上、厚み3.15cmを計る。バチ形を呈し刃先のみ磨研され、タテ方向と斜め方向の擦痕が認められる。

【主体部】　2区の墳丘盛土の浅い位置で、鉄鏃の破片と短刀の破片を発見した。これらは、いずれも現在の盛土の表土の直下の黒褐色土層中に所在した。この黒褐色土層は、その部分だけ落ち込み状を呈しており、これが主体部と考えられなくもないが、形状が不明確な上、鉄器の類も破片しか検出されなかった。

ところで、昭和25年の山本氏の略測図によれば、墳央部に細長い盗掘坑と思われる溝がある。又、昭和37年の踏査では、須恵器甕の破片が採集されており、今回の調査でも、墳裾及び南の濠中から、同一個体の甕や壷の破片が広範囲に散布していた。これらのことから考えるならば、既に、主体部は盗掘を受け破壊されてしまったのではないかと考えられる。

ア、主体部副葬品（推定）

1. 短刀　現存長12.7㎝、幅 1.8～2.0㎝、棟の厚み 7～8㎜を計る。短刀の刃部の一部である。（図16）



第56図　遺　物　実　測　図

2. 鉄鏃　2片ある。17－1は、現存長2.6㎝を計る。片刃の刃部から茎にかけての破片である。刃部は、断面レンズ状で、幅9㎜、厚み3.5㎜、茎部の幅7㎜、厚み4㎜を計る。（図17－1）

17－2は、茎部の破片で、現存長2.2㎝、厚み4㎜、幅7㎜を計る。（図17－2）

3. 小　　結

調査の結果、本古墳は本来一辺18m前後、墳丘基盤は、濠底から高さ1.7m、盛土の高さ2m以上を計る中規模程度の方墳であることが分かった。

主体部は盛土上層部にあったらしいが、後世の撹乱が著るしく、わずかに短刀と鉄鏃の破片を残すだけで、その形状については全く不明である。

本古墳の南の濠の東西線をみてみると、N 74°Eとなり、東側に隣接する乃木二子塚の中軸線の角度N 66°Eと似かよっていることが注意される。このように、両古墳の平面企画や立地の点で深い関連のみられることは、被葬者をとりまく豪族間も同族か、もしくはそれに近い関係にあったものと推察される。

そこで次に、本古墳の築造時期を考えるために、出土遺物を検討してみよう。

主体部の副装品と思われる鉄器類については、時期を示す特徴は見あたらない。墳丘表土や墳裾濠中からは、多数の円筒埴輪片が採集されたが、いずれも小片のものが非常に多く、原位置に立て置かれたものは皆無であった。

これは、恐らく、墳丘が後世田畑に開墾された時、かなり削平され、その際、又は、その後の耕作時に細かく砕かれた結果ではなかろうかと思われる。そのため、円筒埴輪の全形をうかがえるものは皆無であったが、わずかに実測可能であった破片をみても、古墳時代の後期に通有なものという以外、年代観を示す特徴がみられなかった。

次に、土器について検討してみる。南の濠中からは多種の須恵器片が出土したが、その内、蓋坏の坏身及び、器台の破片が注目される。

まず、蓋坏の坏身の破片であるが、これは立ち上がり部を欠いているので、はたしてⅡ期なのか、Ⅲ期に属するのかはよく分からないが、受部と立ち上がり部の境が溝状で、受部の長さが短かく上面が平坦に近いこと、体部外面のヘラによる削り放し調整がていねいであることなどの特徴から、Ⅲ期というよりは、Ⅱ期に近いものといえる。

次に、器台の破片であるが、比較的鋭い沈線を施すもので、Ⅱ期的要素の強いものである。又、筒形器台の破片は、Ⅱ期頃までのものと思われる。当地方の古墳出土の例としては、金崎1号墳出土例が唯一であろう。その他には、安来・高畑窯跡出土品中にも、筒形上部の破片が認められる。いずれにしても、Ⅲ期以降には残らない器種である。

その他多く出土した甕の破片の中には、内面の同心円文押し当て具の痕跡を消去した破片も数片認

められる。

このように、須恵器の観察からは、Ⅲ期とは考え難くⅡ期の範ちゅうに含まれるものが多いのではないかと思われる。

さて、最後に、墳丘基盤上から出土した土師器2点について検討してみる。これは、古墳築成直前の、例えば、地鎮祭のようなお祭りの際に供献されたものと考えられるので、古墳築成の時期を考える上では、最も重要な資料となるものである。

2点ある内、一方の広口壷は、器形にあまり変化がなく、Ⅱ期のものともⅢ期のものとも決し難いが、他方の盌は、器高の低い平底のもので、口縁部が外反するなどの特徴を有する。同種のものは、以前、松江喰ケ谷2号墳でも検出され、出雲市天神遺跡などでも知られ、Ⅲ期頃のものと考えられている。しかし、これとてもまだ出土例の少ないものであるから、ある程度年代幅を考えておいた方がよさそうである。

以上、出土品の検討から、Ⅱ期に該当するものの多いことが分かったが、一方でⅡ期のものともⅢ期のものとも決し難いものも含まれているので、本古墳の築造年代は、おおまかにⅡ期の末もしくは、Ⅱ期とⅢ期の境い目頃になるのではないかと思われる。

このように考えるならば、本古墳は、東に隣接する「乃木二子塚古墳」と時期的にも、そう隔たることなく築造され、しかも、基線の方向がほぼ一致することから、この両古墳は、何らかの深い関係にあったことは、ほぼ間違いないであろう。

ところで、両古墳の南部丘陵上には、かつて「長砂古墳群」があった。いずれも、一辺10～15m級の方墳で、計16基あり、5世紀中葉の樽形瑕、把手付碗、大形と小形の瑕を供献もしくは、副葬していたことから、5世紀中葉から後半頃にかけて、連続継起的に築造されていったものであろう。

この段階では、乃木地区では、比較的小規模の勢力を有する集団で、より大きな豪族と一定の支配関係にあったために、当時としては入手しにくい須恵器の類を下賜された一方、お墓の大きさは強い規制を受けていたのだろう。

次に、「乃木二子塚古墳」の段階では、勢力は最も大きくなり、恐らく、現在の松江市の南西部一帯を勢力下においていたのではないだろうか。しかも、前方後方墳という墳形が採用されていることからも、少なくとも出雲東部全域を掌把していた大豪族の系列にあったことは否めない。

一辺18m前後と「乃木二子塚古墳」の規模からとすると、やや勢力が弱まった感のする「二子塚古墳」の被葬者は、長砂古墳群→乃木二子塚古墳という系譜の流れの中にあって、全盛期の最後を飾るにふさわしい古墳である。

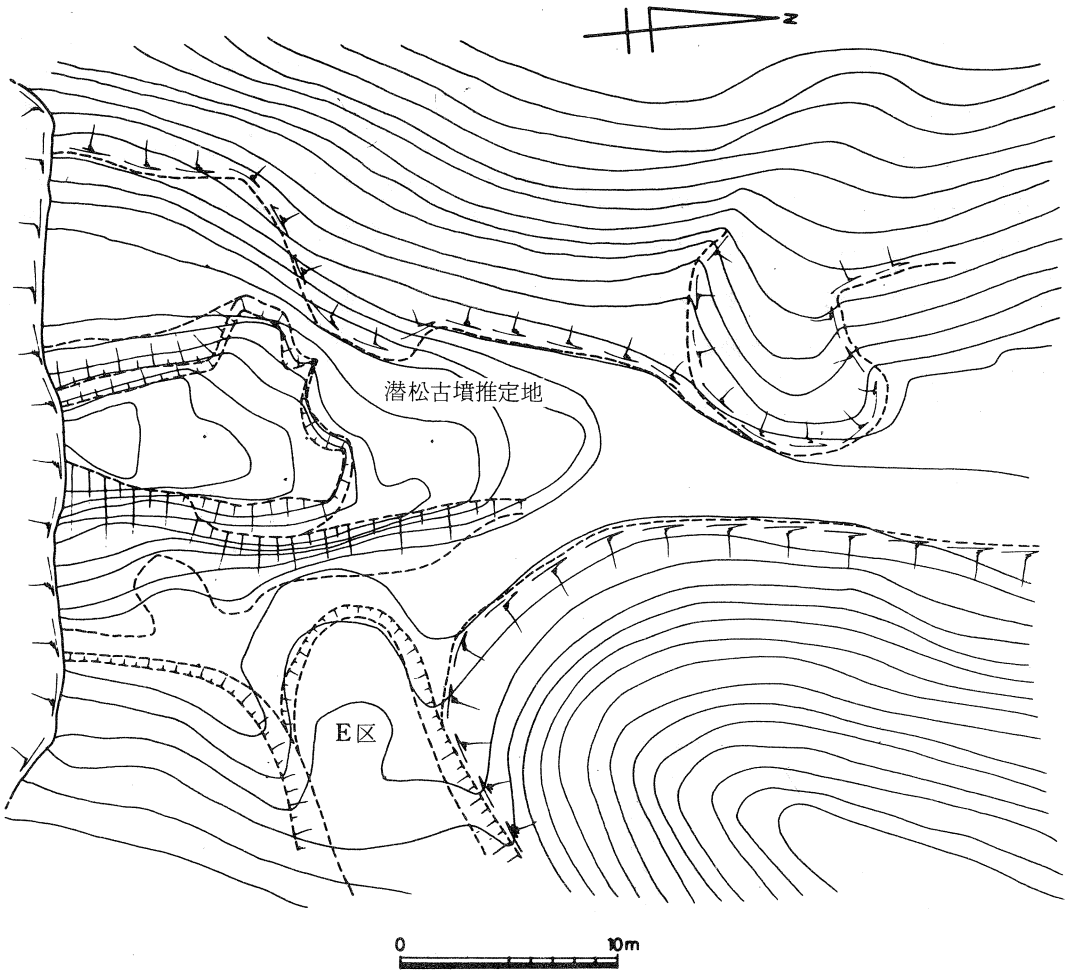
時期的に、二子塚古墳の後にくる古墳については、全く不明であるが、階層分化が激しくなり、大きな古墳は、つくられなくなったものと考えられる。　（岡崎雄二郎）

V　潜松古墳推定地

1. 位置と歴史的環境

本古墳は、松江市の中心市街地より南へおよそ4.2㎞の地点にある南北に続く丘陵尾根に立地している。南部は、湖南中学校との境界で崖面となっている。標高は、約43mを計る。所在地籍は、松江市乃白町字潜松1282－4である。本古墳の北側を尾根伝いに約180 m行くと調査対象遺跡である後友田（うしろともだ）古墳に到達する。この古墳は、直径11～13mの円墳で内部主体は不明であるが、墳裾や溝中から山陰Ⅰ期の須恵器を出土している。

又、南西へ約400 mの山際にある菅沢溜池の水辺では、古墳時代後期頃の土師器小壷、須恵器蓋坏類が出土しており住居跡が推定される。水田をへだててすぐ西側の山に目を転ずれば、田和山古墳がある。これは、前方後方墳1基、前方後円墳（推定）2基の他方墳も多数伴うものである。

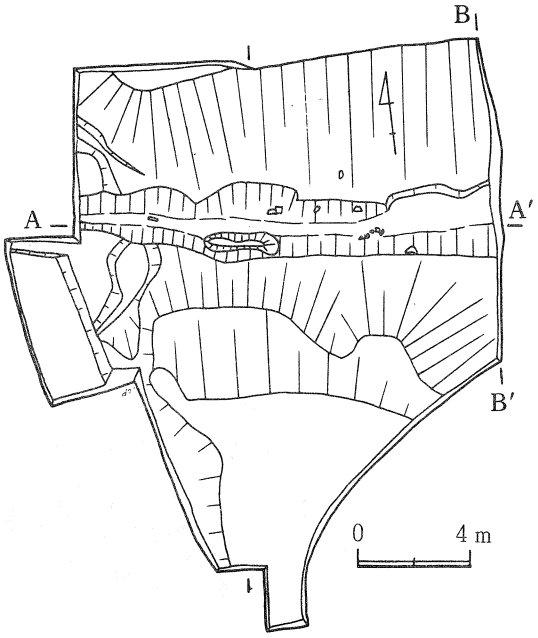


第57図　潜松古墳推定地平面図

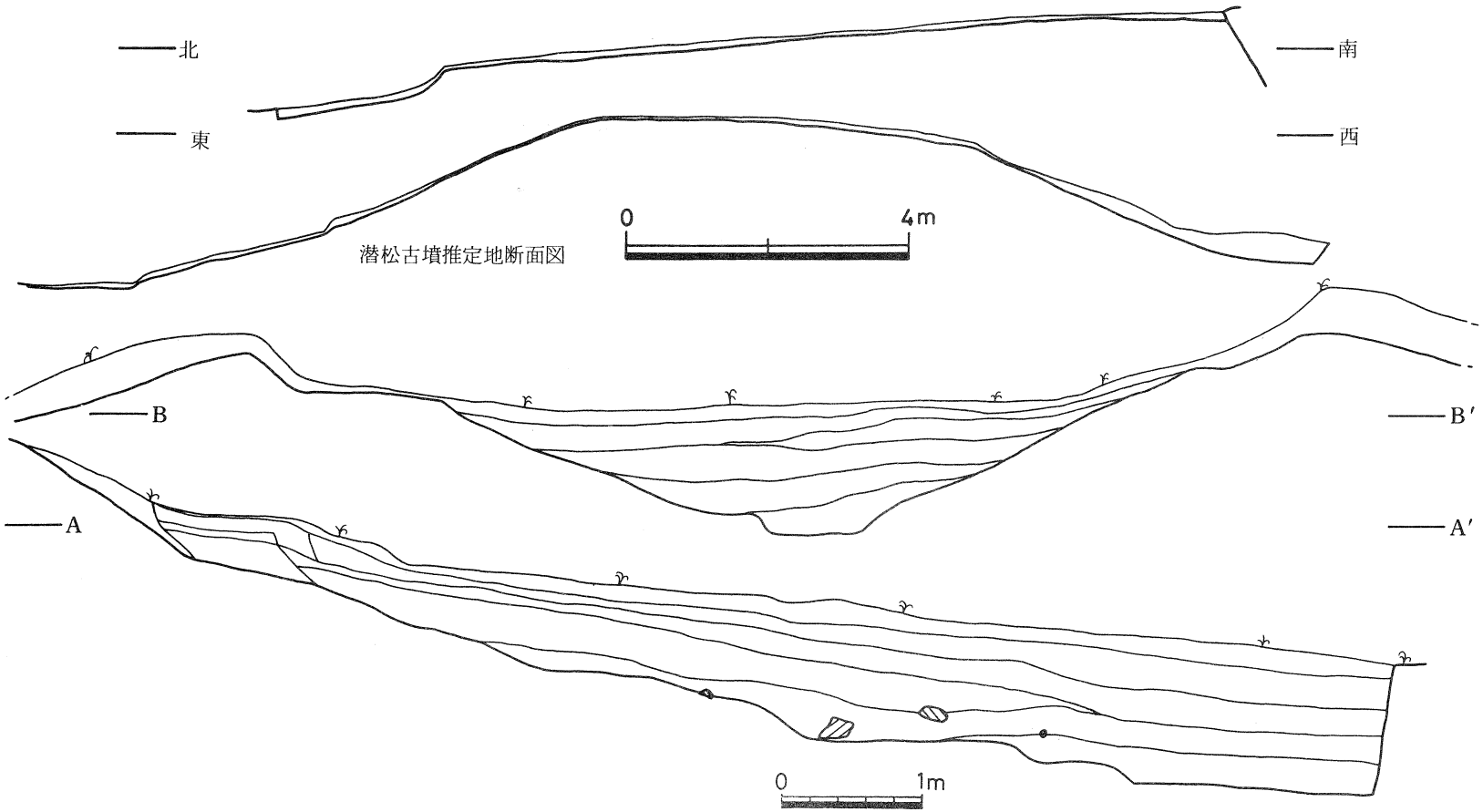
2. 調 査 の 概 要

測量の結果では、東西長22ｍ、南北長25ｍ、高さ２ｍほどの長方形の高まりを呈していたが、調査したところ、表土の下は、５～40cmほどの褐色土が覆っているだけで、一様に明褐色～黄褐色の粘性土の地山となっており、地山面には、何ら遺構らしき堀方も存せず、土器等遺物も皆無であったので、これを古墳ではないと断定するに至った。

一方、この推定地の東側墳裾には山道があり、さらに東方には、南北側に土手を形成する平坦地があり、人為的に加工された地形であると判断されたため、この部分をＥ区と名づけて調査した。その結果、第59図のように平坦地の中央部でＶ字溝が検出された。溝の上端幅は中央部で６ｍ、深さ0.75ｍ、東部で幅5.４ｍ、深さ0.９ｍを計る。堆積土の大半は、砂質土で溝底付近に大小10個余りの石があった以外、何ら遺物は発見されなかった。堆積土が砂質土で比較的新しい時期に埋まった可能性もあり、山裾から尾根の方向へ上がってきていることから昔の山道の一部と考えることも出来る。　　（佐々木稔・岡崎雄二郎）



第59図　Ｅ区調査成果図



第58図　E　区　断　面　図

Ⅵ 後友田古墳

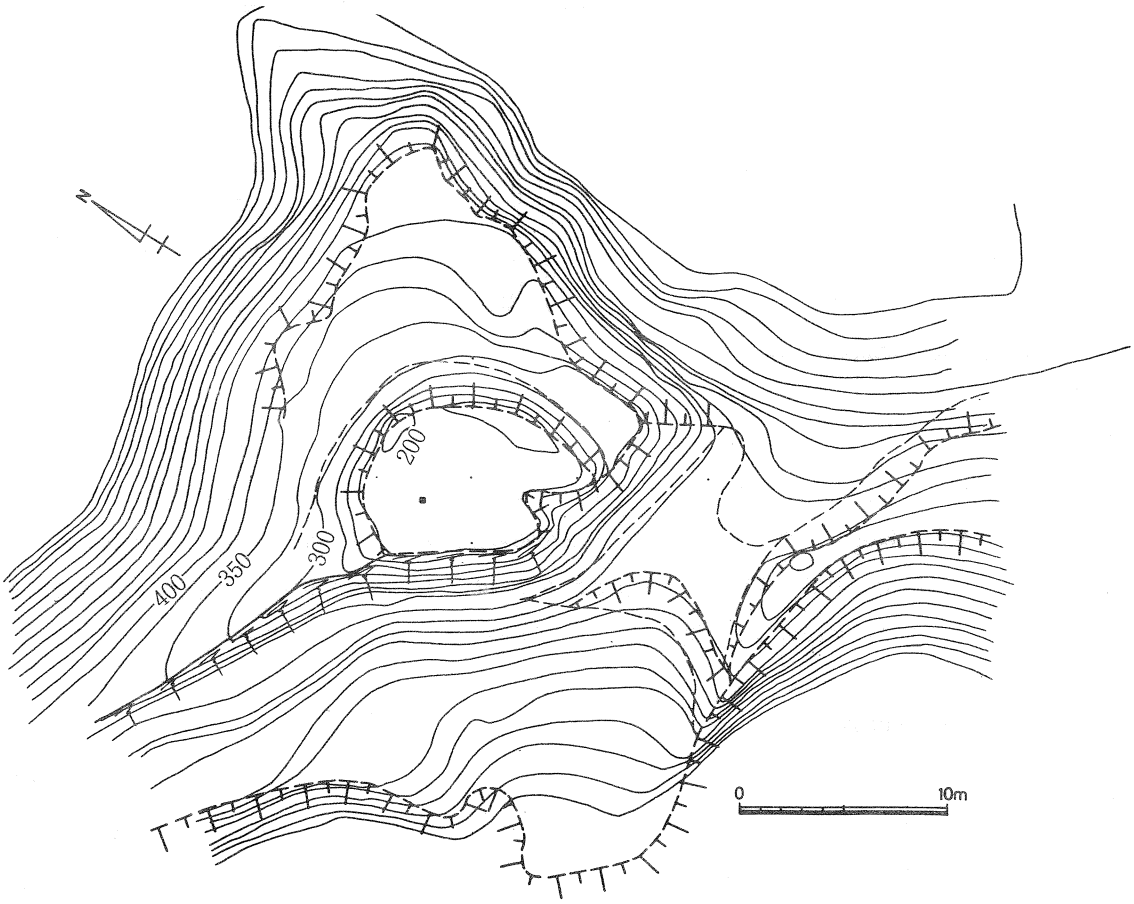
1. 調 査 の 概 要

(1) 古墳の立地

本古墳は、松江市乃白町字後友田1282－4 番地に所在する。友田遺跡の南方約 1 kmの地点にあり、潜松地区からは稜線に沿って 100 mほど北側に位置している。潜松地区から北にのびる稜線が東に分かれる分岐点の最高所に当る。

(2) 墳丘の構造

古墳西側はすでに半分以上が崩壊していた。また墳頂部には四等水準点があり、この水準点設置のために墳頂部が削平された様子で、墳頂部東端に高さ30cmほどの土塁状の盛り上がりが残されていた以外は全て平坦であった。墳頂部及び墳丘斜面はともに 3 ～ 5 cmの表土の下に10～20cmの厚さで明褐色土層が検出された。堆積土はこの 2 層だけで、その下は、黄褐色～明褐色の硬い砂質土の地山とな

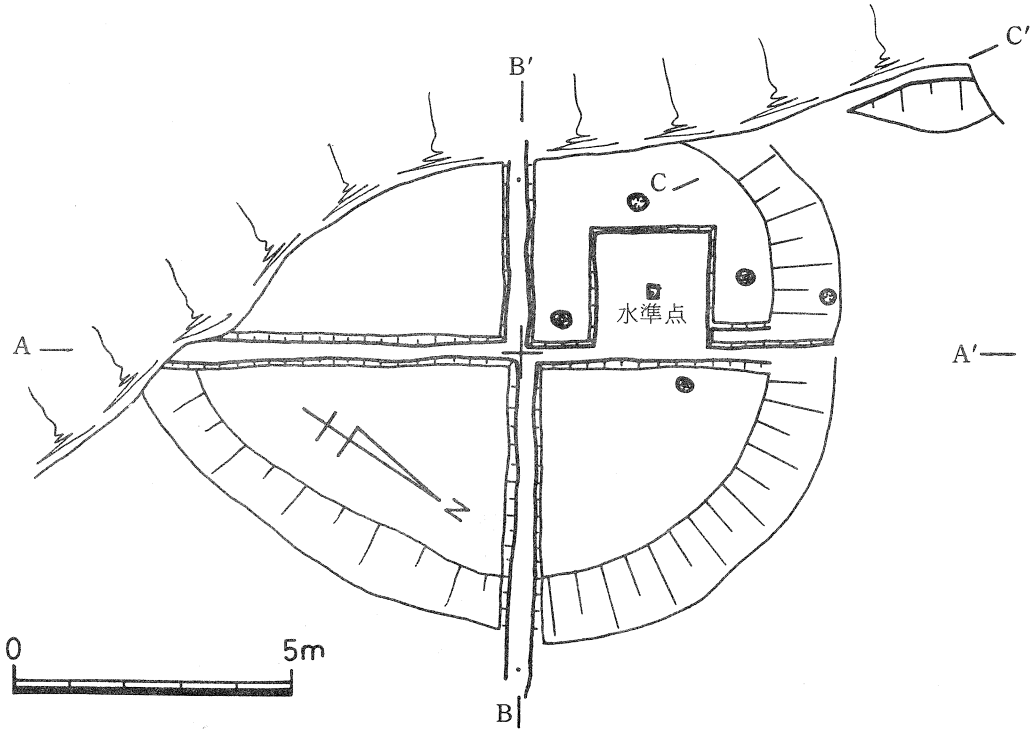


第 60 図 測 量 平 面 図

っていた。西側の崩壊した斜面には厚さ40cmにわたり土砂が堆積していたが墳頂部には主体部は全く発見されなかった。水準点を中心として4ケ所にその支えのための柱穴が検出された。

古墳東側の調査結果から本古墳は丘陵の最頂部を10cmほど残して、そこから略円形に斜面を削り取り、その土を墳丘基盤上に盛り上げて築成したものであろう。周濠は北側でのみ部分的に確認された。

以上のことから、本古墳の規模を推定すると、南北径13m、東西径11m、高さ2m前後を測る略円墳ではなかったかと推定される。後世、西側斜面が何らかの理由でくずれ落ち更に近代に至り水準点



第61図　調査成果平面図

設置のために、主体部ともども墳頂部を削り取り、その土を南側斜面に落したものと考えられる。遺物の出土状況もこれを裏づけている。すなわち墳頂部には旧表土上より検出された弥生土器片のみでこれより上層の堆積土中では遺物が全く検出されなかったこと、古墳に供献されたと思われる須恵器、土師器片はすべて墳丘斜面もしくは墳裾より出土していることである。

(3)　出土遺物の概要

イ、須恵器

北西部の墳裾に須恵器、土師器片が混在して出土し、北側墳裾でも同様の状態で須恵器片が検出された。遺物整理と復元作業の結果、北西部では坏蓋1個体と坏身片1片、甕か壷の破片と思われるもの5～6片に分けられた。その他に埦および別の坏蓋がほぼ完形で出土した。

No.1はこの坏身である。後友田の北西斜面及び墳裾に散乱していた同じ個体の破片20片余りの

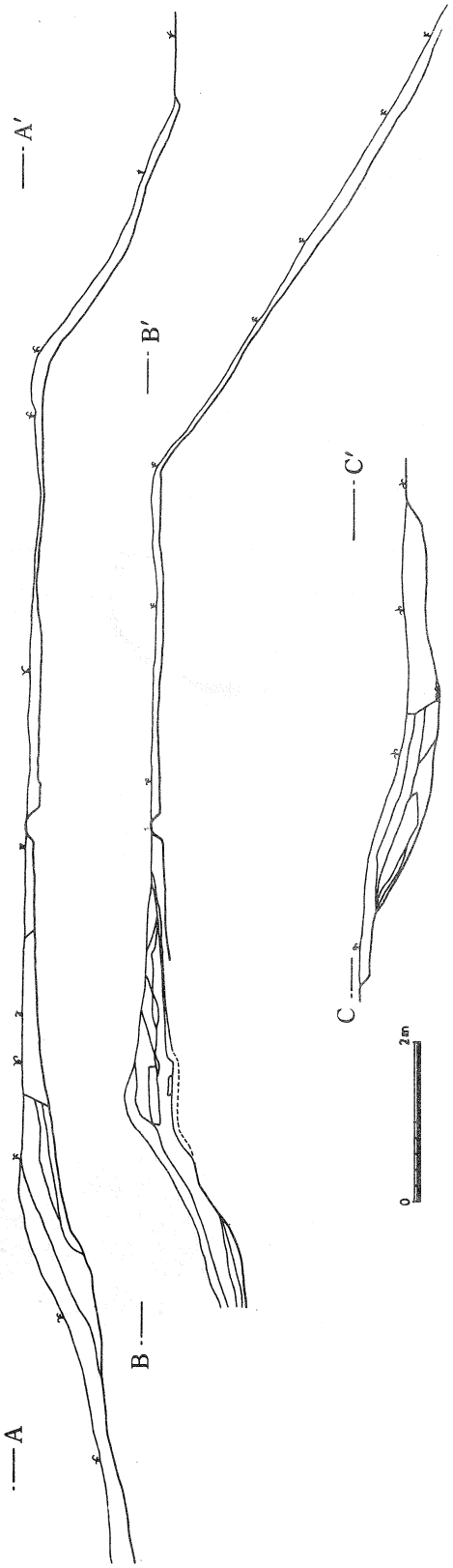
細片を復元した結果、そのうちの半数が接合した。口径11.8cm、器高 5.9 cm、立ち上がり高 1.7 cmを計る。受部は上外方にのびる。口縁はやや内反し、端部は内傾する曲面を有するが、幅 0.4 mmほどのわずかな段が認められる。巻きあげ成形の後、回転ヘラ削りを施して調整したもので、胎土は灰色でやや硬い。（63図１）

No.２はNo.１と同地点から検出された坏蓋の口縁である。No.１の破片を混えて出土したことからこれとセットになるものであると思われる。３cmほどの小片１片が出土したのみで、法量の計測は不可能であるが、端部は内傾する段を持ち、胎土器形の調整ともに坏身と同じであると思われる。（63図２）

No.３は同じく北側周溝内の黒色土層中の溝底近くに散乱していた埦である。口径7.75cm器高 6.2 cm、底径4.15cmを計る。二段の蓋受けを設けたたちあがり高は 1.8 cmで、やや内傾する。端部は鋭く切れ上がっている。把手は作られていないが非常に丁寧な作りである。（63図３）

No.４は同じ北側周溝内から出土した有蓋高坏かまたは有蓋壷の口縁部であると思われる。受部高 2.1 cmを計る。体部上半部の器表面に波状文が施されている。口縁部はほぼ垂直かもしくは内反するものとみられる。端部は内反してわずかに内傾する段を有している。（63図４）

No.５は北側墳裾で発見した。口径11.4cm、高さ 5.2 cm、口縁部高 2.0 cmを計る。内面には緑色の自然釉が付着し、外面の口縁部にも自然釉が付着している。器形調整のため右回り回転ヘラ削りを施している。胎土は灰白色



第62図 墳丘断面図

でかたい。卵形に変形しており口縁部もその影響をうけてやや外反したり内反したりするが、おおむね垂直を呈している。端部は平らで内傾するいわゆるのみ刃形である。（63図５）

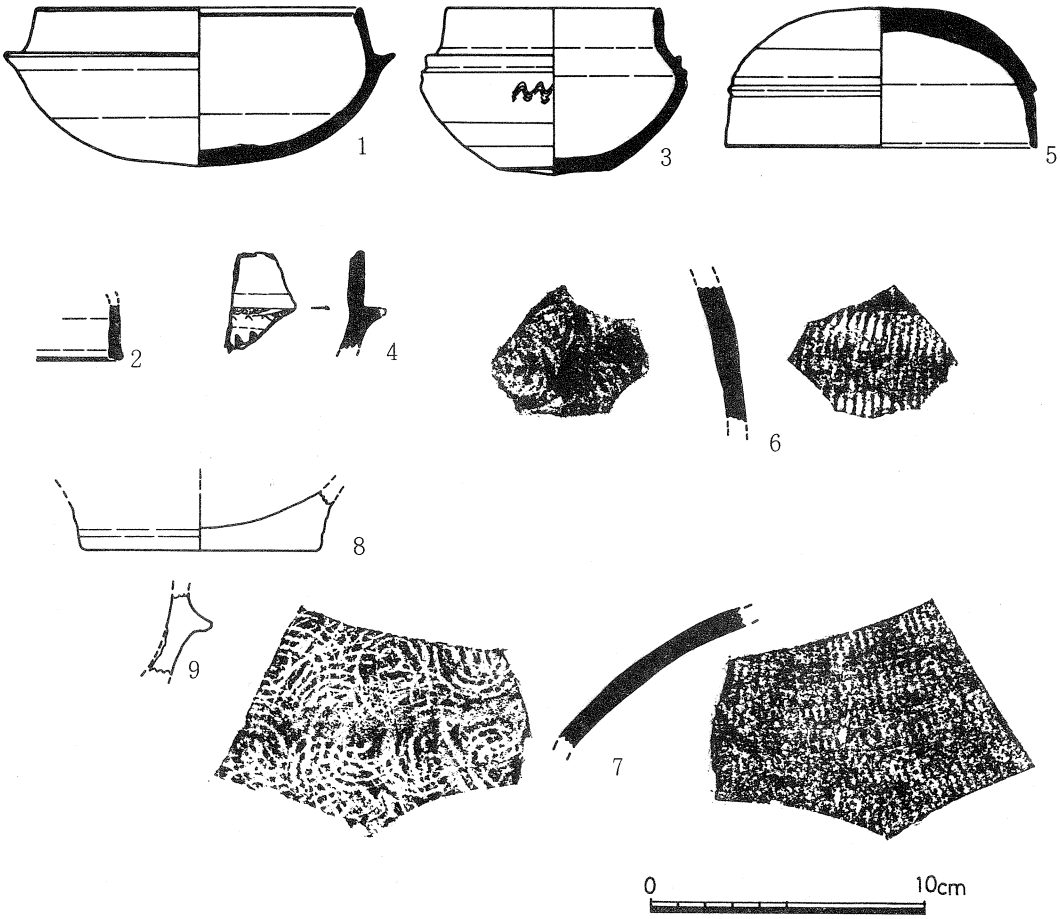
№6.7は墳丘東側斜面より出土した。厚さ７㎜を計る。外面は平行叩き目文を施し内面は同心円叩きの後、スリケシ状の横ナデ調整がみられる。甕の肩部とみられる。（63図6.7）

ロ、土師器

須恵器と共に墳丘北部裾より出土した。土師器は細片のみで形態や特徴をつかむことは出来なかった。削平された墳頂部の平坦面からは弥生土器片が出土している。

№8は墳頂南東部旧表土中から出土した弥生土器の底部である。底径8.6㎝を測る。中心部で厚さ８㎜を計る。（63図８）

№9は同地点から出土した口縁の一部であるが、おそらく複合口縁の断片とみられる。（63図９）



第63図　遺物実測図

2. 小　　結

本古墳がすでに本来の姿をとどめていない以上、古墳の築成当時の主体部の形状や供献された土器の位置、数量等を推定することは出来ない。しかし、ここから出土したいくつかの土器や、その破片から本古墳の築成年代を推定することが可能であると思う。まず最も普遍的な蓋坏について考察してみたい。出土した蓋坏にみられる特徴は以下の点である。まず坏身は、口縁が二段式の形状を有している。坏蓋には上面と側面とを分かつしっかりした突帯を設け、口縁高は20㎜以上を計ること、また端部は二段式かのみ刃状を呈していることである。これらの特徴はいわゆる山陰Ⅰ型式の蓋坏に対比出来るものだが、もっと特徴的であるのはこの蓋坏と同伴して須恵器埦が出土していることである。これは県内では長砂古墳群から出土した把手付埦の他には初例であることから山陰Ⅰ型式と同時代かもしくはこれ以前に製作された可能性も否定出来ない。

この埦と同様の特徴をそなえ、かつ蓋坏も同伴しているもので編年のたしかな例として、大阪陶邑古窯跡群があげられる。この報告によれば、前出の特徴をそなえた蓋坏は、陶邑第1型式の3からⅡ型式の1に対比されるものであるが、埦の類になると第Ⅰ型式の2から5までに出土するに限られており、さらに後友田の把手の全くない埦はⅠ型式の2から3の段階にとどまるものである。このことから後友田古墳の出土遺物は陶邑の編年に対比した場合、ほぼ第Ⅰ型式の3段階に比定出来るものと推定される。

次に山陰Ⅰ型式の特徴をもつ松江・金崎、薬師山古墳の出土遺物をこの陶邑に対比してみたい。山陰Ⅰ型式の特徴である蓋坏の蓋・身ともに、上部、底部が水平に近く、たちあがり高、口縁部高の高く垂直で、かつ二段式の口唇をもち、稜のはっきりしたものをみると、ここでは第Ⅰ型式の3から5にあらわれる特徴である。また高坏にみられる口縁部や脚部のすかし孔の特徴をみると第Ⅰ型式の3から4にみられるもので、これら二つのことから陶邑では第Ⅰ型式の3から4に対比されるものと考えられる。

以上2ケ所を比較すれば、後友田古墳の築成時期は金崎、薬師山古墳と同時代かもしくは若干古くなるものと推定される。

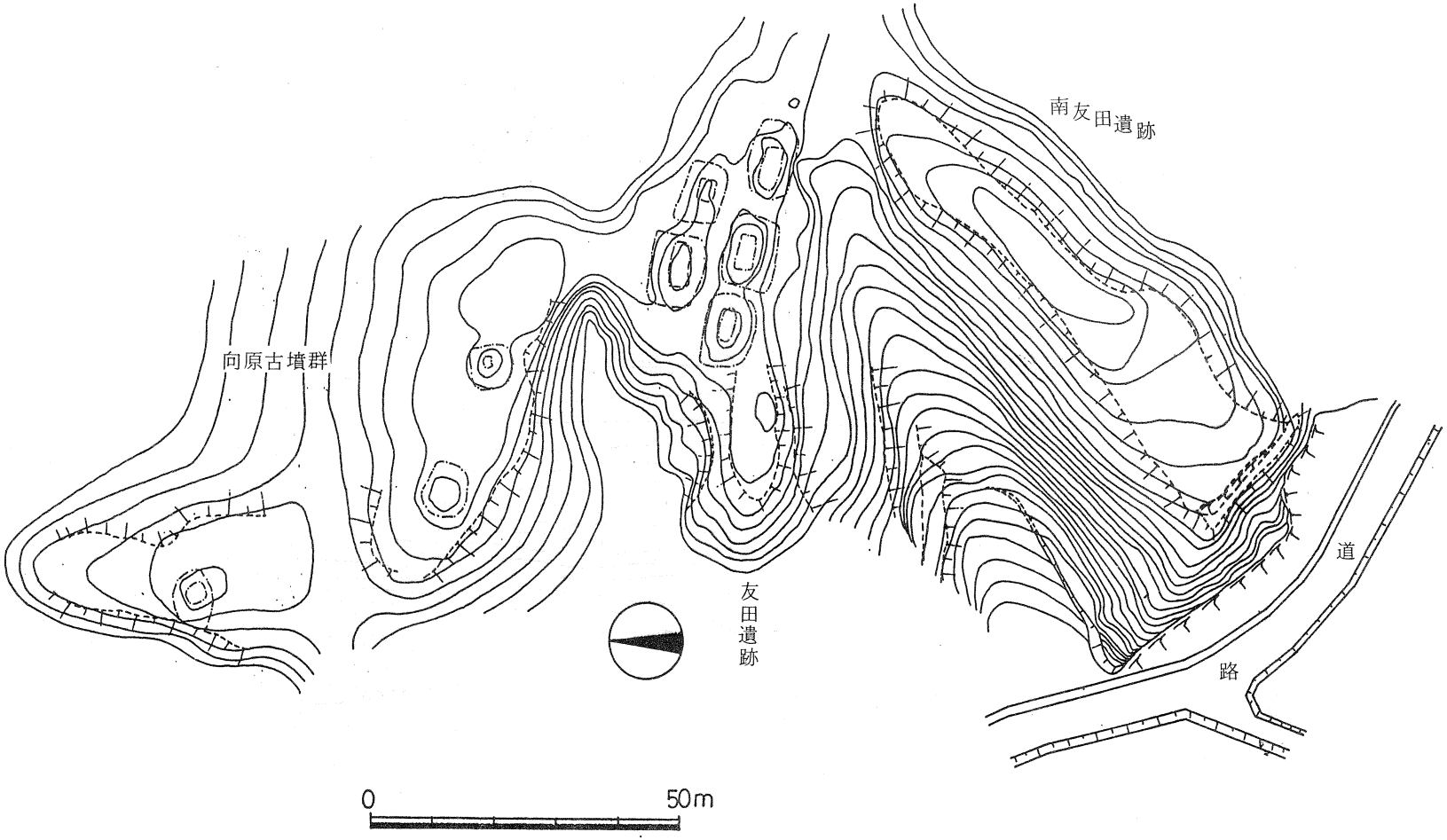
本報告書に所収の長砂古墳群ではこの後友田古墳の築成時期と同時代かさらに古いと考えられる大型樽型瑕や把手付埦が出土しており、おたがいに近接していることから、この乃木地区一帯に古式の須恵器を所持することの出来た有力集団社会が形成されており、本古墳は、長砂グループから分離した小豪族の墓であると思われ、さらに墳形が、円墳になるらしいことから畿内との関連も考えねばならないのかも知れない。

一方、出土した須恵器類は、いずれも山陰Ⅰ型式の範ちゅうに含まれ、しかも埦にみられるように県内でも初例の器種も含まれている。

Ⅰ型式の須恵器を焼成した窯跡は、今のところ安来市・高畑窯跡以外には未確認であるが、果して出雲地方で焼成されたものなのか、あるいは、畿内地方からもたらされたものなのかは今後の検討に

まつしかない。　　（中尾秀信）

Ⅶ 南友田遺跡



第 64 図　全体測量平面図

第 65 図　南友田遺跡測量図

0　20m

1. 位置と歴史的環境

浜乃木町一帯の低丘陵の内、西へ突出した一支稜の尾根上に立地する。尾根は標高23m、西側の水田からの比高は、15m余りを計る。所在地籍は、松江市浜乃木町2790、2793－1、2793－2、2793－3である。字名は、友田であるが、すぐ北側の丘陵上に友田遺跡が所在し、混乱するので、友田遺跡の南部の遺跡という意味で「南友田遺跡」と称する。

本遺跡のすぐ北側の丘陵尾根上には、前述の友田遺跡が所在する。弥生期の集団墓地で土墳墓28基、墳丘墓6基、四隅突出型方形墓1基が確認されている。その他、北方には山陰Ⅰ期の須恵器を出土した向原（むこうばら）古墳群、西方の山には、前方後円墳を含む田和山古墳群、南部に続いた丘陵尾根上には山陰Ⅰ期の須恵器を出土した後友田古墳がそれぞれ所在する。

2. 調査の概要

丘陵尾根上は、平坦であったので、中軸線にそって北（N区）と南（S区）にまず2大別し、さらに直角方向に幅4m間隔で区分し、それぞれを、N－1、N－2、N－3区……S－0、S－1、S－2区……と称した。平坦地上では、いくつかの不規則に点在するピットと少量の土器片の他は、まとまった遺物や明確な遺構はなかった。

【遺構】

(1) SK01、S－5区の南斜面に位置する。平面は、やや長方形で北西－南東の幅約1.2m、北東－南西の幅約1mを計る。3段の落ち込みになり、2段目は、50×40cmを計る。3段目は25×25cmを計る。深土は、南部地山から57cm、北部地山面から1.28mを計る。壙底には遺物は全くなかった。壙底から30～40cm上方に丸味のある石計5個を中央部に入れている。これらの石からおよそ10cm上方で弥生土器と石包丁の破片を発見した。他にも弥生土器の小片が多数出土したが全て、石群より上層にあった。

(2) S－0～S－3区の遺物群

地山面は、S－3区の中ほどから南部斜面に向けて急傾斜し、南側でV字に近い溝となっている。この溝付近とS－2区の地山平坦面、S－0区の急斜面を中心に大量の須恵器片が出土した。S－3区の斜面では、大型甕の他、蓋坏類も出土した。S－2区の平坦面では、大型甕の破片が集中的に散布しており、復元の結果これらは1個体のものであった。S－0区の急斜面では、やはり大型甕の口縁部が出土した。又、これらの南側斜面では弥生土器の甕底部や、砥石、石器類も出土した。

(3) N－1～N～5区の遺物群

ほとんどが、北側斜面上の暗褐色～黒褐色土層から出土。S区と違い、この区域では、須恵器類が少なく、逆に弥生土器片が多い。土器の他は、N－2区で黒曜石の石鏃2点、サヌカイト質

の石鏃1点、N－3区で黒曜石の石鏃が1点出土した。

(4)　SD01

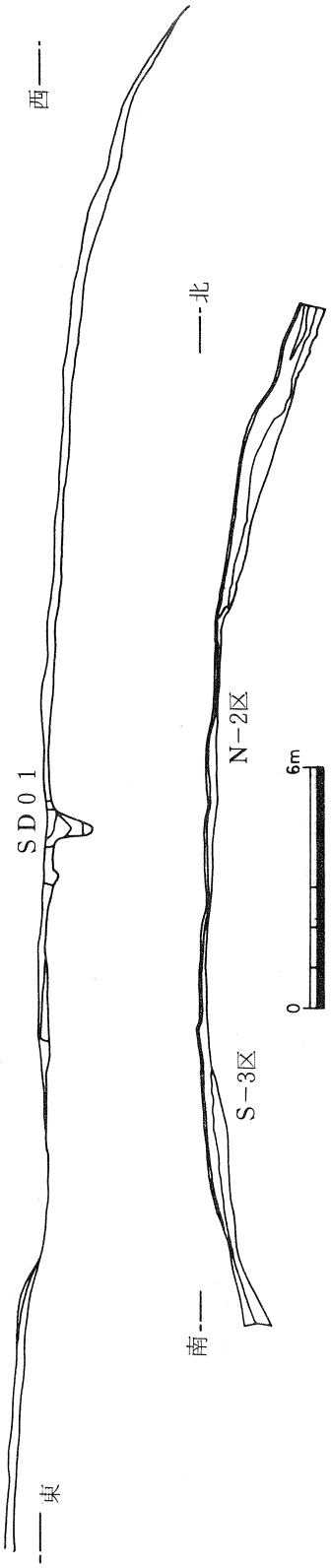
この溝は、N－1区の南部を東北方へ約14mまっすぐに走り、N－5区で南西方向へほぼ直角に折れ曲がり、S－5区の南斜面で自然消滅している。上端幅85cm、下端幅11cm、深さ92cmを計り、土が堆積していた。溝内には、何ら遺物は、発見されなかった。上部の堆積土をみると表土層から堀り込んであることが分かったので、恐らく後世の加工になるものと思われた。

3. 遺構の検討

(1)　SK01　土壙内上層の出土土器片をみると、弥生時代前期後半の土器であり、混入品であるとしても他の時期のものがないことからそのころの土壙であろうと思われる。中層部に石群が存在したことから墓の可能性もあるし、貯蔵穴とする見方もあるが、いずれとも決し難い。

(2)　丘陵先端部

S－0～S－3区、N－1～N－5区では、弥生土器をはじめ、須恵器、土師器類が大量に散布していたが、この付近一帯の地山をみると尾根中央部は平坦であり、これは、東側の支稜基部（S－20区、N－19区）まで同様に平坦面を呈していた。表土は20cm～30cmほどで、遺構を伴なわない。しかも、S－6、7区ではかなり広範囲に後世の撹乱を受けた跡があり、丘陵先端部では前述したとおり深い溝が形成されていた。土器類が出土したのは、全て南北両斜面に近い平坦部かもしくは、斜面である。廃棄された状態である。これらのことから、丘陵上部平坦面は、後世畑地帯に削り平開墾された可能性が強い。恐らく、以前は、弥生～古墳、歴史時代にかけての住居跡があったのではないかと考えられる。



第66図　遺跡断面図

4. 遺 物 の 検 討

1～3は、ＳＫ０１の内部堆積土出土のものである。1、壷形土器の頸部から体部上半部にかけての破片。頸部に7条以上の幅0.5㎜のヘラ描き沈線を施す。弥生前期後半のもの。

2は、甕形土器の頸部から体部上半部にかけての破片で、頸部から2.5㎝下方に9㎜の間隔をおいて2条のヘラ描き沈線を刻み、その内側に斜行楕円型刺突文を施す。やはり、弥生時代前期後半のもので、松江・タテチョウ遺跡に類例がある。

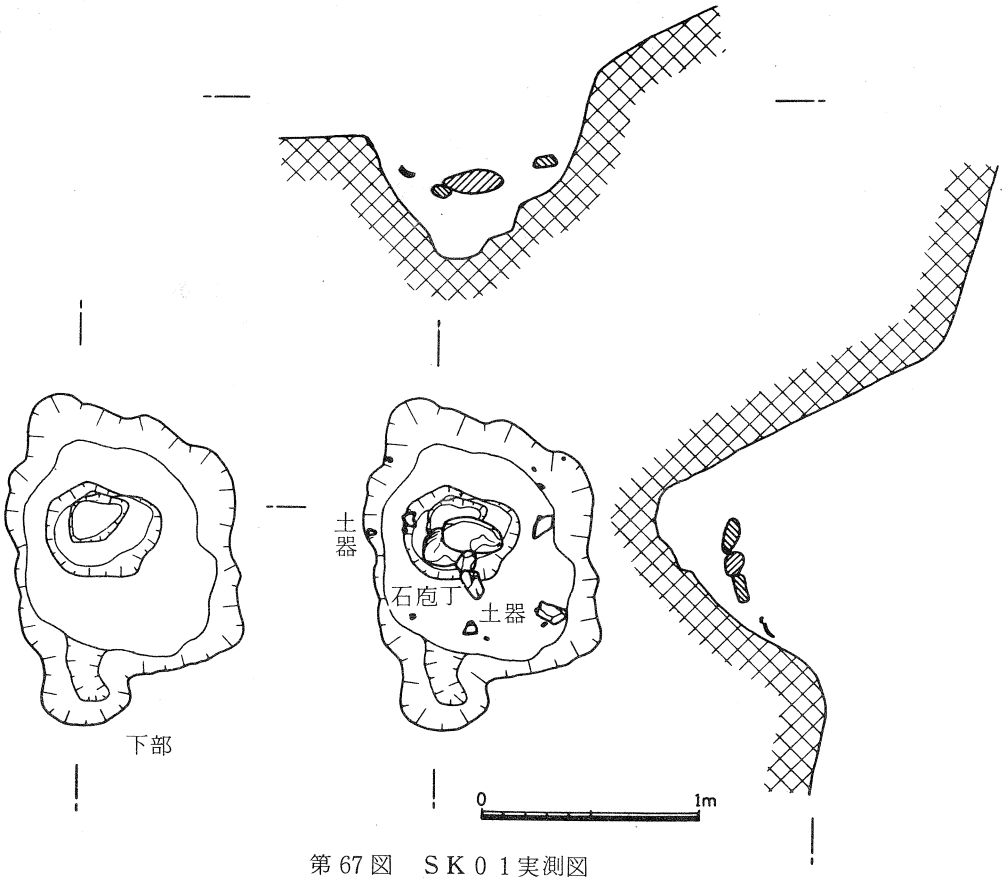
3は、頁岩もしくは泥板岩を利用した石庖丁で、端に近い部分の破片である。端部に近い方の幅は、1.35㎝、中心部に近い方の幅は、3.25㎝、長さは、3.1㎝、厚みは、5㎜を計る。半月形もしくはまなこ状のもので、基部の復元長は、15㎝ほどになるものと思われる。両面ともに、よく磨研されており細かい擦痕の線がついている。

4、Ｓ－2区斜面の黒褐色土層から出土。弥生土器の底部である。底径6.8㎝を計る。

5、Ｓ－2と3区中間畦の黒褐色土層から出土。弥生土器の底部である。底径7.0㎝を計る。

6、Ｓ－10区の褐色土層から出土。弥生土器の底部で、底径6.5㎝を計る。

7、Ｓ－3区の斜面黒褐色土層から出土。土師質の皿である。底部が1.3㎝と分厚い。



第67図　ＳＫ０１実測図

8、S－3区の斜面黒褐色土層から出土。砥石である。両面共に斜方向の使用痕がある。火成岩質のもの。

9、S－2と3区の中間畦の黒褐色土層から出土。須恵器の蓋である。口径13cm、器高4.2cmを計る。天井部外面は肥厚し、削り痕を残さない。山陰4期のもの。

10、S－3区の斜面、黒褐色土層から出土。須恵器の蓋である。口径12.7cm、器高4.5cmを計る。天井部外面は、一方向になでる。山陰4期のもの。

11、S－2区の暗褐色土層中から出土。須恵器の蓋である。口径13.3cm、器高4.3cmを計る。天井部外面は、削り痕を残さない。山陰4期のもの。

12、S－3区斜面から出土。口径9.2cm、器高3.4cmを計る小型の蓋である。天井部外面は、右まわりの回転削り調整を施す。

13、S－3区の斜面から出土。須恵器つまみ付の蓋である。口径10.3cm、器高3.3cm、内、つまみの部分は、高さ1cm、直径1.5cmを計る。山陰4期以後のもの。天井部以外は、右まわりへ回転ヘラ削り調整を施す。

14、S－3区の斜面から出土。須恵器の蓋である。口径9.3cm、器高2.2cmを計り、調整を施す。山陰4期以後のもの。

15、S－2と3区の中間、斜面の暗褐色土層中から出土。須恵器の坏身である。口径10.7cmを計る。山陰4期のもの。

16、S－2区の黒褐色土層中から出土。須恵器の坏身である。口径13.5cmを計る。山陰4期のもの。

17、S－5区南側斜面より出土。須恵器の坏身である。口径12.2cmを計る。山陰4期のもの。

18、S－3区の斜面から出土。須恵器の坏身である。口径11cm、器高3.6cmを計る。山陰4期のもの。

19、S－2区の暗褐色土層から出土。須恵器の瑞形土器の口縁部である。口径11cmを計る。山陰4期頃のものであろう。

20、S－3区南側斜面の黒色土層から出土。須恵器の大型甕の口縁部である。口径52cm、既存高16.5cmを計る。口縁外面は肥厚し、その直下に波状文と2条の平行沈線を2単位でくり返すもの。

21、S－3区南側斜面から出土。中型の須恵器甕の口縁部から体部にかけての破片である。口縁部外面は肥厚し、凹む。文様帯はない。

22、S－3区出土。須恵器大甕で口径23.4cm、体部最大径46cm、器高50.8cmを計る。

23、S－0区出土。須恵器大甕の破片で、口径55cm、口縁部高19.6cmを計る。

24、S－3区の表土層から出土。黒曜石製の石鏃である。長さ2m、基部の幅1.2cm、厚み3mmを計る。凹基無茎式の弥生時代のもの。

25、N－5区北部の暗褐色土層中から出土。須恵器の坏身である。口径10.8cm、受部径13.2cm、器高推定3.2cmを計る。たちあがりの低いもので、山陰4期である。

26、N－4区北側から出土。須恵器の蓋である。口径8.4cm、器高3.3cmを計る。天井部外面はケ

ズリ痕を消去する。小型品で山陰４期のもの。

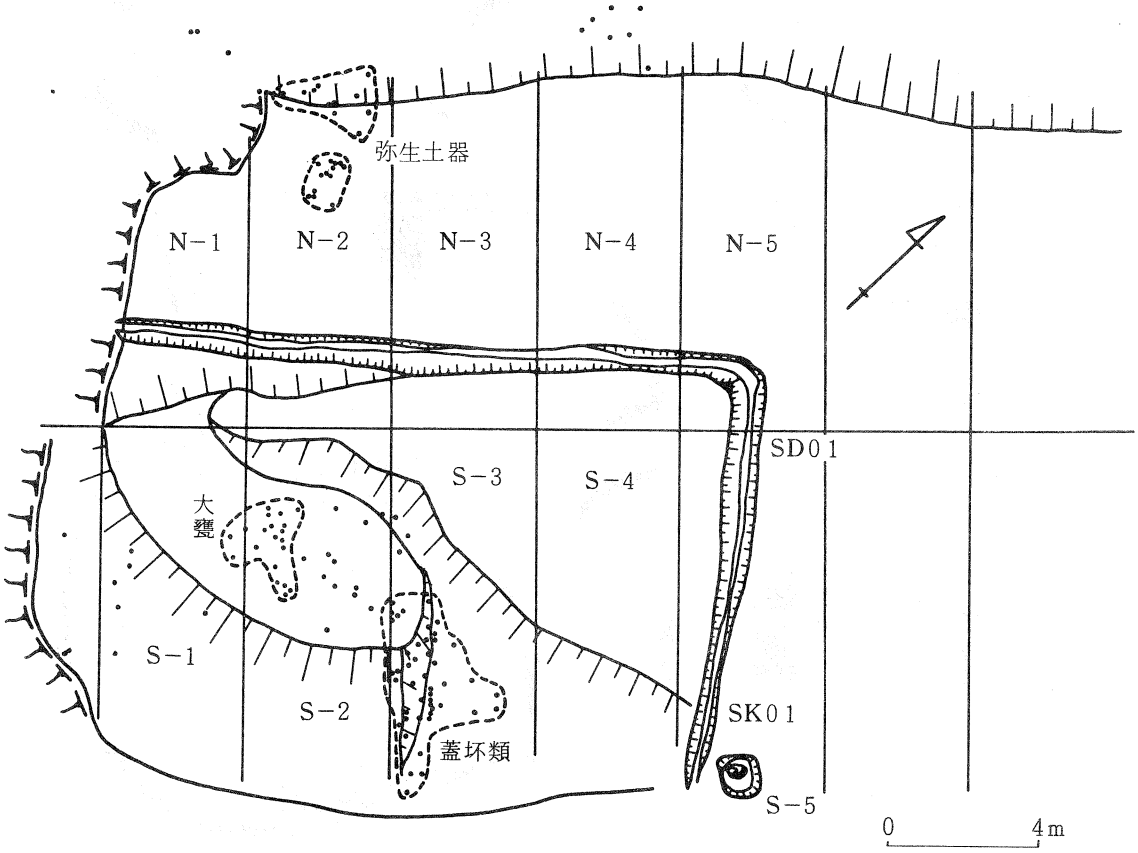
27、Ｎ－６区の暗褐色土下層から出土。須恵器の大形甕の口縁部である。口径 29.6cmを計る。口縁部直下に波状文と２条の沈線文を３単位くり返す。波状文は、施文原体の太いものを使用している。

28、Ｎ－４区地山表層から10cm上方の黄褐色土層中から出土。肥厚する口縁直下に10本単位の波状文と２条の沈線文を２単位くり返す。

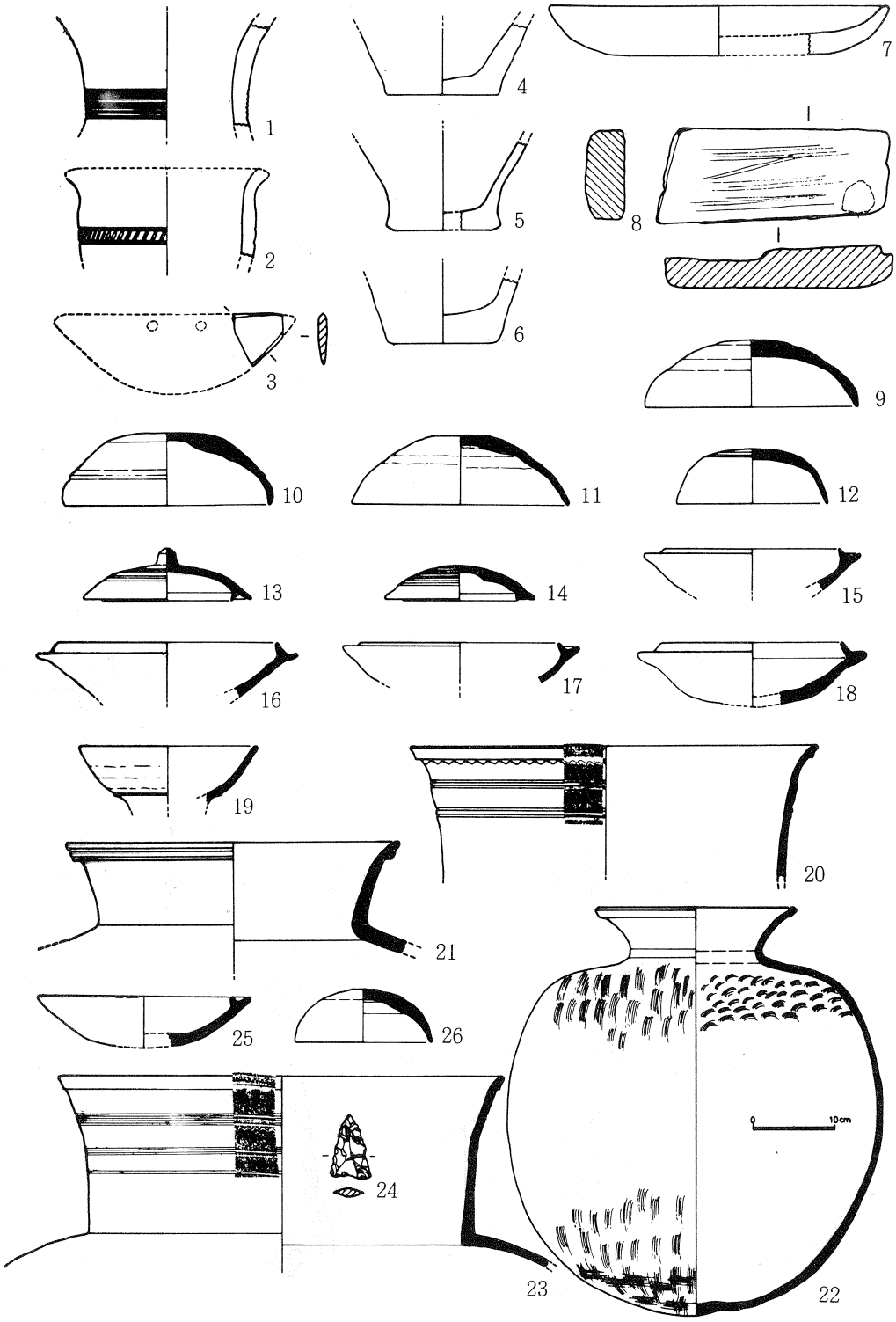
29、Ｎ－２区の北側斜面、暗褐色から黒褐色土層から出土。弥生土器の甕形土器である。口縁部は、外傾し、端部に刻み目を付ける。頸部の下 1.5 cmから 3.5 cmまでの区間に７条のヘラ描平行沈線文を施す。弥生前期後半のものである。他に体部に３条のヘラ描平行沈線文を施した甕の破片もある。

30、Ｎ－３区、黒褐色土層中から出土。弥生土器の底部である。底径 8.5 cm、厚み 1.6 cmを計る。

31、Ｎ－４区、北側暗褐色土層中から出土。弥生土器の口縁部である。口縁上部は、幅２cmほどの平坦面を成し、外方へ水平に突き出る。端部に斜めの刻み目文を施す。頸部の直下には、2.4 cmの区間に、５条の太いヘラ描平行沈線文を施す。体部は、やや外反する。他の破片で、体部から口縁部に向ってゆるくカーブする型式のものもあり、これには、３条の沈線が施されている。口縁の断面が逆



第 68 図　遺物の出土状況



第69図　S区出土遺物実測図

1～3＝SK01　4～24＝S区出土

0　10cm

L字型となる式のもので、北九州地方に類例が求められる。弥生後期後半のものであろう。

32、N－5区の暗褐色土層より出土。弥生土器の底部である。底径12.2㎝、厚み1.1㎝を計る。

33、N－5区北側の暗褐色土層より出土。土師器の壷の口縁部である。単純口縁で頚部直下で分厚くなる。口径14.0㎝を計る。

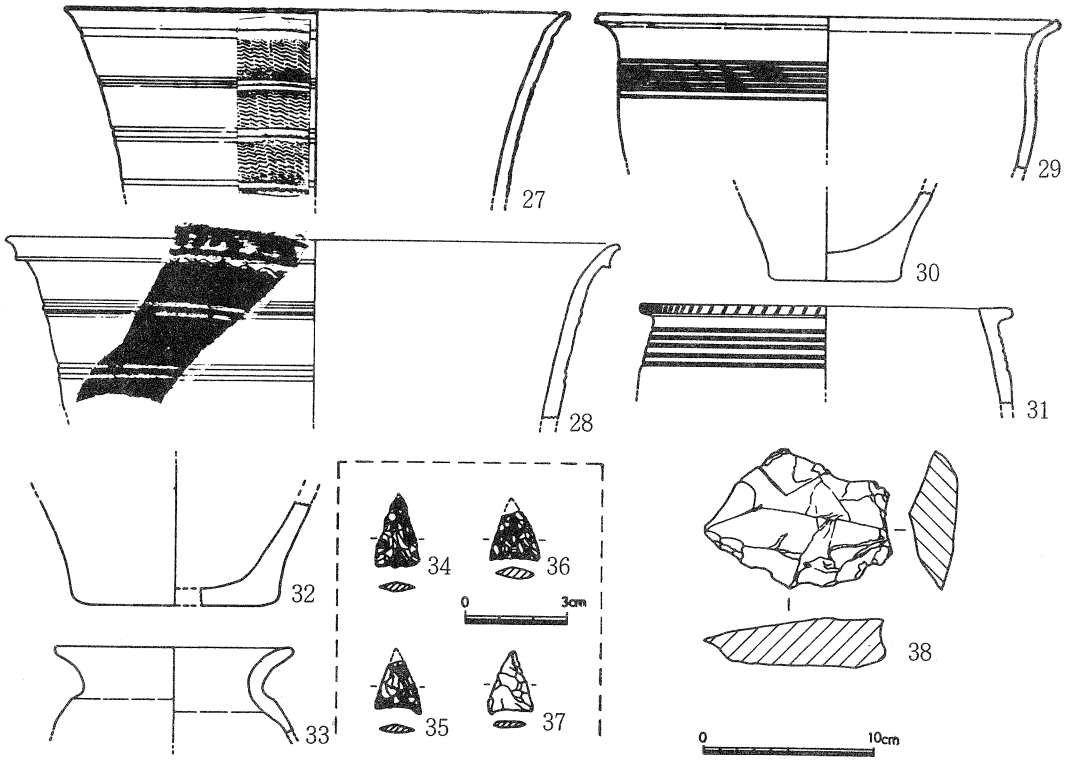
34、N－2区の地山面から出土。黒曜石製の石鏃である。長さ2㎝、基部の幅1.3㎝、厚み3㎜で、先端部をわずかに欠失する。平基無茎式のもの。

35、N－2区北側暗褐色土層中より出土。黒曜石製の石鏃である。現存長1.5㎝、基部の幅1.3㎝、厚み2.5㎜を計る。先端部を欠く。凹基無茎式のもの。

36、N－3区出土の黒曜石製石鏃で、現存長1.5㎝、基部の幅1.45㎝。厚み4㎜を計る。凹基無茎式のもの。

37、N－2区暗褐色土層中より出土。玄武岩質の石鏃で、長さ1.7㎝、基部の幅1.3㎝、厚み2㎜を計る。凹基無茎式のもの。

38、N－5区の暗褐色土層中より出土。黄土色のチャート質の石材を使用したスクレーパー型石器である。長さ11㎝、幅4.5～8㎝、厚み2.5㎝を計る。



第70図　N区出土遺物実測図

5. 小　　結

本遺跡は、尾根上平坦面を後世削平された形跡があり住居跡などの明確な遺構は確認出来なかったが、南北両側の斜面付近からは、弥生前期後半頃の土器と方形の土壙、石鏃、石庖丁、そして古墳時代終末期頃の須恵器類が多量に出土し、住居跡のあったことをほのめかすものである。特に、弥生前期後半の土器類は、出雲部では、松江・タテチョウ遺跡、松江・石台遺跡から出土したものに類似しており通有品が多いと思われる中で、31の甕形土器は、器形の特徴から北九州地方にその系譜が求められるものであり、当地方では、あまり見受けないものであろう。

北側に立地する友田遺跡では、墳丘墓の基盤を成す旧表土層や、土壙墓の周辺からやはり弥生前期後半の甕や壷形土器の破片が点々と出土している。又、西方の低地に立地する欠田（かけだ）遺跡では、弥生前期後半から古墳時代前期までの土器を出土している。

これらのことから、浜乃木の平野一帯には、弥生時代前期後半頃に水稲耕作技術をもった集団が住みつき、低地を水田に開発する一方、丘陵上に住居や墓地を設けて弥生時代の後期頃まで生活を営んだことが知られる。南友田では、弥生中期、後期といった土器は、皆無であるので、中期以後、生活の拠点を移したことが考えられる。　　（佐々木稔・岡崎雄二郎）

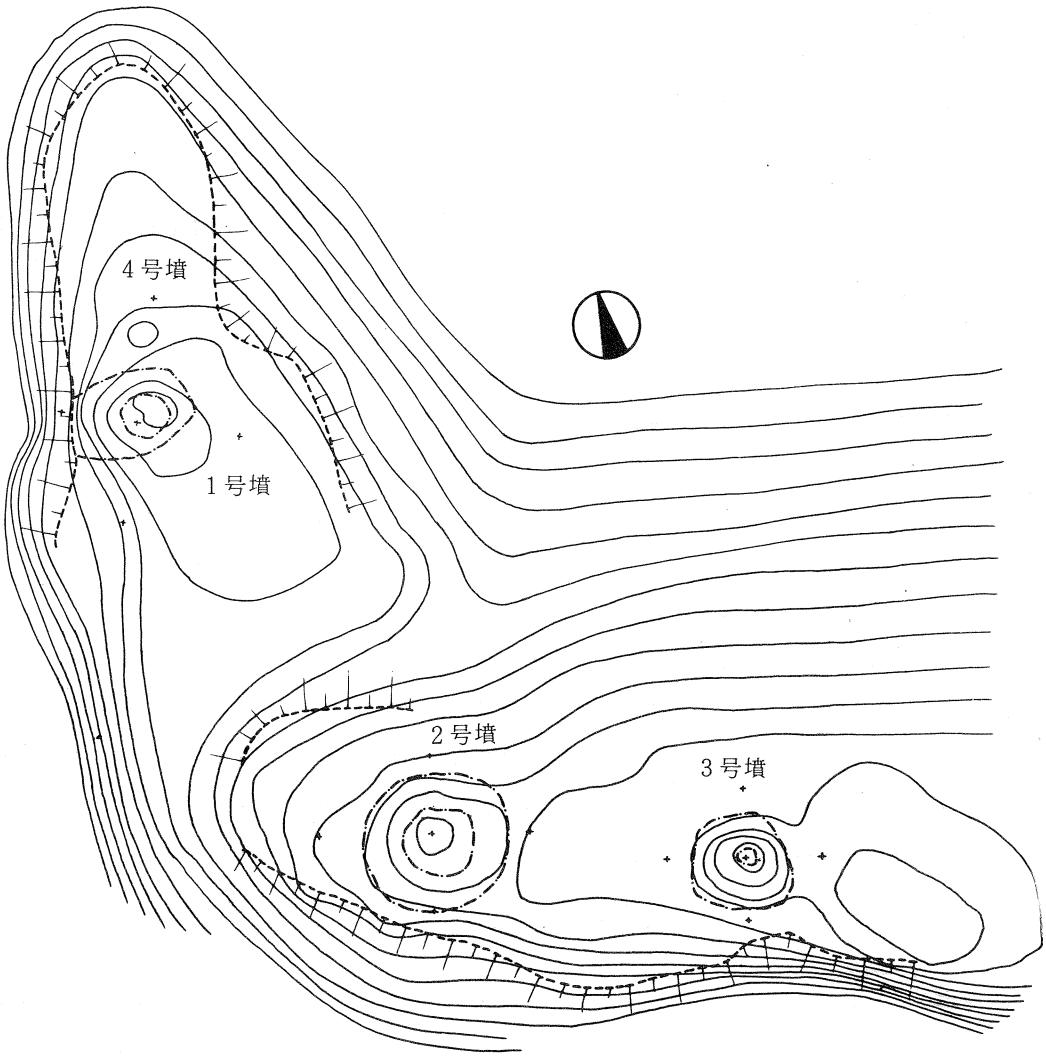
Ⅷ 向原古墳群

1. 位置と歴史的環境

本古墳群の所在地籍は、上乃木町字向原2786番地（土地所有者・宅和昌宏）で、標高18～20mを測る低丘陵上に立地する。西側の水田面からの比高は、11～12mを測る。この内、北西方向へのびる北側の丘陵上にあるものを1号墳、南側の丘陵上で西側先端部に近い古墳を2号墳、東側の古墳を3号墳とした。

当古墳群のさらに南側の丘陵には、別稿で報告する友田遺跡[1]が所在し、さらにその南の丘陵には、南友田遺跡[2]が所在する。

北側には、確実な遺跡は所在しないが、県種畜場や畑によって小規模の古墳は、既に破壊されてし



第71図　向原古墳群測量図

まったかも知れない。

友田遺跡は弥生中〜後期の墳丘墓、土壙墓、四隅突出型方形墓を検出し、南友田遺跡では、弥生前期の土壙墓などを検出している。

2. 各古墳の概要

(1) 第1号墳

ア、墳丘の構造

墳丘は、かなり凹凸があり撹乱を受けた形跡があった。測量では、南北6m、東西は、西部が急斜面となっており、下端の線が不明確であるが、6.5m前後、高さは、東と南がなだらかとなり、北と西が傾斜し、25〜50cmを計った。表面には、円筒埴輪や葺石は見当たらなかった。

調査の結果、周囲の地山を切削し、周溝を設け、その内側に南北6m余り、東西およそ6.5mの墳丘基盤を設ける。基盤上には、旧表土の表層である黒褐色土を遺存する。

盛土は、全般的に15cm前後で非常に薄く褐色土を呈する。

周溝は、西側を除き3方にまわる。上端幅2.5〜2.9m、壙底の幅0.5〜1.0m、深さは、東溝で36cm、北溝26cmを計る。黒色土層、黒褐色土層が堆積している。

イ、遺構

墳丘上には主体部は見当たらなかった。東と南の周溝内には、不定形土壙が3基、古銭やかわらけ類を含む火葬骨片群が5か所検出され、古墓と思われる。この内、土壙は4号で唐津焼の小皿が出土したことから江戸時代前期頃のものであろうと思われる。火葬骨片が伴なわないことから土葬と思われる。1、2、6、7、8号古墓出土の骨片は、人骨と思われ、これらの古墳は、中世末〜近世初期にかけて古墳を利用して営なまれた古墓であろうと考えられる。

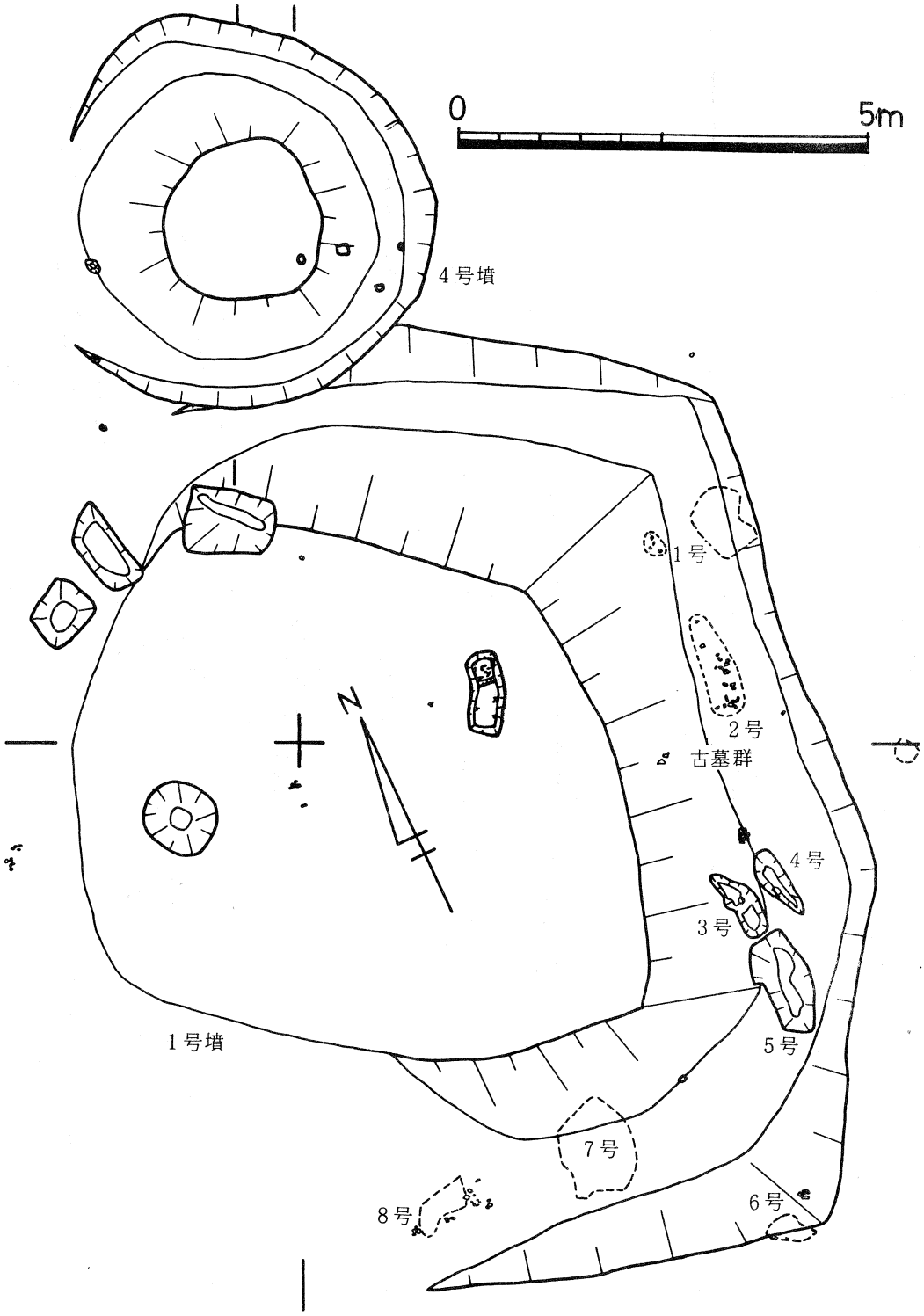
こうした不整形な土壙を穿つ火葬墓は、あまり知られていない。一方、他の骨片群は、浅く穴を堀って骨やかわらけ、古銭を埋納したもので簡単な方法である。

墳丘の北側には、円型墳が1基所在する。測量では、わずかな高まりを認めていたが、その時点では古墳とは考えなかった。1号墳の周囲を調査した過程ではっきりと確認されたので、これを4号墳とする。直径4.9mの範囲の地山を切削加工してその内側に周溝と墳丘基盤を形成したもので、周溝は、上端幅1.4〜1.5m、底幅40cm前後、深さ30〜60cmを計る。基盤は、さしわたし2mほどの円型で、この上に30cmほどの盛土を施している。しかしながら、主体部は発見されなかった。

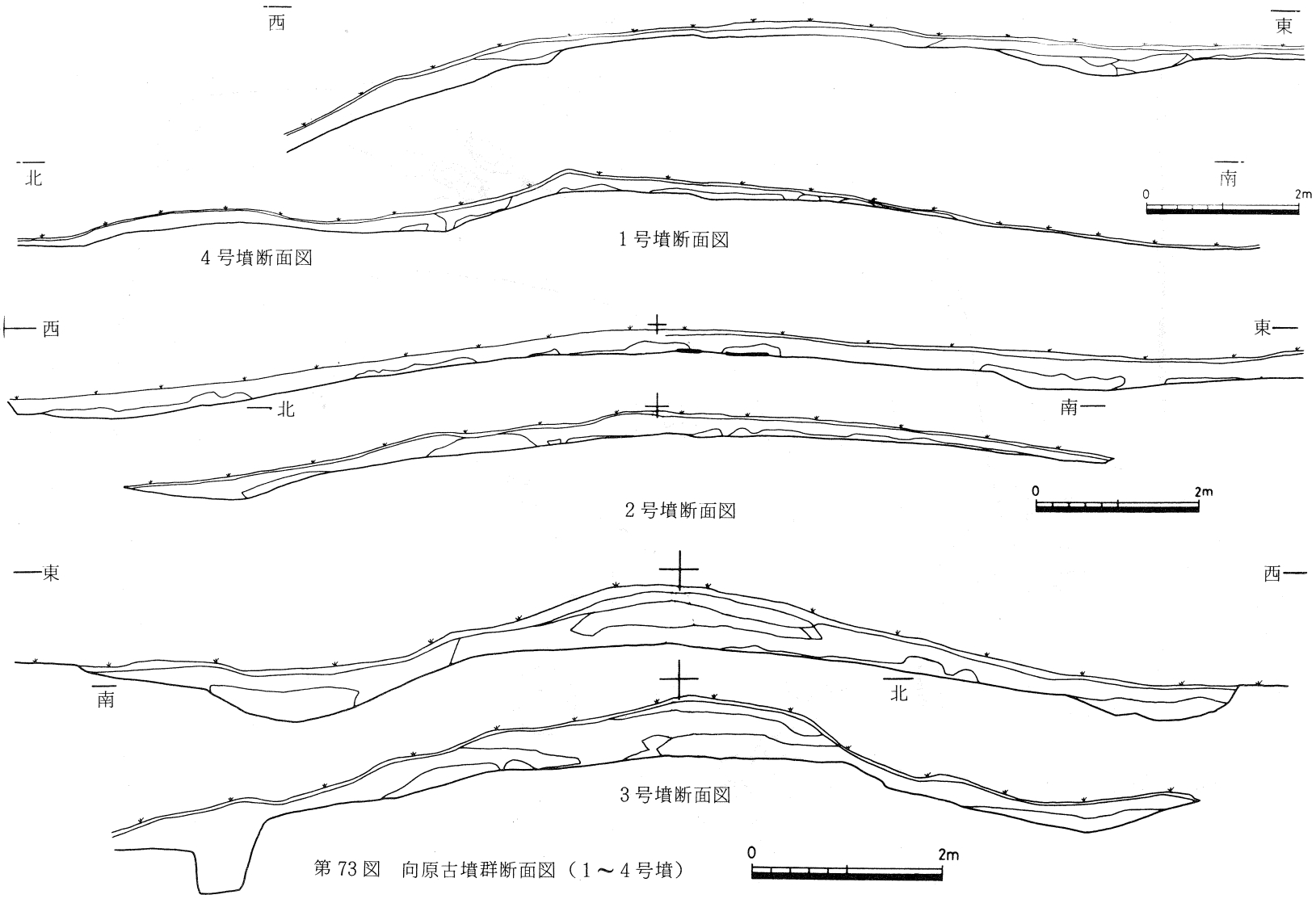
周溝内からは、須恵器片、土師器片がわずかに採集されたがはっきりと時期を確定するには至らなかった。

ウ、遺物

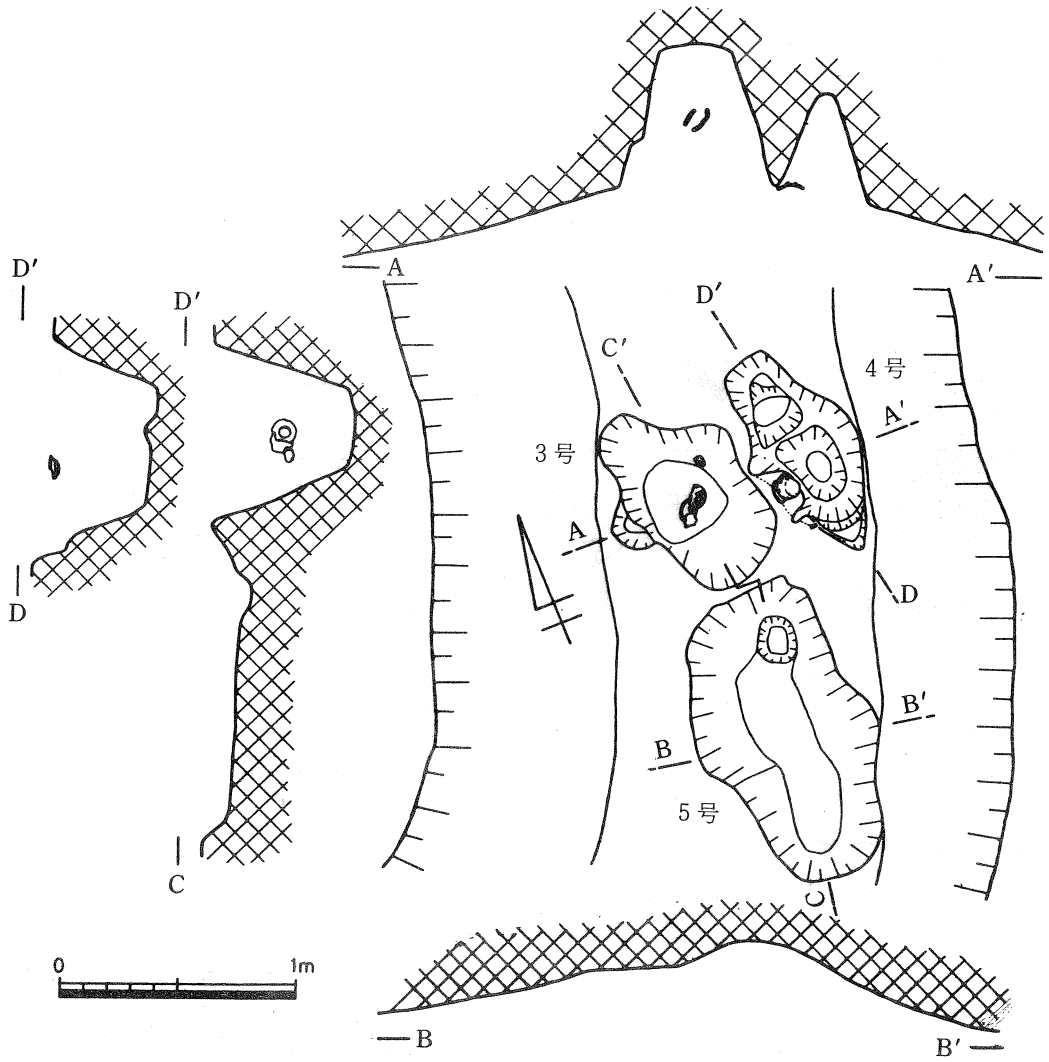
1号墳関係



第72図　1号墳、4号墳調査成果平面図



第73図　向原古墳群断面図（1～4号墳）



第74図　3・4・5号古墓実測図

1、東側の周溝内から出土。須恵器の坏身である。口径10.3cm、受部径13cm、器高（推定)6.1cm、立ち上がり高1.9cmを計る。口縁端部は段をもち、口縁は内傾する。受部は短かく上外方へのびている。底部は、右まわりの回転ヘラ削りを施すが範囲は狭い。陶邑編年のⅠ型式5段階もしくは、Ⅱ型式1段階のものであろう。(3)（図75）

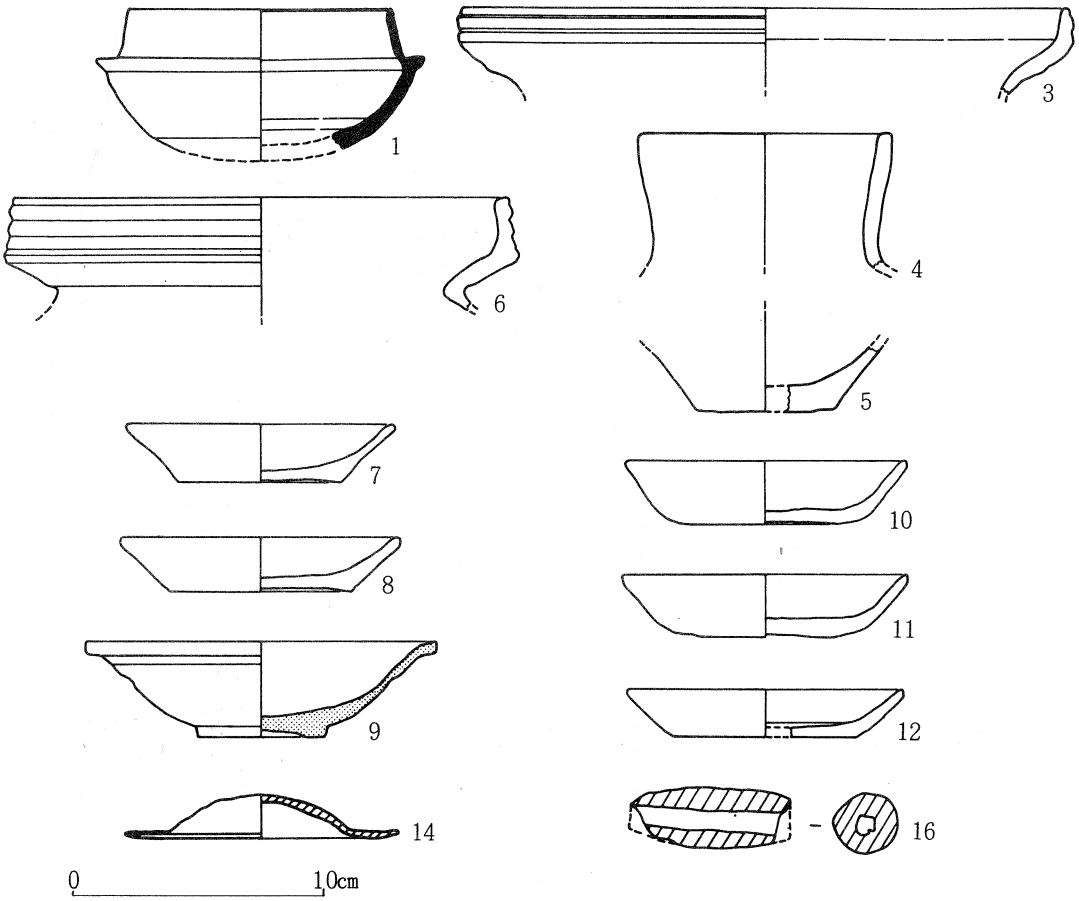
2、墳頂部西側斜面より出土。小型の壷となるもので外面はタテ方向の平行叩き目の上に横方向のカキ目調整を施す。内面は最大径3cmほどの比較的小さい同心円（溝が6重）押当具の圧痕を残しているが横ナデ調整により大半が消去されている。

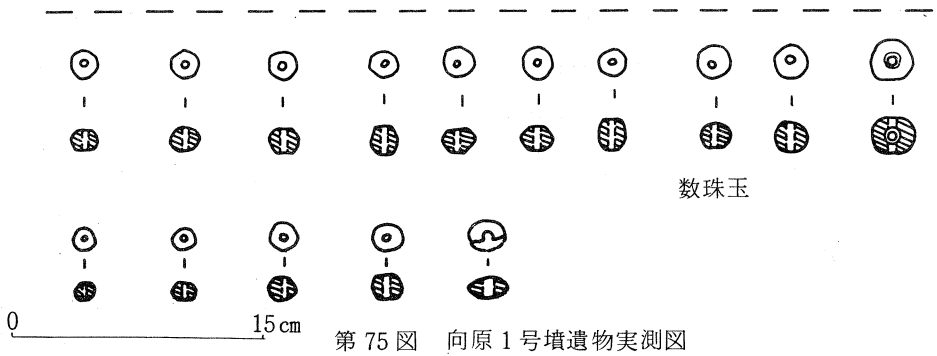
3～5、墳丘基盤上の土壙内から出土。古墳築造以前のものである。3は、口径24cmを計る弥生の甕形土器の口縁部である。外面に2条の沈線を設け、いったん内反し、その直下で外反する

が、いずれも浅い曲線を示す。4は、口径10cmの直立する口縁部と底部である。直口壷であろうか、口縁部は、高さ5cmを計り、わずかに外傾する。底部は底径5.4cmを計り、いずれも外面暗灰色を呈する。

6、墳丘基盤上の旧表土直下から出土。口径19.6cmを計る弥生の甕形土器の口縁部で外面に4条の凹線を施す。口縁部はやや内傾し、頸部は鋭く屈折する。

古墳関係





第75図　向原1号墳遺物実測図

7、3号古墓から出土。かわらけである。底部6.4㎝、口径10.5㎝、器高2.35㎝を計る。底外面は、回転糸切り痕を残し褐色を呈する。

8、3号古墓から出土。かわらけである。底部7.0㎝、口径11.0㎝、器高2.2㎝を計る。底部は高さ1㎜ほどの上げ底となり、静止糸切り痕を残す。

9、4号古墓から出土。唐津焼の高台付小皿である。口径13.8㎝、高台径5.0㎝、高台高4.5㎜、全高3.85㎝を計る。高台は、ヘラによる削り高台である。体部内面から外面の底部近くまで白色系のうわ釉がかかり、底部の無釉部分は、明褐色の地肌をみせる。

10、6号古墓から出土。かわらけである。底径6.4㎝、口径11.1㎝、器高2.5㎝を計る。底部から体部にかけては丸味を帯びている。

11、6号古墓から出土。かわらけである。口径11.3㎝、底径5.0㎝、器高2.5㎝を計る。底部は1㎜ほどの上げ底である。

12、南東部周溝内褐色土層中から出土。かわらけである。口径10.9㎝、底部7.2㎝、器高1.9㎝を計る。

13、2号古墓から出土。数珠玉である。ガラス製のもので計15個を数える。最大のものは、No.1の辻玉で、径8㎜、総高7㎜ある。最小のものはNo.15で、径5㎜、総高3.5㎜を計る。

14、鉄製のチャンガラ様の楽器と推定されるもの。直径10.8㎝、高さ1.75㎝、厚みは一様に2.5㎜を計る。中央部で直径7.2㎝の範囲が円形に高くなっている。

15、鉄製品であるが形状が不明確である。まず直径4㎜の断面円形のリングがぐるりと円を描き、それにまつわるように3か所において、厚み3㎜の鉄線が複雑にからみ合っている。

16、南東部周溝内、黒褐色土層から出土。土師質の土垂である。長さ3.15㎝、最大直径1.2㎝、端部で推定8㎜と5㎜、穴の内径は4～4.5㎜を計る。手網用のものであろうか。

17～22、古銭である。六道銭の役割を果たしたものであろう。

4号墳関係

周溝内から土師器片1と須恵器片少量が発見されたが、器形等不明であり、年代もよく分からない。

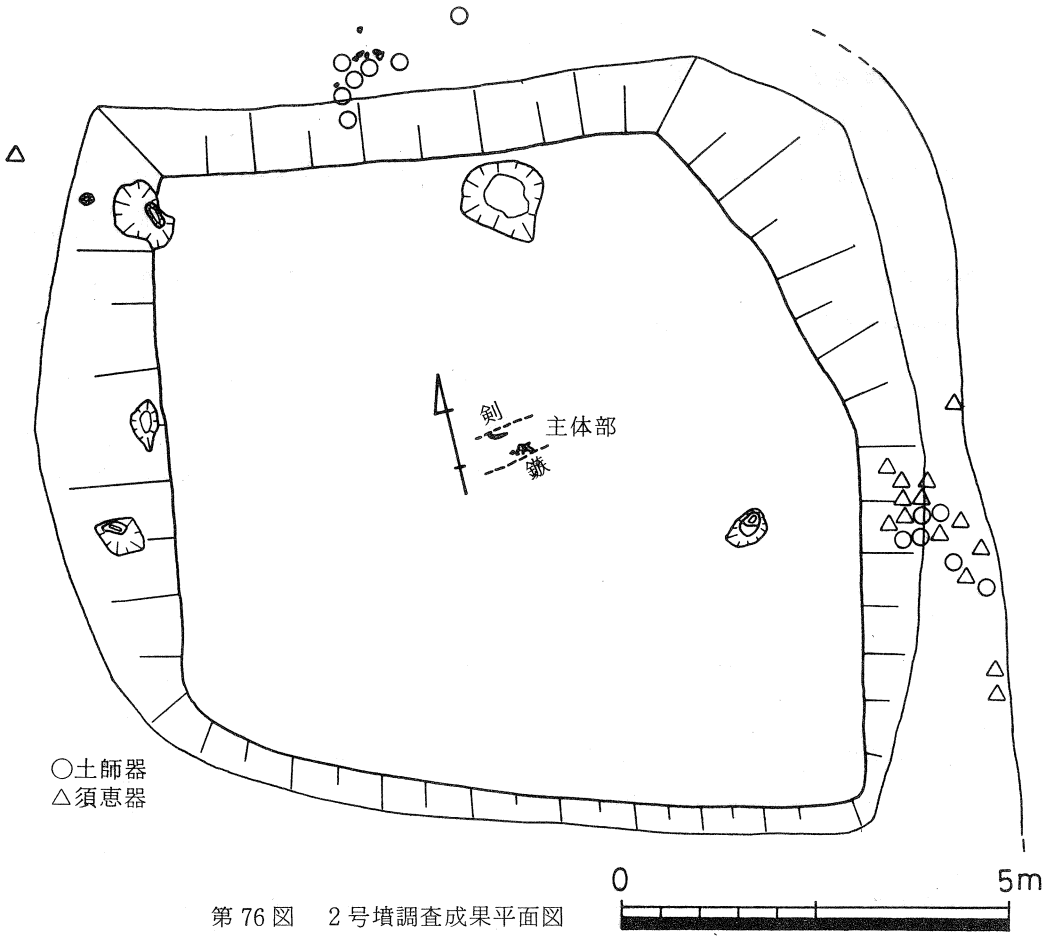
(2) 第2号墳

ア、墳丘の構造

測量したところ、東西南共に一辺10m、高さ0.5mほどの高さの低い小規模方墳と思えた。

調査の結果、東西長8.85m、南北長推定8.8mの略方形の墳丘基盤を残し、その外側を切削加工して段となし、東部には溝を設けるものである。東の溝は、底幅0.5～1.0m、深さ19㎝を計り、南部においてはもう少し斜面の方へ延びているようであるが、南の段の下端は、中心杭から5m南部の地点に求められよう。盛土は、墳央部で30㎝、裾で10～25㎝を計る。主に褐色土が盛られている。

イ、遺構



第76図　2号墳調査成果平面図

墳丘基盤のほぼ中央部において地山面上で鉄剣1口と鉄鏃9本を発見したので、この部分に主体部があったものと考えられる。鉄剣と鉄鏃はお互いに、内法で45cm、外側で70cmほど離れた位置にあるので、両者を左右両側に副葬した長方形の主体部が想定される。石などは皆無であったので、単なる木棺直葬であったと思われ、長さは不明というしかないが、幅は前述のとおり70cm前後であったと思われる。

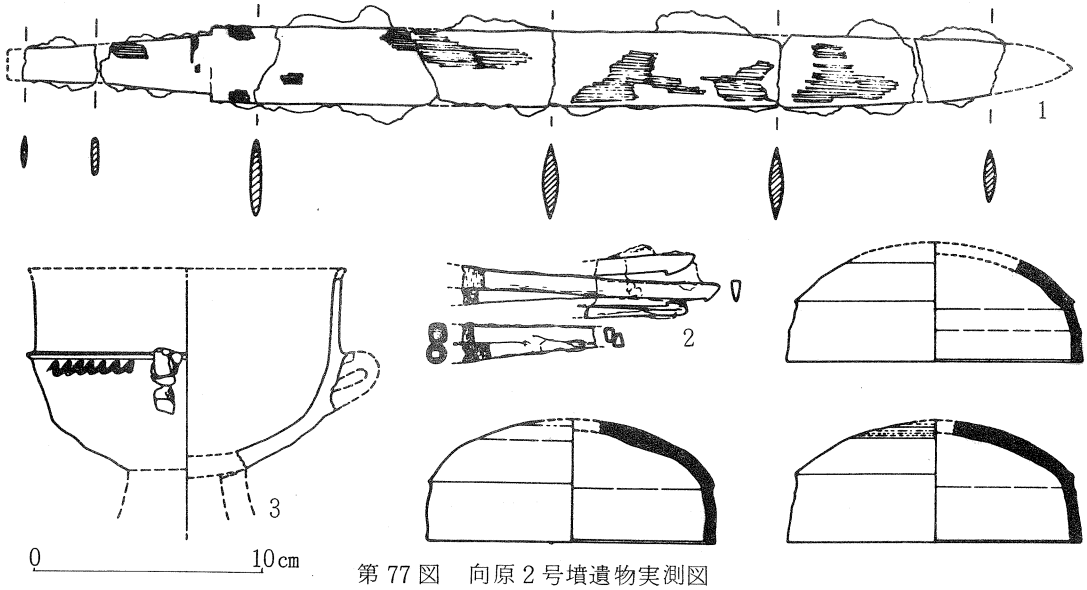
これら副葬品は、全て地山面にほぼ接しており掘り込みがないことから、木棺は墳丘基盤上にその底面を置いたことが知られる。

ウ、遺物

遺物は、前述の主体部に関係した鉄器の他は、北側墳裾と東の溝中からそれぞれ集中して出土した。

◦主体部関係

1は、鉄剣である。現存長39.7cm、刃長34.9cm、茎長4.8cm、刃部は基部で幅3.4cm、厚み5mm、鋒に近いところで幅1.6cm、厚み6mm、茎部は基部で幅3.1cm、厚み5mm、先端部で幅1.7cm、厚み3.5cmを計る。



第77図　向原2号墳遺物実測図

2は、鉄鏃で9本分が銹化してくっついている。観察がむつかしいが逆刺式の鏃で全長は12cmある。茎部には桜皮で固定した箆の一部が付着している。

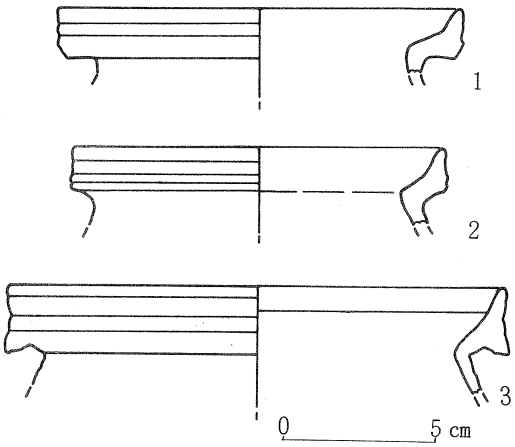
3は、東の周溝内出土の須恵器で把手付無蓋高坏の坏部の破片である。脚部と口縁端部、それに把手部分を欠失する。口縁径は、推定14cmほどで稜部径も14.0cm、脚部との接合部付近の径は、5.2cm、坏部の高さ推定8.85cmを計る。坏部の深いもので、稜線直下に5条以上の櫛描波状文を施し、さらに把手を付けるものである。陶邑編年でいうI型式の4段階のものに類似する。(3)

4～6は、東の周溝内から出土した須恵器蓋坏の蓋部3個体である。4は、口径12.7cm、器高5.5cm、鋭い稜線をもつ。端部は内径する段をもつ。5、6もほぼ同様のつくりである。5は、推定口径13.2cm、器高推定5.3cmを計る。6は、推定口径13.0cm、器高推定5.4cmを計る。

(3)　第3号墳

ア、墳丘の構造

測量したところ、東西長7m、南北長7m、高さ0.75cmの小規模の方墳であると思われたが、調査の結果、直径11m前後の範囲の地山を切削加工し、その内側に周溝と墳丘基盤を形成するものである。周溝は、60～65cmの底幅でぐるりと回り、南部において消失している。深さは、外上端から34cm、墳丘基盤の上端からは、50～55cmを計る。溝中には、一様に黒色土が堆積している。



第79図　向原3号墳遺物実測図

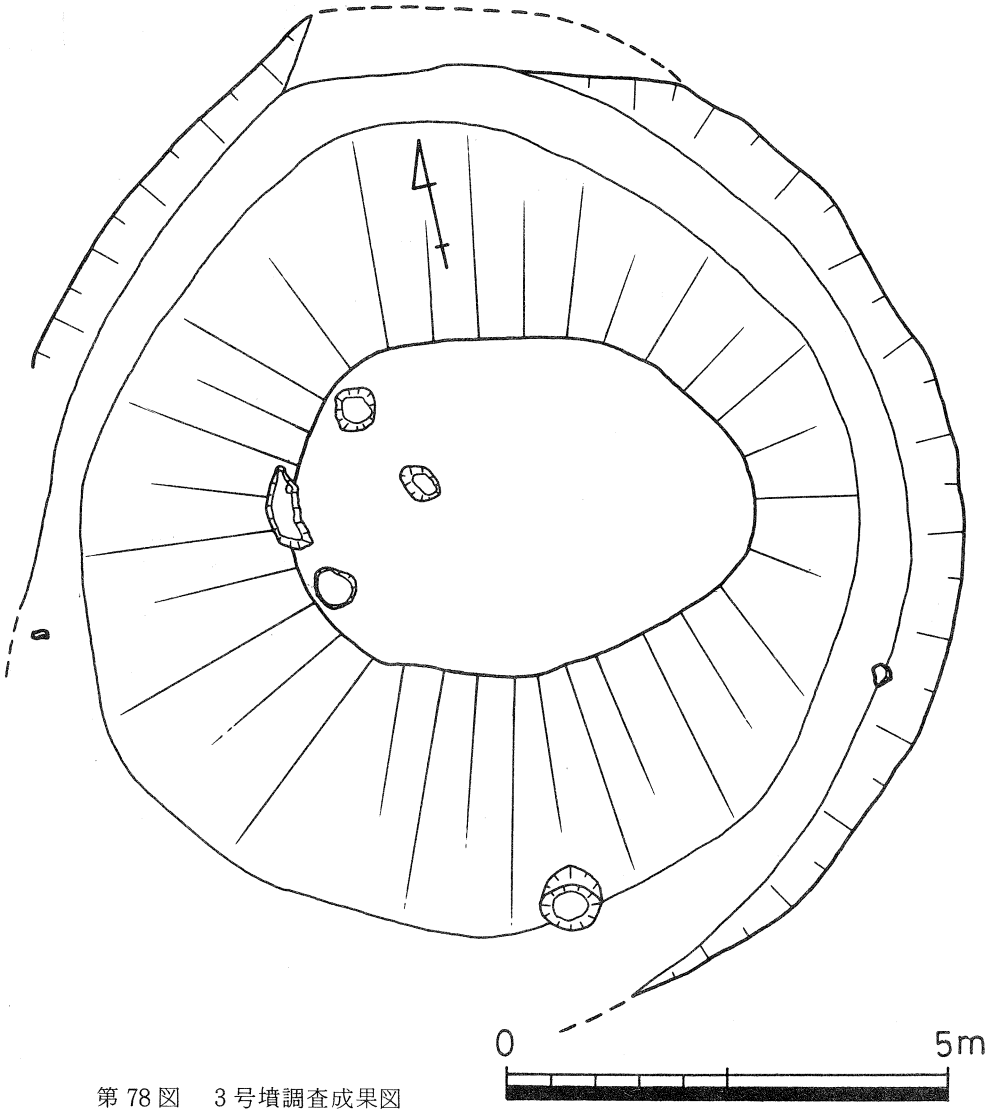
溝の内側には、墳丘基盤が形成されている。溝底からの高さは、前述したとおり50～55cmを計り、なだらかに上がる。上部の平坦面は東西長5.2 m、南北長3.8 mを計り楕円型を呈する。基盤上には、中心部で60cm余りの盛土を施す。全体としては、直径9 mの円墳で周溝を有するものといえる。

イ、遺構

主体部は、確認されなかった。墳丘基盤上及び墳裾の地山面には、5箇所のピットが確認された。墳丘築成以前のものであろうと思われる。

ウ、遺物

古墳に関係した遺物は全くなかった。1は、墳丘基盤上の旧表土層から出土した弥生後期の甕形土器の口縁部の破片で、口径13cm、外面に2条の凹線を施す。2は、周溝内の暗褐色土層から



第78図　3号墳調査成果図

出土したものでやはり弥生後期の甕形土器の口縁部の破片である。口径12cmを計り外面に3条の凹線を施す。3は、墳丘基盤上の旧表土上面から出土した弥生後期の甕形土器の口縁部の破片である。口径16cmを計り、外面に3条の凹線を施し、下端部は下外方へつき出る。

3. 小　　結

(1) 第1号古墳について

調査の結果、一辺6×6.5m、高さは溝底から80cmを計り、3方に周溝を穿つ方墳である。主体部は、基盤を掘り込んではいないので盛土中にあったものと考えられる。古墳に関係した遺物で年代観をよく表わすものは、1の坏身である。これは陶邑編年でいうⅠ型式5段階もしくはⅡ型式1段階のものに類似し[5]、山本編年でいう山陰Ⅰ型式[6]の範ちゅうに含まれるものであろう。

(2) 第2号古墳について

調査の結果、一辺8.85×8.0m、高さは溝底から82cmを計り、東部に溝を設けるものであろう。

主体部は、基盤中央部に底面を基盤に置いた形で盛土中に設けられ、鉄剣と鉄鏃を副葬するものである。

当古墳の築成年代を推定する手掛りは、周溝内出土の須恵器類である。その内、3は把手付無蓋高坏で深い坏部を有し陶邑編年でいうⅠ型式の第4段階のものに類似する。山本編年では、山陰Ⅰ型式に含まれるものである。

(3) 第3号古墳について

調査の結果、直径9mほどの円墳で周溝を有するものである。古墳に関連した遺物は皆無であったので、その築造年代を知ることは出来ないが、1号、2号墳が共に古式の須恵器を供献していることから本古墳も両墳とそう年代差のあるものではないだろう。

近隣の古墳では、長砂古墳群の5、15、16号墳、後友田古墳が円墳と考えられ、時期もやはり、山陰Ⅰ型式の須恵器を供献する頃と考えられている。

本古墳も、何らかの政治的契機によって方系墳の系譜の中に割り込んできた可能性が強い。

(4) 第4号古墳について

1号墳の北側に隣接して所在する4号墳は調査の結果、直径2.0mの円墳で周溝を有する。非常に小規模であるが、築成にあたっては3号墳と同様の契機が考えられよう。

(5) 1号墳周溝付近の古墓について

遺構の形状については、他に比較すべく類例がないので今後の検討に待ちたいが、浅い凹地に骨

片の他、古銭など副葬品を納めた例は、松江・馬込山古墓が挙げられる。しかしそれは火葬場即墓であるのでその点で差異がある。

出土古銭は、その初鋳年をみると中国北宋、南宋のもので日本の年号でいうと平安末頃である。しかし江戸初期に寛永通宝が出まわるまでは、こうした中国銭を一文銭として広く使用していたのでこれだけでは古墓の年代は決められない。

そこで、土器類に目を転じてみよう。かわらけが計4個体出土しているが、細かい編年が確立していない以上、年代観は得られない。最後に、4号土壙から出土した唐津焼の高台付小皿を検討してみたい。

白系統のうわ釉をかけた小皿は、江戸前期頃のものと考えてよい品である。したがって、これら8つの古墓については、大体江戸時代の前期頃を中心とした頃に営なまれたものといえよう。

（佐々木稔・岡崎雄二郎）

第３表　向原古墳群規模一覧

番号	平面形	墳丘規模		主体部				外部施設 周溝				主体部外の出土遺物	墳丘基盤の遺構と遺物
		一辺又は直径(m)	高さ(m)	長さ	幅	深さ	副葬品	東	西	南	北		
1	方	6.0×6.5	0.6	－	－	－	－	○	－	○	○	墳頂部西側斜面で須恵甕の破片、東側の周溝内より蓋坏の坏身１個体。	墳頂部東側で旧表土下に１.０×０.４ｍ、深さ0.14ｍの長方形土壙を検出。土壙内のピットは深さ31cmを計り、内、３種類の土器片を検出した。
2	方	8.8５×8.8	1.1	－	0.7前後	－	鉄剣 1 鉄鏃 9	○	○	－	○	東側の周溝内で須恵器蓋坏の蓋部を３個体、無蓋高坏の破片を検出。	
3	円	直径１１.0前後	1.4	－	－	－	－	○	○	－	○		墳丘基盤上に弥生土器片多数あり。
4	円	直径 2.0	0.6３	－	－	－	－	○	○	○	○	周溝内より土師器片、須恵器片若干	

第４表　向原１号墳関係の古墓一覧

古墓番号	形態	遺構の規模				遺物					
		縦	横	深さ	備考	鉄器	数珠玉	古銭	かわらけ	陶器	人骨
No. 1	不整長方形	0.5	0.2～0.25	地山面より 0.1～0.15	１号墳の周溝下端付近に土壙を伴わずに人骨と共にかわらけが供献されていた。				1		○
No. 2	楕円	0.9	0.55	地山面より 0.14～0.22	周溝内に土壙を伴わずに人骨と共に仏教儀式に用いられた鉦鼓、数珠が供献されていた。	不明鉄製品 2	15	元祐通宝（北宋）初鋳年　1086年 淳熙元宝（南宋）初鋳年　1174年	1		○
No. 3	不整長方形土壙	0.9	0.6	0.6	周溝内の土壙内部に２個体の土器を伴う。				2		
No. 4	不整長方形土壙	0.95	0.5	0.45	墓壙の上端付近に陶製の皿一個体と須恵器片一片を検出した。					1	
No. 5	不整長方形土壙	1.3	0.8	0.15							
No. 6	不整長方形	0.55	0.15～0.3	地山面より 0.07～0.1	周溝の対岸上端付近に人骨とかわらけ２個体を検出する。				2		○
No. 7	楕円	1.0～1.2		地山面より 0.15～0.21	周溝内に人骨と古銭をを検出する。			熙寧元宝（北宋）１枚 初鋳年　1068年 元豊通宝（北宋）２枚 初鋳年 紹聖元宝（北宋）１枚 初鋳年　1094年			○
No. 8	長方形			地山面より 0.04～0.38	周溝内に人骨とかわらけを検出する。				1		○
その他								３区 政和通宝（北宋）初鋳年　1111年	2区 1		

Ⅸ 友田遺跡

1. 位置と歴史的環境

当遺跡の所在地籍は、松江市浜乃木町字友田2791（旧土地所有者、神庭　晃）と松江市浜乃木町字友田2792－1（神庭富吉外1）である。

遺跡一帯には、南北に低丘陵が広がっているが、調査地は、西方へ100 mほど突き出た支丘の上部に立地する。西側水田地は、標高7.70 m、遺跡の標高は、19.00～22.00 mを計り、その比高は、11.30～14.30 mとなる。北側に隣接する支丘には、向原（むこうばら）古墳群がある。方墳2基、円墳1基から成り、古式須恵器を供献し直刀、鉄鏃を副葬する。近世、墳丘を利用して古墓が10か所形成されている。

一方、南側に隣接する南友田遺跡は、明治以後、丘陵上部が削平されているが、両側の斜面の暗褐色土層中から弥生前期の土器片、石庖丁の破片、石鏃が出土すると共に、須恵器の蓋杯類や大甕の破片も多量に出土している。

又、本遺跡の西方600 mの松江農林高校敷地内には、欠田（かけだ）遺跡が所在する。弥生前期から古墳時代前期までの土器類の他、石庖丁が1点出土している。

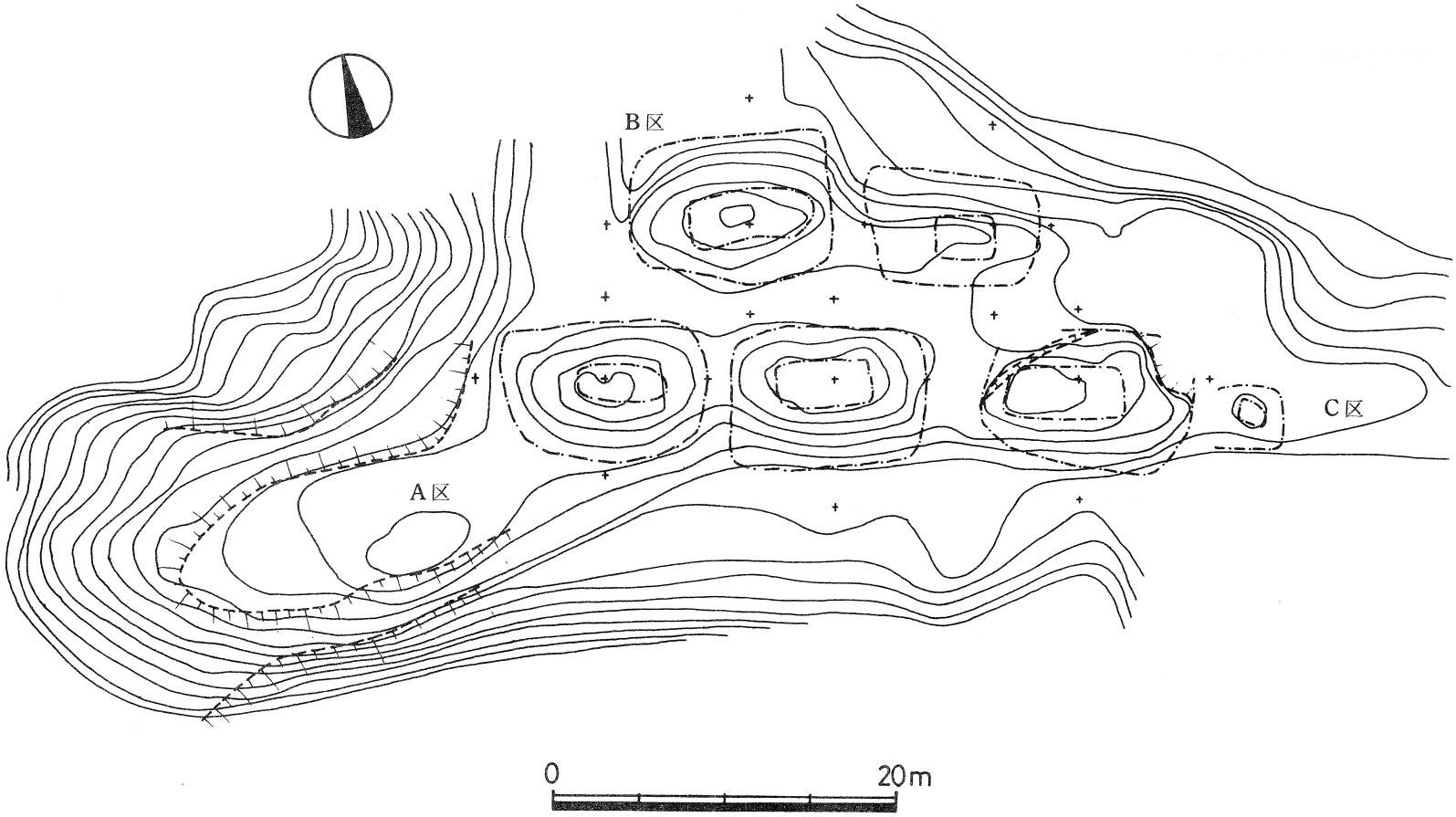
その他、前方後方墳や前方後円墳（推定）を含む田和（たわ）古墳群や、山陰Ⅰ期の古式須恵器を供献していた後友田（うしろともだ）古墳、東部には、黒曜石の石鏃を出土する下沢（しもざわ）遺跡、計16基の小規模の方墳と円墳から構成され、樽形瓹（たるがたはそう）、把手付椀、大小の瓹など古式の須恵器を供献する長砂（ながすな）古墳群、長さ36 mを計り、周濠を設け、昭和56年度の調査によって、6世紀前半期の築造になることが判明した乃木二子塚古墳などがある。

長砂古墳群→乃木二子塚→二子塚古墳の順に時期的に連続して形成された一つの大きなグループを構成する。

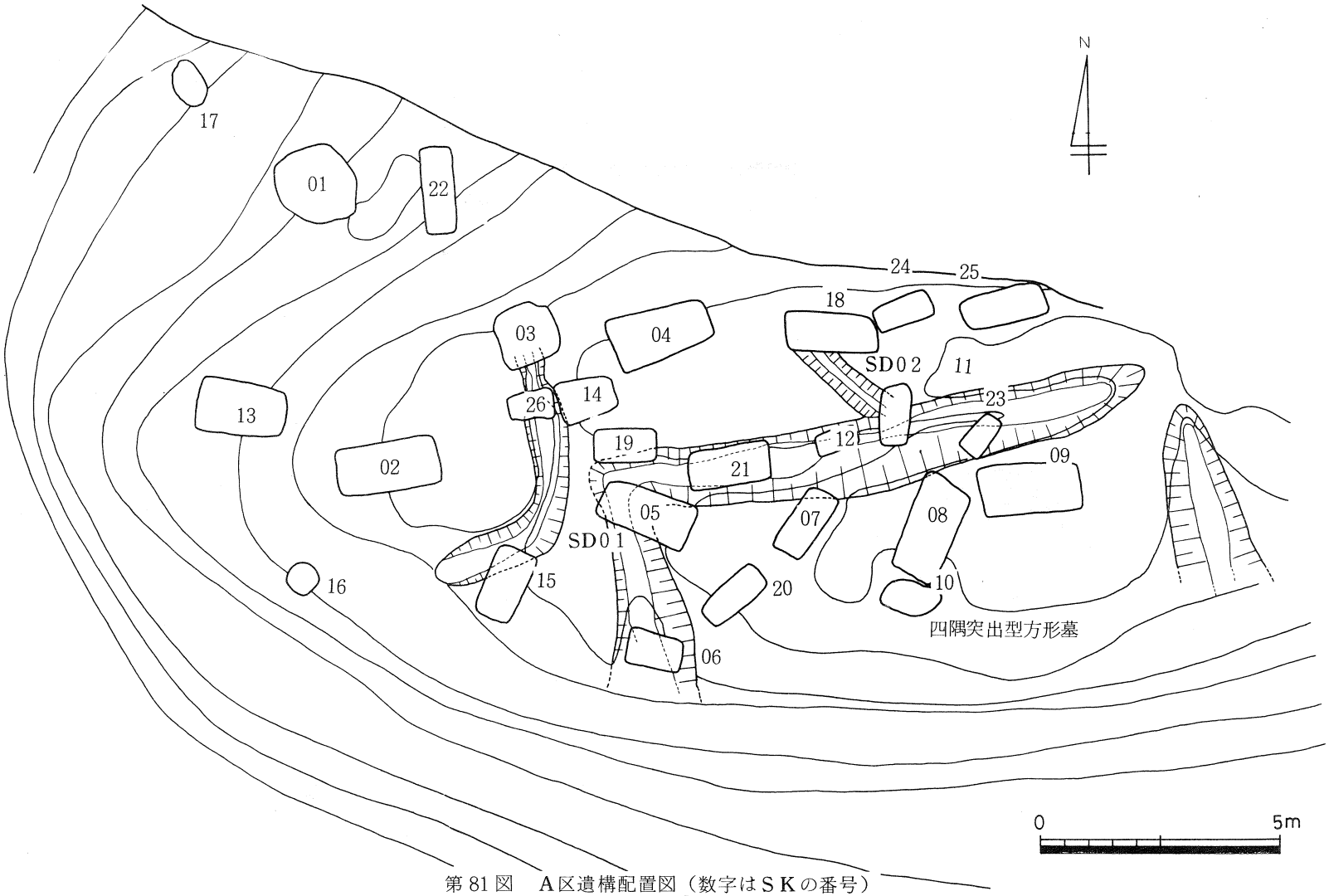
第5表　友田遺跡群A区土壙一覧表

SK	掘り方上端		床面の内法		深さ	特徴	副葬品				その他
番号	長辺	短辺	長辺	短辺			土器	勾玉	管玉	石鏃	
1	1.71	1.35	1.56	1.18	0.34	配石			－		石鏃　2
2	2.21	1.27	1.60	0.64	0.53	配石 くり込み			－	黒曜石1	
3	1.27	1.29	0.93	0.59	0.49	上面 敷石			－		
4	2.01	1.34	1.22	0.44	0.45	上面 敷石			硬質　1		
5	2.05	0.95	1.70	0.7	0.50	配石			13		壷底部 3片
6	1.25	0.80	0.86	0.40	0.40	標石 配石			3		弥生後期 甕1
7	1.60	0.83	1.26	0.64	0.51	標石 配石			13～		赤色顔料 若干

SK	掘り方上端		床面の内法		深さ	特徴	副葬品				その他
番号	長辺	短辺	長辺	短辺			土器	勾玉	管玉	石鏃	
8	2.27	1.25 ～ 0.9	1.80	0.83	0.78	標石詰石 配石		11	200 ～	黒曜石 2 サヌカイト5	
9	2.25	1.16	1.67	0.72	0.46	配石 標石			－		
10	1.42	0.86	0.92	0.40	0.40	配石			－	サヌカイト 破片 1	
11	1.56	0.77	1.24	0.64	0.56				－		
12	0.95	0.55	0.73	0.37	0.50				－		
13	2.15	0.99	1.76	0.70	0.60	標石 配石		1	13	サヌカイト 破片 1	
14	1.29	0.81	1.07	0.41	0.78	配石 くり込み			(軟) 115		
15	1.58	0.81	1.20	0.44	0.54	配石					赤色顔料 若干
16	0.64	0.52	0.41	0.26	0.16	円形					
17	0.99	0.73	1.06	0.87	0.41	標石 楕円形	弥生中期 前半の壷1				
18	2.0	0.92	1.4	0.58	0.54					黒曜石 5 サヌカイト 9	
19	1.4	0.75	1.125	0.56	0.69	配石			25		
20	1.59	0.65	1.23	0.36	0.39	標石			38		
21	1.81	0.88	1.59	0.78	0.61	配石詰石 くり込み			44		
22	1.97	0.78	1.63	0.58	0.40	標石 くり込み				黒曜石 18 サヌカイト16	
23	1.07	0.50	0.76	0.25	0.25	くり込み					
24	1.25	0.65	0.95	0.46 ～0.37	0.35	くり込み			61		
25	1.89	0.75	1.45	0.46 ～0.61	0.43	くり込み					
26	0.955	0.52	0.80	0.335	0.46	配石 くり込み					
計								12	526 ～	黒曜石 25 サヌカイト32	



第 80 図　友田遺跡測量図



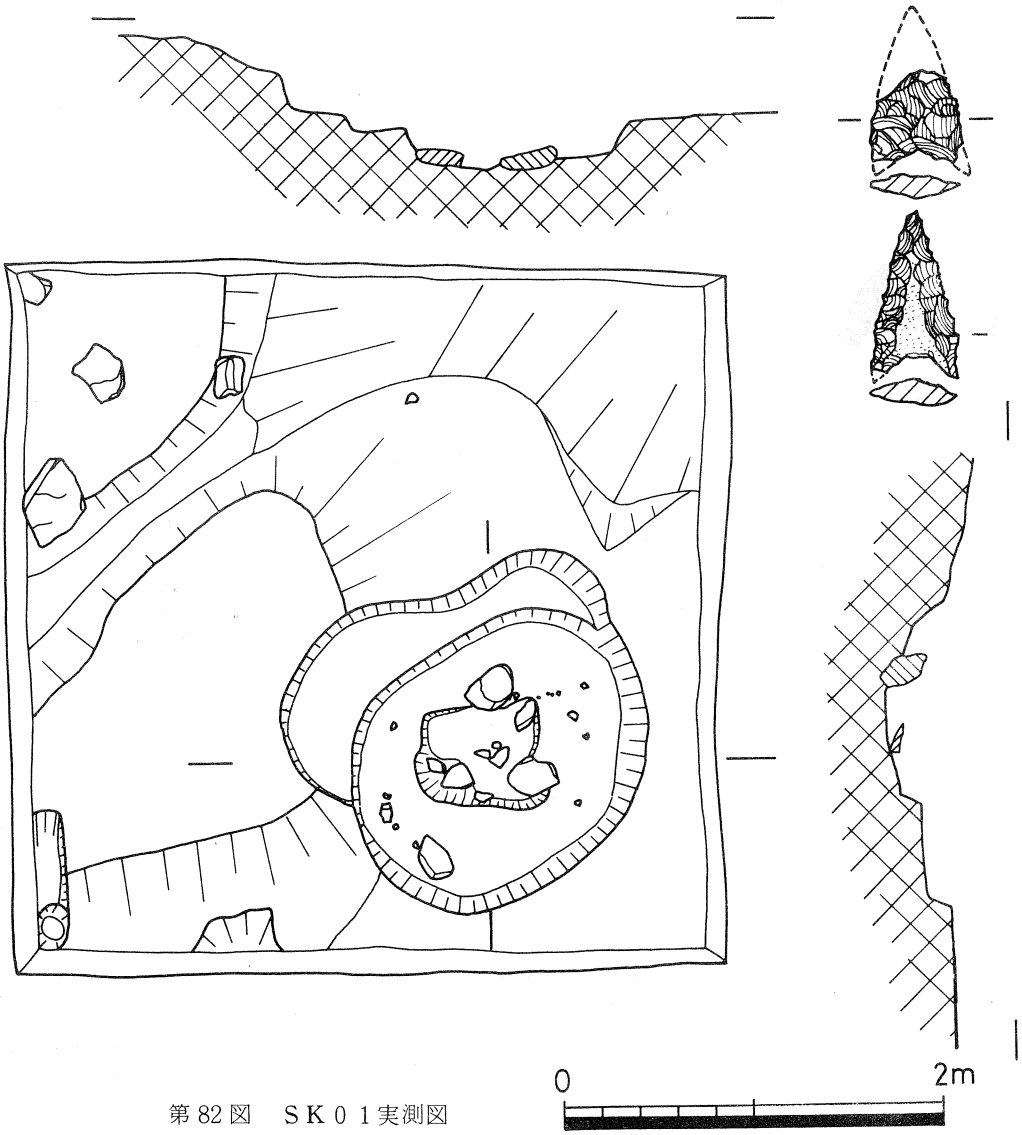
第81図　A区遺構配置図（数字はＳＫの番号）

2. 調 査 の 概 要

(1) A区土壙墓群

SK－01

【遺構】 さしわたし1.35 m×1.71 m、深さ0.34 mの楕円形の土壙である。西南部に幅0.4 m、長さ1.85 m、深さ0.2 mの浅い平坦な段を附ける。この土壙は、2段の落ち込みを有し、2段目の落込みは、中心部で東西0.5 m、南北0.6 m、深さ0.2 m近くの略方形を呈する。この2段目の落ち込みの内外には、さしわたし10～20 cm程度の角ばった転石が10個余り認められる。転石は殆んど土壙底面近くに置いてあった。



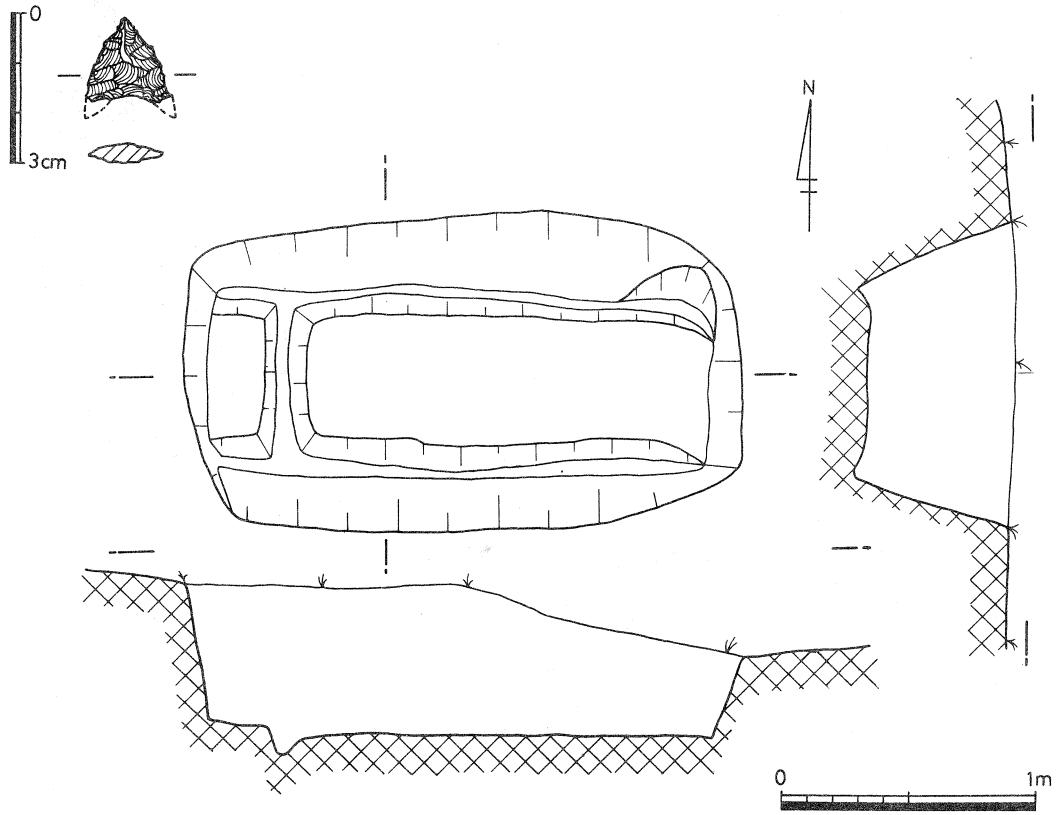
第82図　SK01実測図

【遺物】　土壙内部底面からは、遺物は全く検出されなかった。土壙上部及び周囲の埋土からは、弥生土器片、及び黒曜石製の石鏃が２点発見された。黒曜石製の石鏃の内、１は長さ2.2㎝、基部の幅1.15㎝、厚み３㎜を計る。２は、先端部と両逆刺部分を欠失する。基部の幅1.2㎝、厚み３㎜を計る。出土レベルが上位なので、副葬品とは考え難い。（図82）

ＳＫ－０２

【遺構】　堀り方上面の長さ2.21ｍ、横幅最大1.27ｍ深さ、西壁で53.5㎝、東壁で33㎝を計る。堀り方の上部には、側壁に沿って、転石が配置されていた。この転石は一部３段積みとなっているが、底面までは至っていない。底面には、東西の壁直下に２条の溝と、東寄りにその２本の溝と直交する形で１条の溝がつくられている。これらの溝は上端幅８～16㎝、下端幅４～５㎝、深さ５～７㎝の細いものである。棺の側板をはめ込み固定したのであろう。直交する溝は西側では認められなかった。

【遺物】　土壙内からは、石鏃が１点発見された。東壁から40㎝西側までの範囲で正確な出土地点は不明である。深さは、床面直上。黒曜石製で逆刺の両端を欠失する。現存長1.5㎝、幅1.7㎝、厚み3.5㎜を計る。遺骸に伴うものであろう。（図83）



第83図　ＳＫ０２実測図

ＳＫ－０３

【遺構】 掘り方は上面の長さ1.27ｍ、幅1.29ｍの不整５角形を呈す。深さは中央部で49㎝、底面の平面規模は、93㎝×59㎝の長方形を呈し、掘り方の南部にかたよってつくられている。堀り方の四壁に沿って転石が配列されている。転石はほぼ底面まで２～３段に積まれている。一種の石郭である。配石によって画された底面の平面形はおよそ80㎝×40㎝ほどになり、この大きさでは成人の伸展葬とは考え難いので、足を折り曲げたか、洗骨したものか、又は、幼児の遺骸を埋めたのか、いずれにしてもこうした一種の石郭状の埋葬施設は、出雲地方はもとより山陰地方では例を見ないものである。掘り方の上面には、厚さ３㎝～５㎝の均一な厚みをもつ扁平な板石を二重に敷き並べ覆っている。その範囲は土壙の上面だけでなく、その周囲にもおよび、さしわたし１ｍ×1.35ｍを計る。

【遺物】 石郭内からの副葬品遺物は全く認められなかった。

ＳＫ－０４

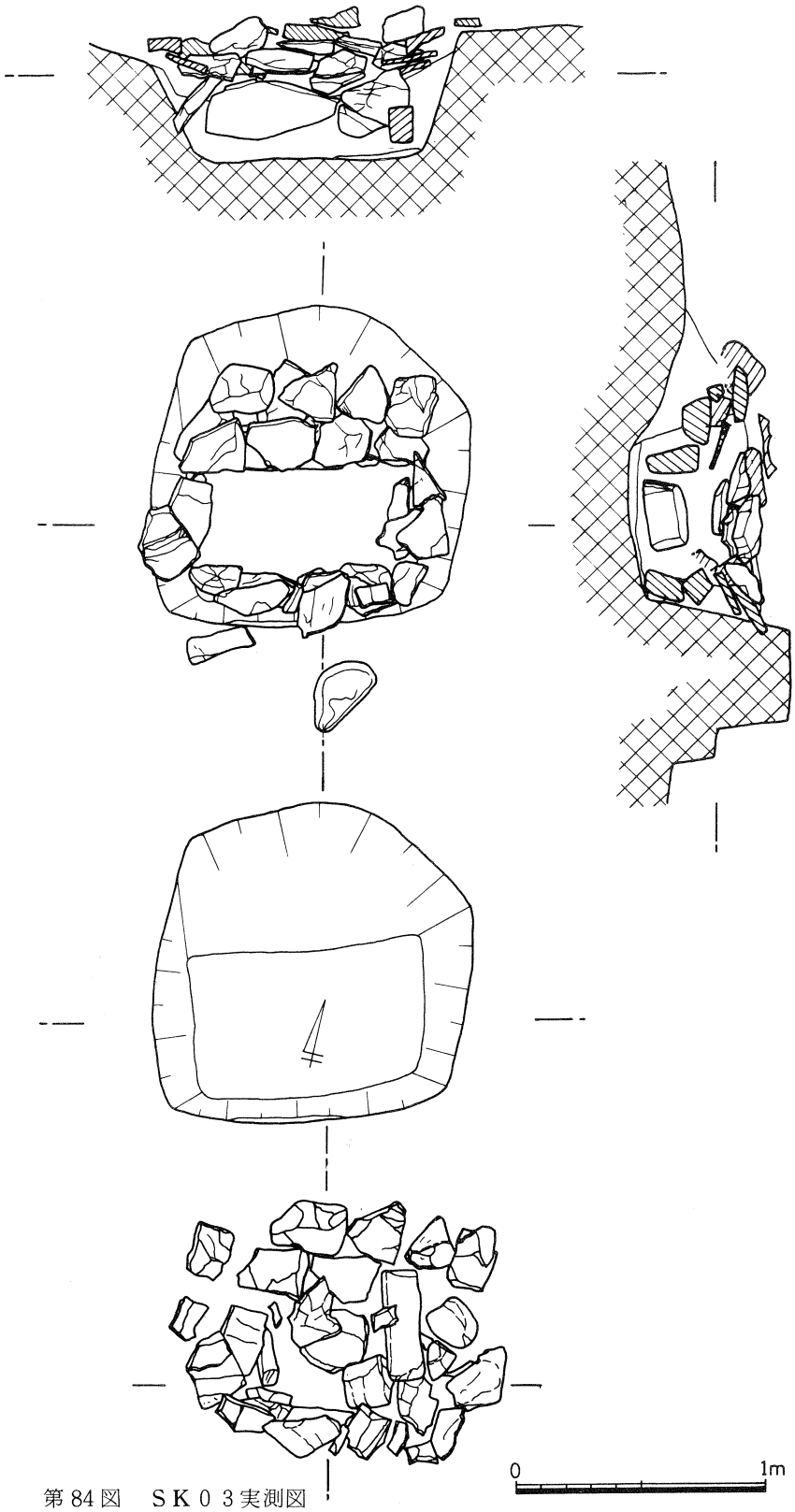
【遺構】 掘り方上端の平面形は長さ2.01ｍ、幅1.34ｍを計る。掘り方下端の平面形は、長さ1.22ｍ、幅0.44ｍ、深さ45㎝を計り、棺の側板をはめ込んで固定したと思われる溝が各２条ずつ穿たれている。長辺に沿った溝は長さ1.8ｍ、短辺の側は、40㎝余りを計る。深さは５㎝前後である。これらの溝は、掘り方の南壁にくつけて設けてあるため北壁に沿った部分については、棺外となる。次に、この溝の外周に沿って転石が配列されている。転石は２～３段積みで、最大40×25㎝程度の比較的大きな石を使用している。一種の石郭である。土壙上部には、厚み５㎝前後の扁平な石を３重～４重に重ねて敷き並べている。その範囲は、2.9ｍ×1.55ｍの広範囲にわたるもので、土壙の直上部を中心に周囲から落ち込んだ状態がよく分る。その落差は約60㎝を計る。このことは、内部に空間のあったことを示しており、それはとりもなおさず木棺に他ならない。とすると木棺にもしっかりとした木の蓋板があって、それが埋葬後一定の時期を経た後、腐朽し陥没した結果、土壙上部のこうした敷石も中心部に向けて落ち込んだのであろう。これらの石は墓の位置を示す標石代わりになるものである。

【遺物】 棺内の西側中央寄りに管玉１個が発見された。底面の地山面にほぼ密着していた。この管玉は副葬品と考えて差し支えないものである。

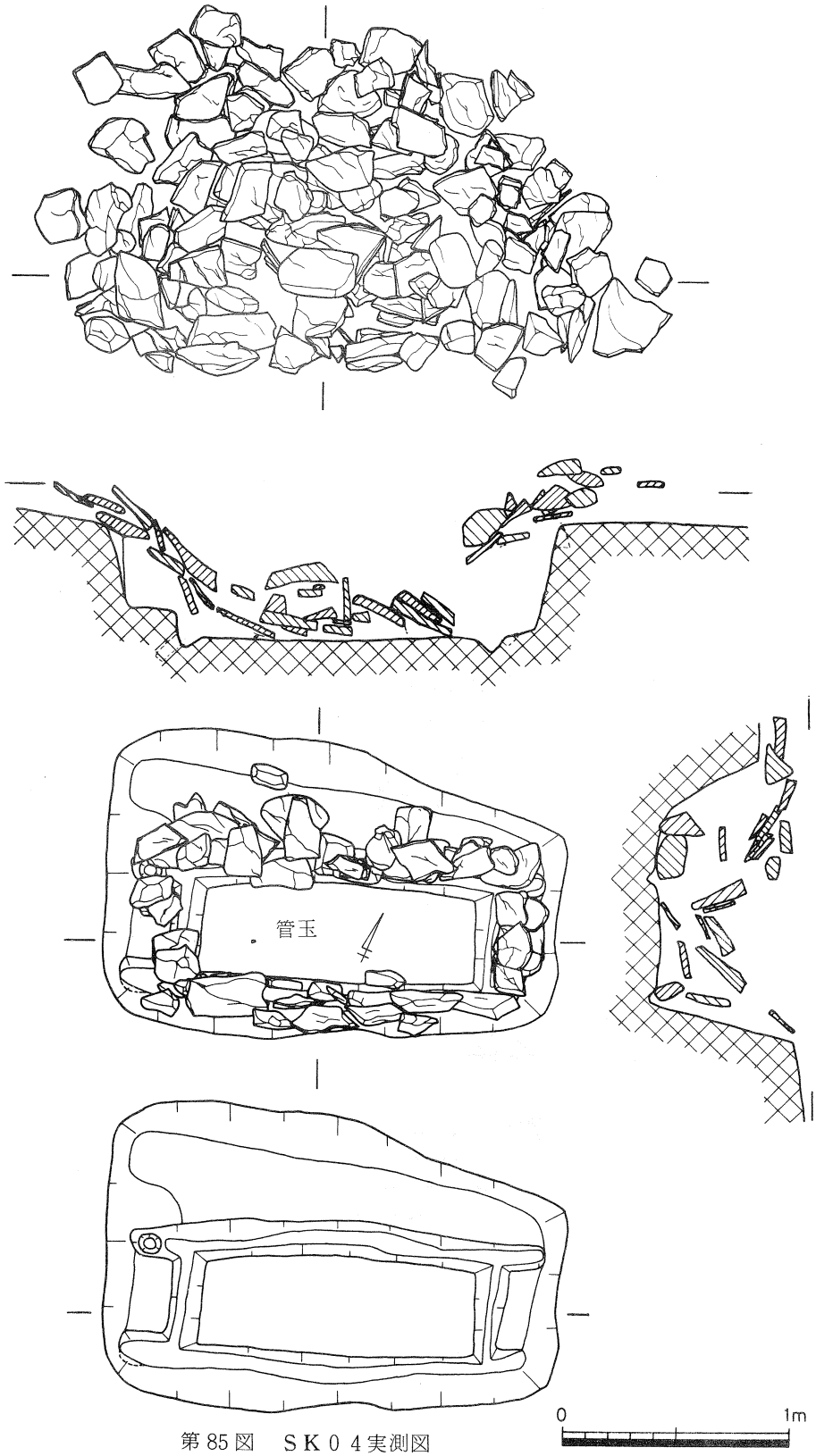
ＳＫ－０５

【遺構】 掘り方の上端の長さ2.05ｍ、幅0.95ｍ、深さ50㎝を計る。掘り方の下端は、1.7ｍ×0.7ｍを計る。この底面には、やはり側板固定用の溝が穿れている。しかし、調査の過程で、底面をやや削り過ぎたきらいがあるので遺存しているのは、長辺の溝の西端の部分と、東側の短辺に沿った溝及び南側の長辺に沿った溝の東端部だけである。これらの溝の配置から考えると、木棺の大きさは、長さ1.45ｍ×0.4ｍしかない。

土壙の四壁内側に沿って上部のみほぼ一列に転石が配列されている。これらの配石は一段しかなく土壙の底面まで到っていない。この土壙墓の東半部は、後述するところの貼石方形墓の西北隅部と重復している。すなわち、東側の配石の上部に、厚み５～10㎝の黒色土が認められ、さらにその上部に貼石方形墓の貼石が配列されているのである。このことからＳＫ－０５が古く、その上にＳＫ－０５を



第84図　ＳＫ０３実測図

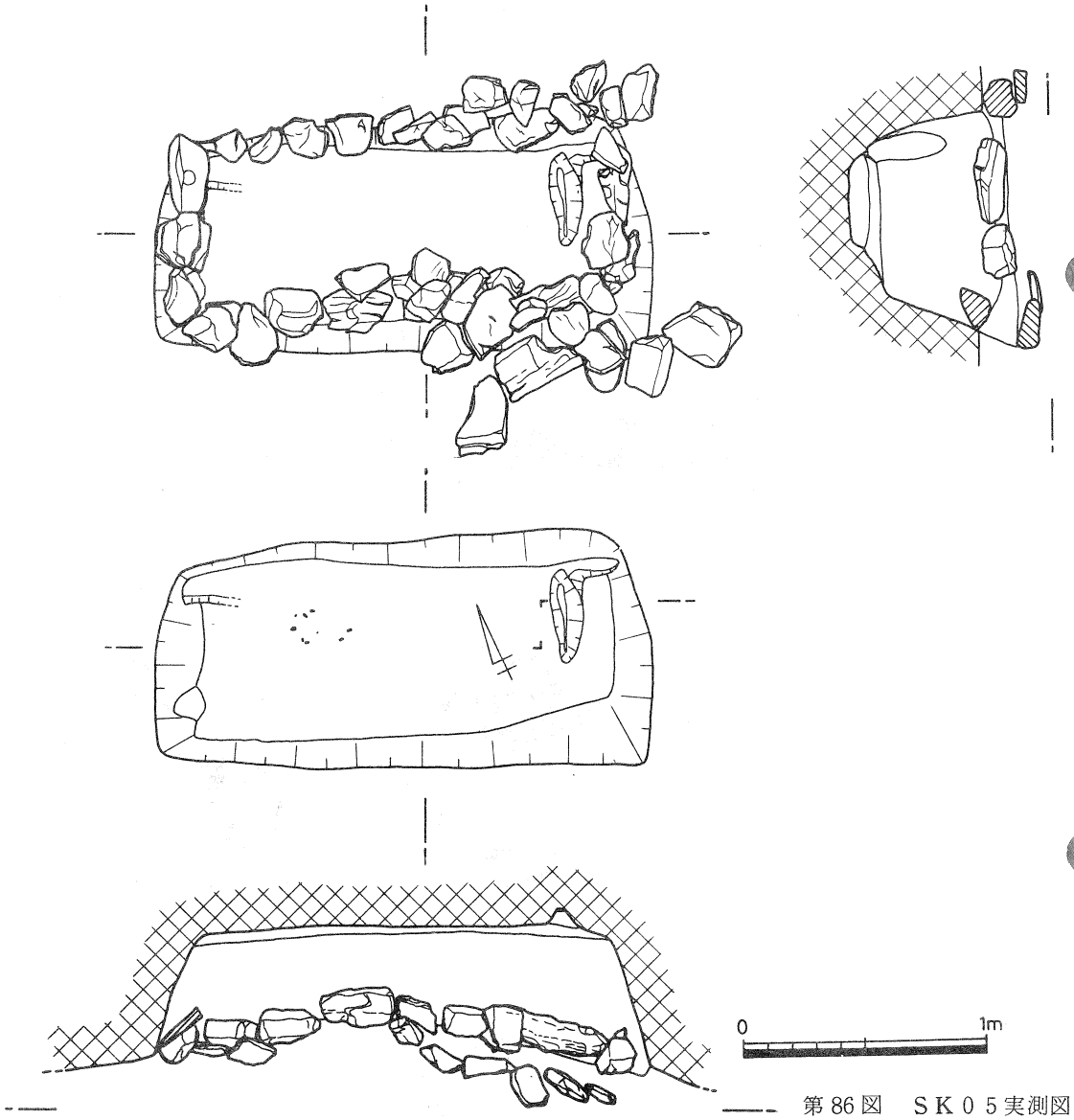


第85図　ＳＫ０４実測図

無視した形で貼石方形墓が重複して造られていることが分かる。

【遺物】　棺内底面付近から管玉が計13個発見された。いずれも西側中央寄りに集中して出土したことが注意される。（図86 ）

又、土壙墓周辺の表土直下からは、底部の破片が出土している。底径9.2㎝、底部の厚み1.15㎝、体部の厚み7㎜を計る。胎土は砂粒少なく硬く、黄褐色を呈する。（110図3）

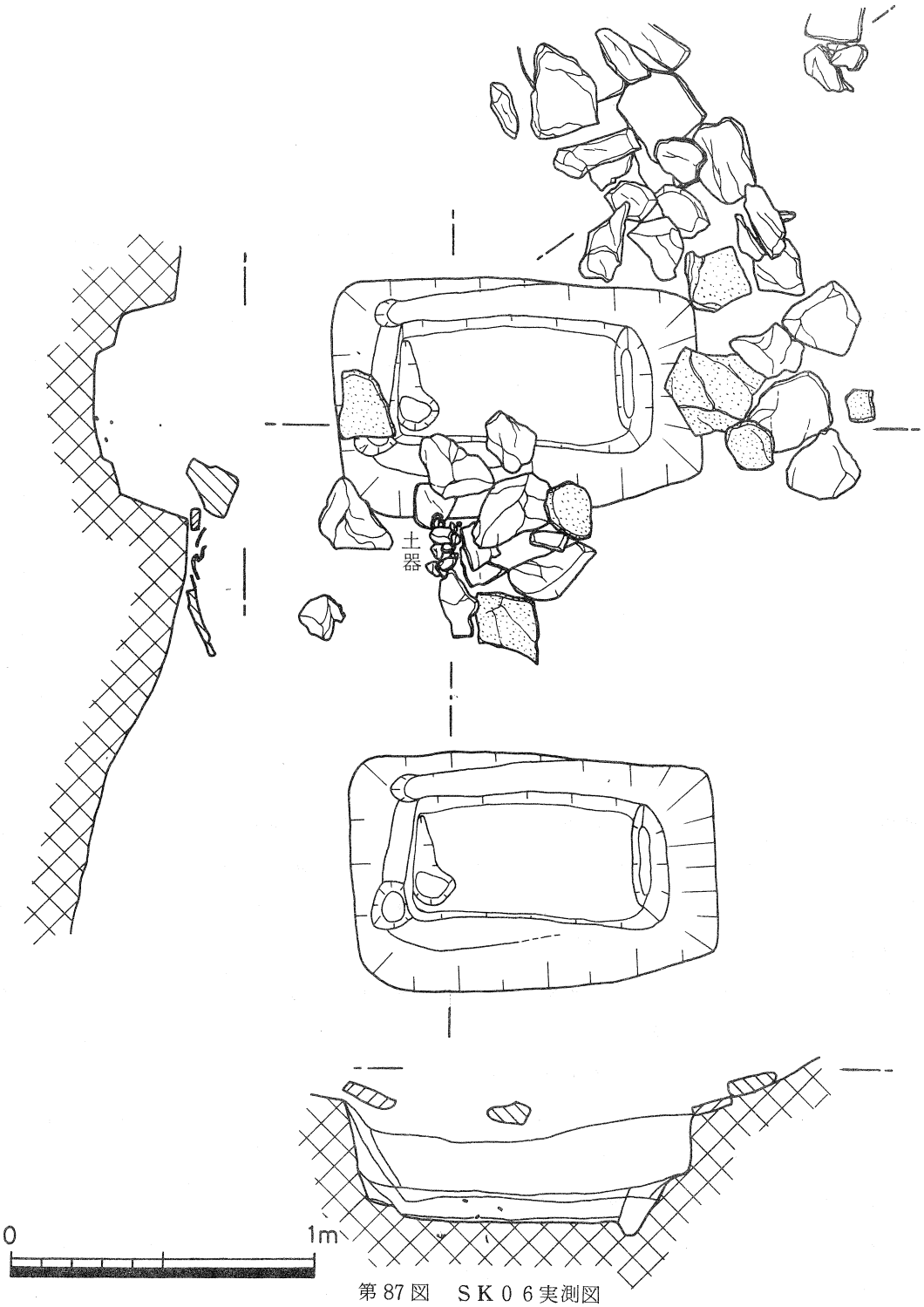


第86図　ＳＫ０５実測図

ＳＫ－０６

【遺構】　掘り方は、長方形を呈し、上面の長さ1.25ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.4ｍを計る。二段の掘り込みを有し、二段目の掘り方は、長さ0.86ｍ、幅0.4ｍ、深さ7㎝を計る。この掘り方の東西両側の壁に沿って4㎝前後の浅い溝が認められた。これは棺の側板の固定用の溝であろうと思われる。長辺の側には、溝は見あたらなかった。掘り方の東壁は、ＳＫ－０５と同様貼石方形墓の東側貼石列がの

っている。又、土壙の中央部から西側にかけては貼石方形墓の周溝が穿たれている。土壙内に石を配した形跡は見当らないが、土壙の南壁を中心にして、さしわたし80㎝×60㎝の範囲に転石を集め、その西端に弥生土器を1個体置いた集石遺構が発見された。



第87図　ＳＫ０６実測図

【遺物】　土壙内からは、底面近くで管玉が３個出土した。副葬品と思われる。（図 87 ）又、土壙南側の集石遺構の西端に置いてあった弥生土器は底部を下にしているから本来は正常な状態で供献されていたものであろうが、果してＳＫ－０６のものであるのか、それとも貼石方形墓に関連のあるものなのかどうか、他に類例がないので不明である。

この土器は、体部の大半を欠くが、口径 16 ㎝、底径 4.8 ㎝、推定器高 28 ㎝を計る。口縁は、二重口縁で拡長部は高さ 2.3 ㎝を計り、３条の凹線文を施し、下端部は下外方へ２㎜突き出ている。

頚部はくの字形に鋭く屈折し、体部へ急角度で続いていく。このため体部最大径は、通常よりやや下方に推定される。体部外面は、タテ方向の刷毛目調整を施し、口縁部から頚部にかけては、一部にススが附着する。底部の厚みは、中央部で４㎜を計る。内面の調整は不明である。（図110-1）

ＳＫ－０７

【遺構】　掘り方上面における長さは、1.6 ｍ、幅 83 ㎝、深さ 51 ㎝を計る。掘り方下端は、長さ 1.26 ｍ、幅 64 ㎝を計る。土壙西側の短辺の下端から 10 ㎝ほど中央へ寄った位置で、棺固定用の溝が穿たれていた。溝は長さ 47 ㎝、幅 10 ㎝、深さ４～９㎝を計る。この溝によって画された内側の長さは 83 ㎝となる。

土壙の四壁内側には、一段の転石が配列されている。特に西壁中央部には長さ 71 ㎝、幅 17 ㎝、厚み 12 ㎝もの長大な石が使用してあり注意される。土壙の北側は、貼石方形墓の貼石斜面にあたるため、一部削平されている。その貼石は土壙の南部をわずかに残し、その殆んど上部を覆い配石との間には暗褐色土が埋められている。

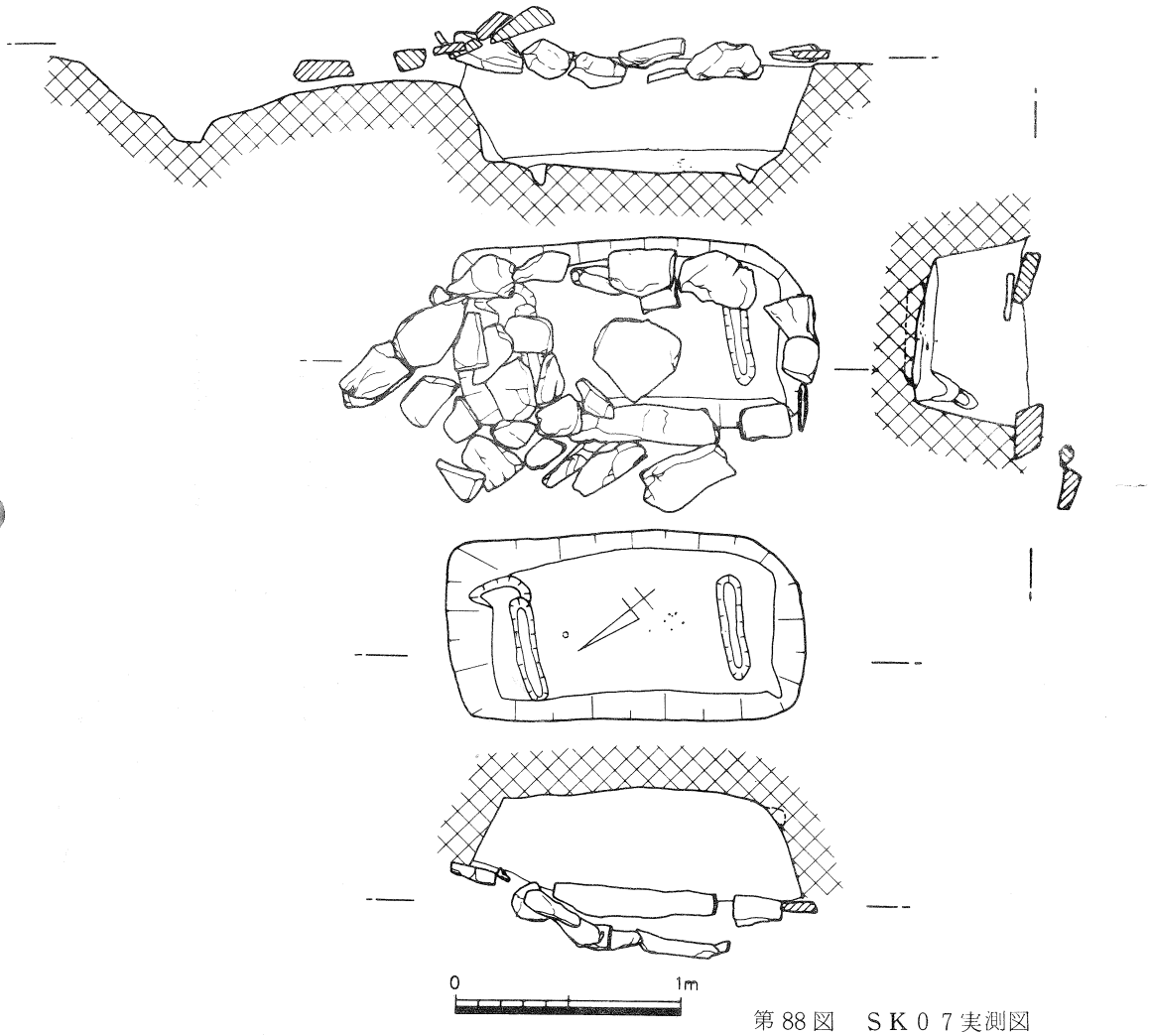
【遺物】　土壙内からは管玉が 13 点出土した。いずれも南側中央部よりの底面近くにあった。赤色顔料は北側中央部よりにあり、２㎝四方位の範囲に集中していた。底面から４～５㎝上方の堆積土中である。

ＳＫ－０８

【遺構】　掘り方上端の長さ 2.27 ｍ、幅は南壁で 90 ㎝、北壁で 1.25 ｍを計る。下端で長さ 1.8 ｍ、幅 83 ㎝を計る。土壙の北西寄りが一段と低い底面となり、長さ 1.46 ｍ、幅 0.7 ｍ、深さ４㎝を計る。北壁には、深さ６㎝の溝がまわっている。側板固定用の溝であろう。同様の溝は、南壁沿いにもあり、長さ 50 ㎝、幅 14 ㎝、深さ９㎝を計る。

土壙の四周壁内側には、やはり転石が配列されているが、他の土壙と違い、その殆んどが二重の構造となっており、石の数量も多く、特に短壁側に石が多く使用されていることから入念な構造となっていることが注意される。これらの配石は、土壙底面までは到達していない。しかしながら北側の短壁の南側には底面近く５個の石が確認された。これは棺の固定用に詰石として棺と土壙の壁の間に置いたものと思われる。

【遺物】　土壙内からは、員数可能な管玉 200 点、その他破片を加えると 400 点以上になるのであろうと思われる。おびただしい数の管玉が発見された。それに混じって勾玉 11 点、石鏃７点が出土した。これらは土壙の南半部に集中していたが、管玉の一部は北半部からも発見された。いずれも出土した



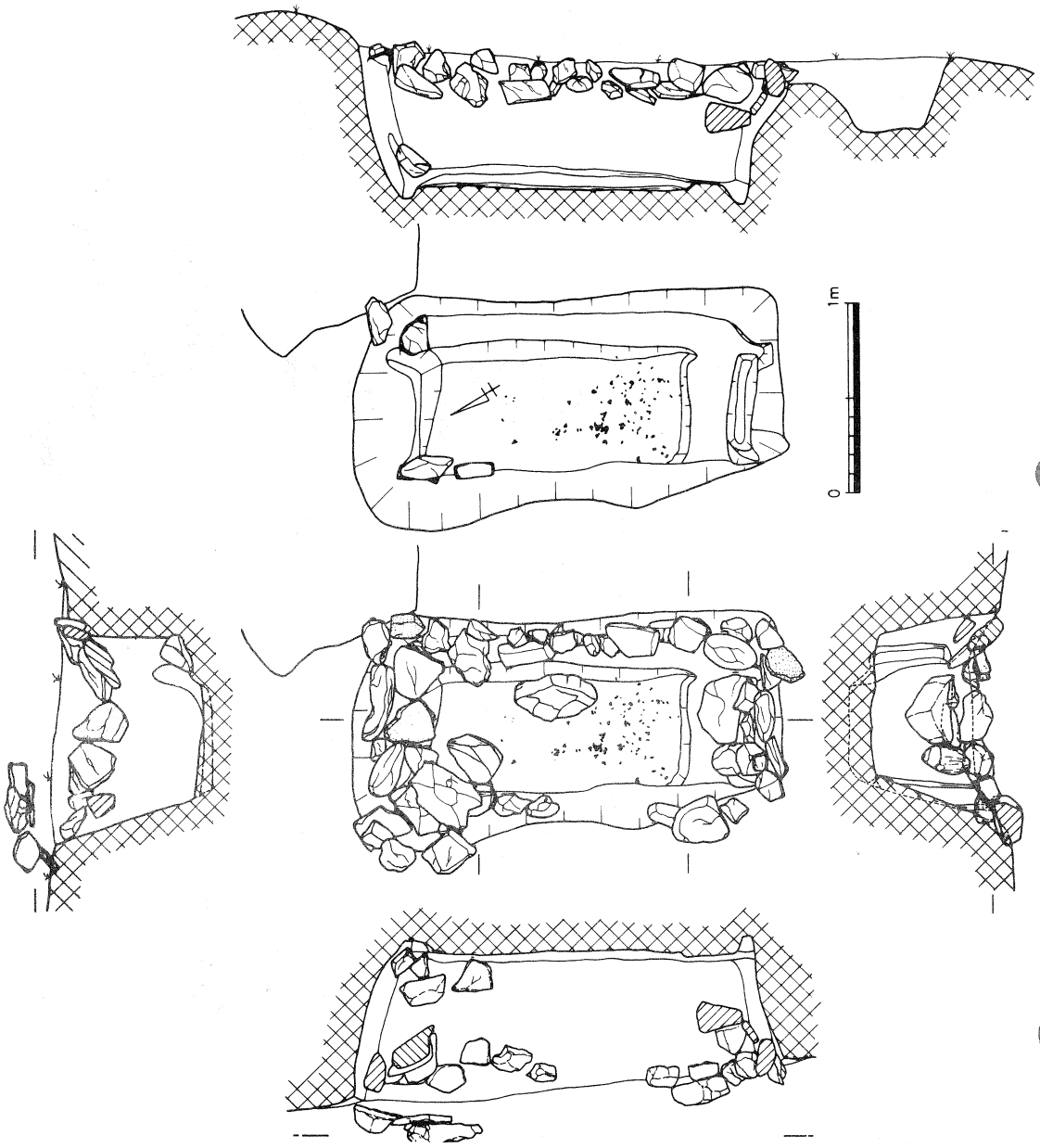
第88図　ＳＫ０７実測図

深さは、底面の上４～７㎝から底面までに限定されており、副葬品と考えて差し支えない。これらの玉の出土状態は、その穴の方向が一定せずばらばらであるが、出土範囲がほぼ限定されており、ひもに通した状態で、あるいは、遺骸についた状態でおさめられたのではないかと考えられる。

管玉は、最大のもので長さ1.25㎝、径3.5㎜、円孔の直径２㎜弱を計る。最小のものでは、長さ7.4㎜、径３㎜、円孔の直径1.5㎜を計る。いずれも黄褐色で、白色系のしまを混えるものもあり、緑色凝灰岩質である。

勾玉は、長さ１㎝前後、厚み２～３㎜を計り、丸味のあまりない三日月型を呈する。内、１個は、明るい緑色と白色のシマ目を呈し、ひすい系の石かも知れない。それ以外のものは、少しくすんだ草色を呈し、ろう石の如くやや軟質のものである。ひも通し穴は、両面穿孔のものが大半である。

又、石鏃にしても弓矢として遺骸のかたわらに副葬されたのであれば、一定の方向を向いて集中して出土してもおかしくないのだが、これもその方向はばらばらである。又、先端部のみ遺存しているものもあるが、このことから遺骸に射込まれた状態であった可能性も十分考えられる。



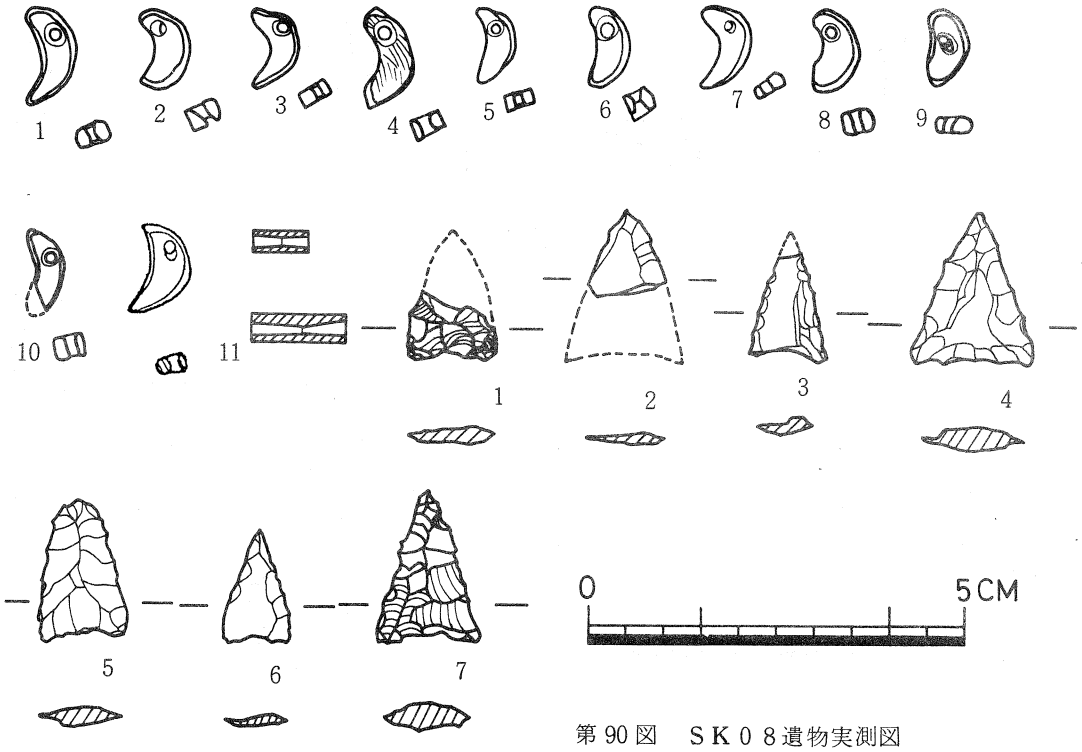
第89図　ＳＫ０８実測図

第６表　石鏃法量一覧表

法量＼番号	1	2	3	4	5	6	7
長　さ(cm)	－	－	－	2.0	1.9	1.5	2.0
基部幅(cm)	1.2	－	1.1	1.6	1.15	0.9	1.4
厚　み(mm)	2	1.5	2.0	3.0	2.5	1.5	3.5
石　　質	黒　曜　石	サヌカイト質	サヌカイト質	サヌカイト質	サヌカイト質	サヌカイト質	黒　曜　石

第７表　勾玉法量一覧表

法量＼番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
長　さ（cm）	1.3	1.1	1.08	1.35	1.0	1.1	1.1	1.1	1.05	推定（1.1）	1.2
最大幅（mm）	4.5	4.5	4.0	4.5	4.0	4.5	4.0	4.8	5.0	3.7	5.0
厚　み（内）（mm）	2	3	2.0	2.8	2.1	3.5	2.0	2.5	2.0	3.0	2.2
厚　み（外）（mm）	3	3	2.5	2.3	2.0	3.0	2.5	3.0	2.0	3.0	2.5
孔　径（mm）	1.5	2	1.2	2.2	1.0	2.5	1.5	2.0	1.5	1.5	1.3
穿　孔	両面	両面	片面	?	?	両面	片面	両面	両面	?	両面



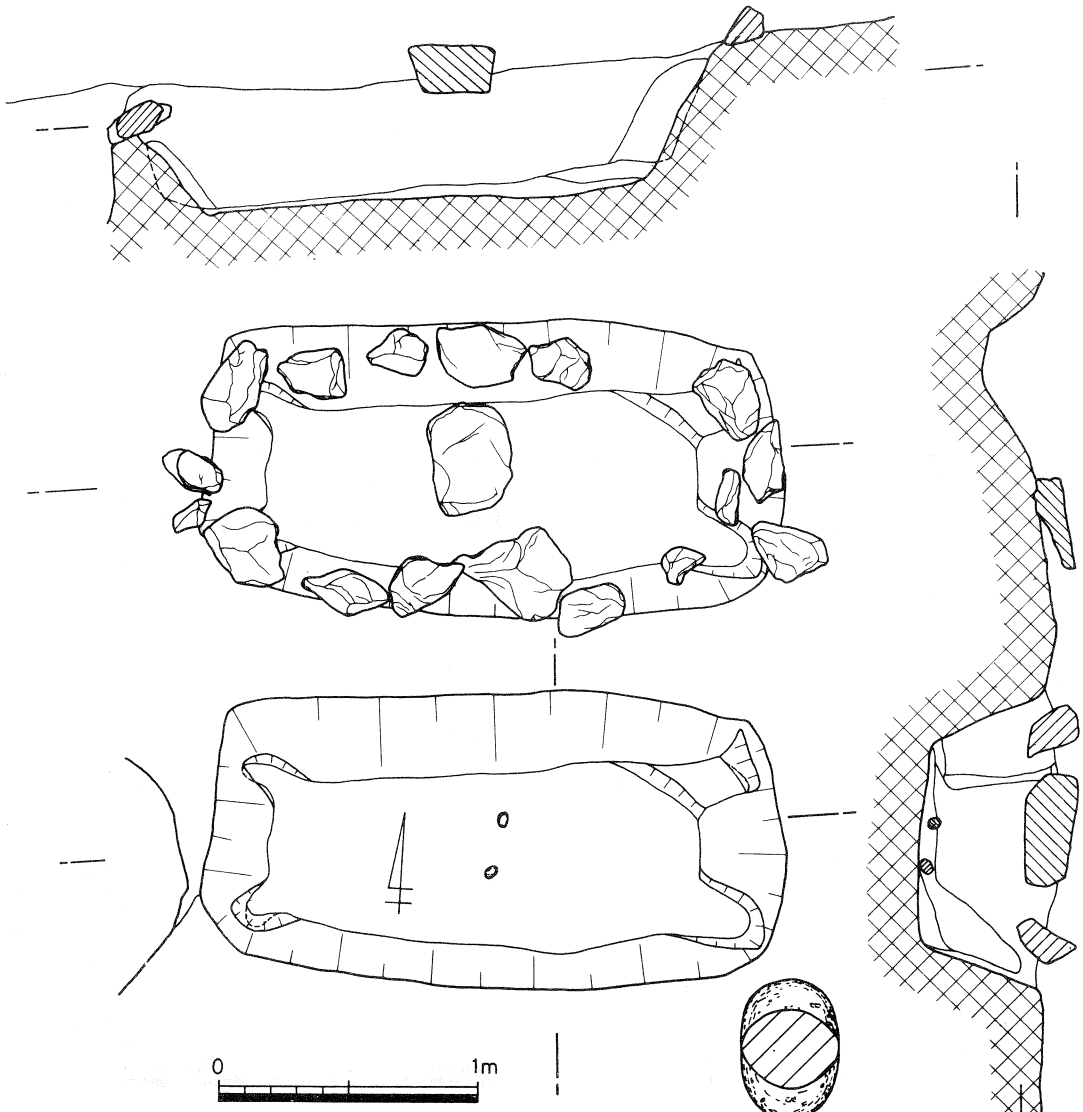
第90図　ＳＫ０８遺物実測図

ＳＫ－０９

【遺構】　掘り方の上面の長さ2.25ｍ、最大幅1.16ｍ、深さ46㎝を計る。東西両壁の短壁の左右にそれぞれやや角度を外方へ向けたくり込みが認められる。

土壙四壁内側には石が配列されているが、東側の両角部分には見当らないし、石と石の間もやや間隔がある。石は一段で底面までには到らない。土壙中央部の上面には、44㎝×32㎝、厚み19㎝のかなり大きい転石が１個配されており一種の標石と思われる。

【遺物】　土壙内の遺物は皆無であった。しかし、土壙中央部底面において５～６㎝×４㎝、厚み５㎝前後のたまご形の円礫が２個、16㎝の間隔をおいて検出された。これは単なる石ではなく、わざわざ同形同大の礫をもってきているので何らかの意味があると思われる。



第91図　ＳＫ０９実測図

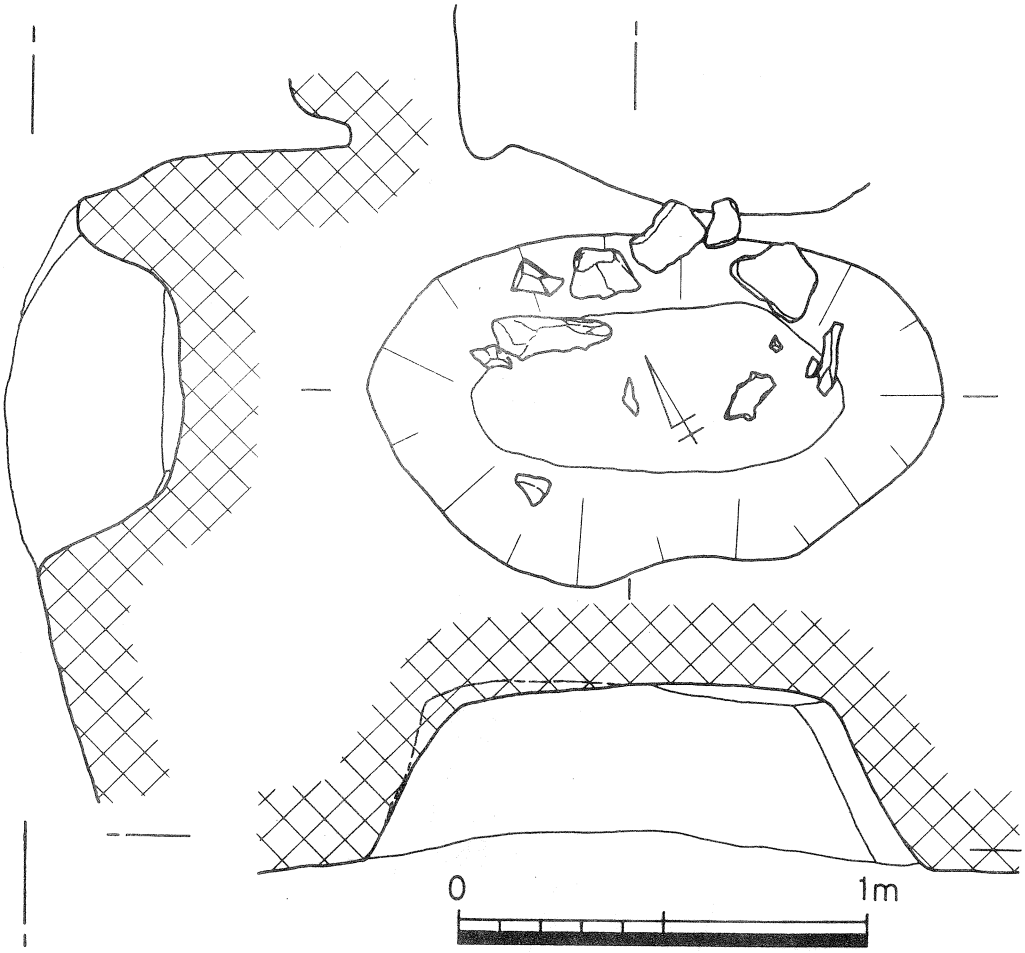
内、１個は5.5㎝×3.8㎝、厚み３㎝ほどの円礫である。（図91）

ＳＫ－１０

【遺構】　土壙掘り方上面の長さ1.42ｍ、幅86㎝、深さ40㎝を計る。底面の長さ92㎝、幅40㎝を計る。平面形は、楕円形で規模の小さいことに注意される。

配石は、四壁全外ではないが、上部に６個ほど配列されていた。

【遺物】　土壙内からは、石鏃の破片が１片出土した。石質は灰色系統のサヌカイト質ではないかと思われる。



第92図　ＳＫ１０実測図

ＳＫ－１１

【遺構】　掘り方の上面の長さ1.56ｍ、幅77cm、深さ56cmを計る。底面の長さ1.24ｍ、幅64cmを計る。南壁直下には長さ43cm、幅10cm、深さ3cmの棺固定用の溝が検出されたが、他には見当らなかった。

土壙に伴う配石は全くない。南壁部分は後の方形墓の貼石がめぐらされ、又、中央部は同じく方形墓の溝が穿たれている。

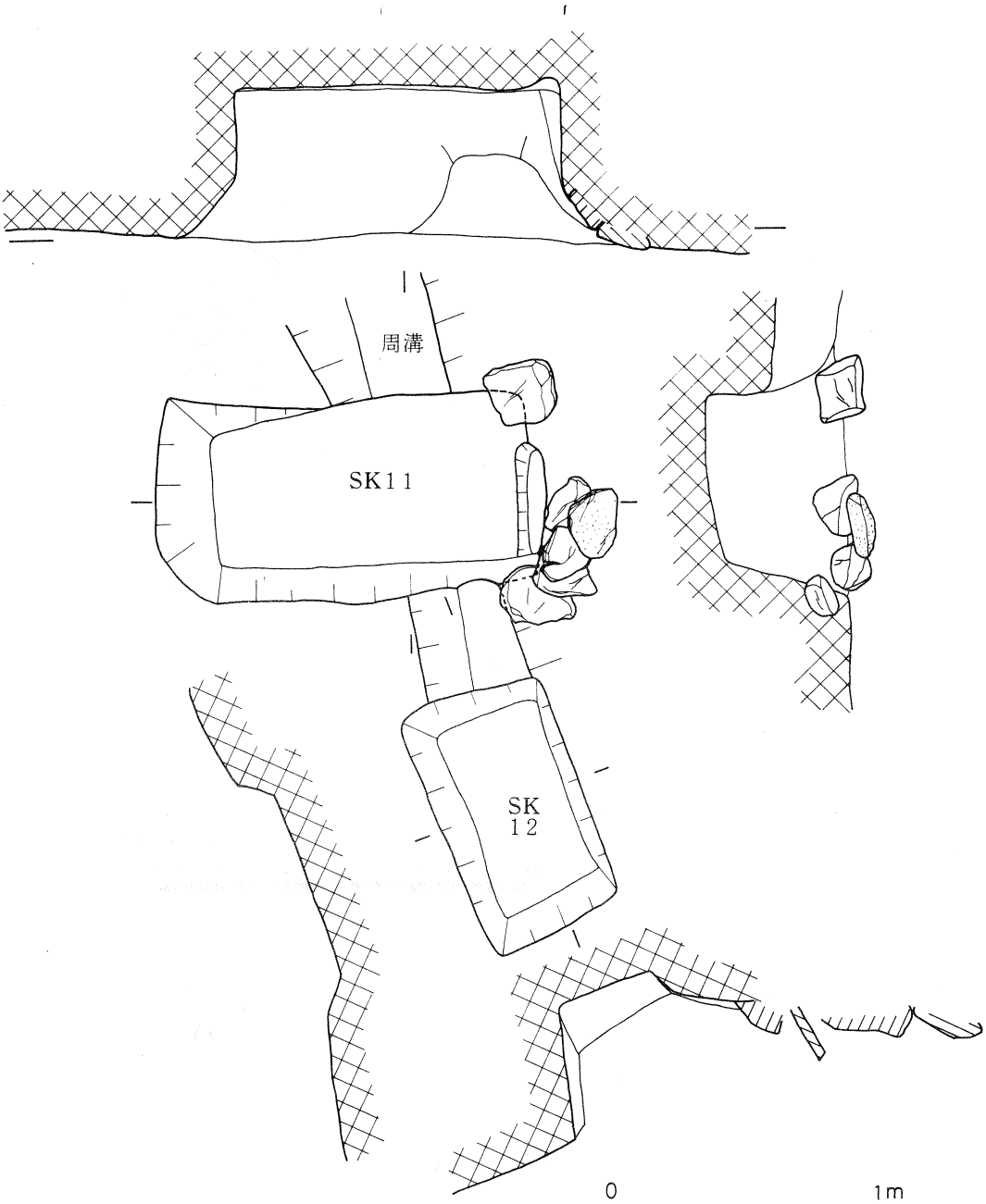
【遺物】　土壙内の副葬遺物は全く無かった。

ＳＫ－１２

【立地】　ＳＫ－11の西側40cmほどの間隔をあけて所在する。ＳＫ－11が方形墓に直交するのに対して、ＳＫ－12は溝と平行である。

【遺構】　土壙上面の長さ95cm、幅55cm、深さは本来50cmあったと思われる。底面の長さは73cm、幅37cmを計る。大半は方形墓の溝によって削平されている。

【遺物】　副葬遺物は皆無であった。



第93図　ＳＫ１１・１２実測図

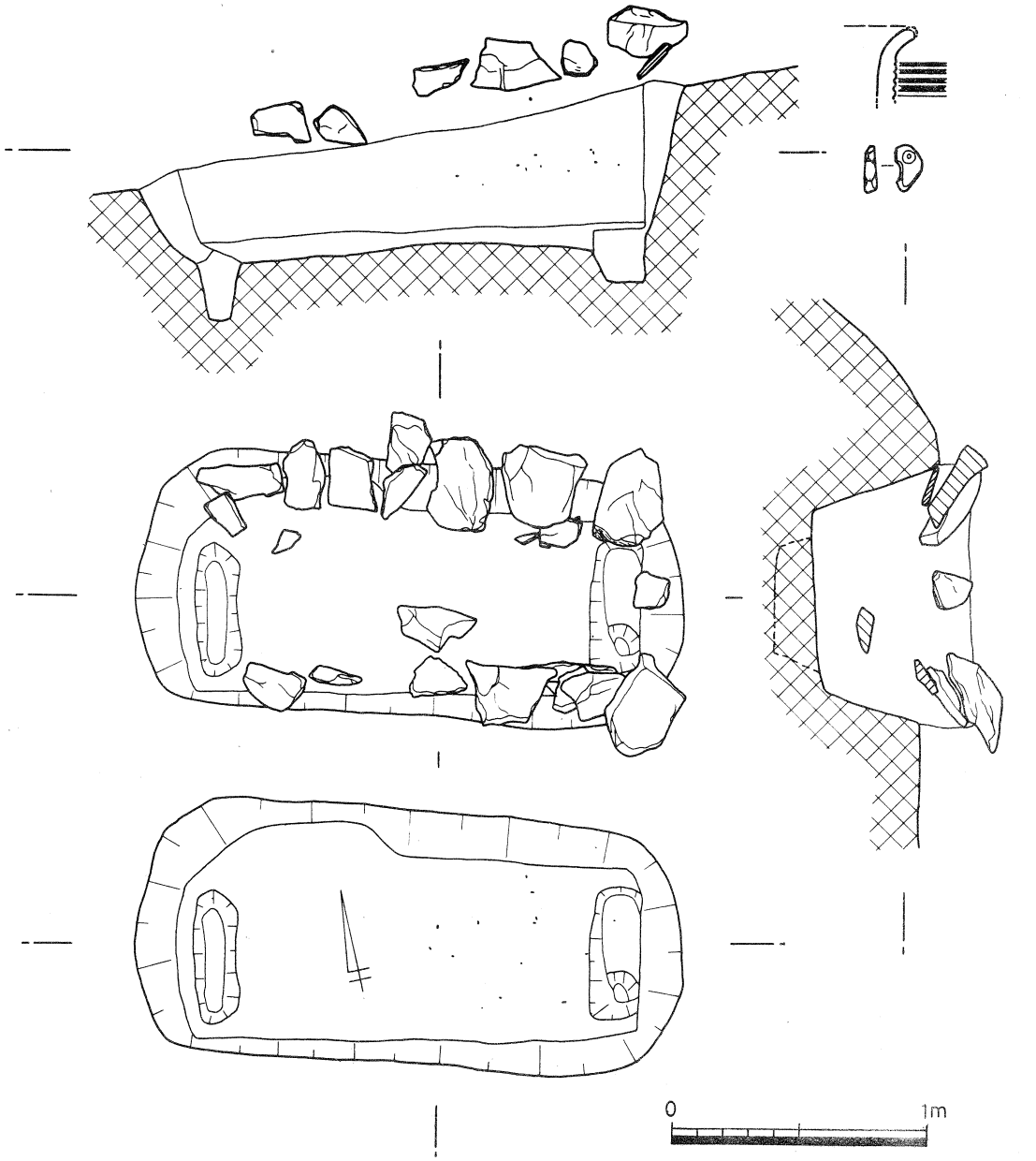
ＳＫ－１３

【遺構】　土壙の上面の長さ2.15ｍ、幅99㎝、底面の長さ1.76ｍ、幅70㎝、深さは東部で60㎝、西部で41㎝を計る。東西の短壁の直下にそれぞれ棺固定用の溝を穿つ。東の溝は長さ53㎝、幅20㎝深さ12㎝、西の溝は長さ53㎝、幅17㎝、深さ22㎝を計る。溝によって囲まれた棺の長さはおよそ1.5ｍと推定される。

配石は、東、南、北壁の3壁に見られ、西壁にはなかった。殆んど一重で、土壙の壁上部に平らに

置かれていたものと考えられるが、南、北壁の東寄りの部分では三〜四重となっている。しかし、いずれにしてもこれらの配石は、壙底までは到達していない。

【遺物】 土壙内の副葬遺物としては、勾玉１個、管玉13個、サヌカイト質石鏃の破片が１点発見された。（図 94） これらの遺物は、土壙内覆土の上〜中位に所在し、下層〜底面近くにかけては皆無であった。このことは、ある程度撹乱を受けた結果によることなのか、全く別の状況を考えるべきなのか決し難い。いずれにしても、他の土壙墓内の玉類の出土状況とは違いを見せている。一方正確な出土地点が不明であるが、土壙の直上又は、周辺の表土直下から高坏の破片が出土している。（図 ）



第 94 図　ＳＫ１３実測図

脚部の破片で坏部を欠く。脚端部の直径は4.2㎝を計る。3段にわたって幅2～3㎜の凹線文を施す。その本数は上段から7本、3本、5本となる。さらにその間の区画に三角形の切り込みを8～9㎜間隔で設ける。この切り込みは底辺の長さ4㎜、高さは1.5㎝を計り切り込みは、土器の内面まで貫通していない。その深さは、5㎜程度である。脚端部は、肥厚して外傾しその外面に2条の凹線文を施す。厚みは脚端部で1.3㎜、下段の凹線文様帯付近で7㎜、上段の凹線文様帯付近で再び1.3㎝と分厚くなり最上部で外傾している。胎土は、砂粒少なく黄褐色を呈する。

壙内出土の勾玉は正確な出土地点は不明であるが、土壙上端のレベルから20㎝位下位で発見された。硬玉系統の石質で円孔部分が灰白色、その他の部分は緑色系のまだらもようである。長さ1.8㎝、最大幅0.95㎝、厚みは円孔部分で3.5㎜、反対側で5㎜を計り角ばって丸味がない。円孔は、直径5㎜の両面穿孔で両者の合わせるところで1.5㎜の径を計る。

土壙埋土内から出土した甕形土器の口縁は外傾し直下に5条以上のヘラ描き沈線を施すもの。黄褐色を呈する。（図94）

ＳＫ－１４

【遺構】 当初、掘り方上面の長さ2.36ｍ、最大幅88㎝の大形の土壙墓と思われていたが、調査の結果、2基の土壙が隣接していることが分かった。そのため、西側の土壙墓をＳＫ－26 東側の土壙墓を従来どおり、ＳＫ－14と呼称する。以下、ＳＫ－14の説明を行う。

掘り方上面の長さは、西壁部分がＳＫ－26と切り合っており消失しているので正確ではないが、およそ1.29ｍ余り、幅81㎝、底面の長さは1.07ｍ、幅は西壁寄りで41㎝、東壁寄りで33.5㎝を計る。深さは、東部で78㎝、西壁寄りで23㎝を計る。棺側板固定用の溝は、東壁直下にあり、長さ33㎝、幅8㎝、深さ9㎝を計る。これ以外に溝は見当たらなかった。

【遺物】 土壙内部の底面から10㎝上位までの深さで、土壙の東側半分でほぼ全域に管玉が115個出土した。水平方向のものが多く、平面的にもかたよりのあるようにも思えるのでひもに通し、遺骸につけられた状態で副葬されたことも考えられる。

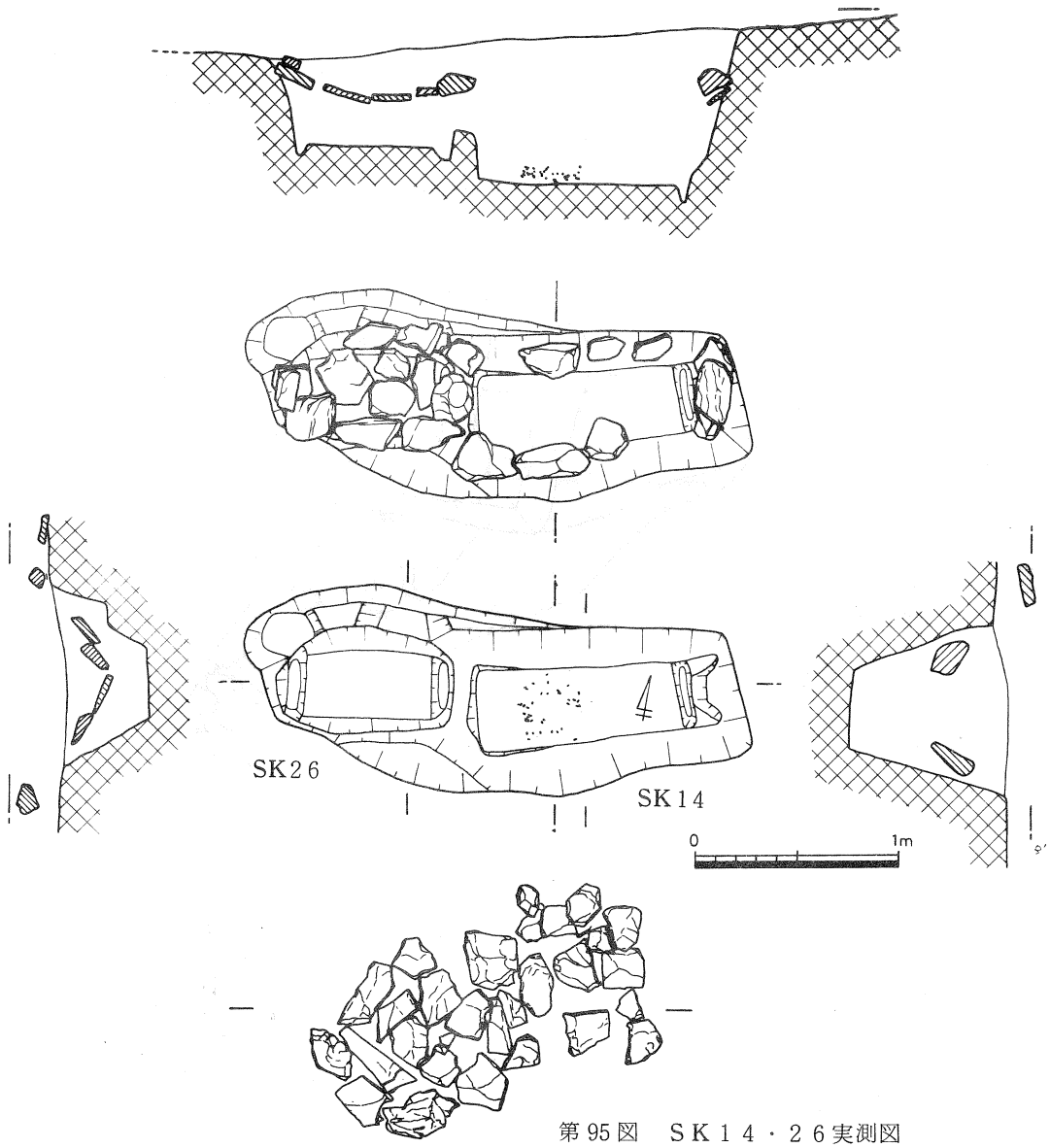
ＳＫ－１５

【遺構】 掘り方の上面の長さ1.58ｍ、横幅81㎝、底面の長さ1.2ｍ、幅44㎝、深さは54㎝を計る。棺の側板固定用の溝は全くない。

土壙上面には、短辺の壁側に3個の石が配列され、中央部のより高いレベルに5個の石が置かれていた。この5個の石は、土壙上面よりも上位となるため、これは埋葬後に石を置いて、標石としたのではないか。

ＳＫ－15の南から西にかけては、幅50～60㎝、深さ5～10㎝前後の浅い溝がほられている。溝と、ＳＫ－15の先後関係は不明である。

【遺物】 土壙内の副葬遺物は皆無であったが、壙内南西隅に近い箇所でさしわたし11×12㎝にわたり、壙底から3～5㎝の深さに赤色顔料が検出された。

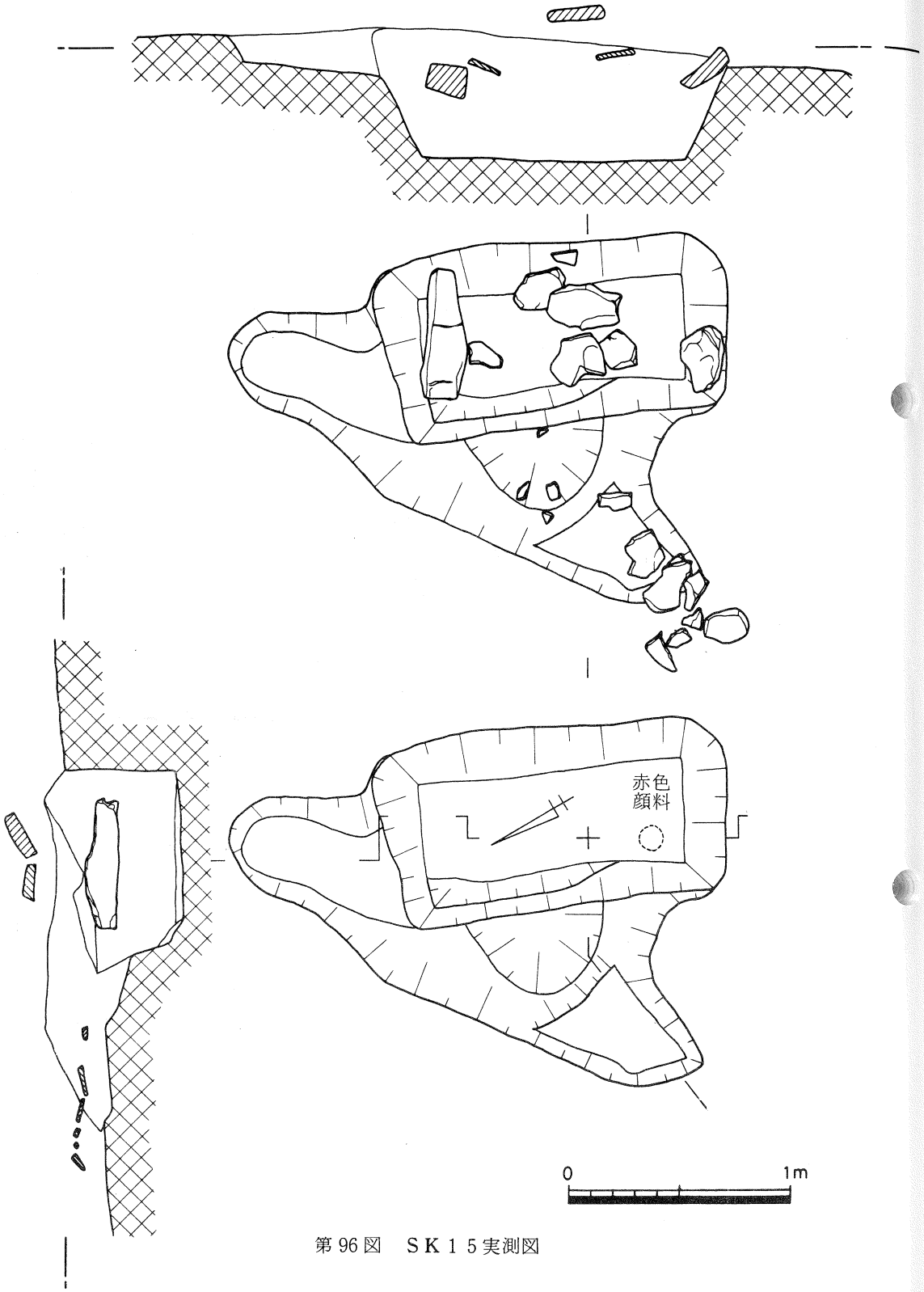


第95図　ＳＫ１４・２６実測図

ＳＫ－１６

【遺構】　土壙上端のさしわたし64㎝×52㎝の円形を呈する。深さは16㎝を計る。底面は、北寄りに深くなっている。

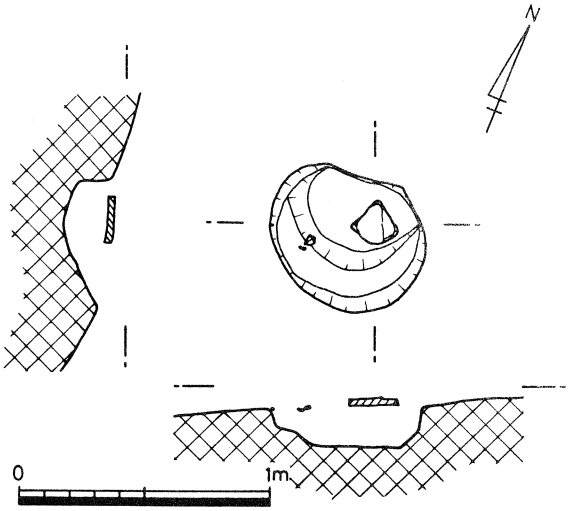
【遺物】　土壙内の覆土上面から弥生土器の小片が3片発見されたが、この土壙に伴うものとは見られない。



第96図　ＳＫ１５実測図

ＳＫ－１７

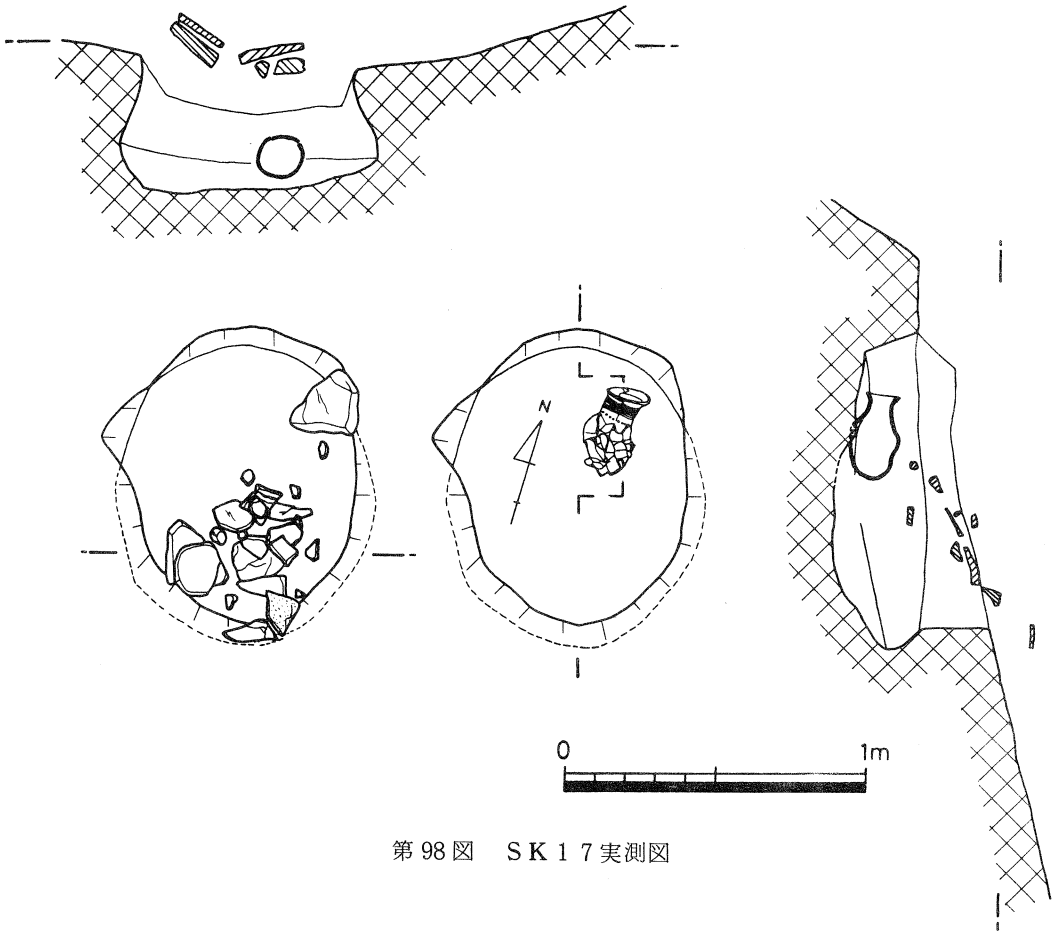
【遺構】　土壙の上端のさしわたし99㎝×73㎝㎝の楕円形を呈し、深さ41㎝を計る。断面を見ると、斜面の上部から南側にいくにつれ次第に断面が袋状となり、壁の途中が外方へふくらんでいる。そのふくらみの部分で寸法をとると、1.06ｍ×0.87ｍとなる。つまり、ほぼ7㎝ほど外方へふくらんでいることになる。こうした形状の土壙は、このＡ区ではこれ以外に類例がない。普通、袋状の土壙といえば貯蔵穴ということが云われるが、ＳＫ－１７の場合は深さが浅く果たしてそのような機能を果たしていたかどうか疑問である。



第97図　ＳＫ１６実測図

土壙の南半部上面には厚み２～４㎝の板石が二重に重なり合っていた。

【遺物】　土壙内の遺物は弥生時代の壷形土器が一点出土した。土壙の中央部に松の根が入り込んでいたが、その根に底部を密着させ、口縁部を北側に向けてほぼ１個体分の壷形土器が横倒しとなった



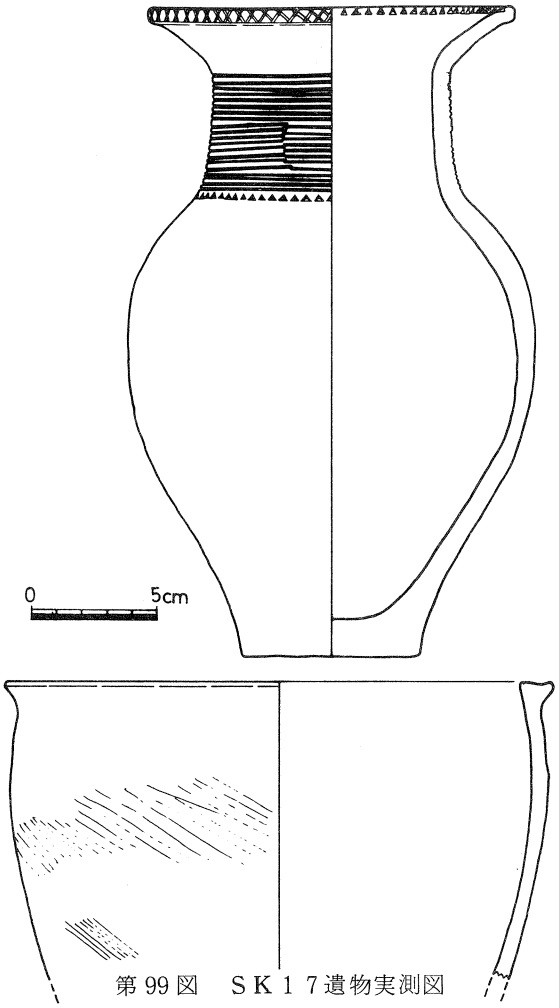
第98図　ＳＫ１７実測図

状態で発見された。この他にも土壙上部の板石群の下の黒色土層中からも同一個体の破片が発見されている。

壷形土器は広口で口径14.5㎝、頚部径は上部で9.4㎝、下部で10.4㎝、体部最大径16㎝、底径7㎝、器高26㎝を計る。

口縁部は斜めに外傾し、高さ6㎜の垂直な口唇部外面には格子目の刻み目文をつけ、その内面には小型の三角文を押しつけている。

頚部は高さ4.7㎝を計り下方に向けてやや直径が広がるが、いずれにしても直径は大きい。外面には、20～23条の沈線を間断なく設けているが、よく観察すると4～5条単位のものであることが分かる。この平行沈線文の直下には小型の三角文が押しつけられている。体部には文様がなく外面は上部4㎝の区間を横方向の、その下方～底部までは、タテ方向のヘラ磨研調整を施している。体部内面はやはり上部が横方向、中位以下底部までは、斜方向のヘラ磨研調整を施している。底部は厚み1.5㎝を計りしっかりしたものである。（図99）



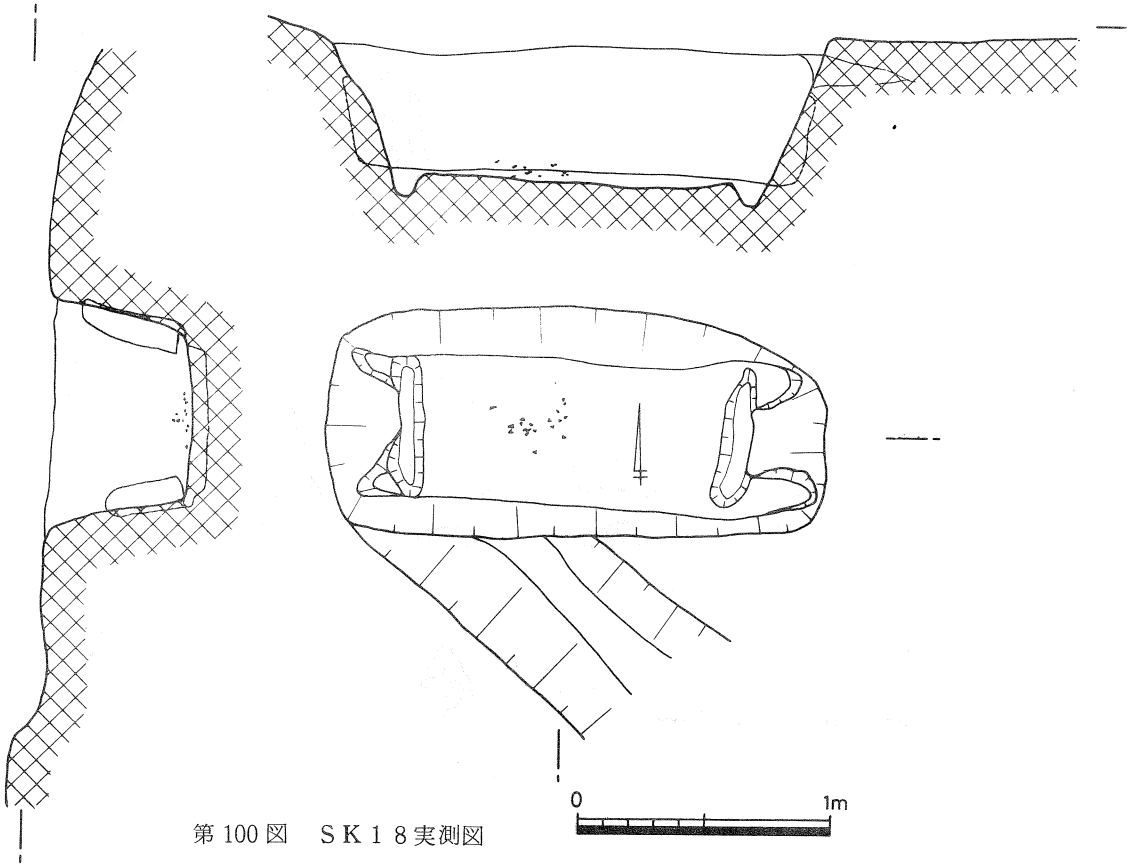
第99図　ＳＫ１７遺物実測図

又、壙内堆積土中から出土した甕形土器は、土壙墓周辺からも出土しており、口縁部から体部上半部を遺存するもので口径は21.6㎝、口縁端部は、幅1.3㎝の水平方向の平坦面を形成し、直下でやや狭まってわずかに外方へふくらみながら内傾してゆく。文様は全くなく、斜方向の刷毛目調整を施す。下部にススの附着が認められる。胎土は砂粒を殆んど含まず黄褐色を呈する。（図99）

ＳＫ－１８

【遺構】　掘り方上面の長さ2.0ｍ、幅92㎝、底面の長さ1.4ｍ、幅58㎝、深さは54㎝を計る。短辺の壁の直下にそれぞれ棺の側板固定用の溝を設ける。すなわち、東の溝は、長さ56㎝、幅15㎝、深さ9㎝、西の溝は、長さ56㎝、幅13㎝、深さ8.5㎝を計る。さらに、これら2つの溝にほぼ直角に交さくする形で短壁の両角部にもくり込みが認められる。すなわち、東北のくり込みは、幅18㎝で20㎝入り込み、高さ35㎝余り、東南のくり込みは幅17㎝で30㎝入り込む。西北のくり込みは、21㎝入り込み、高さ35㎝、幅9㎝、西南のくり込みは、幅12㎝、高さ31㎝で15㎝ほど入り込んでいる。

【遺物】　土壙内のやや西寄りの部分で底面から5㎝上の高さまでの範囲に石鏃が14点出土した。石



第100図　ＳＫ１８実測図

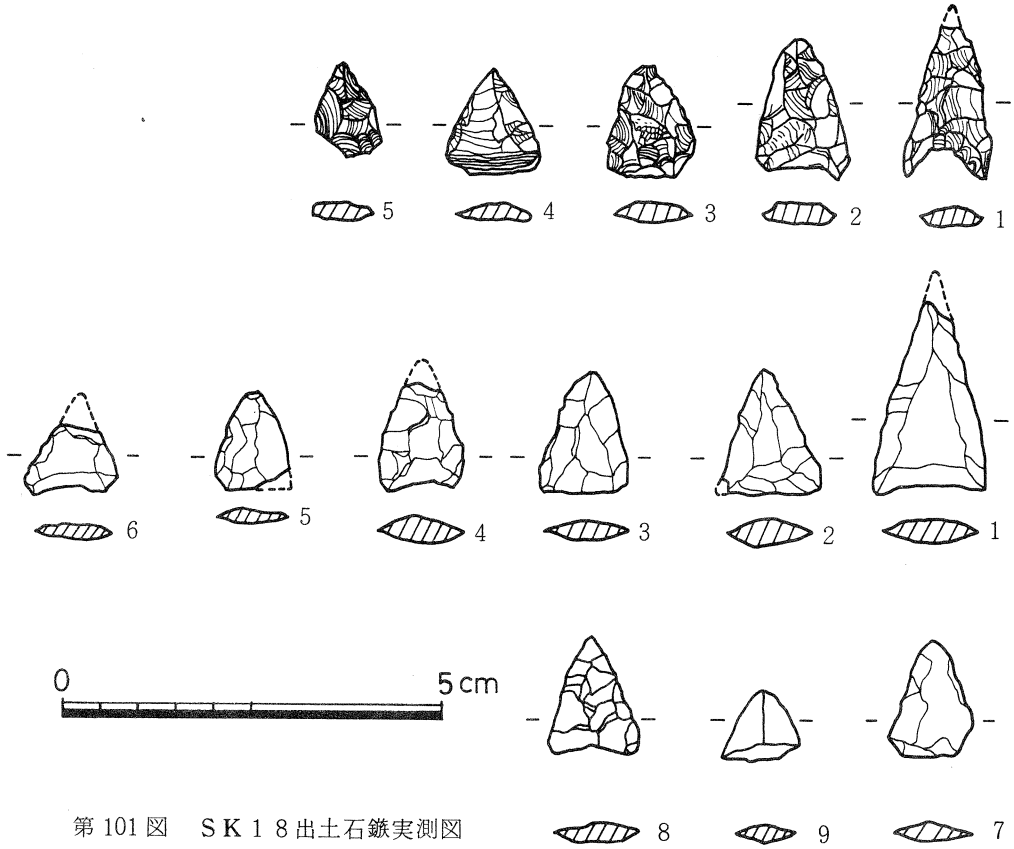
鏃の刃先の方向は一定せず点在しており、また、先端部を欠くものや、逆に基部を欠くものなど破片となったものもあり、弓矢として副葬されたものとは考え難い。個体として確認されるものは、黒曜石製のもの５点、他に小片が２片ある。又、サヌカイト質のものは、９個あり、他に７個の小片がある。

第８表　黒曜石製石鏃

法量＼番号	1	2	3	4	5				
長　さ(cm)	先端部欠失 (2.0)	逆刺部欠失 (1.7)	逆刺部欠失 (1.5)	逆刺部欠失 (1.4)	逆刺部欠失 (1.25)				
基部幅(cm)	1.15	1.20	1.15	1.20	(0.85)				
厚　み(mm)	2.5	3.0	3.0	2.0	2.5				

第９表　サヌカイト質石鏃

法量＼番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
長　さ(cm)	先端部欠失 (2.55)	1.70	1.60	先端部欠失 (1.40)	1.30	先端部欠失 (0.9)	1.55	1.55	基部欠失 (0.9)
基部幅(cm)	1.50	1.30	1.15	1.10	1.0	1.25	1.10	1.25	1.05
厚　み(mm)	3.0	4.0	2.5	4.0	2.0	2.0	2.0	2.5	2.5



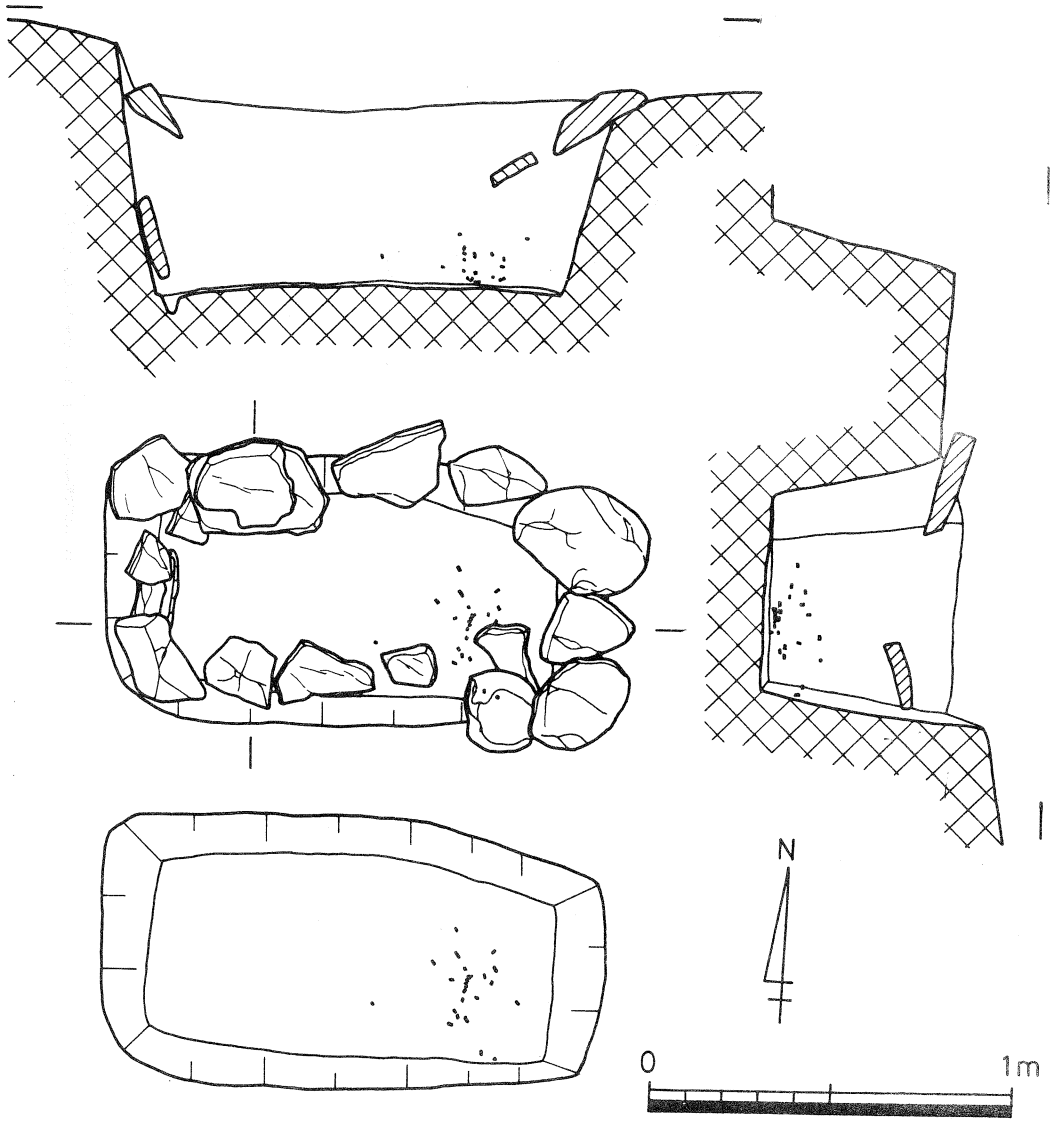
第101図　ＳＫ１８出土石鏃実測図

土壙内堆積土中出土の壷形土器は、体部上半部の破片であるが３条のヘラ描き平行沈線文をつけるもので、その下部で体部最大径となるようで直径25㎝を計る。沈線文の上部にやや凹みをつけた部分のあることが注意される。胎土は、１～２㎜の砂粒を多く含み黄褐色を呈し焼きはもろい。

ＳＫ－１９

【遺構】　土壙上端の長さ1.４ｍ、幅75㎝、深さは東壁で69㎝、壙底の長さ1.125ｍ、幅56㎝を計る。東壁直下中央部に、棺側板固定用の溝があり、長さ25㎝、幅５㎝、深さ５㎝を計る。この溝と東壁の間には厚み４㎝ほどの板石を置いている。土壙上面付近には、15個ほどの転石が配列されているが、その位置は、ちょうど土壙の上端と下端にかかる部分である。

【遺物】　壙内からは、西半分において管玉が計25個発見された。その深さは、壙底から15㎝までの範囲である。

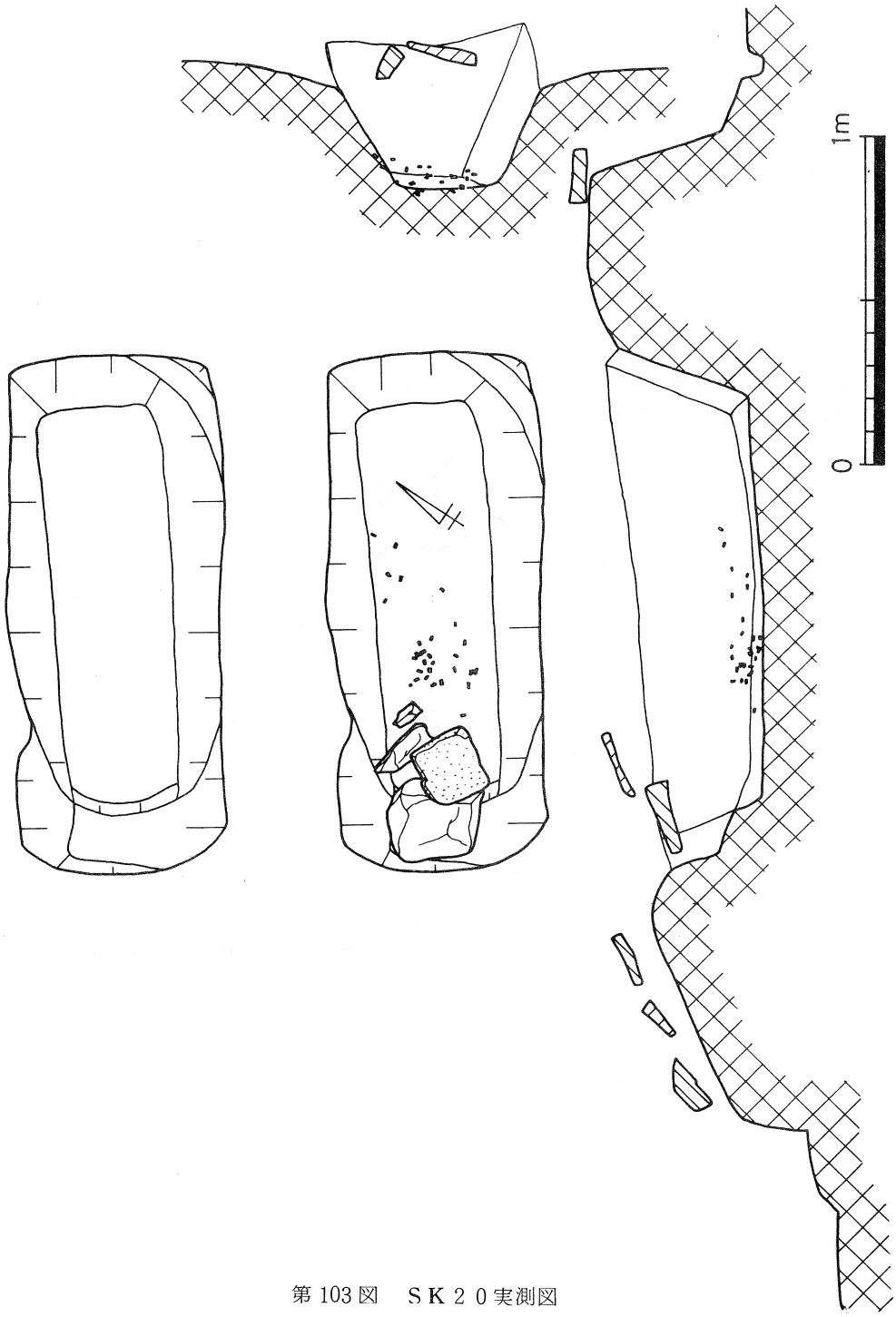


第102図　ＳＫ１９実測図

ＳＫ－２０

【遺構】　掘り方の上面の長さ1.59ｍ、幅65㎝、深さは東壁部で39㎝を計る。壙底の長さ1.23ｍ、幅36㎝を計る。両側の短壁周辺は2段となっている。その直上で土壙上面付近には板石が4枚重なるように置かれていた。

【遺物】　壙内からは、中央部で管玉が計38個発見された。深さは、壙底から13㎝までの範囲である。



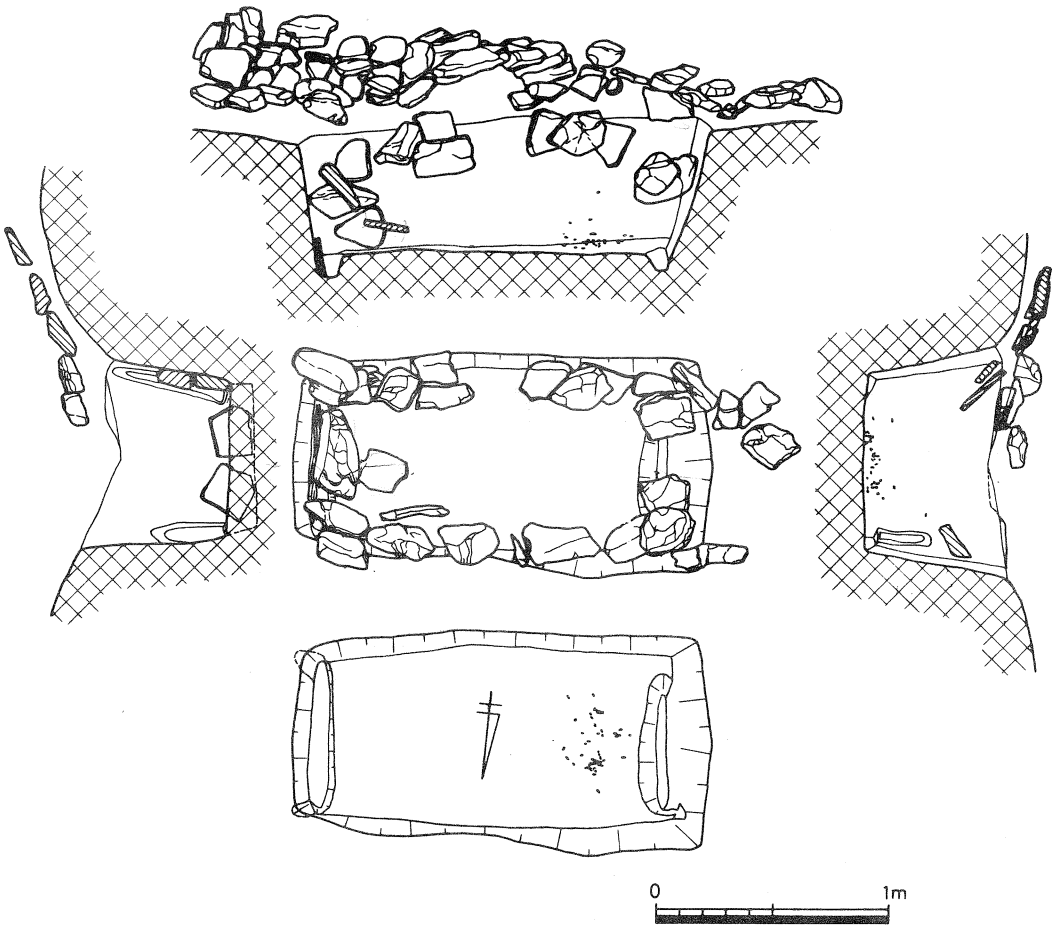
第 103 図　ＳＫ２０実測図

ＳＫ－２１

【立地】　土壙は、貼石方形墓の北側の周溝内におさまるように平行にあるが、方形墓の貼石がＳＫ－21の南壁の直上にまで到達しているので、ＳＫ－21が古く造られ、後にＳＫ－21を無視してその上に方形墓の貼石と周溝が形成されたことが分かる。

【遺構】　土壙の掘り方上面の長さ1.81ｍ、幅88㎝、壙底の長さ1.59ｍ、幅78㎝、深さ61㎝を計る。東西の短壁直下に棺側板固定用の溝を穿つ。東の溝は長さ62㎝、幅11㎝、深さ11㎝を計る。この溝中には厚み１～1.5㎝の板石が２枚左右に立てて入れてあり、東壁にくっついている。又、溝の南側には石が南壁に沿って２個積み重ねてあり、下方の石は壙底面に密着していた。西壁の北隅にも底面近くに転石が１個置かれていた。土壙内壁上面には転石が四周に配列されていた。

【遺物】　土壙西側の中央部で44㎝×30㎝の範囲に管玉が計44個発見された。出土の深さは、１個のみ壙底から26㎝で、その他の玉は、壙底から15㎝までの範囲である。



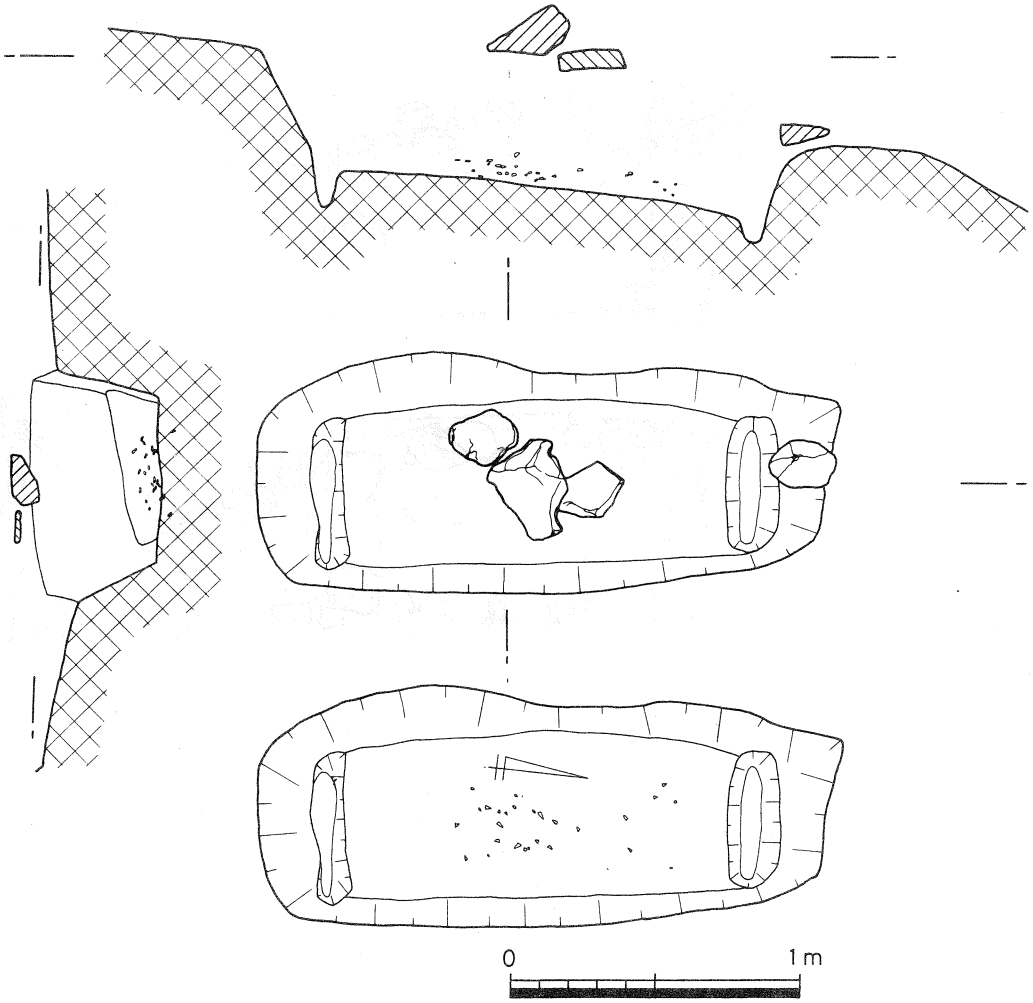
第104図　ＳＫ２１実測図

ＳＫ－２２

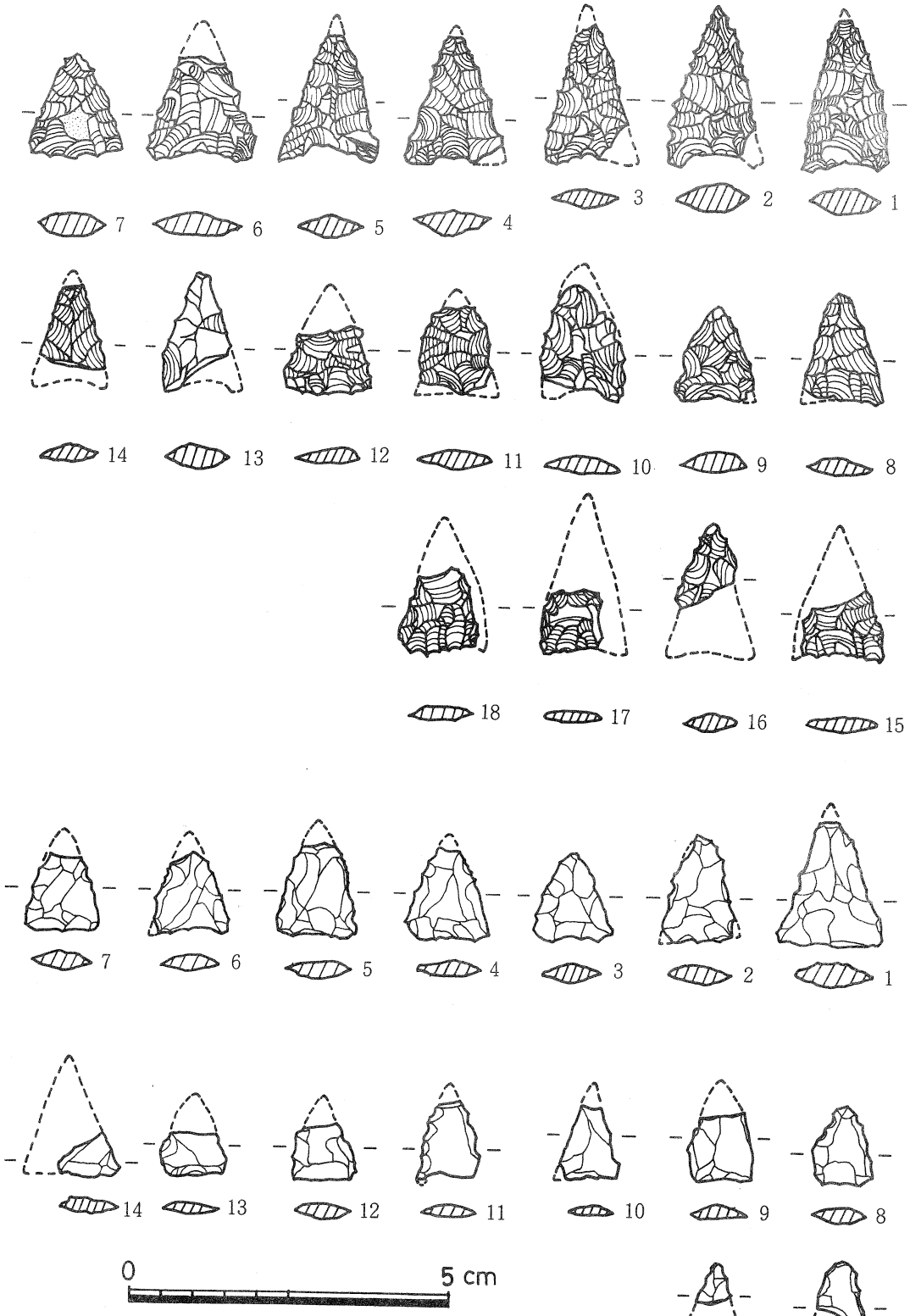
【遺構】　掘り方の上面は、長さ1.97ｍ、幅78㎝、壙底の長さ1.63ｍ、幅58㎝、深さ約40㎝約計る。南北の短壁に棺側板固定用の溝を設ける。すなわち南の溝は、長さ53㎝、幅11.5㎝、深さ13㎝、北の溝は長さ48㎝、幅18.5㎝、深さ7㎝を計る。これによって遺骸の収納できる平面規模は、長さ1.33ｍ×幅40～45㎝となろう。

土壙の上面中央部には、転石が3個集中しており、北壁近くには1個認められた。

【遺物】　土壙中央部において、壙底から10㎝上方までの深さに石鏃34点が出土した。その平面的分布は78×30㎝の範囲である。内、黒曜石製のものは、18個あり他に小片が5片ある。凹基無茎のものが大半であるが、平基無茎のものも若干ある。一方、サヌカイト質のものは、16個あり、他に小片が4片ある。平基無茎式のものが多い。



第105図　ＳＫ２２実測図



第106図　ＳＫ２２出土石鏃実測図

第 10 表　黒曜石製石鏃法量一覧

法量＼番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
長さ (cm)	先端部欠失 (2.35)	2.50	先端部欠失 (2.20)	先端部欠失 (2.0)	先端部欠失 (2.0)	(1.6)	1.6	1.75	1.5	(1.75)	(1.40)	(1.05)	1.35	(1.30)	(1.05)	(1.3)	(1.0)	(1.35)
基部の (cm)	1.40	(1.40)	(1.30)	(1.50)	1.55	1.70	1.45	(1.25)	(1.25)	1.35	(1.15)	1.40	(1.05)	(1.0)	(1.30)	(1.95)	(0.95)	(1.25)
厚み (mm)	4.0	4.0	3.0	3.5	3.5	3.5	3.5	3.0	3.0	2.5	3.5	2.5	4.0	3.0	2.0	3.0	2.0	2.0
型式	凹基無茎	同左	同左	同左	同左	同左	平基無茎	同左	同左	凹基無茎	平基無茎	同左	凹基無茎	不明	凹基無茎	不明	凹基無茎	平基無茎

第 11 表　サヌカイト質の石鏃法量一覧

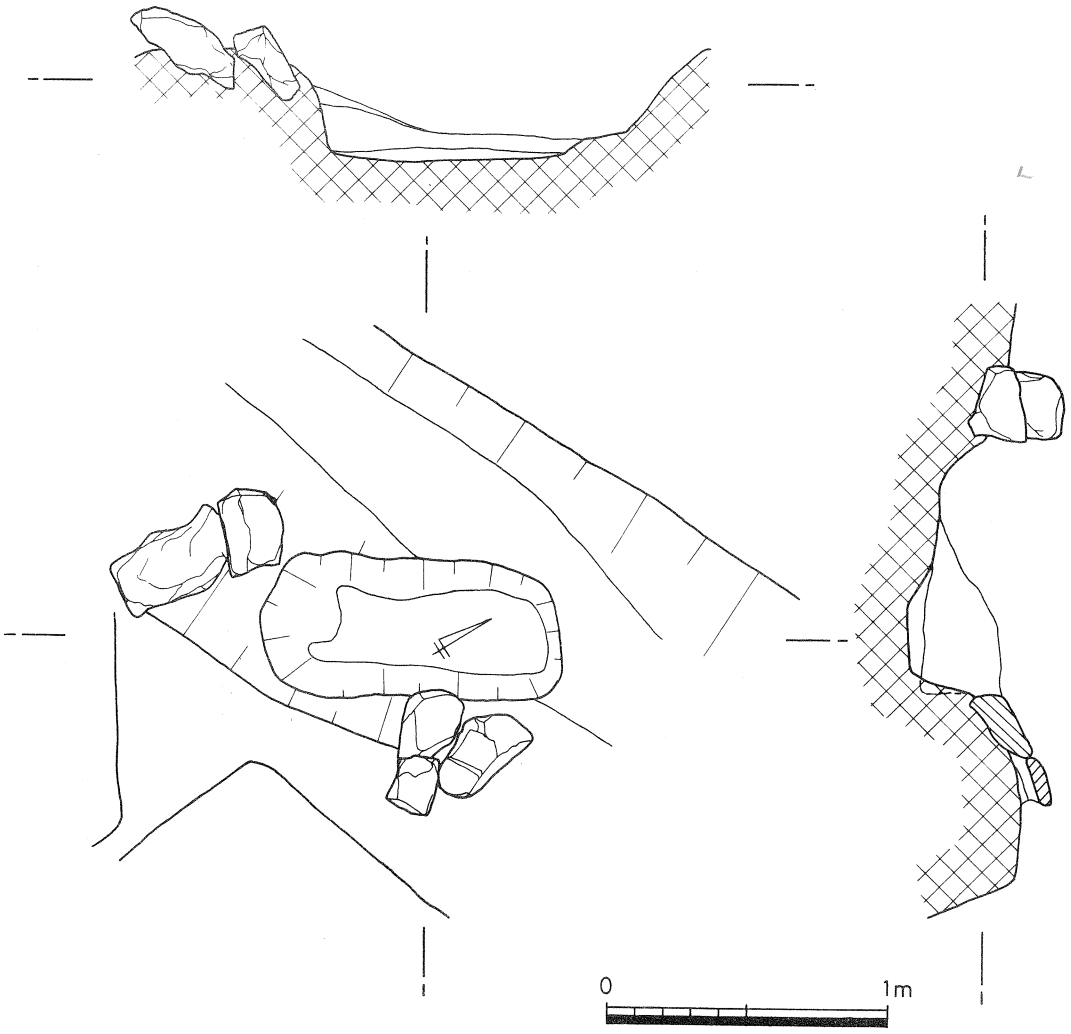
法量＼番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
長さ (cm)	(1.95)	1.70	1.40	(0.9)	(1.45)	(1.3)	(1.2)	1.2	(1.1)	(1.15)	(1.25)	(0.85)	(0.65)	(0.70)	(0.95)	(0.6)
基部の幅 (cm)	1.65	(1.15)	1.25	1.3	1.3	(1.2)	1.15	0.95	1.0	(0.95)	1.0	1.0	1.05	(1.0)	(0.8)	(0.55)
厚み (mm)	4.0	3.0	3.0	2.5	3.0	2.5	3.0	2.5	2.0	1.5	2.0	2.5	2.0	2.0	2.0	2.0
型式	平基無茎	同左	凹基無茎	平基無茎	同左	凹基無茎	平基無茎	凹基無茎	同左	平基無茎	同左	同左	同左	同左	不明	不明

ＳＫ－２３

【立地】　貼石方形墓の北の周溝の南側斜面に穿たれているが、上部に貼石があり、ＳＫ－２３が古く、貼石方形墓が新しくその上に形成されたことがわかった。

【遺構】　掘り方の上面は、長さ 1.07 m、幅 50 cm、底面の長さ 76 cm、幅 25 cm、深さ約 25 cm を計る。南の短壁の両側にくり込みを認める。

【遺物】　土壙内からの副葬品は全く発見されなかった。

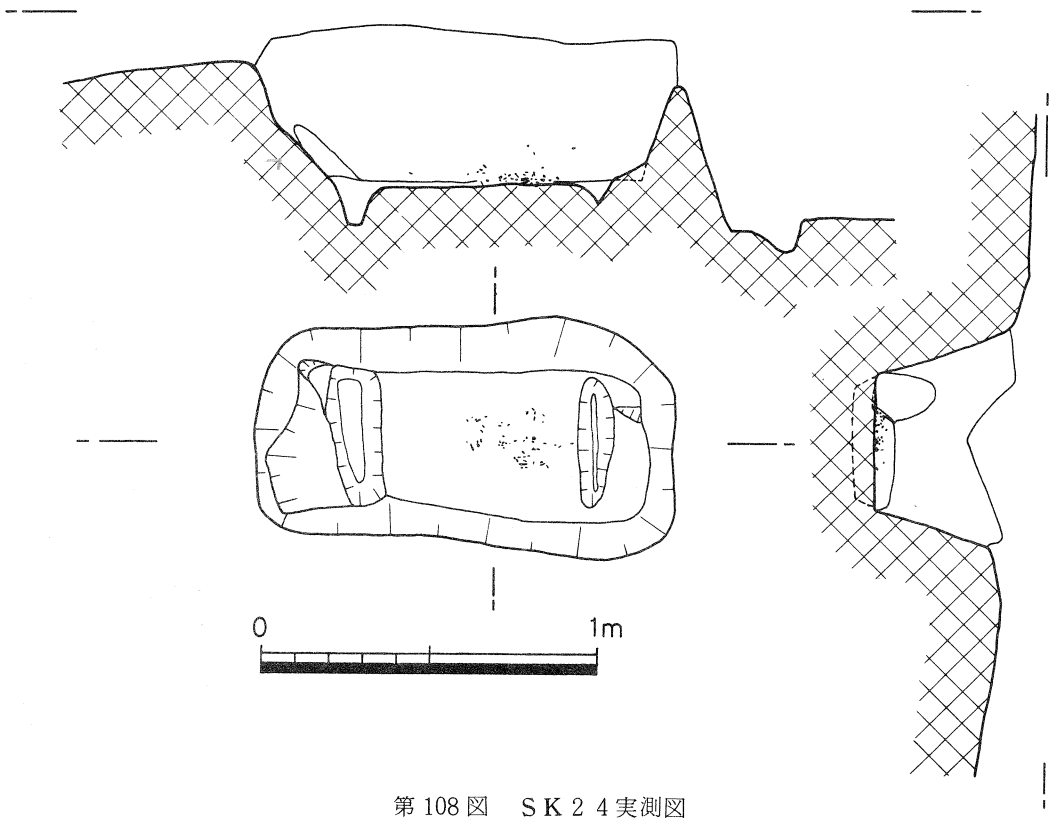


第 107 図　ＳＫ２３実測図

ＳＫ－２４

【遺構】 土壙の上面の長さ1.25ｍ、幅65㎝、底面の長さ95㎝、幅46～37㎝を計る。東西の短壁に棺側板固定用の溝を設ける。東の溝は長さ42㎝、幅14㎝、深さ11㎝、西の溝は長さ39.5㎝、幅11㎝、深さ5㎝を計る。これによって遺骸を安置した平面規模は長さ59㎝、幅約35㎝となる。

【遺物】 土壙内の中央部から西部にかけて、34㎝×20㎝の範囲に、管玉が計61個出土した。このうち二重連となったものが2箇所に検出された。このことから、当初はひもに通した状態であったことが分かる。深さは壙底から11までの範囲であるが、大半は3～6㎝の深さに集中している。

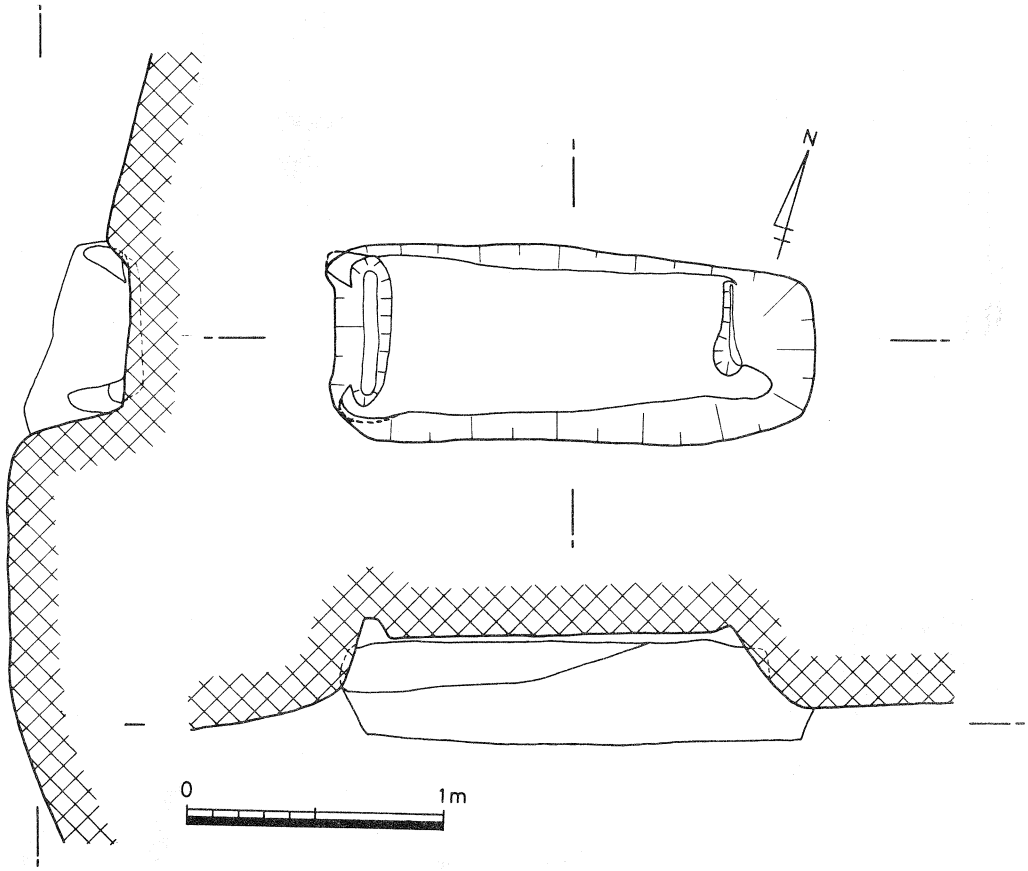


第108図　ＳＫ２４実測図

ＳＫ－２５

【遺構】 土壙上面の長さ1.89 m、幅75 cm、底面の長さ1.45 m、幅46～61 cm、深さは南壁側で43 cmを計る。東西の短壁に棺側板固定用の溝が設けられている。東の溝は長さ37 cm、幅4～11 cm、深さ2.5 cmと平面形はやや変形している。西の溝は長さ59 cm、幅14 cm、深さ8 cmを計る。この溝に直交するくり込みは、西壁の両側と、東壁の南隅の計三方向に認められ、いずれも10～15 cm、高さ15cm ほどのものである。これによって考えられる遺骸を安置した平面は、長さ1.28 m、幅40～45 cmほどである。

【遺物】 土壙内からの副葬品は全く発見されなかった。



第109図　ＳＫ２５実測図

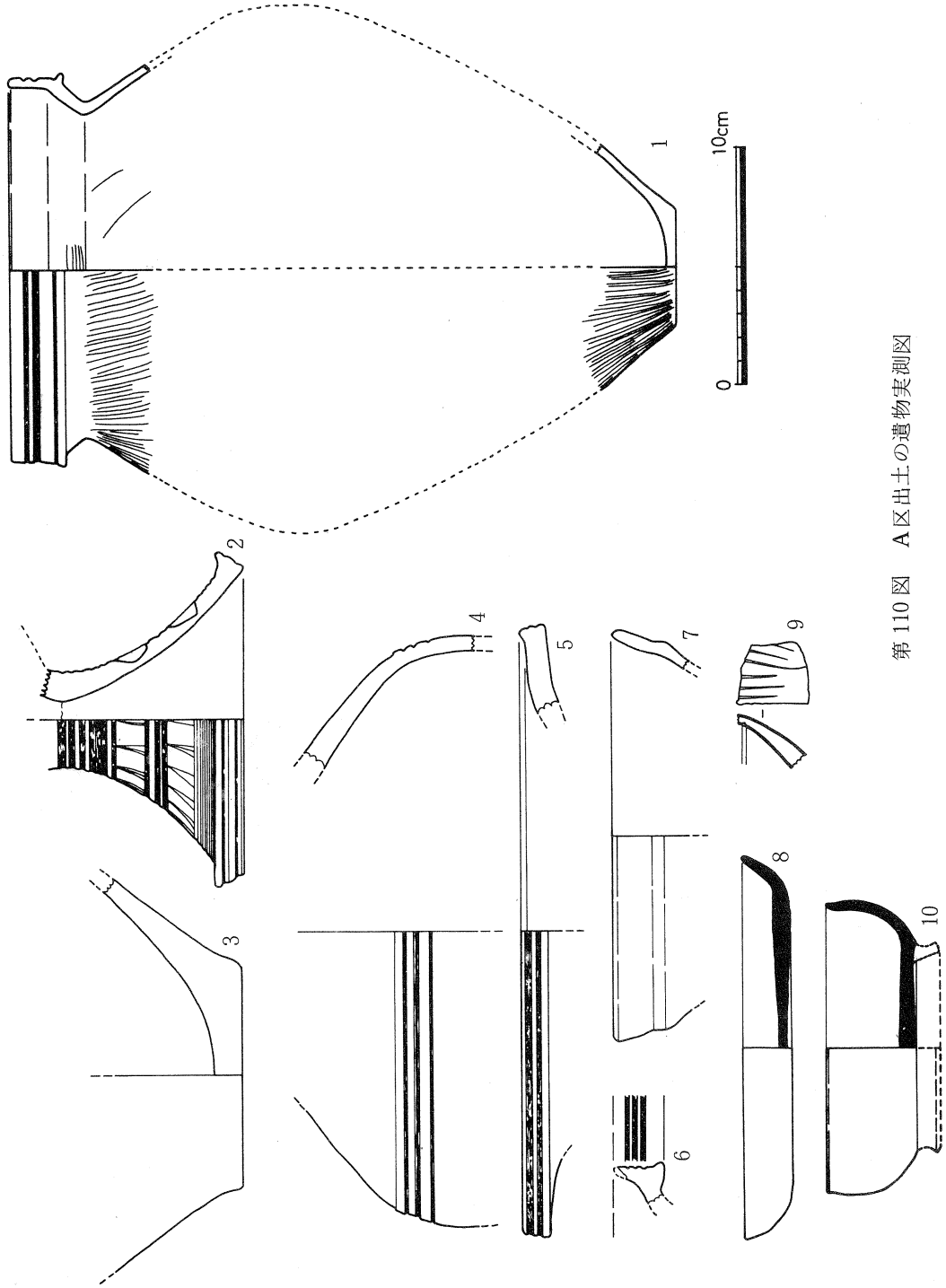
ＳＫ－２６

【遺構】 土壙上層に厚み3～5.5 cmの扁平な板石を内側におき外側にはやや角ばった厚みのある転石を計14個まんべんなく殆んど重ねずに敷き並べている。さらに20 cmの褐色土をおいて上部にやはり扁平な板石が多数敷き並べられていたのであるから東側～隣接するSK－14 と一体となってわずかばかりの盛土と敷石があったことが注意される。

土壙は、上端長95.5 cm、幅52 cm、深さ46 cm、壙底長80 cm、幅33.5 cm の小形の土壙墓である。東

西両側の短壁の直下に棺板固定用の掘り込みを有する。すなわち、東の掘り込みは長さ32㎝、幅11㎝、深さ14.5㎝、西の掘り込みは長さ39㎝、幅14.5㎝、深さ5㎝を計る。これによって、棺の内法は長さ62㎝、幅33.5㎝となる。

【遺物】　壙内に副葬品はなかった。



第110図　A区出土の遺物実測図

(2) B区墳丘墓

弥生期の墳丘墓と目される墳墓が計6基確認された。北側に6号、1号、2号がそれぞれ周溝を共有して連らなり、南側に3号、4号、5号の3基がこれ又周溝を共有して連らなり、北の3基と南の3基も又周溝を共有しているのである。

つまり、6基の墳丘墓がそれぞれすき間なく溝を共有し、相接しているのである。これらの墳丘墓には基盤上に主体部と目される土壙墓と、同溝内の土壙、それに墳丘墓の外周に位置する土壙墓の3種類の遺構が認められる。

そこで、まず墳丘墓の本体から概説していくことにする。

第12表　友田遺跡群一覧表（B区墳丘墓）

名称	墳丘の形態					遺構の形態					遺物の種類と数量				
	平面形	長辺	短辺	高さ	外表施設	SK番号	掘り方上面長辺 底面 長辺	短辺 短辺	深さ	特徴	土器	勾玉	管玉	石鏃	
1号	略長方形	上端 11.00	6.26	総高 1.14	貼石周溝	1−01	2.16 2.00	0.78 0.64	0.23	くり込みあり					
		下端 12.50	9.80	0.60		1−02	2.34 2.25	0.58 0.50	0.26	くり込み					
				盛土 0.54		1−03	1.74 1.56	0.56 0.40	0.18						
						1−04	1.00 0.90	0.60 0.46	0.31	−					
						1−05	1.40 0.92	0.44 0.34	0.30	−					
						1−06	2.16 2.04	0.68 0.56	0.30	くり込み					
						1−07	2.02 1.90	0.70 0.50	0.30	くり込み					
2号	略長方形	上 10.50	4.1〜4.2	0.72	貼石周溝	2−01	2.51 2.32	1.30 0.72	0.40						
		下 12.00	5.7〜5.9	0.22		2−02	2.52 2.27	1.10 0.70	0.35	くり込み					赤色顔料若干
				0.50		2−03	1.61 1.45	0.48 0.42	0.10	くり込み					
						2−04	1.40 1.25	0.53 0.43	0.12	−					
						2−05	1.83 1.58	0.64 0.53	0.26	くり込み					
						2−06	1.75 1.42	0.50 0.43	0.10	−					
						2−07	2.25 2.13	0.76 0.73	0.07	くり込み					
						2−08									
						2−09									
3号	略長方形	上 9.20	7.65	1.52	貼石周溝	3−01	1.80	0.97							
		下 11.30	9.10	1.06											
				0.46											
4号	略長方形	上 10.50	7.70	1.44	貼石周溝										
		下 12.25	9.25	0.68											
				0.76											
5号	略長方形	上 10.75	6.15	1.87	貼石周溝	5−01	1.90 1.30	0.54 0.44	0.05	くり込み					
		下 13.15	9.75	1.39											
				0.48											
6号	長方形	上 9.00	6.0	1.22		6−01 1号	2.10 1.72	0.80 0.66	0.24	くり込み					

名称	墳丘の形態					遺構の形態					遺物の種類と数量				
	平面形	長辺	短辺	高さ	外表施設	SK番号	掘り方上面長辺 底面 長辺	短辺 短辺	深さ	特徴	土器	勾玉	管玉	石鏃	
6号	長方形	11.5	7.0	0.80		6−02	1.80 1.74	0.68	0.35			硬質 2			
				0.42		6−03	2.00 1.42	0.78 0.66	0.20	くり込み					
						6−04	1.46 1.20	0.56 0.50	0.08						
						6−05	1.30 1.10	0.48 0.36	0.32						
						6−06	2.50 1.80	0.92 0.82							
						6−07	2.34 2.06	0.82 0.74							
						SK 27	3.85 1.05	2.8 0.77	0.57						
						SK 28	2.00	1.15	0.60						
						SK 29	1.93 1.36	0.71 0.37	0.30						
						SK 30	4.5 2.90	3.50 2.00	1.20		弥生中期中葉				
						SK 31	0.75	0.68	0.25						

1号墳丘墓

【墳丘基盤】 東西の上端長11ｍ余り、南北の長さ6.26ｍの略長方形を呈する。東と西の周溝の下端の距離は12.5ｍ、南と北の周溝の下端間の距離は9.8ｍを計り、基盤の上端と溝底との差は東溝で1.1ｍ、西溝で86㎝、南溝で60㎝、北溝で1.2ｍを計る。こうして、周囲を削平された墳丘基盤は黒褐色を呈する旧表土を遺存している。この基盤上には計7基の土壙墓が掘り込まれている。

【貼石】 地山を削平して造られた墳裾の斜面には、さしわたし10～40㎝ほどの角のある転石が多数確認された。これらの転石は恐らく貼石として置かれたものと思われる。

【周溝】 墳丘墓周囲には周溝がまわっている。すなわち東の溝は2号墳丘墓との間にあり、2号墳丘墓側には明確な立ち上がりが無いが、上端幅からＳＫ31の西端までの距離は2.3ｍ、下端幅からＳＫ31の西端までの距離は70㎝を計る。高低差は68㎝。南の溝は3号墳丘墓との上端間で3ｍ、下端間で25～50㎝。高低差は54㎝を計る。4号墳丘墓との上端間の距離は4.5ｍ、下端幅1.1ｍを計る。この部分の溝底中央部にＳＫ29が所在する。

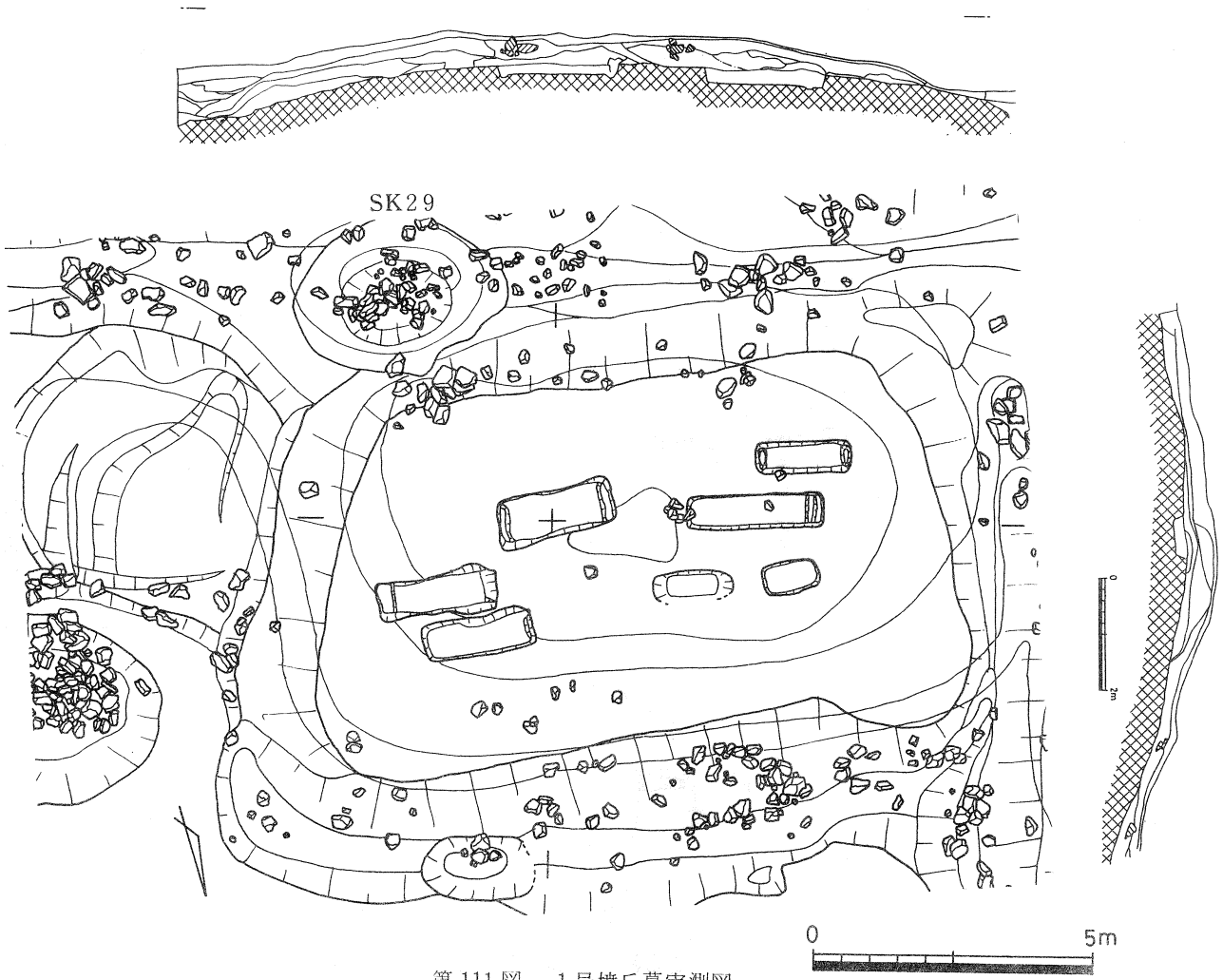
西の溝は上端幅2ｍ、下端幅40㎝、深さ32㎝ほどの比較的細くて深い溝で南部の幅が広く北にいくにつれ幅が狭くなる。

北の溝は上端幅2.2～3.0ｍ、下端幅60～70㎝、深さ46㎝あり、東部の溝中にＳＫ27が所在する。西の溝が最もレベル的に深く、次に北の溝が東方向から開始され一段と高い。

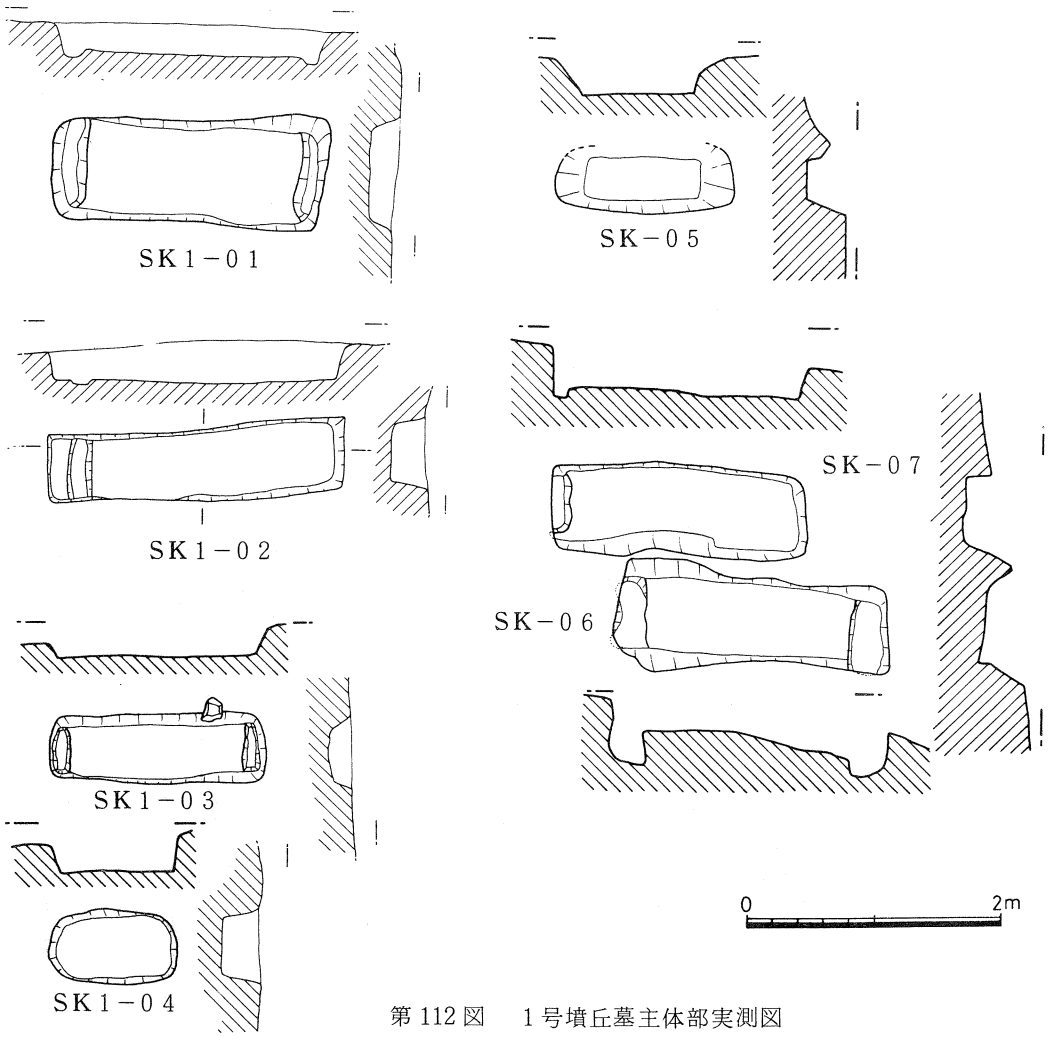
北と西の周溝内からは、弥生中期～後期にかけての甕、高坏型土器が、西～南の溝にかけては須恵器甕片が表土層から出土している。

北の溝のさらに外側の平坦な地山面にもＳＫ28の長方形土壙墓が所在する。

盛土は、墳丘中心部で54㎝を計る。



第 111 図　1 号墳丘墓実測図



第112図　1号墳丘墓主体部実測図

1号墳丘墓

【主体部】

ＳＫ１－０１　上端の長さ2.16ｍ、同幅78㎝、壙底の長さ2.0ｍ、幅66～74㎝、深さ23㎝を計る。両側の短壁直下に掘り込みを有する。東の溝は長さ70㎝、幅12㎝、深さ6㎝、西の溝は長さ70㎝、幅18㎝、深さ7㎝を計る。内部に副葬品は見当らなかった。

土壙直上には、埋葬後大石が3個置かれていたが、その内の最も東側にあった石は20×36㎝、高さ46㎝あり立てて置き、その底面の周囲には15×5～6㎝程度の小石を10個ほどすえて上の大石を固定している。

この大石の上部は盛土の表面まで到達し一部露出していた。恐らく墓標として用いられたのであろう。

ＳＫ１－０２　上端の長さ2.34ｍ、幅は東部で58㎝、西部で54㎝、底面の長さ2.25ｍ、幅50㎝、深さ26㎝を計る。西壁から13㎝離れた壙底に掘り込みがある。すなわち、長さ46㎝、幅19㎝、深さ4㎝を計る。土壙の中央部直上の盛土中には、18×23×15㎝ほどの転石が1個あり、さらに土壙

の東側盛土中にも5個ほどの転石が集中して盛土中に含まれていた。これは恐らく墓標の役割りを果したものと考えられる。

ＳＫ１－０３　上端長1.74ｍ、幅56㎝、底面の長さ1.56ｍ、幅40㎝、深さ18㎝を計る。西壁直下に掘り込みがある。「すなわち、長さ32㎝、幅6㎝、深さ18㎝を計る。副葬品は皆無であった。

ＳＫ１－０４　上端長1ｍ、幅60㎝、底面の長さ90㎝、幅46㎝、深さ31㎝を計る。幅の割りに長さの短かい小判形の土壙である。土壙内からは何ら遺物は発見されなかった。

ＳＫ１－０５　上端長1.4ｍ、幅44㎝以上、底面の長さ92㎝、幅34㎝、深さ30㎝のやや小型の土壙である。土壙内からは何ら遺物は発見されなかった。

ＳＫ１－０６　上端の長さ2.16ｍ、幅60～90㎝、底面の長さ2.04ｍ、幅50～58㎝、深さ30㎝を計る。両側の短壁直下に落ち込みを有する。すなわち、東の溝は長さ58㎝、幅26㎝、深さ14㎝、西の溝は長さ56㎝、幅18㎝、深さ26㎝を計る。副葬品は皆無であった。

ＳＫ１－０７　上端長2.02ｍ、同幅70㎝、底面の長さ1.9ｍ、同幅50㎝、深さ30㎝を計る。西壁直下に掘り込みを有する。すなわち長さ42㎝、幅8㎝、深さ6㎝を計る。副葬品は皆無であった。

出土遺物の概要

墳丘墓に関連した遺物は北側の周溝の底部で多く確認されたが、墳丘墓上には皆無であった。盛土中や盛土層下の旧表土上面からは、主として甕の底部などが出土しているが、墳丘墓築成以前のものである。

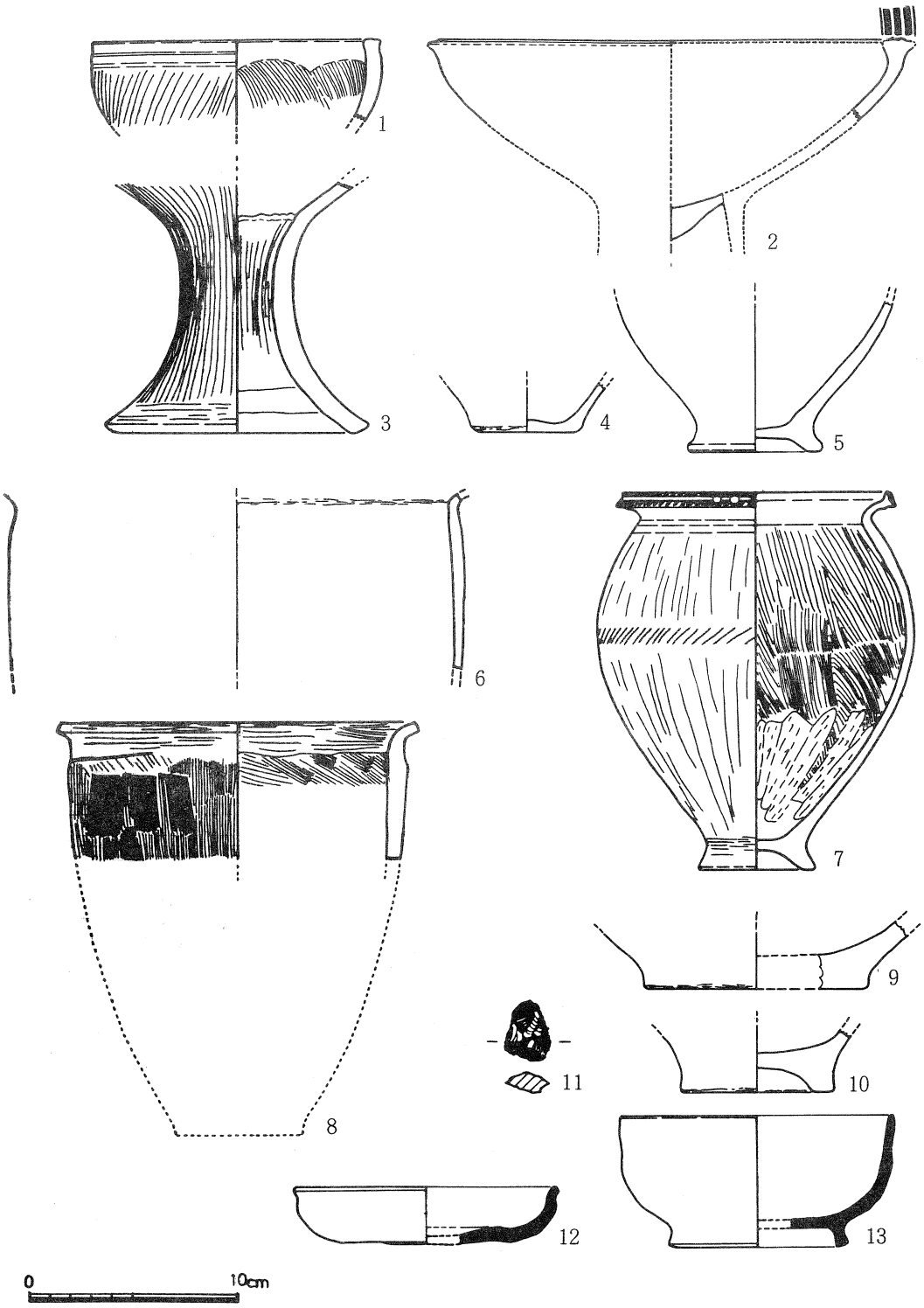
1　北溝第1群中のもの。口径13.8㎝を計る高坏形上器の破片で坏部下半部から脚部を欠く。口縁端部は平坦で幅7㎜を計る。口縁部は内外面共に横方向のナデ調整を施す。口縁直下に2条の細い沈線を施す。坏部は半球状に内傾し、外面は斜方向のヘラ磨研、内面は荒い刷毛目調整を施している。砂粒少なく、焼きは硬い。灰黒色を呈する。（図1）

2　北溝第1群中のもの。口径23.6㎝を計る高坏形土器の破片で、坏部下半部から脚部を欠く。口縁端部は幅1.6㎝ほどの平坦面をなし、幅の太い3条の凹線を施す。

口縁部直下は、急に厚みをへらし7㎜ほどとなる。その部分から体部にかけては急激に内傾していく、破片先端部では厚み6㎜、これと同一個体のものと思われる円板状の粘土のかたまりは、この高坏部底部に取り付けた粘土板と思われる。直径5㎝、中心部での厚み1.5㎝、坏部との接合部での厚みは4.5㎜を計る。（図2）

3　北溝第1群中のもの。底径11㎝を計る高坏形土器の破片で口縁部を欠失する。現存高12㎝、坏部と脚部の明瞭な区分がなく外形は上下対称的である。

しかし内面において、坏底部に粘土板を付けた痕跡が遺存しており、この部分から上が坏部、下方が脚部となる。外面は殆んどタテ方向のヘラ磨研調整を施している。そのヘラの幅は3～4㎜を計る。脚部外面は横ナデ調整、同内面は底部近くを2段にわたり横方向のヘラ削り調整を施す。その上部にはしぼり痕を残す。厚みは坏下半部で6㎜、脚最小径部で1.0㎝、脚端部で9㎜を計る。胎土は石英



第 113 図　1 号墳丘墓遺物実測図(1)

粒の少ないもので焼成はややもろい。全体に暗灰色を呈する。（図３）

4　北溝中第１群と第２群の中間で出土。底径4.6㎝を計る。小型の甕又は壷の底部である。底内面中央部はややふくらみ厚み６㎜、体部の先端で４㎜を計る。胎土は、砂粒少なく、内面暗褐色、外面は赤褐色から黄褐色を呈する。（図４）

5　北溝中第３群出土のもの。台付壷又は台付甕の破片で体部上半部から口縁部を欠く。底径6.2㎝、台の端部の厚み8.5㎜、底部の厚み4.5㎜、体部の端の厚み４㎜を計る。台の高さは6.5㎜で体部は徐々に内傾して上がる。砂粒は少なく焼成は良、明褐色を呈する。（図５）

6　西溝中第４群出土のもの。甕形土器の破片で口縁部と体部下半部を欠く。体部は最大径22㎝を計り、ややふくらみをもち、下部でススの附着が認められる。頚部から口縁部に向けて著るしく外傾する。厚みは体部最大径で5.5㎜。内面の調整は不明、内面黄褐色、外面は明褐色を呈する。（図６）

7　西溝溝中の第６群出土のもの。ほぼ１個体分の台付甕形土器である。口径12.6㎝、頚部径11.1㎝、体部最大径15.4㎝、高台の径5.7㎝、器高18.3㎝を計る。口縁は、頚部からくの字に折れて外傾し、口縁端部に幅８㎜の平坦面を形成する。その面にまず斜行の平行線文を刻み、次に中央部に凹線をつけて切断し、(又はその逆の順序）、最後に直径４～4.5㎜、厚み１㎜ほどの円形浮文を５㎜前後の間隔を置いて３個ずつ１か所に配列している。これは全体で４か所に配置してあるものと思われる。

頚部直下は７㎜の区間に横ナデ調整を施し、それ以下の体部はタテ方向の細かいハケ目調整を施している。体部最大径付近には幅９㎜の区間にクシ目状工具による斜行刺突文を施している。

体部内面は、頚部以下をまずクシ目状工具によりかき上げた後、底部から７㎝上方までの区間ヘラ状工具により削り調整を施している。体部の厚みは４～5.5㎜を計る。下半部には一部ススが附着している。高台は中央部で9.5㎜高くなり、厚みは５㎜を計る。脚端部は下外方へ延びている。出土した時、体部中央部に1.0×1.5㎝ほどの穿孔のあることを確認したが、取り上げの際、細かく砕けたので図示していない。

穿孔部分は溝底に接していた。（図７）

8　２区の盛土層下、黒色土層上面（旧表土）から出土。体部下半部を欠く甕形土器である。口径17.1㎝、口縁部は１㎝ほど外傾する。外面は口縁端より２㎝下で細かい刷毛目調整、口縁部や頚部は横ナデ調整を施す。内面は、口縁端から1.5㎝下方まで横ナデ、それ以下1.5㎝までの区間に斜め方向のクシ目調整を施し、以下体部内部は不明瞭であるがヘラ磨研と思われる。胎土には、１～２㎜の砂粒を含み焼成は硬い。内面は明褐色、外面は黄褐色を呈する。（図８）

9　１区の旧表土から出土。底径10.3㎝、底部の厚み1.7㎝、体部の厚み0.9㎝を計る。黄褐色を呈する。（図９）

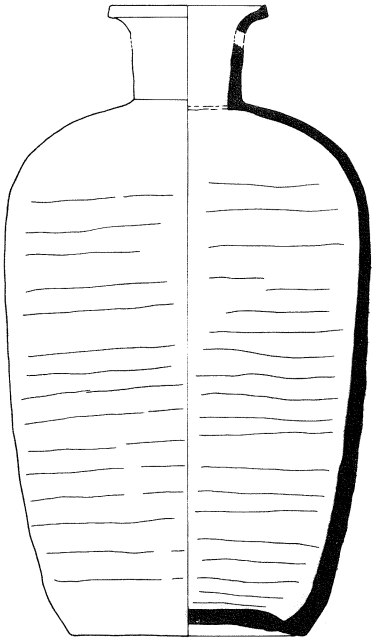
10　２区の旧表土上面から出土。壷又は甕の台部である。台部は高さ1.2㎝、底径7.2㎝、端部は幅１㎝の平坦面を成す。底部の厚み７㎜、体部の厚み６㎜を計る。（図10）

11　1区北側表土直下の盛土層中より出土。黒曜石製の石鏃の半製品である。長さ2.9㎝、幅2.1㎝、厚み4.1㎝を計る。（図11）

遺物の検討

1、2の高坏形土器は、坏部が半球状で口縁端部が水平方向の平担面をもつという特徴をそなえている。

こうした特徴をもつ高坏形土器の類例としては、県内では安来市大塚町殿河内所在の八脇谷遺跡のA地区第1号住居跡床面出土のものや、出雲市天神町所在の天神遺跡、同市古志町所在の下古志遺跡出土品、八束郡美保関町福浦小学校敷地遺跡、邇摩郡仁万町坂灘遺跡出土品の中に求められる。これらの高坏は弥生時代中期中葉に属するものである。いずれにしてもあまり出土例はない。



第114図
1号墳丘墓出土遺物(2)

県外では、岡山県倉敷市菰池遺跡や広島、中山遺跡出土の高坏に類似する。畿内の第三様式併行で、やはり中期の中葉頃のものである。

3は県内では類例がない。県外では岡山県高本遺跡出土品に類品がある。やはり中期中葉頃に位置づけられている。

5は台脚を付けるもので、台脚だけをとりあげると県内では江津市波来浜遺跡にみられる。弥生後期後半頃とされる。県外では鳥取県新袋川遺跡の壷形品にみられる。中期後半に位置づけられている。

6は薄手の甕形土器で、口縁部は恐らく、くの字形に外傾するものであろう。県内では出雲市、天神遺跡に類品があり、中期中葉に位置づけられている。

7は口縁端部の装飾文様の特徴から中期中葉頃のものと思われる。類品はない。

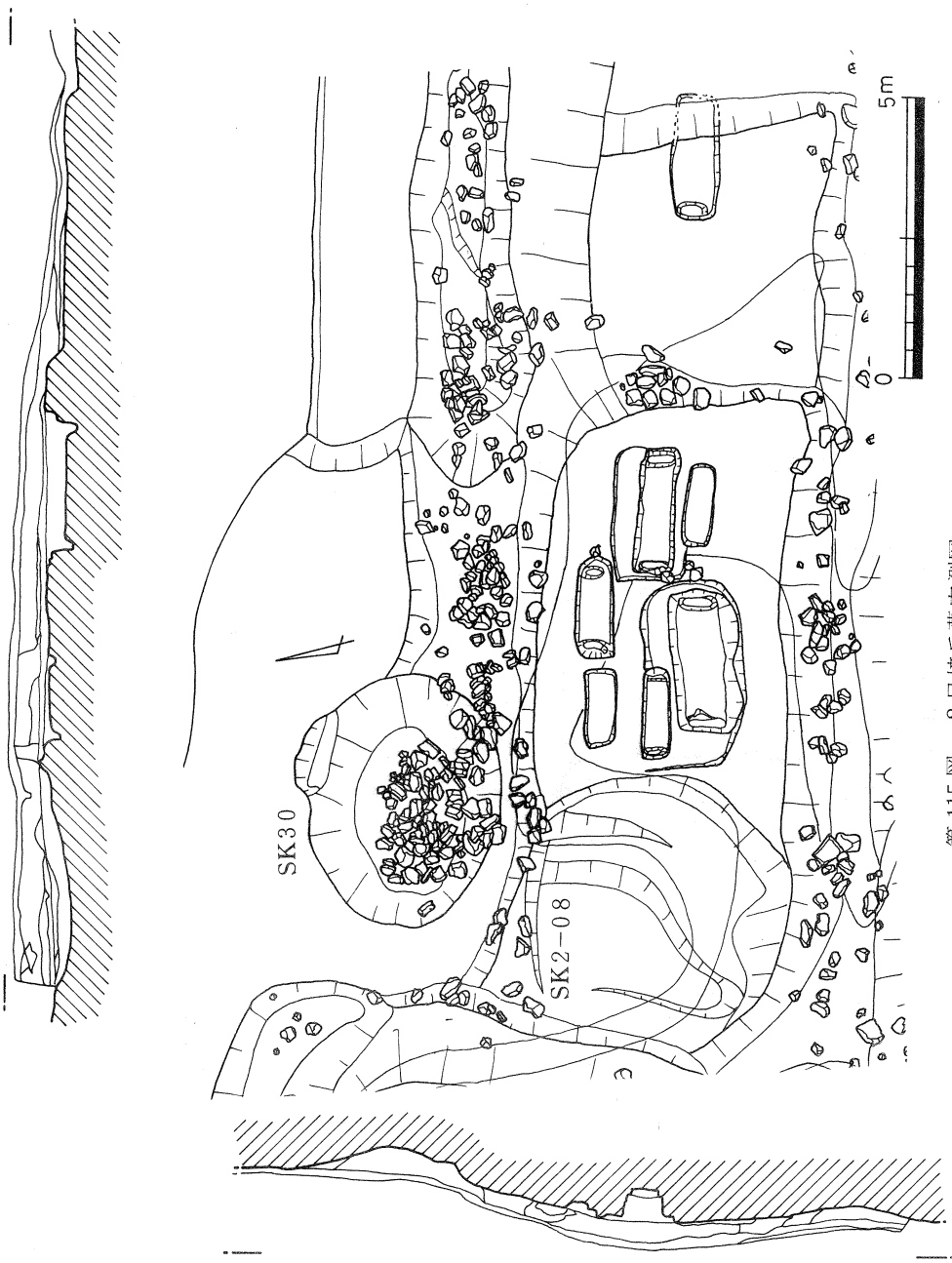
8は旧表土上面から出土したもので、益田市、安富遺跡、松江市タテチョウ遺跡出土のものに類品があり前期後半のものである。

2号墳丘墓

【墳丘基盤】　東西長12ｍ、南北長5.7～5.9ｍの範囲の地盤を切削加工し、その内側に東西長10.5ｍ、南北長4.1～4.2ｍの墳丘基盤を形成する。比高は南の溝底から22㎝を計る。さらにこの墳丘基盤の東部に隣接して、20㎝余り低い平坦面が形成されておりその範囲は、東西長5.15ｍ、南北長4.9ｍあり、上部の平坦面は東西長4.5ｍ、南北長4ｍを計る。しかしながら、基盤の東端は後世の溝の形成によって掘削されており、さらに数10㎝は東側へ延びることが考えられる。

【溝】　南側を東西にはしる溝は、溝底の幅30～70㎝を計る。東側には存在しない。北側はすり鉢状の土壙ＳＫ30とＳＤ03の中間に遺存する。溝底の幅1,65ｍ、墳丘基盤上端からの深さは、28㎝を計る。

【盛土】　中央部で50㎝、墳丘基盤の上端で36㎝を計る。主として褐色土、暗褐色土を盛る。東部

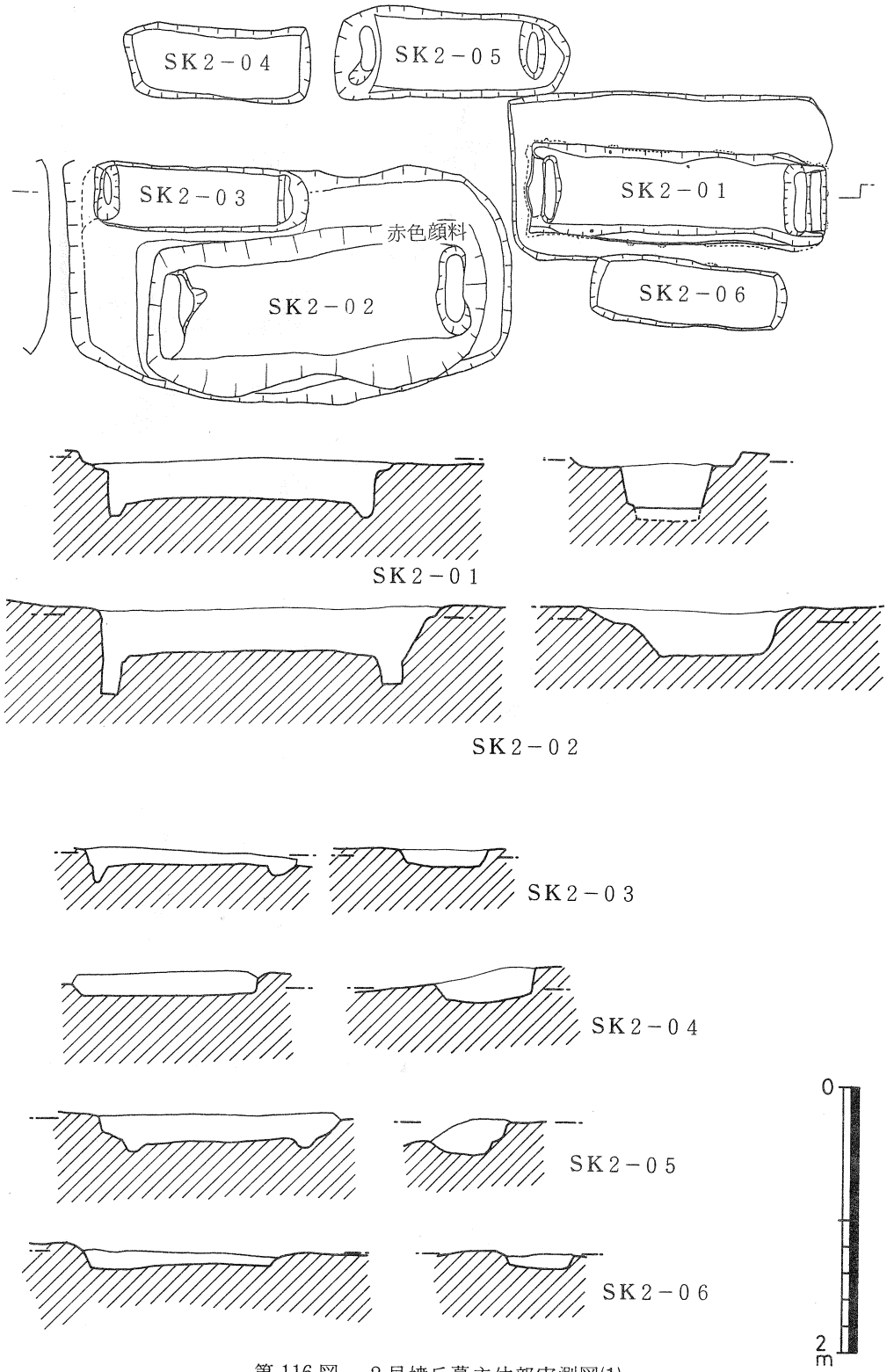


第115図　2号墳丘墓実測図

の平坦部では25㎝前後を計る。

【貼石】　西側には全く認められず、南と北側の溝中には落ちこんだ石が遺存している。東側の裾では、さしわたし30㎝前後の大石が10個余り最低3列あり、貼石と思われる。

【遺構】　中央の墳丘基盤上には計6基の土壙墓が集中しており、さらに東部の一段低い平坦面の東端にも1基確認された。西部の1号墳丘墓側には、ほぼ4m四方の範囲に不定形の土壙（SK2−08）が確認された。この土壙の直上で表土の直下には大きな転石が集中しており、そのかたわらから古銭が11

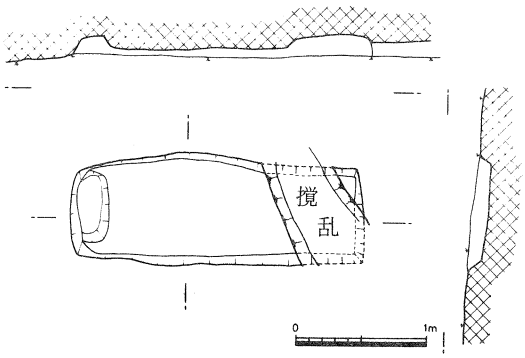


第 116 図　2 号墳丘墓主体部実測図(1)

個発見された。土壙の壙底からは、弥生土器の破片が発見された。

中央基盤上の土壙墓

ＳＫ２－０１　掘り方の上面の長さ2.51ｍ、幅1.3ｍ、土壙底面の長さ2.32ｍ、幅72㎝、深さ40㎝を計る。東西の短壁直下に掘り込みを有する。すなわち、東の掘り込みは長さ65㎝、下幅14㎝、深さ12.5㎝、西の掘り込みは長さ55㎝、下幅12㎝、深さ12㎝を計る。



第117図　２号墳丘墓ＳＫ２－０７実測図(2)

掘り方の内側には淡緑色の粘性土が４～７㎝の幅をもって点々と長方形にまわっていることが注意される。その長さは2.27ｍ、幅は西側で69㎝、東側で約60㎝を計る。恐らく、これは棺の外周の範囲を表わしたものと思われる。こうした例は、１号墳丘墓や６号墳丘墓の各土壙墓、又２号墳丘墓のＳＫ２－０２でも確認され、本墳丘墓群では通有の形態である。この粘性土は純粋な粘土ではなく、深さも５㎝までで、棺の目張りをしたとかいう実質的な機能は果していないもので、今のところ用途不明である。棺の内法は、長さ1.66ｍ、幅70㎝と推定される。

ＳＫ２－０２　旧表土面まで削り下げたところ、東西長3.3ｍ、南北長1.75ｍの範囲に褐色の軟質粘性土が内側に、地盤である明褐色粘性土が外側に認められたので、この内側の部分が土壙の掘り方であろうと思われた。これを掘り進めたところ、大小２つの土壙墓があらわれた。ＳＫ２－０２はこの内、南のより大きな土壙墓である。ＳＫ２－０３は、ＳＫ２－０２の北西側に切り合って所在する。

両者の切り合いによる前後関係は、ＳＫ２－０３がＳＫ２－０２の掘り方を切って掘り込まれていることから、ＳＫ２－０３が新しく、ＳＫ２－０２がより古くかつ大きさからいって主体的なものと考えられる。

ＳＫ２－０２は、前述のとおりまず東西長3.3ｍ、南北長1.75ｍの範囲の地山を６～11㎝ほど浅く掘り下げた後、やや南寄りに東西長2.35ｍ、南北長72㎝の範囲に褐色の軟質の砂質土が認められこれが墓壙と思われた。この墓壙の東の上端線上には、奥行１～４㎝で厚み１～２㎝の淡緑色粘性土が詰められていた。これは、ＳＫ２－０１にも見られた特異なつくり方である。掘り下げたところ、東西長2.52ｍ、南北幅1.1ｍ、壙底の長さ2.27ｍ、幅70㎝、深さ35㎝の長方形墓壙で両短壁の直下に掘り込みを有する。すなわち、東の掘り込みは長さ66㎝、上幅14㎝、下幅８㎝、深さ22㎝を計る。西の掘り込みは長さ64㎝、幅14㎝、深さ28㎝を計る。墓壙底面の東部には赤色顔料が散在していた。その範囲は40㎝×50㎝である。

ＳＫ２－０３　掘り方の上端の東西長1.61ｍ、南北長48㎝、壙底の東西長1.45ｍ、南北幅42㎝、深さ10㎝を計る。東西両短壁の直下には掘り込みがある。すなわち、東の掘り込みは長さ37㎝、下幅７㎝、西の掘り込みは長さ40㎝、下幅６㎝、深さ12㎝を計る。副葬品は皆無であった。遺骸を安置できる棺の内法は、長さ1.19ｍ、幅42㎝、深さ７㎝以上と推定される。

ＳＫ２－０４　ＳＫ２－０３の北側に平行して隣接する。上端長1.4ｍ、幅53㎝、壙底の長さ1.25ｍ、幅43㎝、深さ12㎝を計る。棺固定用の掘り込みは全くない。副葬品は皆無である。

ＳＫ２－０５　ＳＫ２－０４の東側に設けられた隅丸長方形の土壙墓である。上端長1.83ｍ、下端長1.58ｍ、上端幅64㎝、下端幅53㎝、深さは南壁から26㎝を計る。両短壁の直下に掘り込みを有する。すなわち、東の掘り込みは上端で40×19㎝、下端で31×8㎝、深さ10㎝を計る。西の掘り込みは上端で44×10㎝、下端で33×10㎝、深さ6㎝を計る。

ＳＫ２－０６　ＳＫ２－０１の南側に平行して隣接する。上端長1.475ｍ、幅50㎝、下端長1.42ｍ同幅43㎝、深さ10㎝前後を計る。

ＳＫ２－０７　２号墳丘墓東部の一段低い平坦面の東端に所在する。中軸長を東西方向に向ける。東部を後世の溝によって切断されている。上端の東西長は2.25ｍ（推定）、幅86㎝、下端長2.13ｍ（推定）、同幅73㎝、深さ7㎝を計る。西側の短壁直下に掘り込みを有する。上端長56㎝、同幅30㎝、下端長44㎝、同幅20㎝、深さ8㎝を計る。

ＳＫ２－０８　地山面を４ｍ四方にわたり不定形に掘り込んでいる。深さは、東側の上端からだと53.5ｍあるが西方向へ上端が下がっていくので、西部ではあまり高低差がない。堆積土は落ち込み内に明褐色土が入っており、下部は黒褐色土となり、炭化物と弥生式土器の破片が入っている。

墳丘墓より古い段階の土壙であろう。上層から古銭が11枚出土した。（第119図）

出土遺物の概要

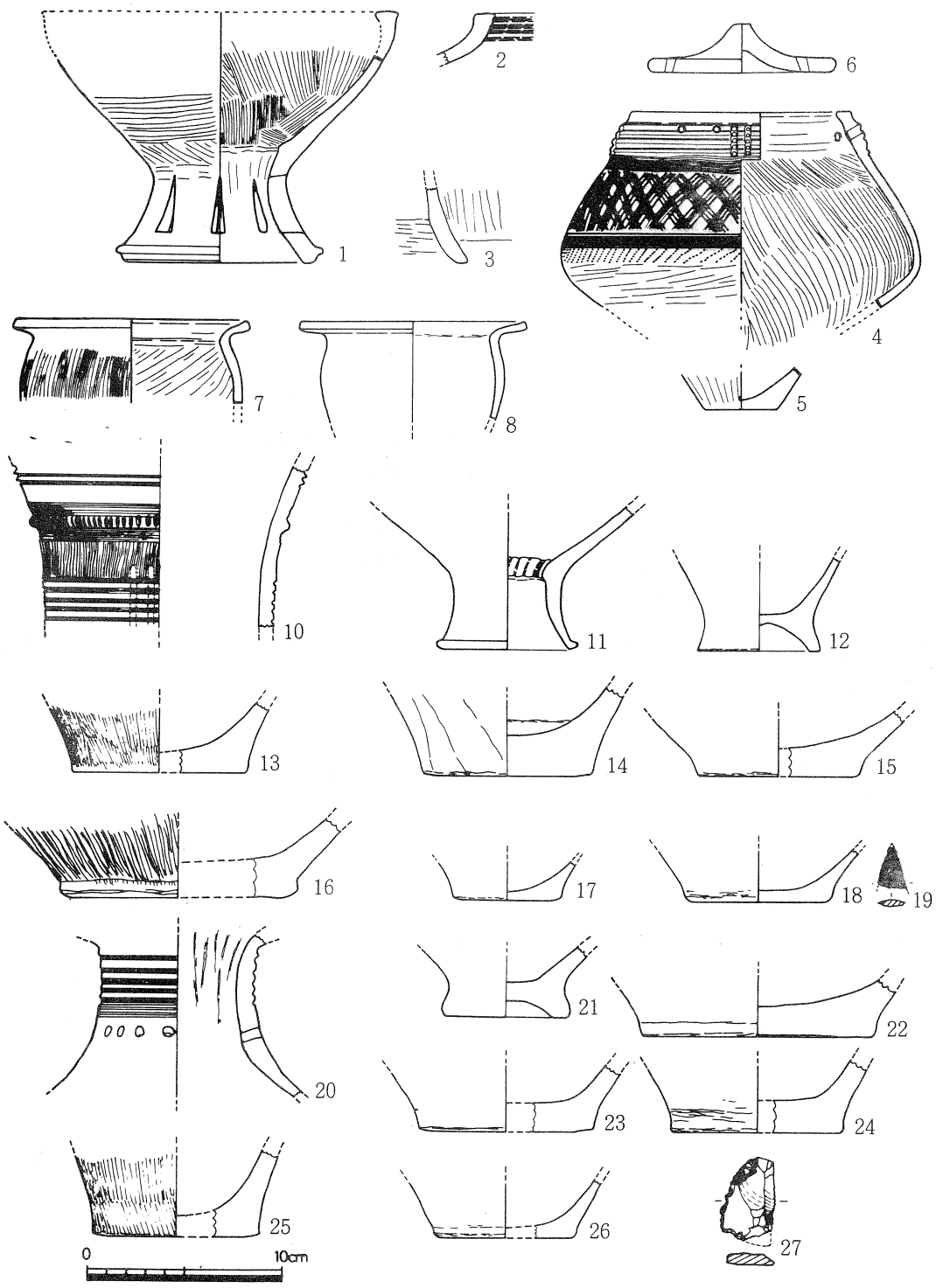
墳丘墓に関係した遺物は、１区と４区の北溝中から多く出土した。又、墳丘墓築成以前のものは、盛土層中と盛土層下の旧表土上面から出土した。

1　４区北溝中から出土。口縁部と坏底部を欠く高坏形土器である。底径9.4㎝を計る。坏部は急激に外傾して立ち上がり脚部との接合はきつく曲がる。脚部では再び下方へ向けて広がり、脚端部においてやや肥厚し、一条の突帯を設ける。脚部には、三面形の透し孔が2㎝余りの間隔をおいて計8箇所設けられている。すかし孔は、高さ3㎝、底辺の長さ9㎜を計る。厚みは、坏部上半部で5㎜、接合部に近いところで8㎜を有し、接合部で9.5㎜、脚端部で1㎝を計る。坏部内面は、上部を荒い間隔のナデ調整、底部付近は細かいナデ調整を施す。坏部外面は、上部を横方向のナデ調整、脚部に近い部分を斜方向のナデ調整をする。脚部は内外面共に横方向の細かいナデ調整を施す。

2　高坏形土器の口縁部の破片で外面に太い4条の平行凹線文を施す。１と同じ地点で出土。

3　高坏形土器の脚部の破片で脚端部内面を削り調整したもの。１と同じ地点で出土。

4　１区の北側に所在するＳＫ３０に至る急斜面の南西部黒色土層中より出土。無頸壷形土器で、体部の下半部から底部を欠く。口径11.4㎝、体部最大径18.6㎝、現存高10.15㎝を計る。口縁部から体部最大径部分までは内傾し、口縁直下に4条の平行突帯をつけ、4か所において突帯の上から垂直方向に粘土ひもを付けている。さらに、その中間に直径3.5㎜前後の円孔を1.5㎝間隔で2個ずつ2箇所に設けている。これらの文様帯の下には6～8条単位のゆるやかな波状文帯が9㎜続き、さらにその下方3.8㎝の区間に4条単位のクシ目状工具による格子目文様帯が施されている。この文様帯



第 118 図　2 号墳丘墓出土遺物実測図

の上部に一部赤色顔料（橙色系統）が遺存していた。格子目文様帯の下は体部最大径になるあたりであるが、7条単位の横方向の平行沈線文があり、その下方に7個単位のクシ描列点文が斜め方向に施されている。その下方は、やや斜め方向のヘラによる磨研調整が施されている。この区間には一部赤色顔料が遺存している。口唇部は、幅7㎜の平坦面を成し、内面に0.5㎜ほどのふくらみをつけている。4条の平行突帯までは、横方向のナデ調整それ以下は斜方向の荒いナデ調整を施す。厚みは、波状文帯付近で5㎜、体部最大径付近で3.5㎜、下半部で再び厚みを増し4.5㎜となる。全体に黒色～淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含みややもろい。

5　4と同じ地点で出土。底部の破片で平底である。底径3.6㎝、厚み5㎜を計り、外面は、タテ方向に磨研している。底部付近は、黒色、体部にかけては淡黄色を呈する。

6　4と同じ地点で出土。蓋形土器である。直径9.8㎝、端部の厚み7.5㎜、中央部は載頭円錘形を呈し、中央部で厚み1.4㎝、高さは2.55㎝を計る。平坦部に左右2孔ずつ円孔を穿つ。全面、指か目の細かい布でナデて調整している。胎土は、細かい砂粒を若干含み焼成はもろい。明褐色を呈する無頸壷とは、直径が合わないので必らずしもセット関係にならない。

7　4区北溝中から出土。口径11.8㎝を計る小型の甕形土器の破片で体部下半部を欠失する。口縁部は著るしく外傾し口唇部でやや厚みを増し5㎜を計る。頸部で5㎜、体部最大径付近で4㎜を計る。体部外面には、垂直に近い斜め方向のクシ目調整を施し、ススが附着している。頸部外面から口縁部を径て同内面に至るまでは横ナデ調整、体部内面は斜ナデ調整を施す。体部内面は明褐色、同外面は黄褐色を呈する。

8　7と同種、同規模のものである。口径11.6㎝を計り、体部下半部を欠く。

9　4区のSK30内の堆積土中から出土。口縁がラッパ状に開く式の壷形土器の頸部付近の破片である。9条の凹線文を施し、最小径6.0㎝を計る。内面にしぼり痕を残す。（第131図4）

10　1区北溝の黒色土層中から出土。口縁部に向ってラッパ状に開き、口縁端部が水平面を形成する式の壷形土器の頸部付近の破片である。最大部に5条（以上）の深い平行沈線を施し、部分的に、タテ3㎝以上、横幅3㎜の粘土ひもを沈線の上に貼り付ける。平行線の上部は、1.95㎝の区間ヘラ磨研を施し、その上部は7㎜の区間に5条の浅い沈線を施し、さらにその上部に6㎜幅の刻目突帯をもうけ、その上部に再び5条の浅い平行沈線をつける。その上部は、1㎝ほどの無文帯をおいて、再び深い平行沈線文様帯が始まる。厚みは、8㎜前後を計る。

11　1区北側周溝内、暗褐色土層中から出土。壷又は甕の台部から体部下半部にかけての破片である。台部底径6.5㎝を計り、高さ3.8㎝端部で外方へやや肥厚する。底部に粘土板を取り付けた痕跡が認められる。厚みは、台部で4㎜、接合部で1.1㎝、体部で5㎜を計る。胎土は、砂粒少なく良質のもので、焼成も良い。褐色を呈する。

12　1区北側周溝内出土。壷又は甕の台部から体部下半部である。台部底径6.3㎝、高さ1.3㎝を計り、端部は、幅5.5㎜の平坦面を形成する。底部の厚み4～6㎜、体部は4㎜を計る。胎土は1～2㎜の砂粒多く含み、黄褐色を呈する。

13　1区北側周溝内出土。底径8.8㎝、厚み2.1㎝を計る底部である。外面は、刷毛目調整を施し、明褐色を呈する。

14　1区、墳丘墓北側出土の底部、底径8.7㎝、厚み2.1㎝を計る。外面やや面取りを施し、黄褐色を呈する。

15　1区墳丘墓北側斜面出土の底部。底径8.0㎝、厚み1.5㎝を計る。

16　1区周溝内出土の底部。底径12.0㎝、厚み1.8㎝を計る。1㎜の砂粒多い。黄褐色を呈する。

17　4区の墳丘斜面出土の底部。底径5.6㎝、厚み4.5㎝を計る。底外面は、黒褐色、体部に向けては、黄褐色を呈する。

18　1区、石列外側の黒色土層中出土の底部。底径6.8㎝、厚み6㎜を計る。外面はヘラ磨研調整を施し、胎土は、1㎜の砂粒多く、内面は黄褐色、外面は、暗褐色を呈する。

19　2区周溝内出土。黒曜石製の石鏃である。刃先と基部を欠く。現存長2.1㎝、厚み3.5㎜を計る。

20　3区の盛土層中の表土直下から出土。高坏形土器の頸部から脚部にかけての破片である。頸部直下に5条の太い沈線を施し、さらにその下方に浅い3条の沈線を施す。さらにその下方に直径6㎜の円孔を、1.0～1.6㎝間隔で16個前後あけるものである。脚部最小径は7.8㎝を計る。内面にしぼり痕を残す。

21　4区西側の盛土層中から出土。底台部である。底径6.2㎝、高さ8.5㎜、端部は、幅7㎜の平坦面を形成する。底部の厚み9.5㎜、体部の厚み7㎜を計る。胎土は、緻密で硬い。黄褐色を呈する。

22　1区墳丘斜面盛土の内、暗褐色土層中から出土。底径11.7㎝、厚み1.6㎝、体部の厚み1.1㎝を計る。

23　1区盛土の内、暗褐色土層中から出土。底径9㎝、厚み1.5㎝、体部の厚み9㎜を計る。1～1.5㎜の砂粒多く黄褐色を呈する。

24　1区旧表土上面から出土。底径8.5㎝、厚み1.7㎝、体部の厚み1㎝を計る。1～2㎜の砂粒を多く含み、明褐色を呈する。

25　1区東側石列付近の旧表土中から出土。底径8.6㎝、厚み1.4㎝、体部の厚み9㎜を計る。外面は、タテ方向のカキ目調整を施す。

26　25と同じ地点から出土。底径6.9㎝、厚み6.5㎜、体部の厚み4㎜を計る。内面黄褐色、外面黒褐色を呈する。

27　4区から出土。茶色のチャート質もしくは玉髄系統の石材の片側に刃を付けたもので、長さ4.3㎝、幅2.8㎝、厚み6.5㎜を計る。スクレーパー型石器である。

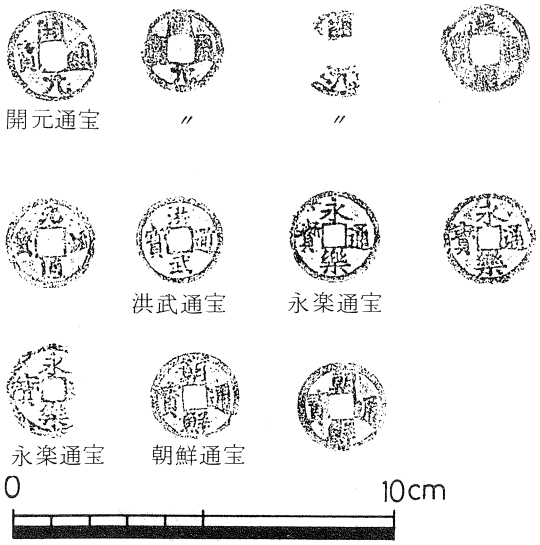
遺物の検討

1、**2**、**3**は、三角形の透し孔を有する低脚の高坏の形状から、出雲市天神、同市下古志遺跡出土の高坏と同類であろう。県外では、広島県中山遺跡などに見られる。中期中葉頃のもの。

4は、櫛目文を豊富に施した無頸壷で、八束郡鹿島町古浦遺跡の無頸壷、県外では岡山県倉敷市菰池遺跡出土品に類例があり、中期中葉から後葉にかけての土器である。

7、8は、出雲市天神遺跡出土のものに類例があり、中期中葉のものである。

9は、高坏形土器とすれば、邑智郡石見町中野の余勢の原遺跡、仁多郡横田町大宮の代山遺跡、邇摩郡仁万町の坂灘遺跡、出土の高坏の頸部に類似する。いずれも中期後葉のもの。



第119図　ＳＫ２－０８直上出土の古銭

20は、9と同様高坏形土器の頸部から脚部にかけての破片であるが、沈線文帯の下方に円孔を突つことが特徴である。この特徴は、岡山県地方の中期中葉頃の高坏に類例の多いものである。

ＳＫ２９　１号墳と４号墳の中間の周溝に所在する。3.85ｍ×2.8ｍ、深さ57㎝の平面楕円型、断面すり鉢状の土壙である。内部に角のある転石が多数入り込んでいた。さしわたし15～50㎝ほどのものである。これが墳丘墓からの落ち込んできた貼石なのか、土壙に伴うものかは不明である。墳丘墓とこの土壙との先後関係については全く不明であるが、土壙内にも黒色土が分厚く堆積しており、そう隔たるものではない。

ＳＫ３０　上端東西長4.5ｍ、同下端2.9ｍ、南北上端長3.5ｍ、同下端長２ｍ、深さ1.2ｍを計る。ＳＫ２９と同様に平面は楕円型、断面はすり鉢状を呈する。

やはり、大形の転石がかなりの量入いり込んでおり、そのすき間から弥生土器の破片が多数出土した。その内、１号墳丘墓側の急斜面から出土した土器は壷と無ケイ壷、高坏などで弥生中期中葉頃から後期にかけてのものであることが分かった。

この土壙は形態的にＳＫ２９と同種のものであることから同じ性格を有するものと思われる。

ＳＫ３１　２号墳丘墓と５号墳丘墓の中間の溝中に所在する土壙で、75×68㎝、深さ25㎝余りを計る。下端はやや南部にかたよるが、北と東にピットを穿つ。北側のピットは16.5㎝×14㎝、深さ26㎝を計る。東のピットは5㎝×5㎝、深さ9㎝を計る。内部の堆積土からは、若干の角礫の他弥生時代の甕形土器の破片が出土した。かなり散在した状態でまとまりを示さない。

ＳＤ－０３　２号墳丘墓の北東からスタートして長さ22ｍ以上、幅1.7～2.0ｍ、深さ70～90㎝を計り、内部堆積土は上部から褐色、暗褐色となっている。この堆積上中には、おびただしい数の転石が入いり込んでいた。これら転石は20～40㎝のもので、主として褐色～暗褐色土層中に含まれ下層には含まれていない。